紙のプロレス RADICAL

No.11

7·20の1日密着を1枚に!!
特別付録! 前田日明 特製ピンナップ

前田日明! 引退記念特集 次なる獲物は何だ!

さあ、大一番目前!!
エネルギー・エクスチェンジ烈談!
高田延彦 vs エンセン井上
高田vsヒクソン戦迫る!!
マット界総出の大予想!!

総天然色&非天然色特集!
「格闘か? 芸術か? それとも格闘芸術か!?」
UFOジャパン代表 佐山聡 他

ヒクソンを狩れ!!

(エンセン)

こんな読者サービスは本誌だけ!
気合い入りまくりの「読者プレゼント」も完全!

あの人物の特製ポートレートも付いてるというか!
UFO特集で飛びますかーッ!!

とうとう語られるSWSの真実!
『S 多重アリバイ』
第1回 アポロ菅原

全女30周年記念インタビュー
なぜか ダンプ松本登場!

毒霧よ、今夜もありがとう!!
「紙プロ・スーパースター列伝」
ザ・グレート・カブキ

やれんのかーッ!!
バトラーツ両国進出記念特集!
石川雄規 ㊙発掘インタビュー/トンパチ・マシンガンズ

狂気が物議をかもしだす!
プロレス・マスコミ表紙批評

紙のプロレス RADICAL No.11 ヒクソンを狩れ!!
発行元:(株)ダブルクロス 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話/03-3403-5188

ENERGY EXCHANGE

「ワタシは
お願いしたい。
ヒクソンを
倒してほしい」

「今年は
思いきって
行くよ！」

IMAGE IV
SCREEN PRINTING

髙田延彦 × エンセン井上

TAKADA NOBUHIKO × ENSON INOUE

RADICAL SCOOP TALK 烈談！

進行＆構成／山口日昇
text by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

髙田延彦【たかだ・のぶひこ】
1962年神奈川県出身。80年高校卒業と同時に新日本プロレス入門。第１次ＵＷＦを経て、88年一大ムーブメントを巻き起こした第２次ＵＷＦへ。前田日明に次ぐエースとして名を馳せる。その第２次Ｕ崩壊後、91年自らＵＷＦインターナショナルを設立。ボクシングのＴ・バービック、北尾、ベイダーらを撃破。「最強」を旗印にマット界を駆け抜けたが、97・10・11ヒクソン・グレイシーに世紀の完敗！　今年の同日に「世紀のリ・マッチ」が行われる。ヒクソンを狩れ、ノブ！

エンセン井上【えんせん・いのうえ】
1967年ハワイ出身の日系四世。本名：Enson shoji Inoue。現・修斗ヘビー級王者。絶対に後ろに引かないその闘いぶりは、相手の肝を潰し、観る者の魂を揺さぶる。ナンパでは声をかけられないシャイなところもあるが、ストリート・ファイトにはいまでも積極的に参加する“歩く大和魂”。97・4・6ヒクソンと闘ったこともある“伝説の魔人”ズールを秒殺。同年5・30ジョージア州で行われた第13回アルティメット大会では、ライト・ヘビー級トーナメントに出場。１回戦を突破！

ENERGY EXCHANGE

エネルギー交換完了!!

片や、10・11ヒクソンとの「世紀のリ・マッチ」を控えた高田延彦。片や、前号における前田日明との大和魂連鎖対談に続き来襲する、〝格闘技界の風雲児〟エンセン井上。両者の間に横たわる〝ディスコで握手・乱闘寸前事件〟の真相とは何か!? さあ、エネルギーとエールのエクスチェンジ対談の開始だ! ノー問題ノー問題!

高田　エンセンは日本語ウマイね。俺よりウマイよ。

エンセン　そんなことないヨ。ゼ～ンゼン覚えない。

高田　俺なんか、英語しゃべろうと思っても「エクスキューズミー」と「ア、ハン?」だけだからね（笑）。

エンセン　アハハハハ。でもね、高田さん、この雑誌ね、問題よく作るから気をつけてネ（笑）。

――なに言い出すんですか、いきなり！

高田　わかってる。問題のオンパレードだもんね、この雑誌。

――またぁ、やめてくださいよ。エンセンさんにしても前田日明さんにしても自分から言うんですから（笑）。

高田（横目で睨みながら）そうかなぁ。言わせよう、言わせようとしてるでしょう（笑）。

――ま、それはともかく（笑）、問題と言えば、高田さんとエンセンさんの間には、前号の「前田日明vsエンセン井上」対談で発覚した〝ディスコで握手・乱闘寸前事件〟というものがありますけど（笑）。

エンセン　アレは覚えてますか?

高田　全然覚えてない!!（爽やかに）。

エンセン　オ～～～、やっぱり（笑）。だって、そのことがあった30分後ぐらいに、高田さん、「一緒に飲もう!」って誘ってきたですよォ（笑）。

高田　俺が?

エンセン　もう「アレアレ～?・?・」よォ。でも、「オー!　行こおかぁ」って思っちゃった、オレ。面白かったヨ。

高田　だから、その『紙プロ』を見ながら「ああ、こういうことがあったのか」って思ったくらいだからね。だけど、一瞬たりとも覚えてないね。自分のやったことだとは到底思えない（笑）。

エンセン　アハハハハハ。ワタシも酒飲んでいろいろ暴れちゃう友達も多いからしょうがないと思ったよ（笑）。自分は飲まないけどネ。

高田　あれ、そう。エンセン飲まないの?

エンセン　コワいコワい。あんまり味、好きじゃない、昔から。

高田　たぶん思い出さないと思うけど、お店はどこ?

エンセン　地下の方。なんだっけ?　青山の方。

高田　……?……?……?……（下を向いて考え込む）。

エンセン　ハーゲンダッツの交差点を曲がったところ。

高田　ああ。

エンセン　そこに友達と行って、あそこの社長から「高田さんが来てる」って聞いて。その頃キングダムのジムに練習に行ってたけど、まだ高田さんに会ったことなかったんで挨拶をしに行こうかなって思ったネ。

高田　うんうん。それで?

エンセン　それで「道場では桜庭（和志＝現・高田道場）さんと金原（弘光＝現・リングス）さんと練習してるんで、よろしくお願いします」って言ったら、「誰?」って睨まれたよォ!（笑）。

高田　そうだった?

エンセン　「ああ、どうしよう」と思った。「あんた誰?」って言われたよ。それで「エンセンです」って言って握手して、そしたら高田さんが引っ張ってきたね。飲み物い～っぱいテーブルの上にあって、も～うアブなかったヨ（笑）。

高田　……思い出せないなぁ。

エンセン　だけど、笑ってるから冗談と思った。で、もう1回握手したら、ま～た引っ張られた。「ちょっとヒドイなぁ」と思ったけど、もう1度握手しようとしたね。「今度引っ張られたら、高田さんのことを引っ張ろう」と思って握手したら、高田さんは力

TAKADA NOBUHIKO × ENSON INOUE

あるから引っ張れなくて、もうボンッとお互いに引っ張りあったね（笑）。「ああ、ちょっとマズイよ～、これ。どうしよう?」って思って。それで金原さんが後ろからワタシのことを抑えてくれて。

高田　金原はその時なんて言ってたの?

エンセン　「高田さんは酔っぱらってるから」って（笑）。

高田　ぜ～んぜん、覚えてない!!（爽やかに）。1ミリたりとも覚えてないね（笑）。

エンセン　アハハハハハ!

――それはいつ頃の話ですか?

エンセン　ワタシ、練習始まったばっかりだよ、キングダムで。ぜんぜん前ネ。

高田　キングダムが旗揚げする前かな?

エンセン　そうそう、始まる前。

高田　それだったら確実に1年以上前だね。あの店に最後に行ったのがそのくらいだしね。写真がいっぱい飾ってある店でしょ?

エンセン　ア～、違うよォォォ、（手を叩きながら）ぜ～んぜん覚えてないヨォ～。ハーッハッハッハ。

高田　う～ん。となると、まったくわかんないね。

エンセン　それでワタシ、「失礼があったら、どうしようどうしよう」って思って。それで金原さんは女の子とかと楽しくしてて、「違う場所に行こう」って言ってきた。「高田さんも行くならオレはイヤだイヤだ」って、ワタシ。そしたら本人の高田さんがワタシのとこ来たよ。「次の場所で飲もう!」って誘いにきたよォ!（笑）

――「あんた誰?」って言っておきながら（笑）。

エンセン　ソ。「アレアレ?・?・」って思ったヨ。それで次の場所では隣に座らされて飲まされたヨォ～（笑）。

高田　ハッハハハハ。ホント?

――高田さんも前田さんも酒グセ悪いですからねぇ（笑）。

エンセン　前田さんは普段も悪いでしょ?（笑）。

高田　ハッハハハハ!　そうだね。

エンセン　あれ以上悪くなるのって考えられないよォ～（笑）。ワタシも普段悪いから、酒飲まないよォ～。

高田　でも、なんかバツ悪いね。酒飲んでる時は覚えてないこと多いんだよ（照）。

エンセン　バツ悪いって何?

高田　恥ずかしいってこと（照）。

エンセン　アハハハハハ!

高田　だけど、Uインターは酒グセ悪いのが多かったね。自分がこんなでしょ。だから見習っちゃうんだろうね（笑）。ヤマケン（山本健一＝現・リングス）とか高山（善廣＝現・フリー）、金原とかみんなそうだもん。そろそろやりたいね。同じメンバーにエンセン入れて。

エンセン　金原さんも酒グセ悪いの?

高田　エンセンと飲む時はマイペースで飲んでるでしょ。

エンセン　そうそうそう。

高田　俺なんかと行くと「乾杯!」の連続だから酔っ払うのが早いんだよ。

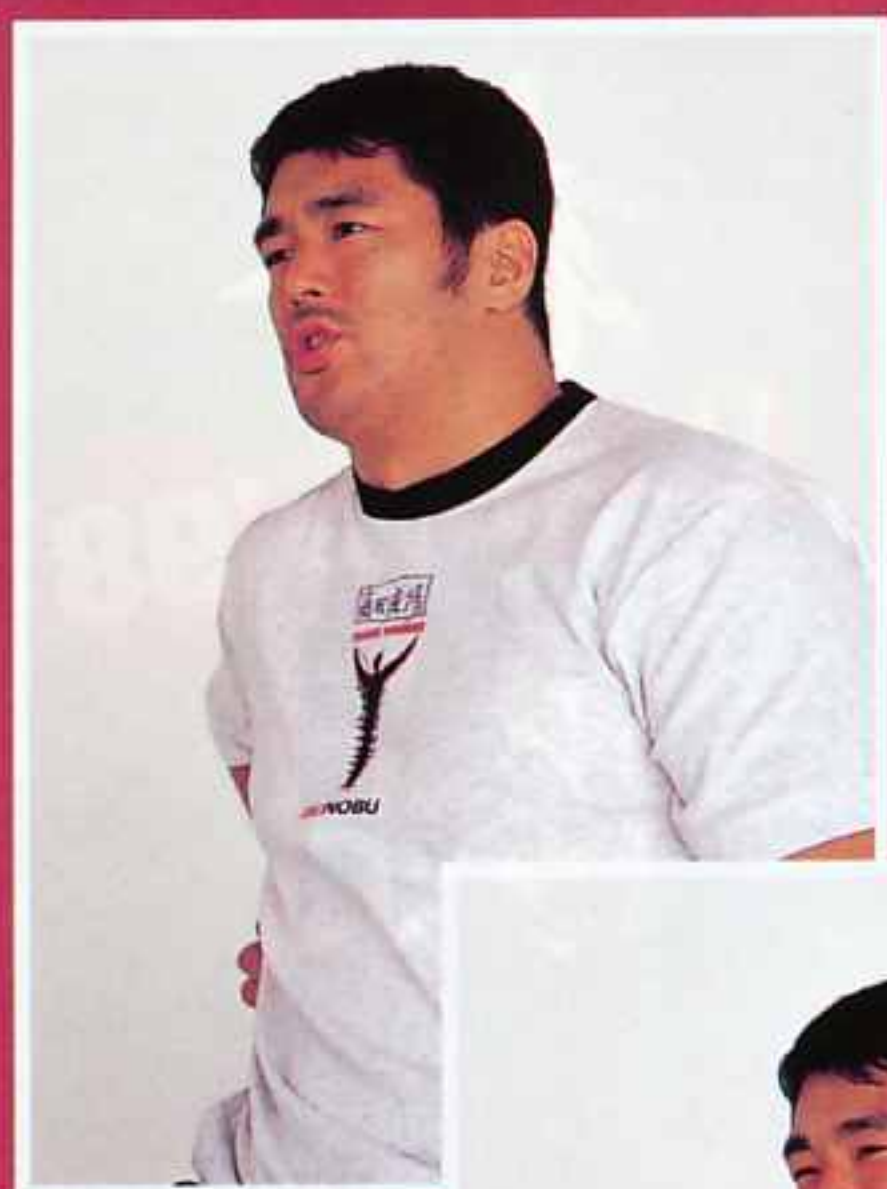
――昔の新日本プロレス道場の伝統みたいなものが、遺伝子として受け継がれてますからね。要するに「娑婆じゃない世界」（笑）。この前も前田さんが話してたでしょ。

エンセン　ビックリしたねェ。新日本プロレスの道場には佐山（聡）さんもいたんですよねェ。

高田　佐山さんは酒飲まない。ケーキとまんじゅうばっかりだから（笑）。

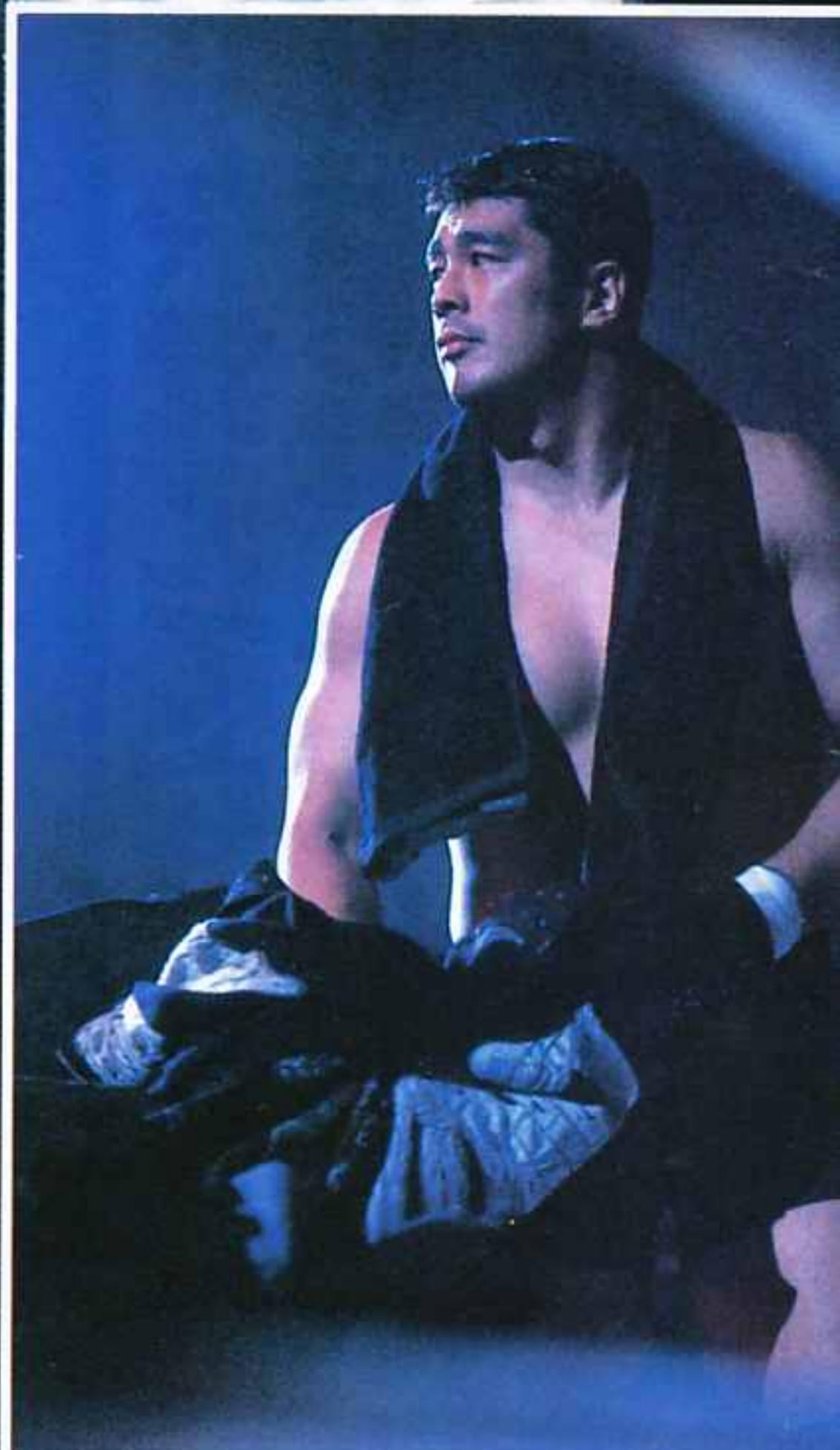
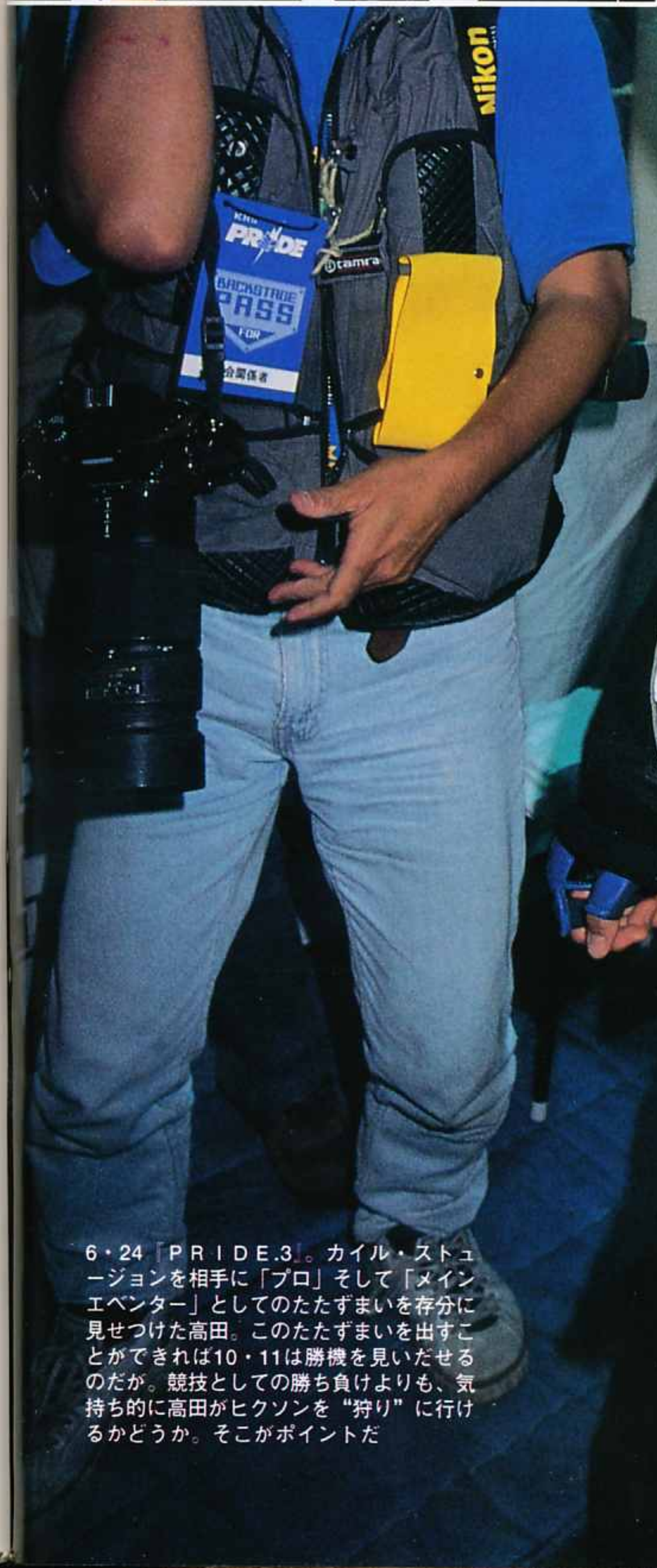
エンセン　だ～から、あんなにプヨプヨになっちゃった（笑）。

高田　身体だけ見たら飲めそうだけどね。ボトルみたいな身体してるしさ（笑）。

エンセン（テレコに向かって）ワタシはそう

ぜ〜んぜん、覚えてない!!
1ミリたりとも覚えてないね(笑)
(高田)

高田道場
TAKADA NOBUHIKO
格闘
Viagra'98

格闘

Viagra'98

6・24『PRIDE.3』。カイル・ストュージョンを相手に「プロ」そして「メインエベンター」としてのたたずまいを存分に見せつけた高田。このたたずまいを出すことができれば10・11は勝機を見いだせるのだが。競技としての勝ち負けよりも、気持ち的に高田がヒクソンを“狩り”に行けるかどうか。そこがポイントだ

言ってないで～す。高田さんでした（笑）。
高田　（テレコに向かって）エンセンはうなづいてました！（笑）。
――というわけで、高田さんのエンセン井上に対する印象はどんなものですか。
高田　キングダムの連中からも聞いてるしね。とくにファイターの部分はみんなからも聞いた上に、ビデオでも何回も見てるから、ある程度は知ってるんだよね。でも、ファイター以外の部分で実際にこうやって会ってみると、ちゃんと挨拶できて話もできる。人間としても印象が凄くいい。常識人って感じだね。
――ゲ！　常識人？
高田　驚くということはもう一面あるの？
エンセン　う～ん、怒る時多いね。ケンカとかストリートとかで。
高田　いまでも？
エンセン　ソ。だからお酒飲まないから言い訳できないのネ。
高田　いまでもやってるの？
エンセン　ソ。最近もあったし。2週間ぐらい前かな。スゴい悪口言われて。オートバイの人だから、ヘルメット被ってた。その上から殴ったヨ～（笑）。
高田　殴っちゃったの？　車を運転してる時？
エンセン　ちょっと事故になりそうだったの。ワタシは「どうもスイマセン」って感じだったのに、「なにやってんだ、コラッ！」とか

俺もこの間、高速道路で止めたよ、車!!（爽やかに（高田）

言うのよ。それでワタシは車から出たの。「どうしてそういうことを言うワケ？　なんでそんな"声"が必要なの」って。それでも睨んでたから、もう我慢できないでボーンッと（笑）。
高田　暴れん坊だねぇ（笑）。
エンセン　それでまた睨んだから、もう1回ボーンッて（笑）。それで帰ろうとしたら、彼がオレの車の後ろをバーンッて蹴ったね。それでもう、ダメ。
高田　それでまた切れたの？
エンセン　車から出て、彼を人形みたいにグルグルグルってネ。でも、本気では殴らない（笑）。
高田　そういうトラブルは車を運転してると多いよね。
エンセン　でね、ハワイでは、もし相手が怖かったら睨んだりしないよ。もう、それで謝るよ。
高田　うん。
エンセン　でも日本の場合は、よくエバることが多いね。こっちが怒ってても、逆に相手が口が悪くなるとか。ワタシが怒ってても何もしないと思ってるからネ。
高田　そう。何もしないと思ってるヤツは多いね。本当に侮辱されたらそうなるのは当たり前なんだけどね。
エンセン　それで、そのオートバイの人、ワタシが車を出しても全然引かない。ケンカしたそうだから、「いいよ、ケンカしちゃおう」

TAKADA NOBUHIKO × ENSON INOUE

って感じで手を出したら「ゴメンゴメン」ね。男じゃないよ。そんな大きい態度に出るんだったら、なんでその後もやってこないの？　いまの日本人は"声"が大きいだけで、ホントの"声"のディフェンスができない。それだったら"声"、出さない方がいい。チワワみたい。
高田　キャンキャンキャンキャン言うヤツ多いからね。しかしヤンチャだよね、エンセンは。でもさ、さっきの常識人って俺が言ったことは全部取り消してくれる（笑）。
――やっぱり野蛮人に変えときますか。
エンセン　違うよ、賢い野蛮人（笑）。
高田　でもね、誰でも怒ることあるよ。日本で運転してたら。俺もついこの間、高速道路で止めたよ、車!!（笑）。
エンセン　オ～、ワタシよかった、あの時に高田さんとケンカならなくて（笑）。
高田　芝公園あたりを走ってたら、トラックがグワーッと横からウィンカーもなしで入ってきたんだよ。それで「あれ？　俺はなんか悪いことしたのかな？」って思ってね。
エンセン　その気持ちよくわかるヨ（笑）。
高田　「いや、俺はこいつに何にもしてないよな」と思ってね、それでライトをパッパッパとパッシングして、大人の怒りを現してね（笑）。それから横にピタッとつけて走ったのよ。それで横を見たら、向こうもこっちを見て睨んでるから、「OK、OK」と思って、そいつのトラックの前にガッと出て止めたのよ。高速道路の上を80キロぐらいで走ってるのをギューッて止めてね。それで「何してるんだ！　俺が何かやったのか？」と。
エンセン　はいはい。面白～い（笑）。
高田　そうしたら向こうは「いえ、何にもしてません」と。トラックっていうのは運転席が高いから気持ちも大きくなっちゃうんだろうね。それで「俺のテクニックが良かったから事故にはならなかったけど、普通なら事故起こすぞ」って言ってね。エンセンのように直接野蛮なことはせずに、謝らせて終わり。だけど後ろはダァーッて渋滞！（笑）。
高田　後ろの人には「ごめんね」ってね（笑）。
エンセン　うわ～。スゴイねェ。
高田　後ろの方で「高田だ！　高田だ！　ガンバレ！」とかいってなかったカ？（笑）。でもホント、車に乗ってるとそういうの多いね。9回はガマンするけど、やっぱり1回は切れるよね（笑）。
エンセン　ワタシは逆だなァ。1回ガマンするけど、9回は切れるネ（笑）。
高田　じゃあ、全然違うわ（笑）。
エンセン　ちょっとワタシ、まだ子供だから。大人にならなくちゃいけない。ガンバリます（笑）。
高田　エンセンはいまいくつなの？
エンセン　13歳です（笑）。
高田　ん？　ああ、精神年齢がね（笑）。
エンセン　アハハハ。そうそう。ホントは31歳ネ。
高田　前田さんは39歳にして、まだヤンチャだからね（笑）。
エンセン　わぁー、怖～い（笑）。ワタシは29歳の時が一番怖かったもん。前田さんも39歳？　次の年代に変わる時が一番怖いヨ～（笑）。

●

――ところで、エンセンさんから見た高田さんの印象を聞かせてください。
エンセン　最初に、手を引っ張ったから、もうちょっとわかんないネ（笑）。
高田　ハッハハハハハ！
エンセン　だけど、ヤマケン（山本健一）の道場オープンの時にゆっくり話してね。その

ヒクソンを髙田さんが倒してくれたら納得できるネ（笑）

（エンセン）

格闘

Viagra'98

前にもいろいろ金原さんからも聞いて。そのエピソードは「高田さんらしいじゃない」って言われたから（笑）。個人的にワルイ印象はない、いま。強くて優しくて、いいと思うよネ。

高田　いや、最初にそんなことがあったから、そう言われると、よけいに恥ずかしいね（笑）。

エンセン　前田さんだって強い。態度も強いでしょ。

――ガハハハ。態度も強い。いい表現だ。

エンセン　でも、エライのは強くって優しくできる。それに高田さんの試合も見てるし、ヒクソンとも闘ってるし。スゴいうらやましいの感じあるね（笑）。ワタシはお願いしたいのよ。ヒクソンを倒してください。勝ってください。

高田　うん。

エンセン　それでね、もし高田さんとの勝負が終わってヒクソンが引退したら納得できない。次はオレがお願いしたい。でも、高田さんが倒してくれれば納得できる。

高田　うん。

エンセン　ワタシ、心は日本人だから。同じ日本人として倒してほしいね。で～も、ヒクソンと2度も闘える人はいないよ。2度も闘わない理由は、ヒクソンは2度も闘いたくないからと思うよ。だから、凄くいいと思うよ。ガンバってほしいネ。

高田　そうだね。ここで頑張らないと頑張るところがないじゃない。

エンセン　ワタシとお兄さん（イーゲン井上）はグレイシーの中でかなり嫌われてる。別にワタシはグレイシーは嫌いではないよ。ワタシ、もともとグレイシーの動きだし。だから、高田さんともチャンスがあったらいろいろ練習したいね。だけど、いま桜庭さんも大体そういうグレイシーみたいな動きわかってるし、その練習も十分だと思う。桜庭さんもかなり世界の中に入ってるから。

高田　うん。そうだね。

エンセン　桜庭さんと練習できたら十分だよ。だから楽しみですよ、試合。桜庭さんは技術的にも最高ね。でも、心が優しすぎるからバーリ・トゥードには向かないかもしれない。人を殴るのあまり好きじゃないって言うから。でも、一緒に飲みに行くと、やっぱりそういう部分はあるよね。彼も男だヨ！（笑）。この間のカーロス・ニュートンとの試合もスゴい良かったし、動き的にもポジション的にもよかったし、感動したね。

高田　桜庭はマジメ。昔は暴れてたけどね（笑）。

エンセン　エ？　彼も暴れちゃう？

高田　最近は暴れないね。いまはリングで気持ちよく暴れてる（笑）。

――桜庭さんは後ろからタクシーの運転手の首をスリーパーで締めちゃったこともあるらしいですからね。

エンセン　アハハハ！　アブナイねぇ。信じられないね（笑）。

高田　そんなヤツがビールの宣伝にも出てるしね（笑）。

エンセン　ア！　それ昨日見た！　ビックリしたね、「ア！　桜庭さんだ！　スゴ～い！」って（笑）。

――エンセンさんは、もしヒクソンと闘ったら、「絶対に引く試合はしない」って言ってましたけど、高田さんにもそういう闘いを望んでるんだと思うんですよ。

高田　うん。それが課題だろうね、今年の。最低限のね。去年は引きっぱなしだったから。今年は思いきって行きますよ。去年はガチガチだったもん。緊張するのはね、当日だけでいいよ。疲れちゃうからね。リングに上がる直前に緊張すればいい。ところでエンセンの次の試合は？

エンセン　そうね。10月25日（『バーリトゥード・ジャパン'98』）に試合がありそう。自分の心は決まってる。

TAKADA NOBUHIKO × ENSON INOUE

――それまでにヤンチャして捕まんないでくださいよ（笑）。

高田　そうね（笑）。

エンセン　捕まっちゃあ試合には出れないよね（笑）。

――手錠してリングに上がったりして（笑）。高田さん、エンセンさんはワゴンで生活してるんですよ。

高田　ホントに？

エンセン　試合前はそう。だいたい練習は6時間やってるから。それに練習は、シューティングだけでできない。レスリングとかキックのジムとか、いろんなところを移動しながらするでしょ。

高田　寝たり、休憩したりするのがワゴンの中なんだ。

エンセン　そうそうそう。休憩の時間が大切だから。大宮、遠いでしょ。帰ったり、行ったりは無理。

高田　そうね。練習してる時は移動がきつい。グラウンドだけじゃなくて、打撃の練習とかあったりすると大変なんだよ。そんな時にいちいち渋滞の中で運転してたら精神的にも凄くきつくなってくるからね。

――なんか、今日のテーマは日本の道路事情のようですね（笑）。

高田　それと運転マナーね（笑）。

エンセン　マナー、悪いね（笑）。

高田「すぐに睨むな」（笑）。

エンセン　ワタシは、やる気があるなら睨んでいいよ（笑）。

高田　俺はいまはもう道場に子供が通ってるからね。模範にならなきゃいけないから、エンセンみたいに野蛮なことはできない（笑）。

エンセン　ホント～？（笑）。

高田　安達（巧コーチ）が、いまキッズたちにレスリングの基本を教えてるんだよ。

エンセン　オ～！　いいね、それ。ワタシも小さい頃はやってないからね。野球とかバスケとかラケットボールとかで、レスリングはやってないから。

高田　俺も野球少年だったからね。

エンセン　ワタシも野球は夢ね。だけどうまくなかったから。だからラケットボールの方を選んだよ。

高田　格闘技はいつから始めたの？

エンセン　ハワイの時に野球やりながら中途半端みたいに、ストリート（・ファイト）のために柔術やってた。それだけヨ。格闘技は大好きだからよく見てた。それでヒクソンが日本に来た時にバーリ・トゥードを見て。それを見たらワタシも少しはできるかなぁって思って。それでその時、27歳だったから最後のチャンスと思って。

高田　ほぉー。27歳で格闘技を始めるって遅いよね。

エンセン　ケンカの血は生まれつきだからネ（笑）。それでUインター、パンクラスとか全部電話かけて、シューティングだけ、たまたま「明日来てください」って言われた。パンクラスは「新弟子テストまでダメ」って言われたし。

高田　その時、格闘技で食べていこうって決めてたの？　27歳でプロとしてやっていこうと思う決断は大変なことじゃない。

エンセン　だから最初は、試合1回だけやってみたいと思った。その時は「いまから格闘技のプロになる」とかはゼ～ンゼン思ってないヨ。

高田　だけど、リングに上がるということは、エンセンみたいに、もともと闘うことに躊躇しない人間だと自然なことかもしれないね。日常をちょっとリングに持ち込むっていうかさ。

エンセン　だけど、佐山さんが「プロのリングに上がってみない」って言った時は反対

したよ、最初。ワタシはアマチュアだけやるつもりだったから。絶対にアブナイって思ったから。だけど、佐山さんが毎日毎日「ダイジョブダイジョブ」って言うから。彼がそういうチャンスをワタシにくれた。ホントにどうもアリガタイ。

高田 佐山さんが導いてくれたわけだ。だけど佐山さんは、あの肉体であのスピードとキレでしょ。そこは凄いよ。

エンセン そうね。それはホメたい。

高田 あの身体で。お腹、こ〜んなでしょ（笑）。あんなキレ出せないよ。天才だよね。

エンセン だから、痩せたらスゴいネ。

高田 あと30キロ痩せたらね（笑）。そうしたら目にも止まらないスピードになるね。

エンセン アハハハハ！ そうねそうね。あと、チョコ食べるスピードもスゴいね（笑）。ハワイから一箱、チョコのお土産を渡したら、話しながらアッという間にボンボンボンボンって、す〜ぐ食べちゃう。スッゴいスピード。見たらもう4分の1しか残ってない。ホントだヨ（笑）。

――その佐山さんも前田さんもそうだけど、必ずマット界の状況が変わる局面には高田延彦あり、なんですよね。UWF、バービック戦、北尾戦、新日本との対抗戦、そしてヒクソン戦と、本人が意識してるのか無意識なのかはともかく、時代のキーポインターって感じですよね。

高田 運がいいんじゃないんですか。ともかく前向きにやってるからね。それがたまたまいい方に転がってるんじゃないかな。

エンセン だから、高田さんは有名な人でしょ。それなのに優しい。スゴいね。有名な人はエラそうな人多いから。

――有名と言えば、エンセンさん、高田さんは奥さんが女優さんなんですよ（笑）。

エンセン アー、ホント。知らなかった。いいネ。

高田 女優っていうか、タレントだね（笑）。エンセンは結婚したい人はいるの？

エンセン ああ、はいはい。だけど、ナンパとかメンドクサイ。全然できない。金原さんと一緒に2人で行くけどゼ〜ンゼンできない（笑）。

高田 まあ、いい女を探すコツは、よく飲み歩くことでしょう（笑）。

エンセン アハハハ！

高田 それで、好きになった人にまっすぐ行くしかないよ。

エンセン オー、それできない。運転してるとキレイな人いると見ちゃうね（笑）。でも、結婚したらまっすぐ1人の人、見たいね。結婚する前もそうしたいけど、自分は弱いとこある（笑）。

高田 ちょっと目移りしちゃうの？

エンセン ちょっとじゃない。かなりネ（笑）。

高田 それじゃあ、たぶん一生弱いね（笑）。

エンセン だ〜から、お酒飲んだらもっとヤバイからね。すぐケンカすることと、いま言ったことの二つは直したいところ。いい直し方ないですか？

高田 アドバイスしたいけど、俺も初っぱなの話があるからね。言いようがないよ。いまでもやってんだからね（笑）。

エンセン アハハハハ！

高田 アドバイスされなきゃいけないね、逆に（笑）。

エンセン だから、バレないような方法のアドバイスをお願いします（笑）。

高田 バレないような方法ねぇ（笑）。

エンセン あとでネ（笑）。

高田 ということは、俺がバレちゃいけないようなことをやってるっていうわけ？

エンセン じゃないです（笑）。桜庭さんとか、まっすぐ1人を見てる人が周りに多いから。高田さんはそのボスだから、もっと勉強ネ（笑）。でも、高田さん、ホモじゃないよねェ？（笑）。

TAKADA NOBUHIKO × ENSON INOUE

――何を言い出すんだ、いきなり！（笑）。

エンセン 違うよ〜。最近、ヒドイ目にあったヨ。ゲイのクラブに行かされた、ダマされて（笑）。

高田 どうしたの？

エンセン 普通の格闘技イベントのゲストだと思って呼ばれて行ってみたら、みんなゲイね（笑）。もう、ビックリよ。その日、向こうの関係者と会った時にすぐにわかった。もう帰ろうかと思ったけど、サービスサービスね。ステージに上がったらもう筋肉の人がイ〜ッパイで全員、男（笑）。

高田 全員が男？ それは困るね（笑）。

エンセン ワタシより大きい人もいて、怖かったよォ（笑）。それでしゃべった後、ファイティングポーズ取ってくれっていうからOKしたけど、「服を脱いでくれ」って（笑）。もォー！ 怖かったよォー！ 酒井さん（エンセンのマネジャー）、ダマしたね。きっと知ってたネ（笑）。

酒井 僕は何度も確認したんですよ。「ゲイとか、そういうんじゃないですね？」って（笑）。

エンセン だけどね、向こう着いて「やっぱりゲイよ〜、どうする？」って電話したら、酒井さん、「ワハハハハハ！」って笑ってただけ。ヒドイね、ゼ〜ッタイ知ってたヨ（笑）。

――ガハハハハ！ さすがエンセンさんのマネジャー、茶目っ気たっぷりですね。違う言い方すると、タチが悪いというか（笑）。

高田 でもエンセンはこの世界では友達多いでしょ。

エンセン そうね。プロレスの人も多いよ。やっぱりキングダムの中の全員。友達になってからはいつも雑誌とかも見るし、ビデオとかも見て面白いヨ（笑）。シューティングで一緒だった四代目タイガーマスクがみちのくプロレスに行ったから、みちのくも友達多いヨ。

高田 そうなんだ。

エンセン だから格闘技もプロレスも似てるよ。ルールだけが違う。だから、『週刊プロレス』とかいつも見てるヨ。たまにバーリ・トゥードの試合でもつまんない試合あるでしょ。だから、あれがいま一番面白いと思うよ、みちのく。面白いよ〜、ヨネ原人とか（笑）。キングダムとかシューティングとかパンクラスとかと全然違う世界だけど、もうまったく面白いヨ（笑）。

高田 ところでそのゲンジンって何？

――ヨネ原人っていって、まあ、高田さんが酔っぱらってる時の状態で、顔にペイントしてメチャメチャに暴れ回るのがキャラクターなんですよ。

高田 はっはー。なるほどね（笑）。

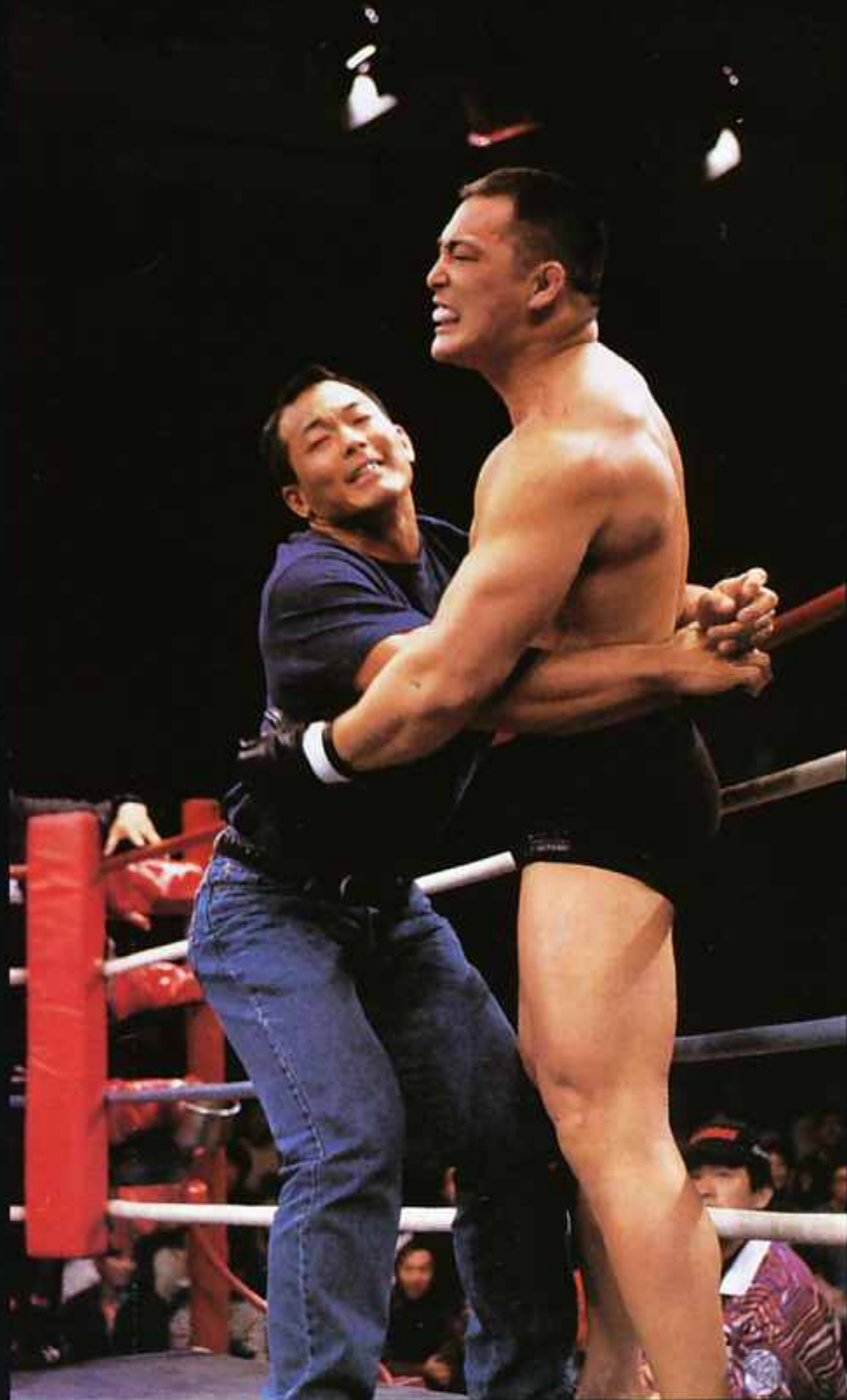
エンセン そうそう、キ○ガイみたいなの（笑）。ワタシ、ヨネ原人のファンよ。だって、みちのくの方が完全にキャラクターを持ってるヨ。性格のいいヤツ、悪いヤツとか、いろんなキャラクターがあるヨ。面白いネ（笑）。

高田 ほぉ〜、面白そうだね（笑）。

エンセン 格闘技の人は「プロレスが好きじゃない」とかよく言うけど、オレ好きよ。あいうプロレスも面白いと思うヨ。

高田 ま、キャラクターが薄いと見る方もつまらないというのはわかるけどね（笑）。だけど、この前の『PRIDE』（3）もそうだけど、ゲーリー・グッドリッジみたいなキャラクターがいたり、何かファミコンみたいじゃない。一般の人が見てて、みんながみんな柔術系だったらつまんないけど、グッドリッジがいたり、マルコ（・ファス）がいたり、あるいはホイラー（・グレイシー）が

格闘 Viagra'98

97・11・29『バーリトゥード・ジャパン97』でフランク・シャムロックに敗れて以来、リングから遠ざかっているエンセンだが、闘争心は1ミリたりとも衰えてはいない。もし高田が敗れるようなことがあったら、「次はワタシが行きたい！」とヒクソン狩りにも意欲を燃やしている

格闘技イベントのゲストだと思って行ったら、みんなゲイね（笑）

（エンセン）

みんなが上がれるような〝場〟を作っていかないとね（高田）

がいたり、（エマニュエル・）ヤーブローがいたりとか、そういう組み合わせがあると面白いよね。

エンセン　そうそうそう。『PRIDE』はいろんなキャラクターいたネ。

高田　うん。1回も格闘技を見たことのない女性が、桜庭の試合を見て「素晴らしい。キレイ」って言うわけね。だから、それなんだよね。

——うまい選手同士がやると、何も知識がない人に対しても、「闘いを突き刺す」ことができるってことですよね。

エンセン　ウマイ同士だと、よくつまんない試合になるんだけどね。あの試合はキレイでスゴかった。

高田　うん。エンセンは『PRIDE』に出たりしないの?

エンセン　出たいよ。でも、いい相手とやりたいね。ヤーブローとかペドロ（・オタービオ）とか、そういう相手はイヤ。ヒクソンとか、そういう相手と試合したいね。自分もね、あとどのくらい闘えるか、わかんないから。

高田　エンセンが出たら面白いよ。

エンセン　やりたいやりたい。だから、『PRIDE』の人、これ読んだら声かけて（笑）。

——エンセンさんは問題発言が多いからたぶんダメですよ、きっと（笑）。

エンセン　アハハハ。そうか。この間もパンクラスと問題あったしね。だから、パンクラスに言いたいのは、ゼ〜ンブまったく『紙のプロレス』のせいネ（笑）。

——へ？　そう来ますか。

エンセン　ワタシが言いたいのは、パンクラスもリングスもそういうのも全部好きよ。例えば新日本の選手がバーリ・トゥードに出なくても強い人絶対にいるでしょ。いまバーリ・トゥードに出てなくても。そういう人たちでトレーニングするとか、お互いに弟子を作るとか、一緒に練習できるとか、そういうことを作りたい。

高田　そうだね。そういう場が大切だね。そこから底辺を広げていって、もっともっと大きな、人々に夢を与えるマット界にしていきたいよね。

エンセン　だから、この間、この雑誌（前号）でパンクラスのこと悪く言ったのも謝りたいよ。もしかしたらワタシが言い過ぎたかもわかんないし。やっぱり将来的にもみんなと仲良くしたいよ。高田さんともね（笑）。だから、ディスコで手を引っ張られたことを覚えてないで良かったヨ〜（笑）。

高田　ハハハハハ！　ノー問題ノー問題。だけど、みんなちょっと過敏すぎるんだよね。なんか、マスコミに書かれたことでも、1行ピクッとくるものがあると背中を向けるとかね。神経質過ぎるよね。

——高田さんも、この間（7・2『SKY PerfecTV!』発足記念パーティー）、パンクラスの船木誠勝選手や鈴木みのる選手に挨拶されなくて憤慨したとか、新聞に載ってましたよね。

高田　あのね、「挨拶されなくて憤慨した」なんて言ったら、俺が意地の悪いジジイみたいじゃない。まったく、この男だけは（笑）。あれはせっかく久しぶりに会ったから話くらいしたかったなぁと思ったのよ、ただ単に。なにもさ、先輩面して「挨拶に来なかったからとんでもない」とか、そういうんじゃないよ。ただ、あまりにも冷たい空気が流れてね。そういうんじゃ寂しいんじゃないの?って、ただそれだけだよ。それを報じた新聞の書き方によって全然受け取られ方が違ってくるからね。

エンセン　『紙のプロレス』みたいネ（笑）。

——また始まったか。ウチほど正直に書いてるところはないですよ（笑）。

エンセン　〝みたい〟って言っただけヨ（笑）。まあ、いいよいいヨ。面白いし（笑）。ただ、ワタシ、選手的に口が軽い。

高田　だから、心のどっかで繋がってれば、何言ってもオッケーなんだよね。選手と選手の間には何にもないと思うよ。だから、これからは団体形式っていうのが難しくなるでしょ。人件費もいっぱいかかるしね。また選手も強くなって有名になれば、当然の成りゆきでお金も欲しいでしょ。でも、スポンサーがいなければ、運営のことを考えたら試合数も多くしなきゃならないこともある。そうすると、逆に試合の質は下がるし、ケガ人も増えていく。

エンセン　うんうん。

高田　そういうのを整備していくには、道場制にして、キチンとしたスポンサーのついたイベンターが年に何回か大会を開くと。で、どんな場にも出ていけるようなシステムを作らないと難しいよね。例えばエンセンとか、桜庭とか、パンクラスの選手とか、みんなが上がれるような場を作っていかないとね。で、そうなった場合はみんなの間に信頼関係を作らないといけないでしょ。同じマット界にいるんだという、根っこの部分での仲間意識を持たないと。コミッショナーを設置するとかね。

——その考え方は前田さんも同じですよね。でも前田さんの場合は、まわりに神経を使いすぎるほど使いますけど、まわりにとって敵だと思うと、徹底的に突っ込んでいきますからね。突っ込みすぎだろうっていうくらい。そこが素敵なんだけど（笑）。

高田　そうそう。だけど、ああいう人が1人いてもいいんじゃないの。みんながみんな、ああだったらメチャクチャだけどね（笑）。

エンセン　シューティングではワタシね（笑）。

高田　だから、そういうのは一団体に1人ま

で！　限定！（笑）。

——ガハハハハ！　限定しますか。それでは最後に、お互い10月に試合を控えた者同士、エールの交換といきたいんですが。

エンセン　そうね。ヒクソンが勝つって言う人が多いでしょ。でも、ヒクソンの弱いところが高田さんの強いところ。それがあるね。ヒクソンは大きな弱いところあるね。立ち技とか、まったくできない。高田さんは立ち技できるし、力も強いから、あとは作戦の問題だと思うね。だから、闘うような寝技じゃなくて、自分の強いところに逃げるような寝技の勉強？　グレイシーの寝技から逃げて、自分の強いところに持っていく寝技の勉強？　それだけでいい。作戦によるよ。だからどっちが勝つとかホントに言えないよ。去年の試合はまったく関係ないヨ。

高田　ありがとう！　今日はエンセンに元気をもらった感じだね。彼は、格闘技界の中で久々に出てきた元気なヤツって感じじゃない。そういう選手が出てくると活性化されるし、そういう選手が出てこれる土壌をもっともっと作っていかなきゃね。しかも、彼は力のない人間が吠えるというんじゃなくて、それなりのものをキチンと持ってて、言葉でもちゃんと表現できる。物怖じしないし、言いたいことも言えるしね。

——言い過ぎって部分もありますけどね。

エンセン　ガン！（司会のスネを蹴りあげる）

——い、痛てェ。

エンセン　クックックック。痛くないよォ〜。

高田　人の話に口をはさむから蹴られるんだよ（笑）。だから、彼には「オレが格闘技界を引っ張っていくんだ」っていう気持ちを持ってもらって、やっぱりヘビー級を引っ張っていってもらいたいね。ヘビー級が頑張らないと面白くならないから。

エンセン　そうですネ。

高田　体重の軽い人も技術的には素晴らしいけど、ダイナミックにデカイヤツがぶつかりあったらビジュアル的に勝てない部分ってあるからね。エンセンはそういうものを持ってるわけだから、これからもダイナミックに頑張ってください。それからその、ひと言多いところも失わずにね（笑）。10月25日は、試合が正式決定したら、ゼヒ応援に行きたいね。

——ありがとうございました。そうだ！　今度、〝ディスコで握手・乱闘寸前事件〟の再現シーンをやりませんか？　うちでビデオを作りますから（笑）。

エンセン　アハハハハ。面白いね。でも高田さん覚えてないもん、できないヨ（笑）。

高田　だからエンセンが監督と脚本をやればいいんだ。だけど、俺はホントに酒を飲まないとね。演技できないから。すべてを忘れるほど飲まないと再現できないね（笑）。

——それは怖い（笑）。

エンセン　きっと『紙のプロレス』は困るヨ。

高田　出演がオレとエンセン。後ろにはサク（桜庭）と金原ね（笑）。

エンセン　アハハハハハァ。

——前田さんが「俺も出る」って言ったらどうします？

エンセン　うわぁ！　それはイヤだよ。怖い人ばっかりになっちゃうヨ（笑）。

高田　うん、それだけは困るね（笑）。

——それはゼヒ見てみたいですけどね（笑）。今日はどうもありがとうございました。

【8月15日／東京・スタジオ・エビスにて収録】

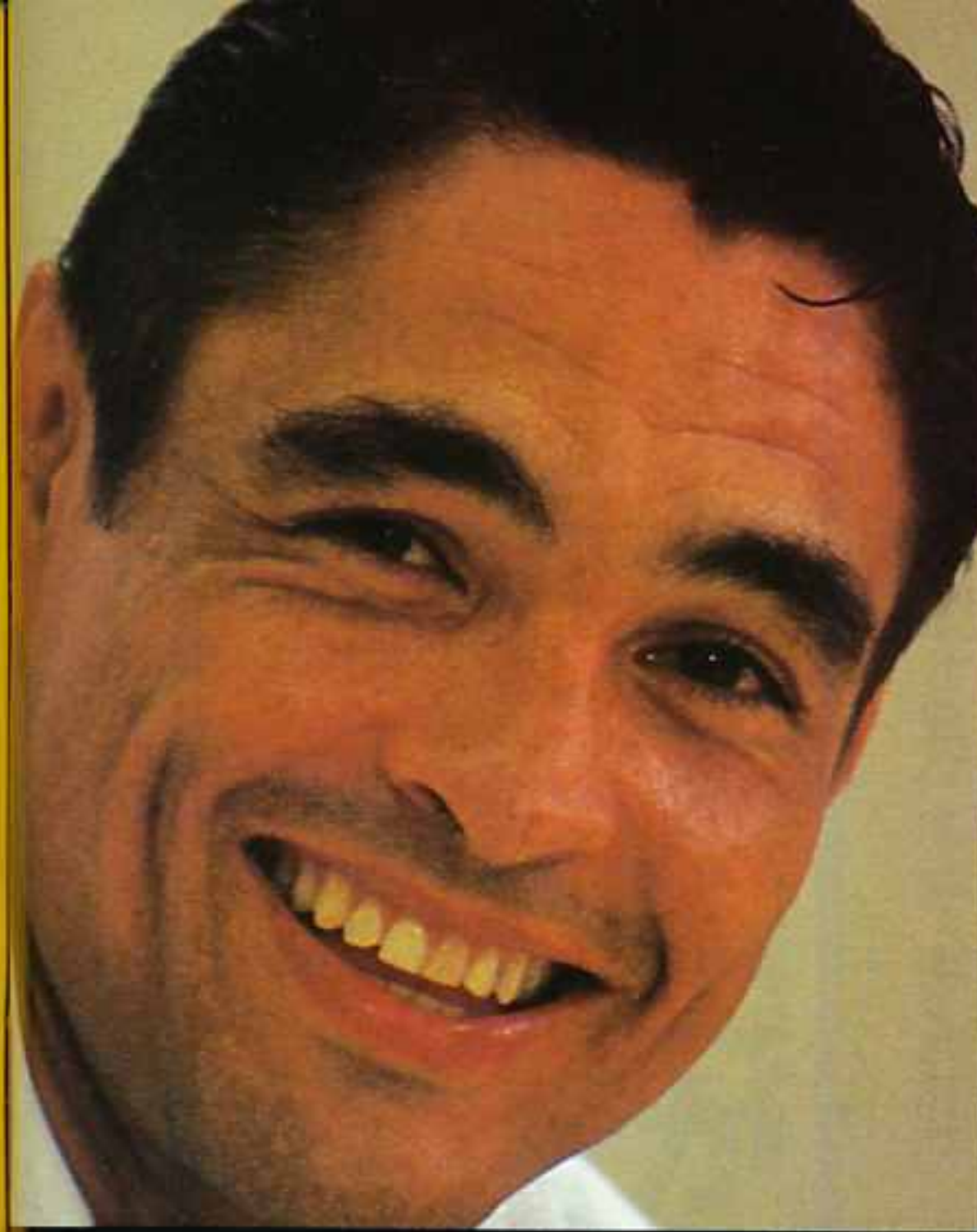
TAKADA NOBUHIKO × ENSON INOUE

エンセンからPRESENTネ!!
「大和魂」と「NEW」サイン入りTシャツヨ。

元気で賢い『紙プロ』キッズたちに、元気で野蛮で素敵なエンセンからプレゼントがあるネ。巷のストリートでも話題沸騰の「大和魂」Tシャツ・ブルーグレーバージョンと、新作Tシャツ・アイボリーバージョンを各1名にあげます。ちなみに新作Tのバックプリントは、「修斗」のタトゥーが眩しいエンセンの背中。愛犬（アメリカン・ピットブル）・修斗クンの写真も入ってるヨ。どちらも直筆サイン入ってるヨ〜。P152と同じ応募方法ネ。どっちがほしいか書かないとワタシ、殴るよ。キレると止まらないヨ、ワタシ。ま〜だ子供ね。大人にならなくちゃ。ガンバリマス。おまえもガンバッテ当てるネ。

450戦無敗

ヒクソン VS 高田 大予想

元気！

10・11 世紀の一戦ふたたび

最後に笑うのはどっちだ！

プロレス・格闘技界のみならず日本全国を震撼させた『98・10・11　PRIDE.1　高田延彦VSヒクソン・グレイシー』の一戦。『紙のプロレスRADICAL』では昨年に引き続き高田VSヒクソン大予想を大々的に行いたいと思います。今年は、やる側オンリー、総勢24名の強者達に予想をしてもらいました。どこよりも早く、どこよりも幅広い人選でお届けする超大型アンケート。キミも赤ペン片手に真剣に予想しろ!　三度目はない!!

今度は高田だ！ と予想した皆様

【パワー・オブ・ドリーム代表】
山本健一（リングスジャパン）

Q1　見ました。Q2　長い間プロレス界を引っ張ってきた高田さんらしからぬ試合だった。他のリングでプロレスとは違うものに挑戦するということで、見るのもイヤだったけど、それ以上にプロレスラーとしてのいいところが出せずに終わってしまってもっと残念だった。Q3　あります。Q4　高田さん　Q5　プロフェショナルなスーパースターだから。Q6　5分オーバーぐらいで、バックドロップからの腕ひしぎ逆十字固め。VTルールですが、あえて典型的なプロレス技を言わせてもらいます。VTルールで高田さんらしいプロレス技を出せれば、たとえその技が決まらなかったとしても、高田さんの勝ちに値すると思う。Q8　このルールでの闘い方を勉強すれば、可能性はあると思う。Q9　このルールでどこまで面白い試合になるのか、勝敗よりもVTの素晴らしさを見せてほしい。プロの動きや、気迫に期待したい。

【ただいま6連勝中】
金原弘光（リングスジャパン）

Q1　見ました。Q2　悔しい思いをした。Q3　あります。Q4　高田さん　Q5　今回の一戦は高田さんが命を懸けて戦うだろうから。Q6　1ラウンド、腕ひしぎ逆十字固め　Q7　ボク　Q8　勝つ自信はあります。Q9　高田さん、ぜひ頑張って下さい!!

【打倒ビクター・クルーガー】
ザ・グレート・サスケ（みちのくプロレス）

Q1　見ました、見ました。Q2　ん〜残念！　Q3　あります、あります。Q4　高田さん！　Q5　レスラーがレスラーを応援しないでどうする！　Q6　5分でハイキック一発（出来ればミサイルキックが良い）Q7　谷津さんかな。これからは谷津さんの時代だ。うん。うちのウェリントンでも良い。Q8　戦う前から負けることを考えるバカがいるか！　しかし、プロレスルールじゃなきゃ勝てる訳ないよな。Q9　両選手の勇気に敬服します。どっちも頑張れ！　サイキョッ！

【小さな破壊王】
村浜武洋（シュートボクシング）

Q1　YES　Q2　当たりまえすぎて面白くなかった　Q3　少し　Q4　高田　Q5　プロレスファンだから　Q6　10分くらいでハイキック　Q7　ヴォルク・ハン　Q8　勝てません　グランドができないから　Q9　プロとして大変だと思いますが、客の期待にこたえるような試合をしてほしいと思います。

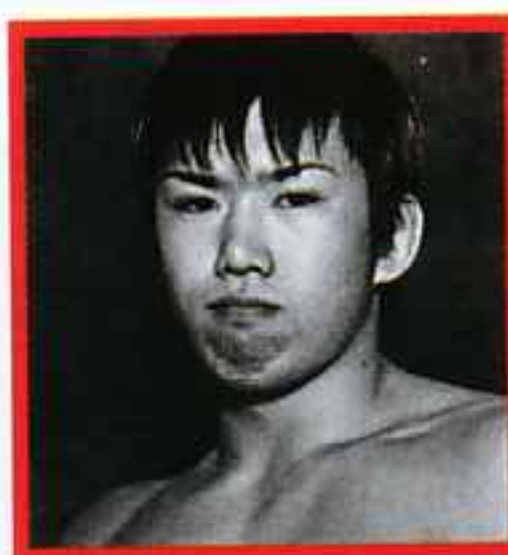
【ドリーム・マウンテン】
福田雅一（レッスル夢ファクトリー）

Q1　Yes　Q2　つまらなかった。Q3　あります。Q4　高田さん……に勝ってほしい。Q5　プロレスラーとして、全てを捨てて一から出直した男に勝ってもらいたいのは当然。Q6　長くなると思います。関節技で　Q7　私　理由　闘いたいから　Q8　1〜2年時間を下さい。Q9　高田さんに今までの様々な思いをぶつけてほしい。

【アンケート内容】Ｑ１　昨年行われた高田VSヒクソン戦はご覧になりましたか？　Ｑ２　ご覧になった方はその時の感想をお書き下さい。また見ていない方は、何故見なかったのかお書き下さい　Ｑ３　世紀の対決から丸一年、あなたはこの一戦に興味はありますか？　Ｑ４　高田延彦とヒクソン・グレイシー、今回の勝者はズバリどちらだと思いますか？　Ｑ５　Ｑ４の選手を選んだ理由はなんですか？　Ｑ６　この一戦は、計何分ぐらいで、どんな技で決着がつくと思いますか？　Ｑ７　この試合の勝者と闘って欲しい選手は誰ですか？　またその理由をお書き下さい　Ｑ８　あなたはこの試合の勝者と同じルールで闘って勝つ自信はありますか？　またその理由をお書き下さい　Ｑ９　最後にこの両選手へのメッセージ、あるいはこの一戦に対する期待をお書き下さい

【ご協力ありがとうございました　押忍！】

【つぼ】
小坪弘良
（レッスル夢ファクトリー）

Q1 はい Q3 YES Q4 高田延彦 Q5 強いから! Q6 さぁ? Q7 福田雅一 理由 こいつも強いから! Q8 はい 理由 ヒミツ! Q9 高田さんプロレス界の為におねがいします!

【大日本・未来のエース】
藤田穣
（大日本プロレス）

Q1 『週プロ』と『ゴング』で見ました。Q2 ヒクソン選手は、メビウスの前にいた練習生と顔が同じだと思います。Q3 はい。Q4 高田選手 Q5 特にないです。Q6 5分くらいで、逆十字で。Q7 ザ・マジックマン 理由 なんとなくです。Q8 高田・ヒクソンvs日高・藤田で是非やりたいです。Q9 頑張って下さい。

【ミゼットレスラー募集中】
角掛留造
（全日本女子プロレス）

Q1 見てるわけねーだろ Q2 知らなかった Q3 おもしろそうだな Q4 高田 Q5 もう負けねーだろ Q6 十分ぐらい 技はわからねー Q7 小川（ロッシーではない） 理由 オレ（意味不明） Q8 あるわけねーだろ Q9 がんばってね

【スペースファイター】
木村浩一郎
（DDT／ST北関東ジム）

Q1 テレビで見ましたQ2 高田選手は実力を出しきれなかった。Q3 あります。Q4 高田延彦 Q5 迷いを捨てて打撃でいけば勝てると思う Q6 10分ぐらい ヒクソンにあれっ?っていう動きを見せて打撃で倒してからの逆十字 Q7 木村浩一郎 Q8 はい。理由 僕の方が場数を踏んでるから Q9 高田選手には完全燃焼して欲しい。ヒクソンとは一緒に練習がしたい

【キングダムの鍵を握る男】
入江秀忠
（キングダム公認プロ格闘家）

Q1 ビデオで見ました。Q3 高田選手が一年間で柔術、バーリトゥードにおける戦術やポジショニングなどをどれだけ学び認識したのか興味があります。Q4 高田延彦選手です。Q5 まず、皆さんに言っておきたいことは、プロレスラーの方々は本当に強いということです。何故かといえば、それはリングでも証明されてきていますし、又、修斗のエンセン井上さんもレスラーとのスパーリングを通して、その強さを確認し、誌面でも「レスラーは強い」と発言していますよね。アルティメット大会でキモ選手を破ったリングスの高阪選手。それに「プロレスラーは強いんです」の桜庭選手。当然彼らのトップにいる高田さんもハンパじゃないと思いますよ。前回のヒクソン戦は残念でしたけど、今度の試合は高田さんがミスさえ犯さなければ、充分勝利を収めることができるし、日本人としても絶対勝ってもらいたいですね。ただ、グレイシー柔術が強いのではなく、格闘家の中でもヒクソン自身が特殊な成分でできている、野球界で言えば王・長嶋であるということです。だから逆にヒクソンがプロレスをやっていても特殊な人ですから今よりもっと強くなっている可能性だって有り得るということですね。Q7 マーク・ケアー 理由 パワーが日本人とはケタ違いだから。Q8 勝負はやってみなければわからないですけれども、自分にはまだまだ実績がないので練習を積んで実績を上げるのが先決です。Q9 最後にこれは言っておきたいんですけど、高田さんは常識的に考えたらこれだけの地位を築いて名前もあって守りに入るのが当たり前なこの世界で、負けたら失うリスクが大きいこの真剣勝負に、怖がらずに闘う! という姿勢が自分としては本当に尊敬できる部分です。こんな挑戦を続けるという素晴らしいことに対して、やる勇気もなく、やれもしない人達があーだこーだと意見や批判を平然とする……自分はそういう馬鹿な発言しかできないダメな人達がこの世界にいることが日本格闘界の発展の大きな足かせになってると思います。

やっぱりヒクソンは強い!
と予想した皆様

【打・投・極の到達点】
桜井"マッハ"速人
（総合格闘技木口道場）

Q1 見た! Q2 こんなもんだな Q3 あまり……ただ試合の内容には興味あり Q4 ヒクソン Q5 こういう戦いに長けている。トータルでヒクソン。Q6 3分 チョークスリーパー Q7 エンセン井上。同じシューターとして、エンセンがやりたがっているので望みをかけたい Q8 やるからには勝つ! 打でKO Q9 魅せて下さい。

【グラップラー刃牙モデル】
平直行
（正道会館）

Q1 はい Q2 予想通りというか本当に何もイレギュラーな事がなかった。Q3 はい Q4 ヒクソン Q5 柔術家であること。ブラジリアン柔術でなくグレイシー柔術家だ。Q6 10分位はかかると思います。チョークの可能性が大きいと思います。もしかしたらもっとかかるかも? Q7 マーク・ケアー 理由 テクニックがパワーに勝てることを証明して欲しい。あるいは逆でもいいがまったく別のタイプ同士の闘いが見たいです。Q8 ノーコメント Q9 高田さんには男の意地を、ヒクソンには柔術とはこんなものだというのを見せて欲しいと思います。

やっぱりヒクソンは強い！
と予想した皆様

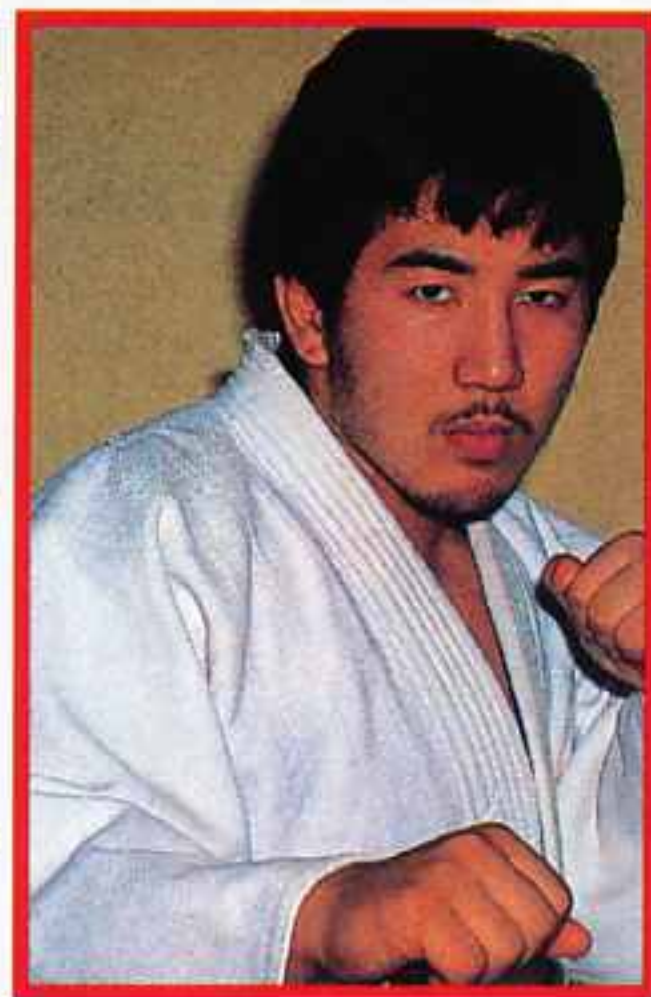
【奇人】
朝日昇
（PUREBREDシューティングジム大宮）

Q1 見ました。Q2 ヒクソンは強いな、と思った。Q3 特にありません。Q4 ヒクソン Q5 強いから。Q6 結構、長くなって（10分以上）寝技からの関節技、絞め技。Q7 バーリトゥードで強いと言われているヘビー級の選手。Q8 ありません。階級が全く違います。Q9 ボクは自分のクラスで戦います。ヘビー級については、半分ファンの立場で楽しませてもらおうと思います。

【白い稲妻】
小路晃
（和術慧舟會）

Q1 はい。Q3 はい。Q4 ヒクソン Q5 VTの経験が豊富 Q6 3R・チョーク Q7 マーク・ケアー Q8 わかりません。勝てないとは思うけど負けるつもりで試合はしません。Q9 高田選手の練習の成果を期待します。

【和製ビクトー・ベウフォート】
高瀬大樹
（和術慧舟會）

Q1 なりました。Q3 あります。Q4 気持ちでは高田さん。現実ではヒクソンだと思う。Q6 2R3：01でチョークスリーパー Q7 自分とマーク・クァーが相応しいと思う。Q8 やってみないとわかりません。でも十分チャンスはあります。Q9 高田選手には日本を背負う身として頑張ってもらいたいです。

【格闘芸術・UNO】
宇野薫
（和術慧舟會）

Q1 はい。見に行きました Q2 やはりヒクソンは強くてうまいと思いました。Q3 はい。興味があります。Q4 ヒクソン選手だと思います。Q5 いくらVTの戦い方を練習しても1年では勝てないと思います。Q6 10分ぐらいでチョークスリーパー Q7 フランク・シャムロック 理由 技術対技術の戦いが見たいです。Q8 もし、体重が一緒ならわからないかもしれないですかね。Q9 ヒクソン選手の間合いの取り方、技の入り方などに期待します。

【地下室マッチの帝王】
北原光騎
（キャプチャー主宰）

Q1 はい。Q2 高田選手が実力を出しきれなかった。Q3 はい。Q4 前回のルールだと、ヒクソンの勝ち。Q5 ヒクソンの得意なルールだから。Q6 どちらが勝つにしても逆十字 Q7 やりたい人がやればいいと思う。Q8 なし。理由 あのルールでの練習をやっていないから。Q9 高田選手の意地に期待

【94、95年レスリング社会人全国大会覇者】
佐好
（キャプチャー）

Q1 見ました。Q2 ヒクソンの完全勝利 Q3 あります Q4 ヒクソン・グレイシー Q5 ヒクソン・グレイシーに有利なルールだから Q6 10分以内でスリーパーホールドか逆十字 Q7 バス・ルッテン 理由 ヒクソンに勝てると思う選手だから。打撃とグランドのバランスがとれている Q8 ありません 理由 この試合のルールを何十年も練習している選手に勝つのは難しい Q9 高田選手がどれだけ作戦・研究をしてきたのか期待してます。

【クールな熱血漢】
臼田勝美
（格闘探偵団バトラーツ）

Q1 はい Q2 ヒクソンは強えーなぁ！ Q3 少々 Q4 ヒクソン Q5 去年見たから Q6 4分47秒、スリーパーホールド Q7 アントニオ猪木 理由 〝世界一強い男〟って旗に書いてあったから Q8 ない 理由 だって練習相手が少ないんだもん Q9 頑張って下さい！

【若き館長】
村上一成
（国際柔術連盟順道会館・館長）

Q1 はい。私もその日、オープニング・マッチに出ていたので。その後の試合はリングサイドで観戦していました。Q2 私はヒクソン選手が勝つと思っていましたし、ほぼ予想したとおりの時間で勝敗が決まったな、という感じでした。Q3 高田選手の〝柔術対策〟がどの程度か、見てみたいですね。Q4 高田選手には頑張って欲しいですけれど、やはり、ヒクソン選手は強豪ですよ。Q5 高田選手のこの一年の練習内容を私はわかりませんが、誰であれ、ヒクソン選手に敗れたとして、その一年後にヒクソン選手を倒すまでになるには、相当の努力が必要ですよ。Q6 2R以内で終わると思います。ヒクソン選手が「地獄絞」「表三角絞」「横三角絞」などの技で勝負を決めるようであれば、ヒクソン選手と高田選手との間に「一年を経た今でも、相当、実力の差がある」と言えるでしょうね。高田選手が勝つには、体重の乗った「上段回し蹴り」で、ヒクソン選手を完全KOすることなど、「打撃技」になるんじゃないですか。Q7 マーク・ケアー選手やマルコ・ファス選手との対戦だったら、とても興味がありますね。Q8 相手がヒクソン選手であれ、高田選手であれ、それが対戦しなければいけない場面であれば、やりますよ。そして、対戦する以上、私は勝つつもりで戦います。ただ、私は、お二人が対戦相手なら、同じルールでも「リング」ではなく「金網」で闘いたいですね。そうなれば、勝敗がどうであれ、ヒクソン選手も高田選手も私も、その対戦以後、〝試合が出来ない身体になってしまう〟ほど、壮絶な試合になるでしょうね。Q9 ヒクソン選手は400戦以上も闘って、未だ無敗の記録を維持してる訳ですから、負ける試合はやらないと思うし、出来ないですよ。高田選手は、今回の対戦が自分を負かした選手との再戦で、多くのファンが〝リベンジ〟を期待しているなかで闘うわけですから、相当のプレッシャーがあるでしょうが「ヒクソン・グレイシーというビック・ネームに負けてたまるか」っていう気持ちを大切にしてほしい。あまり悲壮感を持ってリングに上がって欲しくはないですね。

勝負はやらなきゃわからない！

予想なんてよそう！　な皆様

【ケンカ番長】

小野武志

（格闘探偵団バトラーツ&トンパチ・マシンガンズ）

Q1　見てない**Q3**　特にありません　**Q4**　両者リングアウト　**Q6**　わからない　**Q7**　トンパチ・マシンガンズのリーダー　**理由**　リーダーだから　**Q8**　トンパチ・マシンガンズのリーダー　**理由**　リーダーだからだよ　**Q9**　トンパチ・マシンガンズのリーダーは折原昌夫に決まりました。

【気は優しくて力持ち】

アレクサンダー大塚

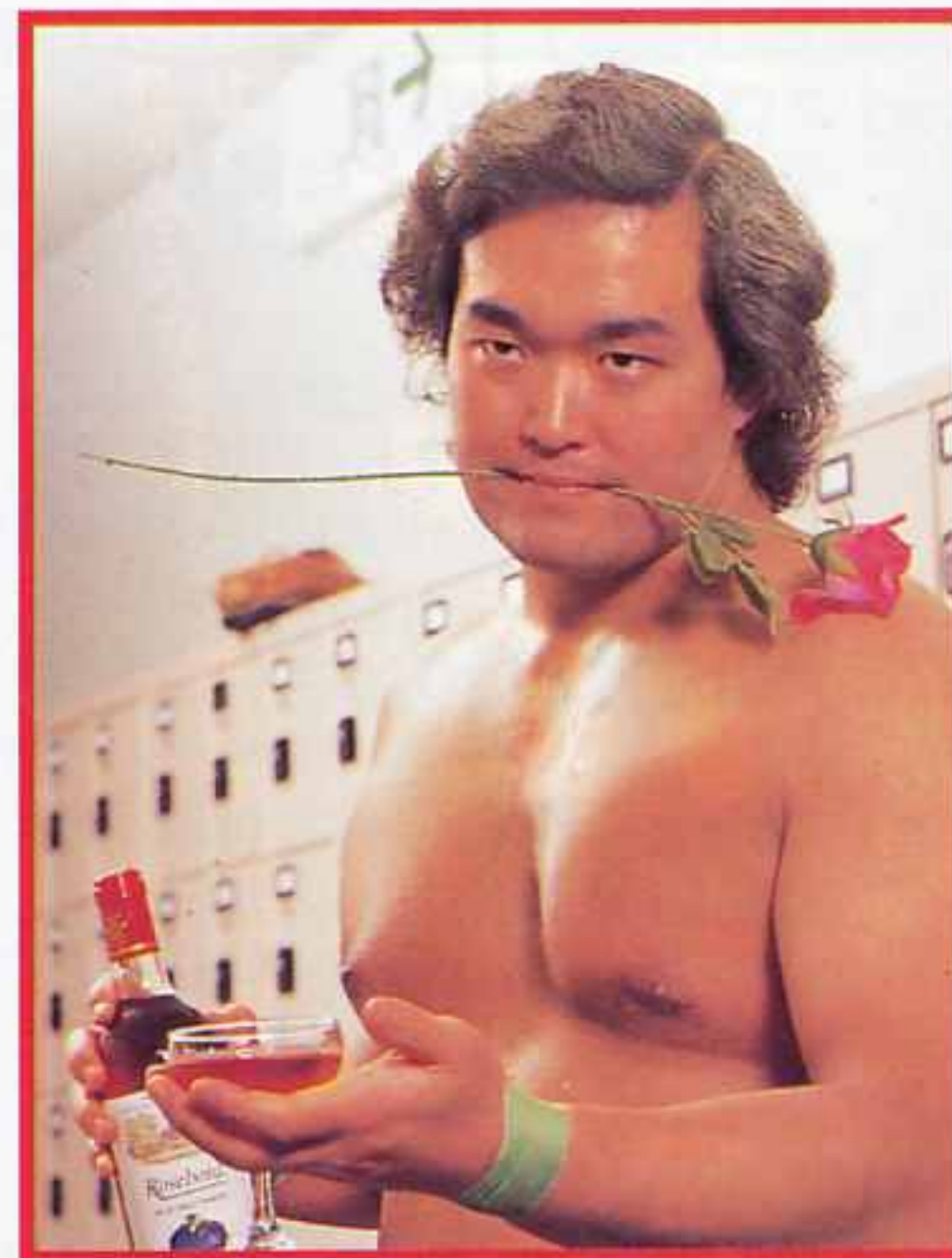
（格闘探偵団バトラーツ）

Q1　はい　**Q2**　がっくり　**Q3**　いいえ　**Q4**　？　**Q8**　あったり？　なかったり？　**Q9**　人生はいつも自分のためです。

【悲しき天才】

セッド・ジニアス

（UNW）

Q1　見てない　**Q2**　アメリカで太陽の光をいっぱいあびて光合成してたから（※1）　**Q3**　特に別になし。今は猪木戦実現のみ。（※2）　**Q4**　ひくそん×高田戦は中止！　為替相場急騰による急激な円安ドル高の為、KRSがひくそん招聘断念！（※3）　**Q7**エド・ルイス（※4）・ルー・テーズ氏曰く「シュートでは史上最強！」ディック・ハットン（※5）・ルー・テーズ氏曰く「古今東西グランドではハットンの右に出る者はいない。カール・ゴッチ？スタンドでは上だがグランドになったらとうてい手におえない」。ザ・ジャイアント、ケビン・ナッシュ。タックルに行っても3階まで持ち上げられて頭から落とされちゃう。　**Q8**　どんなルールなんですか？オーバーザトップロープがあるNWAルール（※6）ですか？　**Q9**　ひくそんは、カルフォルニアの太陽の光をいっぱいあびて光合成完了してくるハズ。メンテナンス面では、きっと粉ミルクを飲んで（※7）スクスク育っているハズ。技術的な面では、ひくそんは相撲とグレコローマンが強い。「攻撃は最大の防御なり、防御は最大の攻撃なり」（リック・フレアー大辞典より？？？）

本誌独占！　超メガ大予想

【プロレスラー】
高田延彦
VS
【グレイシー柔術】
ヒクソン・グレイシー

【打倒!!グンダレンコ】

神取忍

（LLPW）

Q1　見ていない　**Q2**　仕事が入っていたため　**Q3**　あります　**Q4**　？　**Q5**　？　**Q6**　関節技　十分位でしょう　**Q7**　小川直也さん　**Q8**　勝つ自信はありません　**Q9**　高田選手のリベンジに期待したいと思います。そしてヒクソン選手のソツのない動きにも注目したいと思います。※とにかく前日10／10は私がL―1でグンダレンコとの再戦なので、そちらもみなさん注目して下さい！　必ずリベンジします。

※1　太陽の光をいっぱいあびて光合成完了　去る6月24日北沢タウンホールで行われたUNWの大会名。そのタイトルから「ジニアス植物説」まで出る始末。60分に及ぶトークショーは観客が全く反応しない為お通夜のような静けさ。「寛至、猪木寛至、絶対に逃がさないぞ！　必ずやってやる！」というジニアスのマイクアピールに観客はしばしボー然となり固まってしまったという伝説の大会。

※2　猪木戦実現　4・4東京ドームでの猪木引退試合に突如名乗りを上げたジニアス。その理由は何と「ルー・テーズさんが猪木は弱いって言ってたから」という核爆弾発言。4・4東京ドームでの猪木戦は実現しなかったものの「最後の試合をやらせていただきますとは言ったが、引退という2文字は一言も言ってない。試合しろ！」（ジニアス）それだけでは物足りず何と4・4東京ドーム・ジニアス（試合放棄）猪木　でリアルワールドチャンピオンを名乗るとリアルワールドチャンピオンベルトを製作してしまった。猪木がキレる予感……

※3　為替相場急騰による急激な円安ドル高。新小渕政権、宮沢大蔵大臣の、為替は相場に任せればいいという発言により急激な円安ドル高が起こる。その為、各団体は外人招聘が厳しくなる。

※4　エド・ルイス　通算5度NWA世界ヘビー級チャンピオンを獲得した伝説のレスラー。ルー・テーズの師匠であり「絞め殺しストラングラー」の異名を持つ。7度結婚し、そのうち4度が同じ女だったという記録保持者でもある。

※5　ディック・ハットン　1957年11月14日カナダ・トロントにおいてルー・テーズを破りNWA世界ヘビー級王座獲得。元祖コブラツイストとしても有名。マーク・フレミングとそっくりな体型をしている。

※6　オーバー・ザ・トップルールがあるNWAルール　かつて世界最高峰と言われたNWA世界ヘビー級選手権試合のタイトルマッチルールの中にある一項目。トップロープ越しに相手を投げたり落とした場合、即座に反則負けになるというルール。リングの高さが高かったり、場外マットをひいてなくコンクリートフロアーがむき出しになっているアメリカの会場での事故防止の為のルール。しかし、このルールを悪用し、ロープへ飛ばされただけなのに自分からトップロープ越しに場外に落ち反則負けをいただくというつわ者も現れた。

※7　粉ミルクを飲んで　UNW8・8大田区大会のタイトル「土曜サウナプロレス　粉ミルクを飲んで3倍大きくなろう！」の1フレーズから。どうやらジニアスはプロテインやステロイドではなく粉ミルクを飲んで大きくなったらしい。

【アンケート内容】Q1　昨年行われた高田VSヒクソン戦はご覧になりましたか？　Q2　ご覧になった方はその時の感想をお書き下さい。また見ていない方は、何故見なかったのかお書き下さい　Q3　世紀の対決から丸一年、あなたはこの一戦に興味はありますか？　Q4　高田延彦とヒクソン・グレイシー、今回の勝者はズバリどちらだと思いますか？　Q5　Q4の選手を選んだ理由はなんですか？　Q6　この一戦は、計何分ぐらいで、どんな技で決着がつくと思いますか？　Q7　この試合の勝者と闘って欲しい選手は誰ですか？　またその理由をお書き下さい　Q8　あなたはこの試合の勝者と同じルールで闘って勝つ自信はありますか？　またその理由をお書き下さい　Q9　最後にこの両選手へのメッセージ、あるいはこの一戦に対する期待をお書き下さい

【ご協力ありがとうございました　押忍！】

前田日明よ、お前はカリスマだ!!

（by／紙プロ）

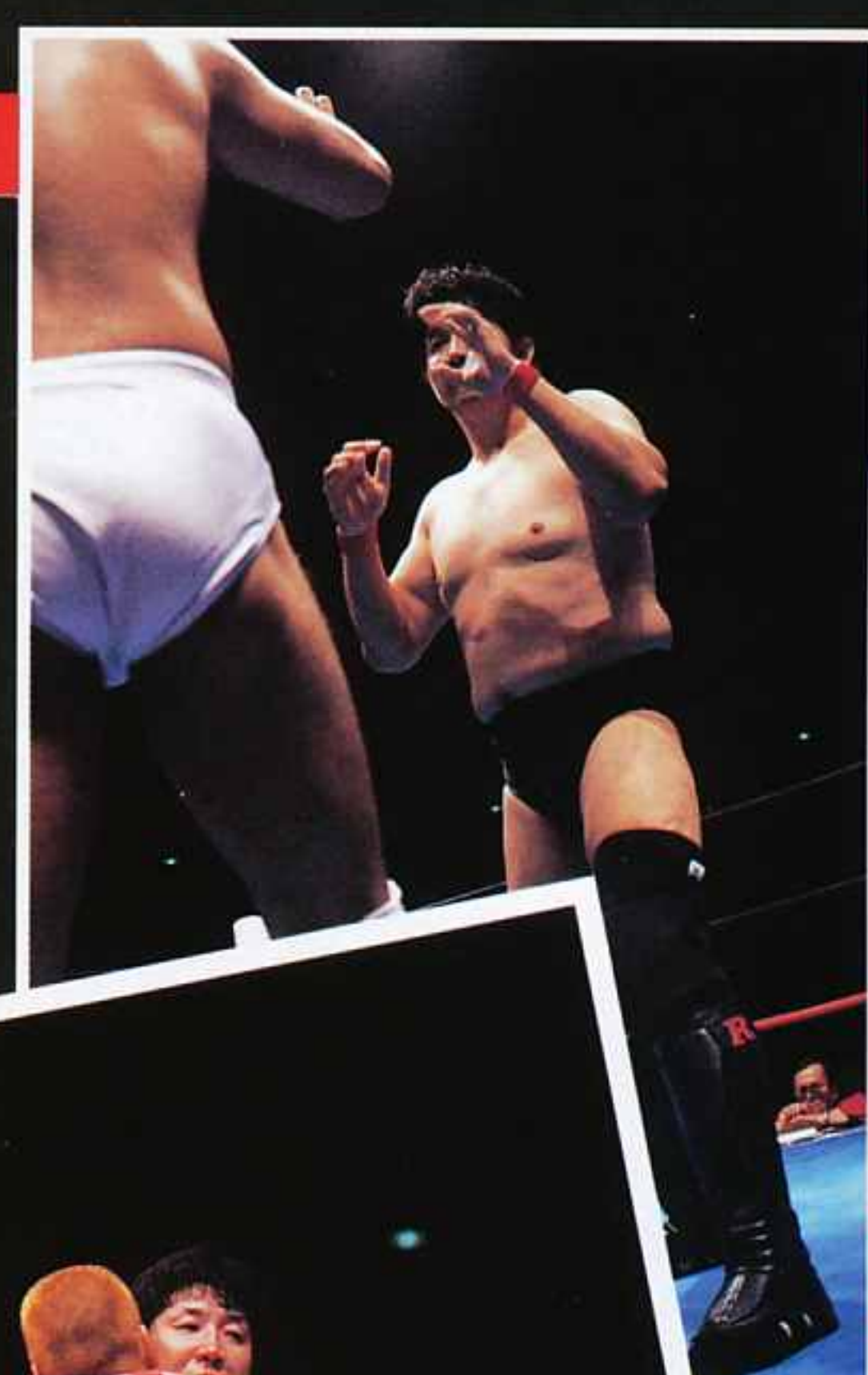
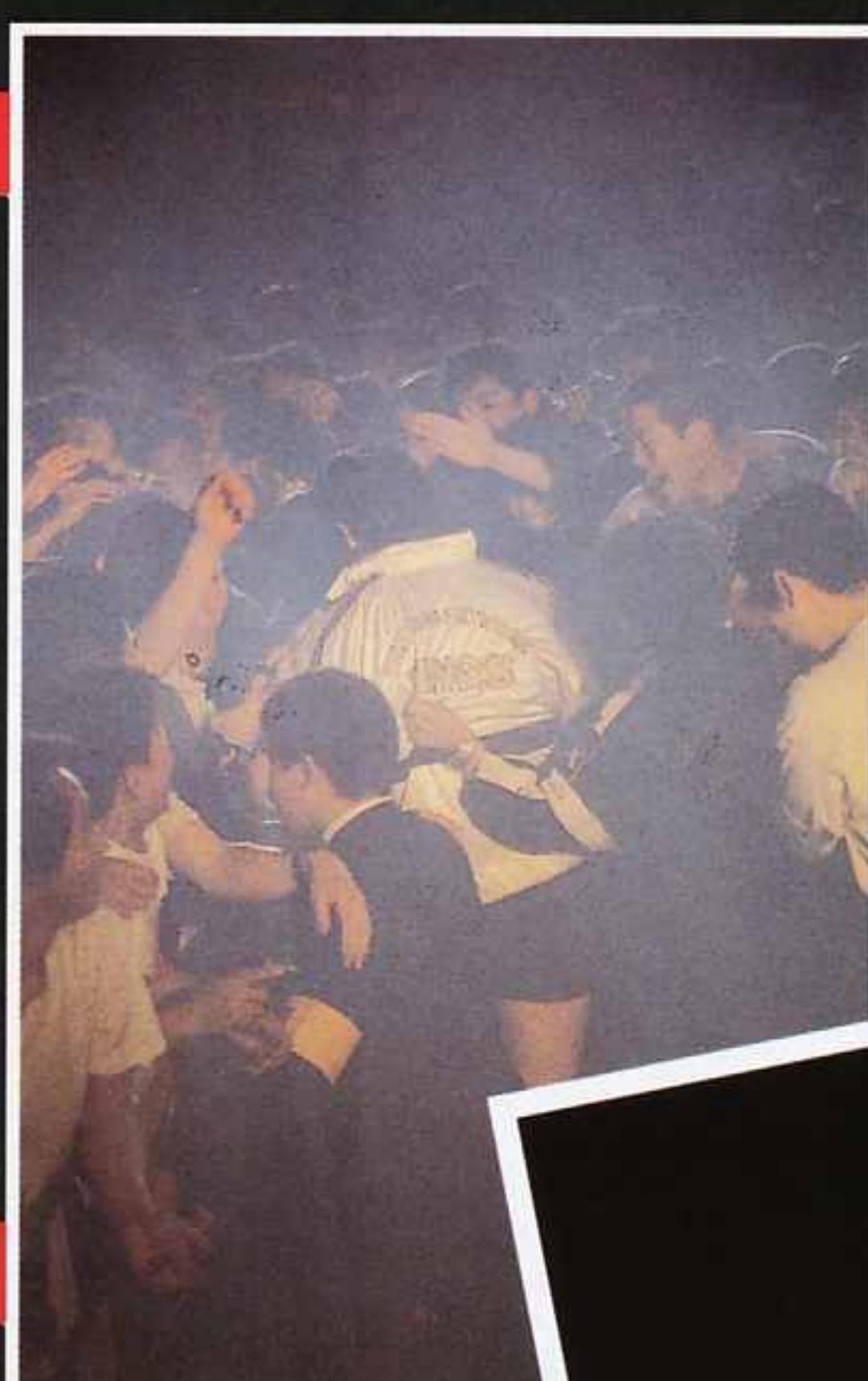
※『紙プロ』の聡明なる読者の皆様へ。これは書名ではありません。書名は『紙の前田日明』です。くれぐれも、チンケな本とお間違えなきようお願い申し上げます

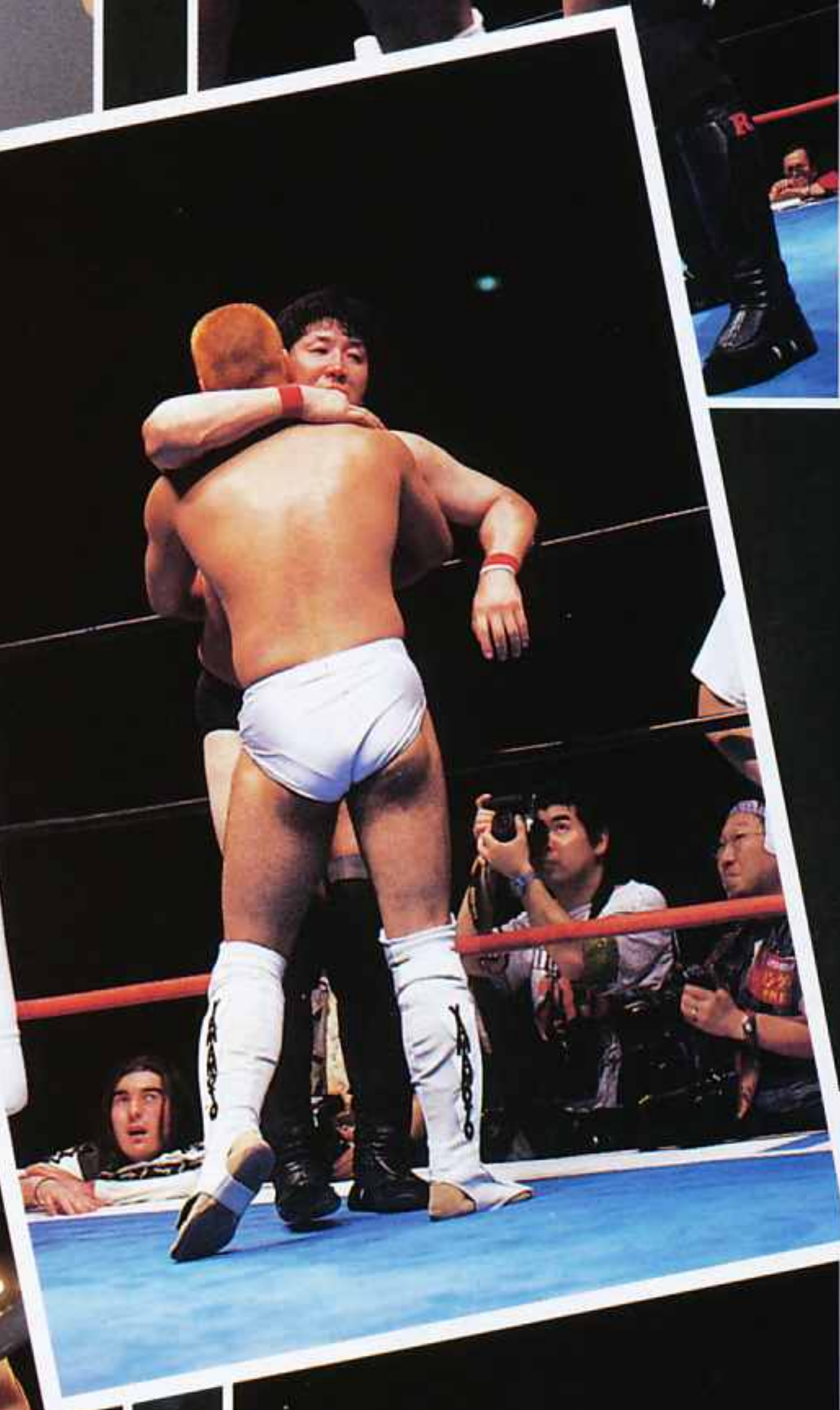
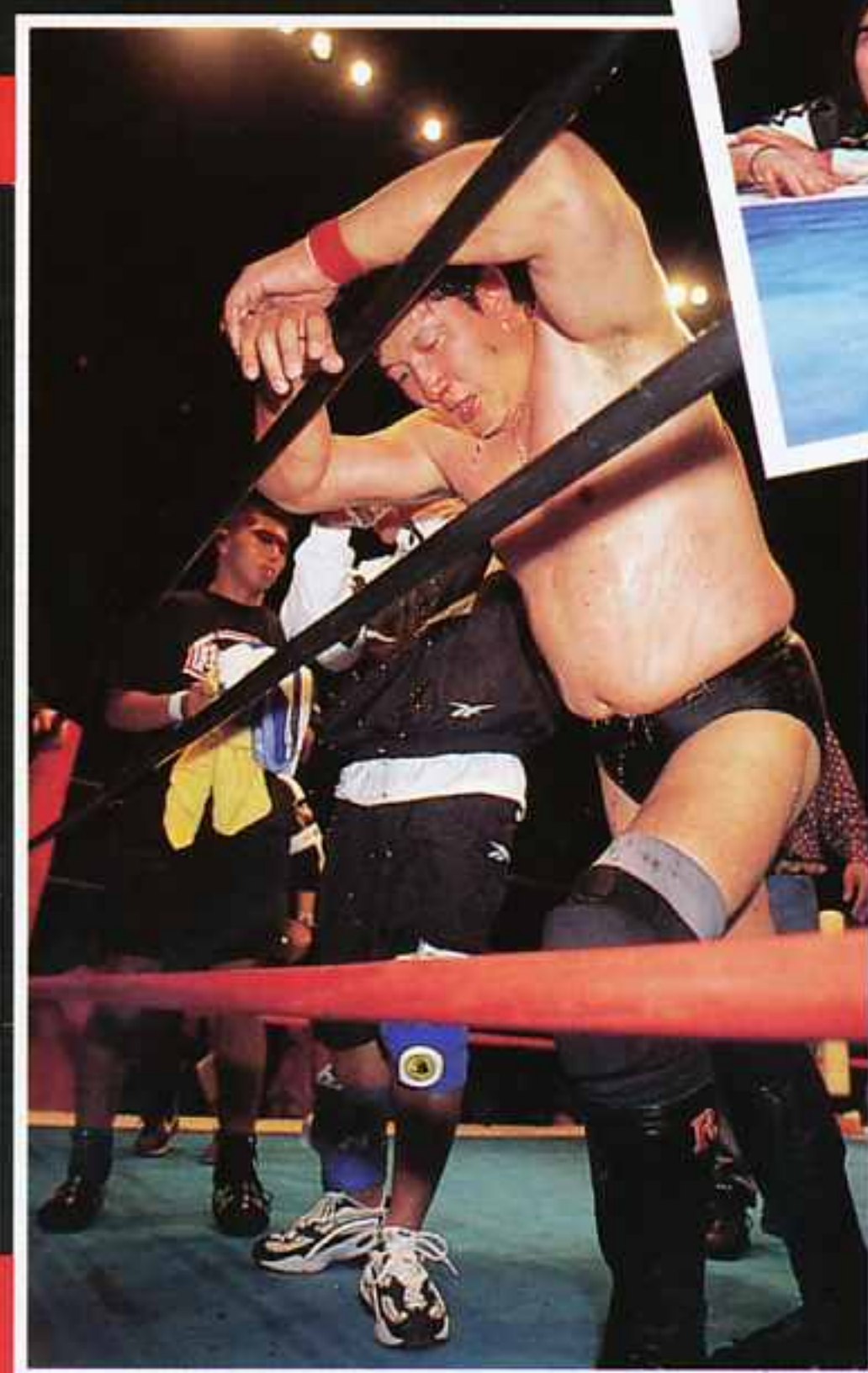
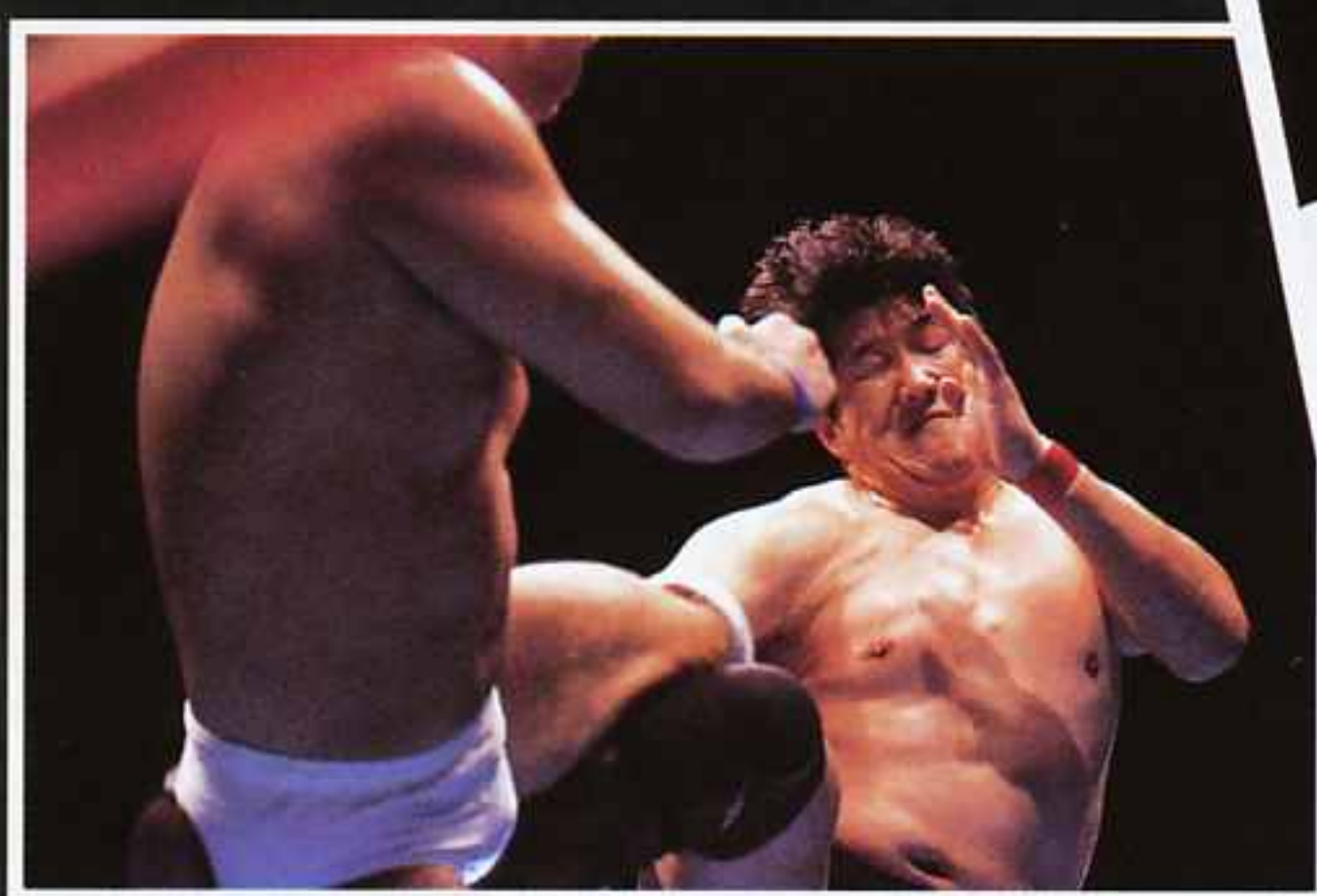
前田日明という名の
エネルギーの歴史が
ここにある!!

前田日明

リングスラストマッチ

Photographs by
Masafumi Endo

去る7月20日。前田日明は自らつくりあげたリングスのマットから降りた。確実にマット界にあったバイアグラの残量は減っている。あとは体内生産していくしかないのだ。そもそも、そのくらいのチカラは前田日明から十二分に与えられているはずなのだから。でしょ?

完了!!

to be continue?

さようなら前田日明
こんにちは前田日明

7・20観戦雑記

山口日昇

いま、バイアグラを飲んだ。
それはウソで、バイアグラを体内生産しながらこれを書いているところだ。

「ライヴはナマモノだ」——というセリフをよく聞く。
ライヴという空間の中で、〝約束ごと〟が目の前に立ち現れる瞬間がある。その瞬間が訪れたときには、意外性という魔物に取り憑かれたときに生じる〝痺れ〟のような快感とは違う、とても奇妙な解放感が生まれるものだ。
ここでいう〝約束ごと〟とは、舞台に上がる者と、舞台を見上げる者との間にある、「伝統的なルール」のことをいう。

燃える闘魂の延髄斬り
東洋の巨人の16文キック
革命戦士のラリアット
虎戦士のローリングソバット
パイレーツのだっちゅーの。ん?

「伝統的なルール」が現出したときに得られる、奇妙な解放感を求めて、人びとは、いつの時代も会場に詰めかけた。
ボクもそのときに味わえる感覚は、昔もいまも大好きだ。

だが。
マエダアキラという存在は、その「伝統的なルール」の改正をリング内外で訴え続けてきた。
新日本プロレス、第一次UWF、第二次UWF、リングス——。
不思議なことに、「伝統的なルール」を蹴破っていったマエダアキラは、舞台を見上げる者にとってバイアグラであり続けた。
当然、ボクのバイアグラでもあった。
一人の人間が転がり続ける様を見れるのは、「伝統的なルール」を甘受するときより刺激が強く、ボクの脳みそと身体を痺れさせたのである。

1998年7月20日——。
そのマエダアキラが自らつくり上げたリングスのマットから降りた。
この日、会場に詰めかけた人のほとんどは、「感動」という額縁に「ゴンタ顔のカッコイイマエダアキラ」をセレモニーごと押し込めて、部屋に持ち帰って飾り付けるつもりだった。

残念でした。
マエダアキラは額縁には入りきらない。
デカイし、オモイし、ヒロすぎるのだ。

マエダアキラは飾れない。
ライヴがナマモノではなく、マエダアキラがナマモノだからだ。

さすがにバイアグラを自家生産しながら書いていると言うことがわからなくなってくる。しかし、自家生産を繰り返していると、見えないものも見えてくる瞬間があるから、実に不思議である。

競技者としての終焉。
格闘家としての引き際。
現実を直視するチカラ。
さようならマエダアキラ。

マエダアキラは、この上、自分がつくり上げた「伝統的なルールじゃないルール」を壊して、「みんな」と「自分」にとってよりよいルールをつくりあげようと、新たな闘いの方向性にエネルギーを向けている。

血。
熱。
エネルギー。
こんにちは
「人生のトータル・ファイター」
マエダアキラ・ザ・グレート!

格闘 Viagra'98

ラストマッチ・
あと1試合・
高田―ヒクソン戦・
そして前田日明の今後――
"7・20"後・初のロングインタビュー!

これから前田日明は思考のアルティメット・ファイターを目指す!

聞き手/山口日昇
Interview by Noboru Yamaguchi
撮影/遠藤政文
Photographs by Masafumi Endo

凄い〝静か〟だったね。「緊張しなくても試合ってできるんだなぁ」って思って面白かったな

前田日明

AKIRA MAEDA

——リングス・ラストマッチ、お疲れさまでした。

前田　どうも。

——そのラストマッチでは、リングス生え抜きの山本宜久選手とリング上で向き合ったわけですけど、山本選手には何を感じましたか。

前田　「ああ、俺もこういう目をしてた時があったな」と、フッと思ったね。

——いい目をしてた？

前田　いい目をしてたねぇ。余計なことを何にも考えてない目。世俗に汚されてない目だね。

——かつての前田日明のように（笑）。

前田　そうそう。あ！　それじゃ、まるでいまの俺の目は汚れてるみたいやんけ!!

——いえいえ（笑）。でも前田さんは、花道を出てくる時にも感じたけど、余計な力が入ってなかったですね。

前田　これから試合をするっていうのに、こんなに静かな気持ちでいいのか、っていうくらい静かに出て行けたね。

——静謐っていう感じでしたよ。表情にしても。

前田　凄い〝静か〟だったね。試合前にああいう気持ちって体験したことないよね。凄い〝静か〟。「緊張しなくても試合ってできるんだなぁ」って思って、なんか面白かったな。

——へぇー。試合は20分間フルタイムだったんですけど、「前田、もっと動いてくれ！」とか「スタミナなんか切らしてないで、もっとガンガンいってくれ！」って思ってたファンもけっこういたと思うんですよ。

前田　ああ。でも、打ち合ったら勝てるわけないんだよね、いまの状態じゃ。いろんなバランスが悪くなってるし。だから「グラウンドに引き込んで」って思ったんだよね。

——時間切れを狙った作戦じゃないんですよね。

前田　全然違うよ。引き分けを狙ったら最後までグラウンドにこだわってたよ。だけど「最後だから、ねちねちした試合をしなくてもいいよな」っていう気持ちに途中からだんだんなってきてね。それに山本も打ち合いたいって感じだったんで「じゃあ、打ち合うか」って。

——当然、途中でスタミナ切れしたっていうのは自分でわかるもんですよね。

前田　「ラスト5分」ってアナウンスが聞こえた時に「引退興行で、なんでここまでやらなアカンのや！」と一瞬フッと思ったよ（笑）。

——もっと楽にさせてくれって（笑）。

前田　いっそ猪木さんの引退試合みたいに5分くらいで終わってくれればよかったなぁってね（笑）。

——でも、猪木さんの相手は元アルティメット王者ですよ（笑）。

前田　でも内容がないよう、なーんてね（笑）。

——ダハハハ。前田さんの試合は、当日の会場の雰囲気が引退マッチ特有の気分というか、「感動させてよモード」だったから、会場には伝わりきらないところもあったんだけど、画面で見るとまた違った部分での迫力の受け取り方ができて、実に面白いですね。

前田　本当は自分で解説ができたらよかったんだけどね。どんな試合も会場で見るのと画面で見るのとじゃ全然違うからね。だから、マスコミも周辺取材をビッチリやって、その辺のところをファンに提示できるようにならないとダメだよね。いまは「こうじゃないか、ああじゃないか」っていう〝じゃないか〟っていう話しかないでしょ、マスコミは。だけど選手の目から見ると極めて真実に近い話になるからね。

——その辺は、前田さんが、かなり以前から言ってた「現役を経験した選手がキチンとした解説なり評論をすべきだ」ってことですね。あ！　前田さん、『週プロ』

骨太な試合となった前田のリングス・ラストマッチ。試合近辺には、4～5年前に再び膝を壊した頃を盛んに思い出したという。当時は「競争者」と「牽引車」の狭間に揺れてパニックを起こす寸前だったらしい

「引退興行で、なんでここまでやらなアカンのや！」と一瞬フッと思ったよ（笑）

の編集長になるっていうプランはどうですか？（笑）。

前田 「俺と宍倉とどっちを選ぶんや！」ってな（笑）。

——ヌハハ。で、試合の方は、「前田勝利」という判定に、観客からブーイングが起きましたけど、耳には届きましたか？

前田 聞こえた！ ブーイングが聞こえて逆に安心したよ、俺は。

——なるほど、観客も育ってるんだなと。

前田 ちゃんとわかってるんやなぁと。

——いわゆる引退式ということで、前田選手を当日のセレモニーごと額縁に入れて、自宅に持ち帰ろうとしていたファンは、「なんでアントニオ猪木や髙田延彦とリング上で握手しないんだ」と思ったでしょうね。

前田 僕は白梅ですから。

——寒梅じゃなくて？

前田 そうです、寒梅です（笑）。

——これはあとから聞いたんですけど、招待したゲストの人たちは上の貴賓席にいてもらって、前田選手はリングから上を見上げる形で、下からへりくだって挨拶するという意図があったそうですね。だからリング上でのセレモニーはなし、シンプルにいこうと。

前田 そう。

——さすがですね、その辺の考え方は。

前田 「実るほど頭（こうべ）が垂れた稲穂かな」というこっちゃ（笑）。

——でも、当日そういう意図でゲストをリング上に呼び込まないことを、前田さんの口から伝えるはずだったらしいじゃないですか。

前田 忘れちゃった！（笑）。

——忘れちゃったって、それを言えばファンも納得するものを（笑）。

前田 だって、忘れちゃったんだも〜ん。

——ワハハハハハ！ 忘れますか。

前田 最後にリングから挨拶する時、マイクを持った瞬間に、ユニバーサル（第一次ＵＷＦ）とか（第二次）ＵＷＦとかリングスで悪戦苦闘したことを思い出して、「ああいう人に助けられたな、こういう人に助けられたな」と思ったらなんかね、それを言わなアカンなぁと思ったんだよ。その瞬間にパッ！ と忘れてしまった！（笑）。

——あのマイクはホント、ドキュメンタリー人間・前田日明らしかったですね（笑）。でも、「ありがとうございましたッ！ 前田日明は一生忘れません!!」って、普通引退セレモニーであんなに一心不乱に生々しく言わないですよ（笑）。もっとカッコつけたことを言うわけでしょ。

前田 そうかな？

——感動的な決めゼリフみたいなものは考えたりしなかったんですか？

前田 全然考えてない！ いつもそういうのは考えたことないよ。ＵＷＦの時もいつでも。

——第二次ＵＷＦ旗揚げの時の「選ばれし者の恍惚と不安、二つ我にあり」とかは？

前田 あれもパッとリングに上がった時に、〝ああ、あの言葉って、こういう瞬間のことを言うんだなぁ〟って思ったら、パッと出てきた。

——経験と知識が合致しないと出てこないですね。

前田 ああ、ワタシは自分が怖い。

——またそれですか（笑）。

前田 でもね、年を取んないとわかんない感覚ってあるよな。年を取るっていうのは面白いね。

運命の糸で繋がった人たちへの感謝の意を表明した、試合後の前田。イベント的にはシンプルすぎる演出に不満の声も漏れたが、前田が「自分にとって正しい」と思えばそれでいいのである

前田日明

AKIRA MAEDA

――じゃあ、ラストマッチを終えて寂しいという思いは全然ないわけですか？

前田　う〜ん。なんていうか、例えば田村（潔司）なり、山本なり、高阪（剛）なりの若い選手が凄い試合をやったり、偉業を残すようなことをパッとやったりしたら、その時に嫉妬心とともに「もっとちゃんとやりたかったな」って思うもんなんだろうね。

――例えば6月（27日・NK）に田村選手と高阪選手が素晴らしい試合をやりましたよね。前田さんも絶賛してましたけど、ああいう試合を見た時にはそういう心境にはならない？

前田　あれぐらいだったら、まだまだやね（笑）。

――ゲ！　あれぐらいだったらって（笑）。

前田　あれぐらいだったら、「俺がやったらもっと沸いたやろ！」ってね（笑）。

――素晴らしい。ラストマッチを終えてまで負けず嫌いってところがいいですね（笑）。あんな究極的な試合を「あれぐらい」って言っちゃうところが凄いなぁ（笑）。

前田　プロは沸かしてナンボやからね！　単純に言っちゃえば。俺は沸かしたし、動員したし、世の中の注目を集めたし、プロとして最高の仕事と思ってるよ。これ以上ない。いろんな物議をかもしながらもね。

――かもしましたねぇ。世間と闘うだけ闘ってましたよね。

前田　最前線ですよ！

――マット界とも闘ってましたね（笑）。

前田　マット界ともペンゴロとも闘った（笑）。

――ペンゴロ！（笑）。マスコミの話題が出たところで、『武道通信』という雑誌の編集長になるらしいですね。

前田　杉山さん（頴男＝初代『週プロ』『格通』編集長、現『武道通信』発行人）には昔、お世話になったからね。当時、ユニバーサルを旗揚げしたばかりの頃は、マスコミには「こいつ何を言ってるんだ？」「いい試合の一つもやってない癖に」っていう感じの目で見られてたんだよ。

――「プロレスがヘタなくせに」（笑）。

前田　そうそう、「プロレスヘタなくせに」って（笑）。

――ズバリ言ってヘタですもんねぇ（笑）。

前田　で、ファンからは「新日本と猪木を裏切った」って言われてな。あの頃に、たった一人、手を差し伸べてくれたのが杉山さんだったんだよ。そのあとにUWFに関してもズッと応援してくれたし。で、UWFをやってきたことを説明する時に、もうプロのレスリングとは言えなくなった時があったんだよ。プロのレスリングとは言えないくらいの可能性を秘めるようになっちゃったから。それで、敢えて『総合格闘技』だと言い出したら、杉山さんが『格闘技通信』を作ってね。で、いろんな意味でいつもキャッチボールがあったんだよ、あの人とは。それで杉山さんが『週プロ』とか『格通』を離れた時にもたまに会ったりとか、話したりとかいろいろしてたんだよ。で、杉山さん自身も居合いとか弓とかもやってて話が合うというか、盛り上がるんだよね。で、どうせやるんだったら武道とか格闘技のマニアのための雑誌じゃなくて、「日本精神、東洋的精神は武道的精神である」と定義づけて、それを通していろんな事件、事象にアクセスしようということになったんだよ。よく武道とか格闘技の達人でなくても「あの人は侍だ」っていう言い方するじゃない。

――はいはい。しますね。

前田　だから、つまりは「生き方」の問題なんだよね。考え方、思想、人が生きるための術。その視点をもとにして世の中のいろんなものとアクセスして繋がっていくような大きな雑誌にしたいんだよね。

――はっは！　なるほど。いよいよ前田日明も本格的に文化人の仲間入りを果たすと（笑）。

前田　文化人っていうか、俺自身がいろんなものに、ちゃんとした意見を持ちたいからね。

――持ってるじゃないですか、すでに十分に。

前田　いや、アクセスをしたいってことなんだよ。意見っていうのはそのときどきで対応する思考なんだよね。その対応する場面をいっぱい作りたいんだよ、自分自身でね。だから、これから前田日明は「思考のアルティメット・ファイター」を目指すんでございますよ（笑）。

――脳みそアルティメット対決！（笑）。

前田　哲学の大家からコギャルのおネエちゃんまで対応しようという（笑）。

――ガハハハハ！　女子高生と会う可能性もあるわけですね。『武道通信』の中で。素敵だ（笑）。

前田　そうそう。女子高生があるかないかわからんけどね（笑）。

――そういう幅の持たせ方もオツですね。「武道とは生き方である」と定義しちゃえば何でもできますよね。

前田　人間が生きるってことは対応するってことなんだよね。相手の立場を尊重する、あるいは自分の意見を大事にする、その時にどこまで歩み寄れるかってことなんだよ。そうやって関係を構築していく。例えば山口くんと俺が同じ高度だったら、その関係性は全然大したことないんだよ。でもね、両人が1000メートル上空にいたら、全然見える位置も見えるものも違うしね。どちらかが歩み寄ったか寄らないかということも問題にならなくなってくる。

――お互いが追いついていかなきゃいけない関係になりますもんね。

前田　そうそうそう。バージョンアップさせていくんですよ（笑）。

――「関係」をバージョンアップしていくんですね（笑）。自分だけバージョンアップさせてもしょうがないと。じゃあ杉山さんとの関係をバージョンアップさせたものが『武道通信』であると。

前田　そうそうそう。杉山さんとの関係をバージョンアップさせた結果がこうなったと。だから、俺の私的な人脈っていうか、個人的に大事にしてる人間関係をい

7・20横浜アリーナで零乃巻（創刊準備号）が発刊された『武道通信』。「切腹の作法」なる記事もあった(!)。壱乃巻（創刊号）10月上旬発刊予定である
■問い合わせ先
杉山頴男事務所
☎042・580・6428

杉山さんが冗談で作った（本人談）「スギヤマ・カード」。裏には『週プロ』編集長時代、徹夜明けで作業を終えてホッとする杉山さんのスナップが載っている。推察するに、かなりの強者だ！

AKIRA MAEDA

っぱい紹介したしね。

——前田先生ほどのレベルじゃないにせよ、この『紙のプロレス』という雑誌も、「世の中とプロレスする雑誌」というものを掲げて、「世の中すべてはプロレスである」と定義してるから、実はなんでもできるんです（笑）。

前田　いいじゃない（笑）。

——発刊当初、まだ判型がちっちゃい頃の『紙プロ』もそういう目論見だったし。

前田　だから、それをもっと全面に押し出して、『武道通信』とくっついてさ、全部とアクセスしちゃえばいいんだよ。例えば政治家で小渕恵三っておるやろ。アレもかなりプロレスやってるって知ってる？

——国会にプロレスを持ち込んでるわけですか（笑）。

前田　小渕はな、「梶山さんを大蔵大臣にとマスコミでは打診してます」とかなんとかって話があったけど、まったく打診してなかったんや、本当は（笑）。世の中には、けっこういろいろ面白いプロレスがあんねん（笑）。

——ガハハハハ！　政治を舞台にしたショーマン派プロレスですね（笑）。

前田　そう。「やった、やった」って言って何にもやってない。「やってない」って言いながらやってるんやったらええけどさ。やってないとなったら、これはもう下等なプロレスやね（笑）。

——下等なプロレス（笑）。

前田　「やってない」と言いながら、実はやってるのが高級なプロレスだからね。

——それは高度ですよね。でもいま前田さんが言った「下等な」っていうイメージが、どうしても、世間がプロレスを見る視線の中にはあって、それは東京ドームに6万人が集まる現在も実は大して変わってないと思うんですよ。でも、そういった世間の視線を射返して、「プロレスにも道がある」ということを提示したのがＵＷＦだったわけですよね。

前田　そうそう。プロレスの原点回帰というところから始めて、プロレスを定義する作業もしてきたし。あとは全日本のレスリングに対して、あるいは新日本のレスリングに対して、「それをやるんだったら、こうやった方がいいよ」って言ったこともあるんだよ。「どうせそれをやるんだったら、こういうやり方もあるんじゃないですか？」みたいにね。「ＵＷＦをやれって言っても、お前らにはどうせ無理やろう。俺らは選ばれた人間だも〜ん」ってね。

——よく考えてみれば、実に挑発的ですよね（笑）。

前田　だから「選ばれないもの同士、こういうことをやった方がいいよ。エッヘン」って言ったこともあったんだよ。それさえもイヤって言ったから、どうしようもない。俺はすべてをＵＷＦにしようとしてたわけじゃないんだから。

——プロレス界の中で前田さんとの関係性を高めあってこれた人っているんですか？

前田　うーん、プロレス界の中ではどうしても苦しまぎれになってしまうよね。

——例えばＵＷＦと新日本が業務提携していた頃に名勝負を展開した藤波辰爾さんとかはどうなんですか。

前田　藤波さんは全然違う視点でいるんだよね。スポーツ・ビジネスとして新日本とかプロレスというものを捉えてやってるから。別の次元からの高い視点なんで、それはそれでわかるんだけど、違う次元でやってるんで段々ちぐはぐになってきちゃうんだよね。

——長州（力）さんはどうですか？

前田　あの人もいまはもうスポーツ・ビジネスっていう視点でやってるでしょ。俺は吉田さん（長州）に変わったヤツがいるなっていう目で見られてたからね（笑）。だから、去年やった『週刊プレイボーイ』での対談でも「お前は誰とも交われないよ」って言われちゃうんだよ。交われなかったら、たった一人でリングスを立ち上げて、海千山千の猛者も含んだいろんな人間とアクセスできないって。

——長州さんは「アキラと違って自分は交われる」と言いたかったわけですかね。

前田　そう。俺をダシにしてたわけや（笑）。俺はコンブか？ってね。

——ガハハハ！　コンブ！

前田　〝しょうがない、昔、蹴っ飛ばしちゃったからな、ボク〟と思ってね（笑）。でもね、俺は、基本的に友達であろうとなんであろうと〝付き合いきる〟んだよ。よくあるやろ？　なんかの拍子に言われたひと言でイヤになったとか、女々しいチンケな関係。ああいうんじゃなくて、付き合いきる！　付き合いきって、それでもどうしようもなくなったら、「それはまたその時に考えよう」みたいなね。そのためにはやるだけのことをやってあげたら、ハッキリこっちもモノ言えるじゃない。取りあえず自分のできる範囲のことをして、その上で相手がどういう反応をするかでわかるじゃない、その人ってものが。

——はいはい。〝付き合いきる〟っていうことでいえば、相手のケツの穴のシワまでわかっちゃうと飽きるのは当たり前なんですけど、飽きた先にもけっこう新しい発見ってあるもんなんですよね（笑）。

前田　そうそう（笑）。

——そっから先は、それを発見できるかどうか、自分の〝視力〟の問題になってきますよね。

前田　このシワのあたりにイボ痔ができてるから、つついたろか、とかね（笑）。

——ガハハハハハ！　ここまで知ったらたぶん全部知り尽くしただろう、って思ってても、知らないことが次から次に出てくる関係ができたら、これは実に面白いですよね。

前田　不思議なもんで、相手のことをすぐにわかっちゃうとね、「こっちだけわかっても申し訳ないから、ちょっと見せてやろうか」って気になる時があるんだよ、

髙田から（10・11の）「セコンドお願いします」って言われて「いいよ」ってOKしたんだけどね

ホントに。

—進んでさらけ出す（笑）。

前田 見せてやろうかな、キ○タマのシワの一本ぐらいって（笑）。

—ガハハハハ！ 子供の頃ってそういうことってよくありましたよね。さらけ出したくなる時（笑）。

前田 あったあった。ホントは人間って大人になっても基本的なことは同じだと思うんだよね。でも、時代の空気なのかどうかわからんけど、最近は妙になんかみんなカッコつけてるんだよね。なんか三文小説みたいな付き合いっていうかね。

—あ、妙にカッコつけるって言葉で思い出しましたけど、前田さんのラストマッチを見て一つだけ残念だったことがあります。前田さんはもう少しカッコつけてください。ラストマッチくらいビシッと身体を絞って出てきてくださいよ！

前田 そ、それは……すいません（笑）。

—こうなったらもう1試合必ずやってもらいますよ、ホントに（笑）。

前田 はい。それはみんなに言われてますから。それは俺も素直に謝りますよ（笑）。

—ガハハハハハ！ いや、謝られてもしょうがないんですけど、だいぶショックを受けたファンもいたと思うんですよ。

前田 でもまあ、終わってしまったことをつべこべ言ってもしょうがないっしょ！（笑）。

—あ、そうきますか！（笑）。

前田 あの姿を見て、やっぱり引退せざる得なかったんだなってわかってくれたらね（笑）。

—「あれ以上はもうできないだろうな」って納得した物わかりのいいファンがいる裏で、「もっとトレーニングしてビシッとやったら前田日明はこんなもんじゃない」っていう欲張りなファンもいると思うんですよ。

前田 うん。ま、しゃーないやろ。俺を見るな、自分を見ろ！ ですよ。

—ラストマッチだけは、「自分を見るな、俺を見ろ！」でいいと言ってたじゃないですか（笑）。

前田 へっへっへ。

—最後のリングスとは別枠のもう1試合は決まったんですか？

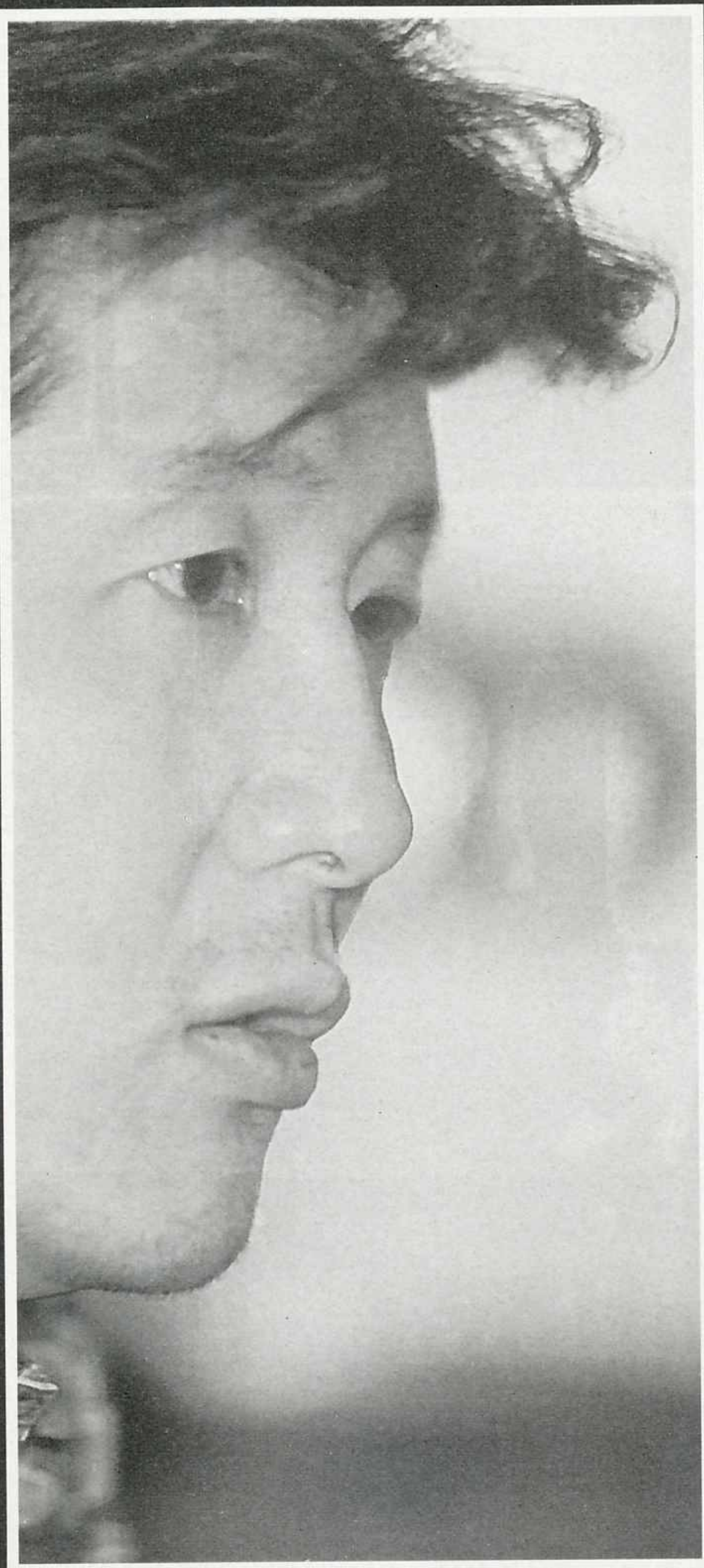
前田 交渉中だね。

—交渉中ということは、前田さんの中では「あと1試合やってもいい」という気持ちがあるわけですよね。

前田 リングスの中で同じ相手と長年やってると、なんかファイターとして中途半端になっちゃうんだよね。だから、1回こっきりで誰もが認める凄いヤツとはやりたいね。

—じゃあ、リング上のファイターとしての芽はまだくすぶってるんですね。

前田 そうですよ。

格闘 Viagra'98

ああ、ウルトラマンだけは俺のことをわかってくれたんだなって（笑）

——よかった。なんとなくホッとします（笑）。

前田 「静かな気持ちで試合ができるんだな」っていうのは面白い経験やったからね。

——その静かな顔の前田日明も前田日明だし、みんなが期待していたゴンタ顔の前田日明も前田日明だし、どっちがホントの前田日明というのはないんですよね。

前田 そうそうそう。

——二つとも前田日明ですもんね。

前田 人間は必要な時に必要な顔になるんだよ。

——なるほど。固定観念で見るんではなく、そのときどきの前田日明の顔を直視したいですね。いまのファンは、ヘタなドラマに毒されちゃって、ドキュメンタリーを見る目がなさすぎますね。

前田 あんなことしてしまった、こんなこともしてしまったという無駄な経験なんかこれっぽっちもないんだよ。その時は「しまった」と思ったりするんだけど、なぜ「〝しまった〟と思った」かを分析して自分で努力して動けば、次に動く時のきっかけになるんだよね。「しまった」と思ってしまった経験によって、次のことに結びついたっていうのは、考えるといっぱいあるよ。

——昔の人は偉いですよね。いいコピーライターですよ。「失敗は成功のもと」っていうのは（笑）。

前田 まさにその通りだよ。年を経た顔っていうのは、重なった分の年輪が出てくるんだよね。その人の顔の意味は、見る人がそれぐらいの歳にならないとわからないよ。それはあると思う。

——ところで10月11日には髙田（延彦）さんがヒクソン（・グレイシー）と再戦しますけど。

前田 （大きく息を吸い込んでから）そうやね。髙田から「セコンドお願いします」って言われて「いいよ」ってOKしたんだけどね。

——エ！ ホントですか!!

前田 でも、よく考えてみたら、その日はイギリスに行かなきゃいけないんだよ。リー・ハスデルが向こうでプロモーションするからね。キックの試合の中にリングス・ルールで2〜3試合入れてやるんだけど、そこにジャパン勢を貸してくれっていう話があって連れて行かなきゃならなくてね。

——いや、かわいそうだけど、この際リー・ハスデルには泣いてもらいましょうよ。日本のファンのためにぜひセコンドについてください。前田さんがセコンドについてだけでこの闘いのトーンは変わってくるんですから。みんなで髙田さんを応援しましょう。

前田 どうしましょう。まあ、いま現在はホントに調整中ってところだよね、調整中。

——思い切った調整をしてください、ここは。で、髙田さんがヒクソンに勝つチャンスがあるとしたらどんな場面だと思いますか。

前田 技術うんぬんっていうよりも、〝何でもあり〟になったら、どういう風なポジションで何を狙って、どういう風に闘っていくか戦略をピシッと決めていかないとね。行き当たりばったりでやってるとマズイでしょ。

——ズバリ言って髙田さんに勝機はあると思いますか。

前田 勝つチャンスは十分あると思う。とにかく悩んで闘っちゃいけないということだね。前回は自分の身体の調子とかいろんなものがあって自滅しちゃったって感じが強かったからね。それに土壇場にきてロープを掴んじゃいけないとか馬鹿なことやられてさ。それはパニックになるよなぁ。それに髙田は、ここ2〜3年精神的にスリ減ることが多かったと思うよね。そういうことの連続だったじゃない。だから消耗したんだよね、たぶんね。

——そういうのを聞くと選手と経営者は一緒にやっちゃいけないってよくわかりますね。というか、団体運営というシステムそのものが金属疲労を起こしてますよね。

前田 毎月毎月、社員とか選手を食わしていくために試合をしなきゃいけないっていうのは大変なことだよ。どっかに道場を構えて好きなだけ練習して、オファー

ウルトラマンからの手紙（本物）と、同封してあったサイン入りポートレート（本物）を心の底から嬉しそうに見せる日明兄さん。ラストマッチを終えても前田日明は前田日明である。以上！

格闘 Viagra'98

AKIRA MAEDA

があれば試合しますみたいなさ、そういうのから見れば数百倍苦しいよ。

—それはそうですね。だけどそれを言ったら、観客の前で闘う意味っていうものを根本的に洗い直していかなきゃならないですよね。

前田　俺は反対にヒクソンに言いたい。「なんでそんなに金がいるんだ？」って。これからは、団体が選手を入門させて毎日食わせて練習させて。で、ケガしたら病院に入れて、休んでる時でもギャラ払ってっていうのは、いろんな意味で難しくなってくるよね。で、うちらの場合は単純に同じレベルの選手が2倍いたら月に2試合できるじゃないかっていう話があるんだけど、客の方は「2倍いるんだったらそれを1カ所に集めて、おっきな試合をやってくれよ」ってなっちゃうんだよね、どっちかっていうと。

—ああ、そうですね。

前田　そうなってくると、最終的にプロモーション方式で、動員力のある選手を呼んでマッチメイクして大会を開いてということになるんだけどね。でも、ある程度、底辺とか組織がシッカリしてないと、ただの選手のギャラの釣り上げ合戦だけで終わっちゃって、結局プロモーションというものも維持できなくなってくるんだよね。そのためにリングスは長期展望に立ってネットワーク運営とか、各国のプロモーションを立ち上げさせたりとかやってるわけでしょ。

—さっきの話じゃないですけど、プロモーター同士でも高度の高い関係を構築していければいいんですけどね。

前田　そうそうそう。それで俺が1000メーター上空にいると、下から引っ張りよる連中もおるからね。降りてこいって言って。だから、いろんな意味で、これから変えていかなきゃいけないことが多いよ。

—ところで全然話は変わりますけど、前田さんは結婚しないんですか？（笑）。

前田　正式に引退してからボチボチ考えますよ（笑）。でも、ラストマッチのことを考えながら、次の試合のことの動きもやらなきゃあかんかったから不思議な気持ちやったね。

—いや、話をはぐらかさないでください。相手はいるんですか？（笑）。

前田　相手はいま募集中やね（笑）。

—ガハハハハ！　いつまで募集してればいいんですか！　なんか汚いよなぁ。全国1千万人読者のみなさん、ダマされないようにしてください（笑）。

前田　いや、ホントにホントに（笑）。あ、そうや！　あのな、意外な人から手紙がきたんだよ。

—誰からですか？

前田　ウルトラマン！（笑）。これや、これ（といって手紙を取り出す）。ええやろ、ええやろ。読んでみ。

—あ！　ホントだ。（ウルトラマンの写真入りの封筒から写真入りの便箋を取り出し）「日明さん、元気かい？　いま日本は平和でとても豊かな国になった。そんな平和な暮らしの中でキミが元気に育ったことをボクは嬉しく思う。（中略）ボクは怪獣の攻撃から地球を守ってきたんだ。キミも弱い人を助けたり、親切にしたり、素直な気持ちを忘れずに成長し、宇宙の平和のために一生懸命だったね。これからも元気で地球を守ってくれよ。キミと友達になれ、こうしてキミと文通できてとても楽しいよ」。カァ〜。前田さん、文通してたんですか、ウルトラマンと（笑）。

前田　そうそう。夢の中で文通してた（笑）。

—なになに。「悲しいこと、うれしいこと、落ち込むようなことがあったら星空を見上げてボクのことを思い出してくれ。ボクはM78星雲からいつでもキミのことを見守っているし、応援しているよ」。カァ〜、いいなぁ、これ。嬉しいなぁ、こんなのもらったら（笑）。

前田　でしょ？　うれしかったもん、俺も（笑）。ああ、ウルトラマンだけは俺のことをわかってくれたんだなって（笑）。

—ガハハハハ！　ついでだから全部読んじゃいますか。「キミが勇気ある地球人であることはボクの誇りだ。キミと一緒に闘える日をボクは待っている。もしかしたらかつてハヤタ隊員と合体したようにキミと合体することになるかもしれない。その時はよろしく頼む」。メチャメチャいい、これ。ウルトラマンと合体できるなんて夢のようですよ！

前田　でしょ？　粋なファンレターでしょ（笑）。

—「日明さんはボクがゼットンに苦戦して倒された姿を見て、仇を取るために最強の男を目指して頑張ってくれたんだってね。ありがとう。ボクはあれからなんとか努力をして復帰したよ。日明さんも引退したようだけど、まだまだ闘うこともあるだろう。身体に気を付けて頑張ってくれ。さようなら。1998年　M78星雲光の国　ウルトラマンより」。これはワクワクしますねぇ、もらったら（笑）。

前田　嬉しい！　自信ついたもん。しかもサインまで入ってるし。一番ほしかったファンレターやね（笑）。

—誰が出したか詮索するよりも、これはホントにウルトラマンが送ってくれたものと思いたいですね（笑）。

前田　そうそうそう（笑）。

—そういうファンタジーがいいですね。それじゃあ、ウルトラマンと合体して最後の敵と闘いましょう！

前田　そうやね。でも相手がゼットンと合体したりしてな。

—そうなったら、ゾフィーを呼ぶだけです（笑）。

【8月13日、光の国近辺にて収録】

紙のプロレス RADICAL

1998 no.11

ページも増やしてな
ピンナップもつけてな
なんの文句があんねん!
いいですか？ 終わりです

紙のプロレス・ラディカル

CONTENTS

前田日明の大好評人生相談『人生は語らず』はラストマッチを終えたばかりのため休載いたします。次号に乞うご期待!

Art Director
出田さん●San Ideta
Design／two-three
村松さん●San Muramatsu
ヒサくん●Kun Hisa
マツ●Matsu
古川ふるーる●Furuuru Furukawa

表紙モデル／髙田延彦&エンセン井上
撮影／斉藤ユーリ
スタイリング／Nobuhiko Takada&Enson Inoue
ヘア&メイク／Nobuhiko Takada&Enson Inoue

※だからね、「RADICALとは何か?」それを考えんとあかんねん。「根源的」とか「根本的」とかいそういう意味やんけ。でしょ!?

※ピンポンパンポーン。T印刷の大杉様、T印刷の大杉様。今度来るときのお土産は「ガリガリ君」以外のものにしてください。ピンポンパンポーン。

格闘Viagra'98

前田がやめようが たとえ髙田が散ろうが（散らないけど） 『紙プロ』はいつだって妥協しないゼ!!

山口日昇

【前田日明プチ語録】
「1年たとうが、2年たとうが、いつだって妥協しないゼ!!」
～87・8・28後楽園。第一次UWF崩壊後、新日本プロレスのリングで行うUWF主催興行のリング上にて

「前田がやめようが、（たとえ）高田が散ろうが（散らないけど）、『紙プロ』はいつだって妥協しないぜ！」

――こう書いたメモの切れっぱなしを残して、山口日昇はこつ然と姿を消した。まあ、よりによって一番クソ忙しいときに出ていったというか。

87年8月28日の、UWF主催興行を思い出していただきたい。第一次UWFが崩壊して、新日本プロレスと業務提携していた頃。新日本プロレスのリングを使って行われた、UWFの2度目の主催興行のことである。

前田日明は、藤原喜明に破れながらも、リング上からこう叫んだ。

「1年たとうが、2年たとうが、いつだって妥協しないぜ！」

――第一次Uが崩壊して約2年、前田はこのとき、新日本のリングに上がりながらも、UWF再興の夢を捨てないことと、UWFの方向性を失わないことにエネルギーを注いでいた。

きっと山口日昇は、フとした拍子にこの前田の言葉を思いだし、それにかけて、冒頭のメモに書いてあることを思いついたのだろう。

はたして山口日昇がこの言葉を右ページ↑にあるように、巻頭記事のタイトルにしたかったのかどうかも定かではない。だって何を書こうとしてたかなんて、絶対に当人の山口日昇にさえ、わからないんだから。

でもな、妥協しないのはいいが、巻頭記事くらい妥協しないで書いて書いていけよ、ボ……これ以上書くと殴られるのでやめます。

でも、こんなことを書いていて、ページは埋まるんだろうか。

あとは、山口日昇の机の上に置いてあるメモを片っぱしから載せてしまおう。うん、これでいい。っていいのか？

10・11、今度の高田のテーマは「自由」である。
「世紀の敗戦」「A級戦犯」といわれた、昨年の敗戦を呼び込んだ精神状態（樹海）から抜け出すのはもちろんだが、「守るべきもの」「史上最大の再起戦」「ゼロからやり直す」といったものからも離れて、とにかく、ありとあらゆることから「自由」になれるかどうかである。
竹博士の上田なんとか（後で調べる）は「竹は木なのか草なのか？」と聞かれ、「竹は竹だ！」といったそーだ。
「高田はプロレスラーなのか格闘家なのか？」と聞かれたら「高田は高田だ」といえばいいんじゃないか。でも、「高田らしさ」という固定観念からも離れないと、「高田は高田」にならない――これいいけどダメ、ボツ

ニオイがキツすぎるのは嫌だが、ニオイがないのもイヤだ。やっぱりニオイはあった方がいい。前田のリングス・ラストマッチは、明らかにニオイがあった。臭気があった。こういうのっていいなぁ。最近の観客席にはニオイをかぎとる力がない。ニオイがわからないということはなにも残らないということだ。

精神のバイアグラとは何か？↑バイアグラのつづり調べる

「理由なき好意」はつまらない。「対立」するまでのアイデンテテーがないのだから。「対立」してもいいから「プロレス」をみるという行為の理由について述べたい。

マット界にバイアグラを！！！！！

勝て、高田！狩れ、高田！

ああ、銭湯いきたい

クミちゃん　03（○×■○）▼×○2

バイアグラを飲まないと強くなれないのはつまらない。バイアグラを手に入れるのではなく、バイアグラを~~作れ~~つくった方が面白い。「関係」こそ体内バイアグラ、脳内バイアグラをつくれる最大のものだ。プロレスファンはいまこそ「プロレス」との関係を考えるべきだ
→べきっていうのは×

以上が山口日昇の机の上に残されていたメモ（というか落書き）のすべてである。

こんなの載せて読者は怒らないかなぁ。

そういえば、山口日昇はこういってたね。

「読者のことなんて考えなくていいんだよ。アテにしちゃえばいいんだから」

アテにするのはいいけど、俺達が原稿を埋めてくれることまで期待するな、このボ…ああ、書けない。あ！　これを書いているのが誰か絶対に口を割らなければいいんだ。

巻頭記事くらい妥協しないで書いていけよ、ボケ！　散れ！　ああ、いつも山口日昇に言われていることを言えるっていうのは、随分とスッキリするものだなあ。

そういうことで、頑張れ、ノブ！

こんな巻頭記事でいいんだろうか。妥協したくないなぁ。

RADICAL Viagra NEWS

桜庭の10・11の相手はアラン・ゴエス!?
秋にまたもや「桜庭咲く」か

拝啓、格通様。「桜庭咲く」は格通様のパクリじゃないです。うちの方が半年前に使ってましたから。別に偉くないんですけどね。誰でも考えられるし

さて、急きょ開設したインフォメーション・コーナーである。名付けて、『RADICAL Viagra NEWS』。ファンの皆様に精神のバイアグラをプレゼントする情報コーナーです。

『紙プロ』には、ストゥージョン戦に勝った際の高田延彦のように、確実に読者が跳ね回って喜ぶ情報（例えば、○○大会の対戦カードとかね）が、各団体さんからFAXなりなんなりで送られてくる。でも、せっかく各団体さんがご厚意で教えてくれても、いわゆる「情報コーナー」がないため、載っけられないものが、た～くさん出てくる。

そもそも、隔月刊というゾウリムシよりもノロい発刊ペースそのものが「情報コーナー」には向いてないのだが、ズバリ言ってしまえば、いわゆる情報記事を書こうとするヤツがいないということなのである。

『紙プロ』の体質が、「見てから考える」「ただ単に情報載せても、つまんねぇだろ！　もっとオンモシレエことをやりたいというか！」という専門紙にはあるまじき、いやハイテク情報化社会にはあるまじき特異体質の側面があるため、「展望記事」というのが大の苦手なのだ。大体、編集長の山口日昇からして、自分の興味あることしかやろうとしないし、読者の側に立って考えるなんてことは鼻からしない男なのだから。ここらへんが「ファン主権」という概念を打ち出しながら、出版ビジネスを成功させたターザン山本と一番違うところである。まぁ、その誇り高き〝ビジネス芸術家〟のターザンも、最近はあんまり誇り高き仕事はしてなくて、文字どおり落武者ぶりに拍車がかかってるんですけどね。拝啓、山本様。全然、あれ「挑発」になってないです（わかる人にはわかりますね）。

で、なんやったっけ⁉（吉村道明調）。

ね？　こういうこと余計なこと書いてるから情報ページが書けなくなってくるわけですよ。えーと、あ、そうそう。抜群に面白い情報を仕入れました。いくら「情報コーナー」は「メンドくせェんです！」と思ってる『紙プロ』でも、しっかり情報網は持っているのだ。しかも海外に！

その『紙プロ』海外情報網に引っかかってきたネタは、アラン・ゴエスの『PRIDE．4』参戦。

そうですね、ゴエスといえば、16歳でストリート・バーリトゥードを体験し、95年5月にはパンクラスのリングでフランク・シャムロックと引き分け、96年プエルトリコで行われた第8回アルティメット大会の会場ではタンク・アボットと乱闘騒ぎを起こしている、あの〝お騒がせ男〟です。

そしてそのゴエスの『PRIDE．4』の相手は我らが桜庭和志！（ニコニコ）。

6・24の『PRIDE．3』では、〝フリー・ファイト界の新星〟〝褐色の宮本武蔵〟といわれるカーロス・ニュートンを見事な試合の末に下し、その実力を再び満天下に示したが（P52参照）、〝お騒がせ系〟のゴエスのようなタイプとやれば、「プロスポーツマン・カズシ」の奥底に眠る「逆ニコニコ」の部分も顔をのぞかせて、いつもと違う桜庭が見れるかもしれない。

現時点では、主催のKRSから正式発表はないが、本誌の情報網から判断すると、80％は実現しそうな雰囲気ではある（ハズれても謝らない）。期待大だ！

しかし、桜庭vsゴエスが実現しなくても、vsヘンゾ（・グレイシー）、vsホイラー（・グレイシー）との対戦も候補に挙がっているというから、いずれにしても、桜庭の対戦相手は誰になっても、ファンが喜ぶ実力者になりそうだ（ニコニコ）。

【アラン・ゴエス】1971年リオ・デ・ジャネイロ出身。10歳のときから祖父に柔術を習い、15歳でカーウソン・グレイシー道場に入門。バーリ・トゥードを含めて、過去200試合以上を行っている、みかけによらない暴れん坊

今年3月に行われた『PRIDE．3』では、高田道場の佐野友飛を30分以上かけてジックリと料理したホイラー・グレイシー。もし桜庭との対戦が実現すれば、高田道場のリベンジマッチとなる

「もしヘンゾとやったら精神的にボロボロにしてやりたいですね」と桜庭はニコニコ語っていたことがある。コワい。ニコニコしていたとしても、「グレイシー」に対しては胸に秘めるものがある

“KRS公認”PRIDE.4観戦ツアー

■大阪・札幌・九州発着

★Aコース　大阪発着／飛行機&宿泊パック
（最少催行人員20名）
10／11　伊丹発　08:50／羽田着　09:50　日本航空102便
～東京ドームにてPRIDE.4観戦～
～試合後、ホテルにてターザン山本とPRIDE.4を語る夕べ参加～（水道橋グリーンホテル泊）
10／12　羽田発　06:45／伊丹着　07:45　日本航空101便
*料金¥42.800（飛行機代、ホテル代、チケット代込み）

★Bコース　福岡発着／飛行機&宿泊パック
（最少催行人員20名）
10／11　福岡発　10:00／羽田着　11:30　日本航空356便
～東京ドームにてPRIDE.4観戦～
～試合後、ホテルにてターザン山本とPRIDE.4を語る夕べ参加～（水道橋グリーンホテル泊）
10／12　羽田発　06:40／福岡着　08:20　日本航空351便
*料金¥54.800（飛行機代、ホテル代、チケット代込み）

★Cコース　札幌発着／飛行機&宿泊パック
（最少催行人員20名）
10／11　札幌発　10:00／羽田着　11:30　日本航空504便
～東京ドームにてPRIDE.4観戦～
～試合後、ホテルにてターザン山本とPRIDE・4を語る夕べ参加～（水道橋グリーンホテル泊）
10／12　羽田発　06:40／札幌着　08:10　日本航空501便
*料金¥53.800（飛行機代、ホテル代、チケット代込み）

★Dコース　大阪発着／飛行機&高速バスパック
（最少催行人員20名）
10／11　伊丹発　08:50／羽田着　09:50　日本航空102便
～東京ドームにてPRIDE.4観戦～
東京駅発　23:00／　高速バスドリーム大阪号
10／12　大阪着　07:47
*料金¥34.800（飛行機代、高速バス代、チケット代込み）

■名古屋発着

1.名古屋発着／高速バス
料金¥19.800
［高速バス代・チケット代込み］
10／11　名古屋発
08:00→東京ドーム着　13:00
10／11　東京ドーム発
22:00→名古屋着10／12　06:00
※名古屋発着のコースは、¥8.000のスタンドS席付

［ツアーのポイント］
■翌日出勤可能です。■試合後「ターザン山本とPRIDE.4を語る会」に参加できます。■スタンドSS席（¥13.000）付きです。■チケットの券種の変更可能です。（参加費用が増減されます）■チケットを既にお持ちの方も参加できます。（¥13.000減額されます）

［下記宛に詳しい資料を申し込むのだ］
■大阪・札幌・九州発着のコースの問い合わせ／近畿日本ツーリスト（株）　銀座海外旅行支店　TEL 03-3562-4911　FAX 03-3564-6307　PRIDE.4観戦ツアー係
申込み締切日：9月16日（水）（定員になりしだい締め切ります）
■名古屋発着コースの問い合わせ先／東洋ツーリスト　TEL.052-961-4891　FAX.052-961-4897

というわけで、10・11「世紀のリ・マッチ」ももう目の前。
『紙のプロレスRADICAL』の次号（NO.12）は、9月下旬に発売します。断言します！　出します、来月!!（でも予定）
「高田・ヒクソン戦」を本誌は本誌なりの切り口で解剖させていただきます。活字のバイアグラをお届けするゾ（ちっちゃいガッツポーズ）

決勝で石川vsサスケの社長対決、遂に実現!?
これは形を変えた『猪木祭り』だ！

11・23バトラーツ、驚天動地の両国進出!!

浅草キッドがツービート襲名をあきらめて、コーヒービートというコンビ名に改名する。というのは200%ライアーだが、世の中には予期せぬ出来事が次々と起こるものである。

なんと、あの赤貧団体・バトラーツ（以下バト）が、来る11月23日、1万1千人収容の大会場、両国国技館に進出してしまうというのだから世も末である。いや、まったく驚きである。8月12日には「いや、これホント」的に発表記者会見まで開かれてしまった。

運営的にあまりにも無謀な賭けをする11・23では、トーナメント『B—CUP'98』が開催される。今号ではこのトーナメント中心に話題を進めよう。

『B—CUP』は『BATTLE WORLD CUP』の略らしいが、「B」はバト、バチバチ、B級、バッタもん、バカ——いかようにも解釈してもらっていいそうだ。

トーナメント参加選手の目玉は、元WWF世界王者で、アントニオ猪木のライバルだった〝ニューヨークの帝王〟ボブ・バックランド！　久しぶりとなる選手としての来日、年齢的なハンディなどが心配されるが、今年4月、『猪木引退試合』にゲストとして来日した際には、ボブ・スマイルと共に全盛期の体躯がまだまだ健在だった。この参戦は実に楽しみである。そして昭和41年、猪木が23歳のときに旗揚げした東京プロレスの初戦の相手として、いまでも語り草となっている名勝負を繰り広げた〝妖気〟ジョニー・バレンタイン。その息子であるグレッグ・バレンタインの来襲も決定した。

〝熱血巨人〟ビクター・クルーガーも入れたバト衆3人以外の日本勢では、かつて猪木に真剣勝負を迫った壮絶なる空手家・水谷征夫の「水」と、対戦を迫られるうちに意気投合した猪木寛至の「寛」、2人の名前を取って名付けられた寛水流空手出身の松永光弘。それから猪木の最後の付け人、FMWの大矢剛功が名乗りを上げた。

ここまできてわかることは、奇遇にも池田大輔以外の選手は、今年マットを降りた猪木と何らかの形で関わっているということだ。その大ちゃんにしても新日本プロレス学校出身、藤原組の生え抜きなのだから、〝猪木イズム〟と無縁とはいえないのである。

これは『猪木イズム争奪トーナメント』の様相を呈してきた！

さすが、闘魂伝承を公言し、〝燃える情念〟を名乗る石川雄規が率いる団体で開催されるトーナメントだ。

そして、〝猪木イズム〟となると黙ってられないとばかりに、「待て待て待てこのヤロー！」とあの〝東北の英雄〟ザ・グレート・サスケが名乗りを上げてきた。

ヘビー級の中で、ひとりジュニアというハンディ、みちのくプロレスの体面まで背負ってサスケが参戦することで、このトーナメントで争われるものが見えてきた。例え噂になっているベルト争奪戦が実現しても、賭けるものはきっとそれだけではないはずだ。

〝利害を超越して　誰れも出来ないこと誰もやらないことを夢としてそれに挑戦する　それが私のロマンである〟

かつてアントニオ猪木が吐いたこの言葉の意味を誰よりも追求しているのが石川とサスケだ。ベルトでもなく賞金でもなく、〝世間が忘れかけた目に見えない何か〟、つまり〝ロマン〟を賭けて8人の猛者は両国のリングに立つ。

バカとロマンは紙一重、という言葉があるが、ここまできたら石川vsサスケの『猪木イズム世界一決定戦』を決勝で見てみたい。

が、1回戦の相手は石川が松永（10・5後楽園）、サスケの相手は、な、なんと1メートくらい身長差があるかのような錯覚を覚えるビクター（10・23大阪）。はたして両者は決勝まで行けるのか？

両国では準決勝、決勝が行われる。

それではみなさん、行きますかーッ！

と勢いよく締めたいところだが、本当に両国に進出して大丈夫なのか、念のため石川社長に聞いてみた。

「できんのかーッ？」

すると、石川社長は、

「来い来い、この野郎!!」

というひと言のみを残して、すすき野の闇に消えていった。

両国大会全体のテーマは〝心の景気回復〟だそうである。ナーシャッ！

8・12に開かれた両国大会発表記者会見。大会名は『BATTLE FICTION～蘇れゴールデンタイム伝説～』。石川と共に〝猪木イズム継承〟を一つのテーマにするサスケは、「私の場合、最低C—CUPはないと、許容範囲に入らないんですよ～」と爆弾発言。会見場を水を打ったように静かにさせていた。元気なサスケがバト魂（バトこん）と接触して復活するか!?　飛べ、サスケ!!

ノータッチ・トペコンをやらせれば日本一（少なくとも越谷一）のド迫力！　パーマンにも変身OK！　その一方ではフリー・ファイト系の大会に出陣というも噂もあるアレク。トーナメントに参加しないところが怪しいが、両国で振り幅の広い振り子はどこに止まる？　んむはぁ。

「2人インディー活性化委員会」として様々な団体に出没するトンパチ・マシンガンズ。「リーダー」の折原は，いまのところ『B—CUP』の補欠としてエントリーされているが、そうなると武志はどーする？　TPの両国のカードはどーなる？　クチビルゲルゲはどうなる？

[B-CUPトーナメント組み合わせ]

1回戦	対戦	準決勝	決勝
10・5 後楽園	石川雄規 — 松永光弘	11・23 両国	11・23 両国
10・23 大阪	グレッグ・バレンタイン — 大矢剛功		
10・5 大阪	ザ・グレート・サスケ — ビクター・クルーガー	11・23 両国	
10・23 後楽園	池田大輔 — ボブ・バックランド		

[B—CUP参加選手]

石川雄規、池田大輔（以上バトラーツ）、ザ・グレート・サスケ（みちのくプロレス）、松永光弘（フリー）、大矢剛功（FMW）、ボブ・バックランド、グレッグ・バレンタイン（アメリカ）、折原昌夫（メビウス＝補欠、オブザーバー）、ビクター・クルーガー（ドイツ）

[B—CUP開催会場]

10月５日（月）後楽園ホール　18：30
10月23日（金）大阪府立体育館　18：00
11月23日（祝）両国国技館　15：00

※10・5後楽園大会と10・23大阪大会。どちらかを観戦して、なおも11・23も観戦される奇特な方には、11・23当日に記念グッズをプレゼント。必ず後楽園大会もしくは大阪大会の半券をお持ち下さい。ぴあ～

緊急特報!「来い！ この野郎」
バト11・23両国大会特電 チケットRADICAL開設

バトの大ファン、美穂ちゃんの大ファン、あるいはバックランドのデッ尻を懐かしく思うファン。そしていままでバトに興味がなくても、『紙プロ』を見て、なにがなんだか的に興味が出てきた人たちに、『紙プロ』が闇ルートでキープした極上チケットを大放出！（全席種あり）。いますぐかけろ、かければわかるサ！　ナーシャッ！

[チケットRADICAL]03・3403・5188

（9月1日より受付。いい席キープしてますよ～、は～い）

■特別リングサイド　10.000円■リングサイド　7.000円■1階指定席　5.000円
■2階特別席　5.000円■2階指定席　3.000円■パノラマシート　15.000円
（枡席1・2列目、パンフレット・お土産付）

※マス席は2人掛けになります

チョーハツがなかったらスベルだけ!
大反響!! 全身編集評論家・ターザン山本の

プロレスマスコミ表紙批評!!

『週刊プロレス』編集長の座を追われてからというもの、自らの長髪性、もとい挑発性を失わないように、盛んにあっちこっちで〝過激な挑発〟を繰り返すターザンの魔手は遂に本誌にまで及んだ。このコーナーの取材当日には「なんでヤマグチが来ないんだぁ~!!」「なんで『紙プロ』唯一の人気コーナー(編集部注:そんなことはない)が前回より1ページ減るんだ!!」「カラーページにしろ!!」「こんなチンケなもん食わせないで、もっとウマイもん食わせろ!!」「し、し、失礼ですよ~!!」とめったやたらに大炎上! 何かに取り憑かれたように、長髪…もとい挑発を繰り返したのだった。というわけで、「その姿勢で行け!(勝手に)」な大反響コーナー、面白いから今号も落武者に吠えさせます。

この週の表紙を並べて見た時に思った!『ゴング』は活気に満ちてる!! 字にも写真にも動きがあって、躍動的だよな。全体的に表紙が生き生きしてる。ところが『週プロ』の方は「動」に対して、〝止まってる〟という意味での「静」でしょ。ボケーッとした橋本の表情でさぁ、「勝った」という感動からもっとも遠いところにいるわけよ。勝った瞬間の写真を使った『ゴング』の方は外に膨らんでるイメージがあるから、『週プロ』の表紙と比べたら2倍の大きさに見えるよ、オレは。

それに『週プロ』はやっぱりコピーにも問題がある!「8年目の〝縁結び〟」ですよォォォ。あのな、橋本は勝たしてもらったのか!? 7年間神様に見捨てられてたのか!? G1ってのは縁結びで勝つものなのかァ!? 縁結びって結婚じゃねえのかァァァァ!? なァ! なァ!「勝負」というものをどういう風に考えているのかってことですよ! ホントにトンチンカンなコピーを佐藤正行は考えるよ。ズレまくりだよ、すべてが。橋本だって思うよ、「オレは縁結びで勝ったのかぁ?」って。8年目でやっとG1に勝ったというのはわかるけど、やっぱり縁結びはないよなぁ。これを見た瞬間にさぁ、変な表現だけど、立ってたチ○ポがシューッと萎んじゃったイメージがあるよ。やっぱり橋本が勝った瞬間というのは劇的に扱わなきゃいけないんだよ。「劇的」というのは「その瞬間を逃してない」という意味ね。だから、ゴングは的を得てる! 8年目の勝利という喜びを写真だけで表していて、その喜びがバァーッと広がっているよな。これはいい表紙ですよ、凄く。

さらに、このバックの鉄柱は赤でしょ。これは2階からの写真を上半身だけにして、鉄柱の赤にからめるように「野望遂行~」のコピーのシャドウを赤にしてるでしょ。赤というのは非常に非日常の色なので、色の使い方もいいよ、これは。確かに泥臭いけども、鉄柱の赤、コピーとロゴの赤、サブコピーの強調したい文字も赤という形で、赤、赤、赤、赤と非日常性をアピールして、「勝った瞬間」っていうのをイメージしてるから、これは合格なわけです! それに比べて『週プロ』はダメだね~。

「8年目にしてよ~やく勝ったという喜びが伝わってこないんですよォォ」

週刊プロレス NO.869
(8/18・25合併号)
■表紙コピー:
8年目の"縁結び"
■表紙サブコピー:橋本とG1
■表紙担当:佐藤正行
■巻頭カラー:「我こそは、破壊王なり!」〈新日本/8月2日・両国〉橋本vs山崎G1決勝リポート(佐藤正行記者)
■トップ記事:「橋本、G1初優勝! "祭り"のつづきは8・8大阪ドーム」G1がいかに怪物的なイベントであるかを説明。ちなみに「祭りの続きの続きは9・23横アリ」だそうです。完全に情報の追っかけ。

「バックの鉄柱も、ロゴとコピーのシャドウも赤。ついでにサブコピーの"夏"も赤。「これはいい表紙ですよ、凄く」——理由は本文で」

週刊ゴング NO.727
(8/20号)
■表紙コピー:
野望遂行への序曲
■表紙サブコピー:破壊王に8年目の"夏"来たる!!
■表紙担当:?
■巻頭カラー:「最強伝説、再び!!」〈新日本/8月2日・両国〉扉は決勝の写真だが、なぜか次のページから蝶野vs山崎戦のリポート
■トップ記事:「G1は夏の一瞬のきらめきではない ここから壮大な闘いが続いていく!!」橋本の今後、裏ヒーロー・山崎、小島、安田、中西の奮闘を称える

「～『週プロ』～がこの週休んだお陰で～『ゴング』～は坊主丸もうけなわけです！ 表紙以前の問題ですよ～！」

週刊ゴング　NO.728
（8／27号）

■表紙コピー：
新世界政権 ここに誕生
■表紙サブコピー：そして歴史は塗り替えられた!!
■表紙担当：?
■巻頭カラー：「蝶野時代、来たる!!」〈新日本／8月8日・大阪ドーム〉蝶野vs藤波IWGP戦リポート
■トップ記事：「1週間で各団体にこれだけの動きが！ 夏から秋へ…それぞれの正念場」蝶野IWGP奪取以外大事件がないせいか、WAR、FMW、全日本、新日本の順で今後の展望を紹介

この時期は、〃お盆進行〃といって印刷会社が休みの絡みで特別な進行になるわけね。その時期に8月8日の土曜日のビッグマッチを載せようと思っても、ふつう載せられないわけよ。だから『週プロ』は、この前の号で合併号にして、この週は休みにしたでしょ。

ところが『ゴング』はこの週、火曜日に出してきたんだよ！ ふつう土曜日の試合を記事にして翌週の火曜日に発売するなんて考えられないんだけど、それをやった『ゴング』は坊主丸もうけなんですよ！ 『週プロ』の方は10日遅れで8・8大阪ドームの増刊号を出すらしいけど、オレに言わせれば、そんなものは腐った商品並べるようなもんですよ！ 出さない方がマシですよ！ ファンは速攻性で買うんだから、『ゴング』は8月8日の試合を全部網羅しておけば勝ちだよ。表紙以前の問題ですよォォォ。

ボクが会社の経営者だったら、最初から負ける勝負をやる『週プロ』の責任者に始末書を書かせますよ！ オレの編集長の時は敵の出方を一日中！ 相手の殺気を持って考えたんですよ、一日中！ 相手はこうきたらをどうして潰したらいいか、問題点は何か、どこが負けてその障害は何か、どこが勝っているのか状況分析から何からいてどこが勝っているのか状況分析から何から全部やった。敵の動向を知らないと闘いなんて出来ませんよ！

リーダーになる人は常に物事に対して戦闘的でなきゃイカン。戦略的でなきゃイカン。だから今回のことは『週プロ』の衰退と没落を象徴的に暗示してる決定的事件だァァァ！ もし会社がそのことを理解してなかったら、会社そのものがタイタニック号ですよ！ 沈没間近だ！ 『週プロ』とBM社は平成のタイタニック号ですよォォォ！

あのね、ハッキリ言ったら雑誌を作るということは獲物を捕る楽しさがあるわけ。興奮してアドレナリンが爆発して、自分の腕と才能を世の中に見せつけられるわけでしょ。これはもうサラリーマンの仕事じゃないよ。エリートのやる仕事ですよ！

エリートでロマンと情熱に燃えた選ばれし者、あるいは選ばれることを求めてる者がやるべき仕事なんですよ。つまり、編集という仕事はヤマ師と背中合わせでもあるわけです。「凄い金鉱があったぁ!!」ってゴールドラッシュになるぐらいのものを発見してくるのが編集者なんですよォォォ！ オレはそれをやってきたわけです。

いまの『週プロ』の状況を打開する方法はシッシーが編集長になるしかないと思う。オレはシッシー編集長待望論なんだよ、いま。シッシーがすぐに編集長になってほしい。そうすれば『週プロ』も際だった表紙になると思うよ。実は『週プロ』のメシアは宍倉次長なんですよ～。そういうことです。

この3冊の表紙を並べてわかることは完全に『週プロ』は出遅れてる！ 前田というのは、この15年間のプロレス界を支えた昭和のカリスマの一角だよ。長州、猪木と続いて、前田は3人のカリスマのうちの3番手に引退したわけでしょ。絶対にここは前田を表紙に持ってこなきゃダメなんだよ。

『ゴング』では日程的な部分でも無理して、値段は高くなってるけど、前田を表紙にして巻頭カラーでもやってるわけでしょ。それなのに『週プロ』は、本誌で1ページしか扱わずに別に増刊号を出した。

それも増刊号が本誌よりも前に発売されていれば認められるよ。だけどこの増刊号は本誌の1日遅れで発売されたんですよ。そんなチンケな発想があるか!?

いまはね、即効性がないと意味ないわけ。なぜかというと、週刊誌という媒体自体が既に〃遅すぎる媒体〃なんだよ。その日のうちにパソコン通信とかインターネットで情報が乱れ飛んでる時代に、本誌よりもさらに1日遅い増刊号を出すなんて認識不足も甚だしいわけですよ～。もうボケボケなんです!!

それにね、増刊号は本誌に比べて部数が圧倒的に少ない。前田という人間には万人が興味を持ってるわけだから、たくさんの人に提供しようとしたら部数の多い本誌の方でやるべきなんですよォォォ!! だから、『ゴング』のやり方が正しいということです。

それに、増刊号というのは、記念碑的な意味もあるんだけども、あの興行では猪木と前田が握手するシーンとかみんなが求めてるウェットな瞬間、そういったシーン、セレモニーがなかったでしょ。感動的なセレモニーがあれば記念碑的な意味も出るけど、記念碑的なものがなかったから余計にすべっちゃったわけよ。

想像してみればわかるけど、猪木とか高田とか山本小鉄とか平田（淳嗣）とかニールセンが、この表紙のワッカの中に入ってたら凄くいい表紙になるでしょ？ でも、偶然そうならなかったらそうならなかったで、全神経を研ぎすまして「前田日明が引退する」ということの意味を一発で提示しなきゃダメだよ！ だから、これは読者の好意に甘えて作ってるわけです。値段を半額にすべきだ。いまの『週プロ』はビジネス的にもクリエイター的にもなまけ者の集団だよ！ つまりこれは、怠惰と欺瞞に陥った増刊号なんですよォォォォ！

それから、『週プロ』本誌。まず一番いけないのは「年間最高試合への挑戦」というコピーですよォォォ！

これはライガーがマスコミに対して批判という問題提起をして、「ジュニア・ヘビー級はなんで年間最高試合にならないんだ!?」と自分たちの意地を言ったわけでしょ。で、言われたままに尻尾を振って、しかも金本の顔もライガーの顔もちゃんと写ってないような写真を使って、「年間最高試合への挑戦」とご丁寧なコピーを打ってしまったんですよ、『週プロ』は！ でもね、これはハッキリ言って表紙になったライガーも金本浩二も喜んでないと思う！ 「こいつは言った通りに作ってるよ」って舌を出してますよ、裏で。

オレだったら、「ジュニアの良さは確かに認めるけども、年間最高試合というのはまったく概念が違うんだ！」とライガーに対して逆に突きつける形を取る！ 突きつけてケンカするぐらいの表紙じゃなきゃダメなんです!! 「ジュニアヘビーがなぜ年間最高試合にならないんだ」とか、そういう問題提起はいいことだよ。ライガーのプライドの高さというのも評価できるし。ただ、これは新日本担当の佐藤正行がライガーや新日本にゴマをすりにいった表紙なんだよね。その姿勢が見えることがまず情けない。それに、なにはともあれ、出すタイミングが悪すぎる。前田の引退の時ですよォォォ!? つまり、いまの『週プロ』は時代の空気をまったく吸ってないということです。

「8年目にしてよ～やく勝ったという喜びが伝わってこないんですよォォ

「前田日明が引退するということの意味を一発で提示しなきゃダメです！」

週刊プロレス　NO.867
（8／6緊急増刊号）

■表紙コピー：
○
■表紙サブコピー：
リングス7・20横浜アリーナ大会　「CAPTURED 前田日明リングスラストマッチ」完全詳報号
■表紙担当：?
■巻頭カラー：「完全燃焼させられた太陽」〈リングス／7月20日・横浜アリーナ〉前田vs山本戦リポート（鈴木健記者）
■特集記事：「AKIRA MY ROAD 軌跡」第一次UWF以降の前田を完全追跡『週刊ファイト』波々伯部哲也記者、鈴木健記者が思い出を綴る。「闘為語録」83年以降の前田語録（構成：河野哲也）

「これはもう前田を表紙にした時点で『ゴング』の勝ちです！」

週刊ゴング　NO.725
（8／6号）

■表紙コピー：
精魂尽きた 前田がいた
■表紙サブコピー：綺麗事じゃ済まさない!!
■表紙担当：?
■巻頭カラー：「リングスの選手として一区切り！ 残るは個人としての最後の大勝負」〈リングス／7月20日・横浜アリーナ〉前田リングス・ラストマッチ＝vs山本宜久戦リポート
■トップ記事：「札幌で主役を奪った天龍、藤波の昭和世代　G1からnWo、橋本、健介はどう出る!?」昭和世代（天龍&藤波）と平成世代（橋本&健介）、双方の夏以降の展望

「これじゃライガーと金本の顔もよく見えないでしょ」

週刊プロレス　NO.866
（8／4号）

■表紙コピー：
年間最高試合への挑戦！
■表紙サブコピー：28分27秒のIWGPジュニア戦に光を――
■表紙担当：佐藤正行
■巻頭カラー：「UFOオープニング特別試合――K―1で〃反則負け〃」〈K―1／7月18日・ナゴヤドーム〉小川vs安生戦リポート（佐藤正行記者）
■トップ記事：「メジャー新日本　この夏のドラマ全部教えます」G13連戦と8・8大阪ドーム大会の見どころ、その週のUFOの動き、ドラマにプロレスの話題が折り込まれていたことなどを紹介

プロレスマスコミ表紙批評!!

「このトロフィーが真ん中に来るのはよくない」

「こんなジグザグな表紙はありませんよ～」

週刊プロレス　NO.868
（8／11号）
■表紙コピー：
泣けた。
■表紙サブコピー：三冠戦を見た。小橋健太を見た。
■表紙担当：鶴田倉朗
■巻頭カラー：「7・24　汗の論理」〈全日本／7月24日・武道館〉小橋vs秋山三冠戦リポート（鶴田倉朗記者）
■トップ記事：「21世紀の全日本とは？　“四天王”に発言の場を　『馬場イズム改革白書』」小橋vs秋山について「解説できない」という馬場の発言を引用。全日本の新時代への改革を提唱。

週刊ゴング　NO.726
（8／13号）
■表紙コピー：
烈夏を駈けてゆけ
■表紙サブコピー：秋山準から小島聡へ　新世代の越境リレー
■表紙担当：?
■巻頭カラー：「この命、続く限り熱き時代を生きる」〈全日本／7月24日・武道館〉小橋vs秋山三冠戦リポート
■トップ記事：「小橋vs秋山から伝わってきた強烈な主張　だから今…全日本の新時代を考えたい！」小橋と秋山が見せた闘いの新境地を中心に、全日本の変革を伝える。

この週はまず『ゴング』だ。オレはこの表紙を見た瞬間、もしかしたら小島がG1の決勝戦に出て秋山的になるのかと一瞬思ったよ。オレは自分のG1予想にぐらつきが起きた。小島の動静が気～になって気になって、G1中は「小島は勝ったか?」っていつも聞いてたもんな。

だってね、秋山はいまや、全日本四天王を超えるぐらいの勢いで、新日本に行ったってトップを張れるぐらい急成長した本物のメインイベンターですよ。だけど、それに対して小島はラリアットやってワァーッとやってるだけなんだよ～。それをね、同等に並べたら全日本は怒ると思う！　だけど『ゴング』からしたら全日本の新星が秋山だったら、新日本の新星は小島であるという論理でしょ。で、小島がおそらくG1で活躍するだろうという「読み」みたいなものもあって二人を並べた。だけどオレからしたら、こんなにイレギュラーを起こしたジグザグな表紙はない！　ジグザグということは、つまりこの『ゴング』の表紙は、ある意味では気に入ってるし、ある意味では変だなって思ってるということです。

対して『週プロ』の方は、鶴田倉朗が全日の表紙を最初に取ったにしては、まあまあ彼なりの努力の成果、精一杯に作ったというのは見えるね。ただ、秋山の急成長の方に力点を置いてほしかった。要するにこの試合は、いつものように「小橋が頑張った」ってやると非常にクサイわけですよ。「三冠戦はこうとしか見れないのか」「このように見るしかないのか」とファンは思うわけ。

そうじゃなしに、膝を攻めざるをえなかった秋山の虚しさというか無念さにピシッと焦点を合わせた方が意味性が出てくるんだよなぁ。

写真についても、このトロフィーが真ん中に来るのはよくない！　秋山の顔が隠れて、トロフィーが主役みたいでしょ。これはトロフィーがないところで二人の顔がもっとハッキリ見える写真を見つけなきゃいけないし、撮らなきゃいけない。この写真でやるんだったら、むしろトロフィーを消すように「泣けた。」とバーンッ！　と大きくコピーをもってくる。「泣けた。」以外の文字はなくていいしね。つまり、そういうことです。

「ロゴの下に白を開けるなんてもってのほかです」

「二人の写真でいくんなら、二人の顔と顔を引っつけて、ガーンッと打ちださなきゃ」

「この“××”は謎かけにもなんにもなってないんだよ」

週刊プロレス　NO.865
（7／28号）
■表紙コピー：
みちのくに、いったか!?
■表紙サブコピー：この夏、復活サスケにバトラーツ&闘龍門勢、そしてハヤブサ…元気者大集合だっ！
■表紙担当：鈴木健
■巻頭カラー：「“いい人”荒井社長にラリアット。それでも冬木は正しいという本誌の見解」〈FMW／7月10日・後楽園〉ハヤブサ組vs冬木組8人タッグ戦リポート（鈴木健記者）
■トップ記事：「ついに封切り　猪木UFOの“劇画ワールド”」UFOとK-1の急接近について検証する内容。小川へのミニインタビュー付き。

週刊ゴング　NO.724
（7／30号）
■表紙コピー：
高田戦？　××だったら有り得るんじゃない!?
■表紙サブコピー：高田との再会発覚に笑顔！　改めて前田を直撃すると…
■表紙担当：?
■巻頭カラー：「天龍源一郎、48歳　闘いとロマンを求め、再び…」〈新日本／7月11日・帯広〉nWovs平成維震軍6人タッグ戦リポート
■トップ記事：「高田と再会！　7・20横浜アリーナ直前！　今、なにを思う!?　渦中の前田日明を直撃」引退を目前にした前田に今後のプランを聞く。表紙の“××”の正体は“エキシビションぐらいだったら”だった。

まず『週プロ』。この表紙はハッキリ言って今年出たヤツで最悪だよ、うん。

なぜかというと、これを作った鈴木健の“マスターベーション表紙”の最たるものだからです！

彼は悪い人間じゃないし、仕事もできるし、オレの直弟子の一人だけど、それに敢えて苦言を呈さなきゃイカン。こういう表紙を2度と作っちゃイカンということを教えなきゃいけない。要するに愛のムチですよ～。

これはね、彼が表紙を作れたということだけで、おそらく破裂するほど勃起して作ったものなんだよね。精神的に勃起して作ることはもちろんいいことなんだけど、これは読者が見た時に、一応サブコピーはあるにせよ、みちのくとバトラーツの事情を知っていなきゃ、さっぱり意味がわからない！

それから一番の問題は、コピーの「みちのくに、いったか!?」だ。これは青森県と岩手県と秋田県がJRと組んだキャンペーンで、みちのくプロレスがイメージキャラクターになった。そのポスターのキャッチコピーが「みちのくに、まいったか！」なんだよね。鈴木健はこれにひっかけてコピーを作ったわけ。つまり、JRの広告を見てる人にしか届かないわけですよ、これは。

おい、こういうのを私物化というんじゃないのか？　しかもこれは最悪の私物化ですよォォ。もちろん彼自身としては善意にあふれた私物化をしてるんだけども、結果として悪い意味での私物化になってしまった。それにタイトルロゴの下に白が空いてるでしょ。こういうことは絶対にやっちゃいけないんです！　表紙は“顔”なんだから。スカスカの顔じゃどうしようもないわけですよ～。

サスケとマスクを被った石川の2人の顔と顔を引っつけるようにして、ガーンッと打ち出せばよかったんですよですよ！　そうすればもっとインパクトも出るわけよ。この号の中にある石川雄規のインタビューはもの凄いインパクトがあったでしょ。それと同じようにやらなきゃいけないんですよ。だからこれは、ハッキリ言って与えられたチャンスを生かしてない！

一方『ゴング』は、前田―高田対談が『スコラ』で一瞬盛り上がったのに相乗りした形の、人のふんどしで相撲を取った、まったくダメな表紙の典型ですよ！　ふつう他が作った話題に相乗りして表紙を作るというのはプライドの部分でできませんよォォ。それに、いまさら前田と高田の二人が会ったところで必然性もないし、発展性もなんにもないじゃない。そういうこともわからないで前田と高田が会ったことをいいように思う『ゴング』の体質そのものが古くてどうしようもない。おまけに、コピーの「××」の正体は「エキシビション」でしょ。『ゴング』も時代をナメきってるよなぁ。

前田も、高田とか猪木とかと再会ばっかりして、あれじゃあハッキリ言って再会マニアですよォォ！　これは必ず書いとってくれ！

全身編集評論家の総評

いまは『ゴング』の方が圧倒的に元気がいい！　元気がいいし、編集者たちの真剣な雰囲気というか編集長のやる気が伝わってくる。業界が落ち込んでる時に「なんとかしなきゃいけない」っていう切実な気持ちが『ゴング』からは伝わってくる。そして奇妙なことに、表紙の派手な写真とか派手な色というのはボクが『週プロ』の編集長をしている時にやっていた手法と非常に酷似してるんだよね。だから、いまは『ゴング』の方が「ハレ」だなということを感じるね。

でも、いま『ゴング』の方が元気があると言っても強いメッセージがあるわけじゃないし、何かを挑発してるわけでもないんだよね。比較対象論として『ゴング』が元気がいいというだけで。

プロレスというのは「強いメッセージ」と「挑発」という2大コンセプトがない限りはファンも騒がないし、マット界も盛り上がらないんだよ。でも、その2大コンセプトを追求してきたボクは追放の目にあったわけでしょ。そうすると、将来の島流しが見えちゃうんだよ、雑誌を作ってる皆さんの目には。結局そこですよ、問題は!!

権力者にとって危険なのはハッキリ言って芸術家なんだよ。モノを支配していて力を支配してるのが政治権力でしょ。ところが芸術家というのは目に見えないものを支配する。千利休は「この茶碗に五万両の価値がありますよ」って言って、人々を見えない力で支配したから、最終的に切腹させられたわけですよ。

だからオレはこれから見えない力で人々を支配していくサイレント・リベンジャーになるんですよォォォォ！

拝啓、全身編集評論家　ターザン山本様
今回、大変好評の「プロレスマスコミ表紙批評」が1ページ減ったのは、このRADICALバックナンバーのページを入れるのを忘れたためです。これを見て激怒、ふるえ、脂汗などの症状が出た場合は、次号でこのRADICALの表紙を怒りを込めてブッタ切ってください。かしこ
（山口日昇）

買えっちゅーの！

元気になればなんでもできる！

全快祈願!!

RADICALバックナンバーのお知らせ

創刊号

◎特集
「プロレスラーとは何か!」
高田延彦／船木誠勝
初代タイガーマスク
橋本真也／タイガー・J・シン
5大ロングインタビュー
◎巻末超ロング・インタビュー
前田日明
◎本誌だから実現できた危険騒然対談
ターザン山本vs鈴木健
◎売れ行き無視のバトラーツ特集
石川雄規／小野武志／田中稔ほか
バトバト勢総登場!

第2号

◎特集「プライドとは何か!」
過激で素敵な脳髄直撃師弟対談
アントニオ猪木vs初代タイガーマスク
高田延彦スペシャル・ショット
田村潔司／高山善廣
TAKAみちのくインタビュー
◎パンクラスとは何だ!?
近藤有己／國奥麒樹真他の
若手選手徹底解剖!
パンクラスを解剖する炎上対談
◎特別寄稿　井上義啓
「熊殺しの墓標」
新連載・石川雄規の「闘いの美術館」

第3号

◎とうとうRADICALに
神様降臨!
カール・ゴッチ完全独占インタビューinUSA
◎特集
「針の穴にラクダを通せ!」
船木誠勝19ページぶち抜きインタビュー
山本宜久／安生洋二
池田大輔／臼田勝美
ロングインタビュー
◎過激で素敵な師弟対談パート2
アントニオ猪木VS初代タイガーマスク
◎八百長論議と闘え!!
「プロレスの敵は世間だ!」

第4号

◎特集
「落とし前」と「世界征服」97
前田日明衝撃ロングインタビュー
高阪剛／近藤有己／山本健一
アレクサンダー大塚
ロングインタビュー
◎神様降臨!　騒然インタビュー・パート2
カール・ゴッチ
◎昭和世代の凄み!酒、女、ケンカ超過激対談
ドン荒川vs藤原喜明
◎世界格闘技連盟プラス1最強カルテット座談会
村松友視／アントニオ猪木
小川直也／佐山聡

第5号

◎特集
『RADICALは高田延彦を応援するぜ!』
高田延彦ロングインタビュー
Puffyほか有名人33人が
高田vsヒクソンを大予想
◎戦慄の新連載
前田日明の破壊的人生相談
◎長井満也／柳澤龍志
セメントインタビュー敢行
◎酒・女・ケンカ超過激対談パート2
ドン荒川vs藤原喜明
◎ビクター・クルーガー／長与千種
ライオネス飛鳥／ディック東郷
愚乱浪花／ザ・グレート・サスケ
◎世界格闘技連盟を語る超ロングインタビュー
タイガーキング

第6号

◎特集「“プロ”と“レス”融合か分裂か!」
蝶野正洋に大胆ロングインタビュー
TAKAみちのく／テリー・ファンク
桜庭和志／近藤有己
◎前田日明の人生相談&プチッ!インタビュー
◎総力特集　高田×ヒクソン戦、終わる
RADICAL観戦記
ガッツ石松／浅草キッド／花くまゆうさく
仮面シューター・スーパーライダー
試合直後、Puffyに独占インタビューを敢行!
◎打倒!八百長論議!
ザ・グレート・サスケが素人相手にお説教!
◎井上京子／井上貴子／角掛留造
松永高司インタビュー

第7号

◎特集「反骨の剣」
田村潔司に鮮烈ロングインタビュー
◎そしてUWFの同窓生が集う!
冨宅飛駈／垣原賢人ロングインタビュー
◎みちプロ経営危機の真実とは?
ザ・グレート・サスケが独占告白!
◎もはや敵なし!
前田日明のメガバトル人生相談
◎祝!　復帰記念
モハメド・ヨネインタビュー
◎ラディカル初登場2連発!
冬木弘道／MEN'Sテイオー

第8号

◎特集『格闘技世界大戦前夜!!』
アントニオ猪木「元気」と「気づき」の
ロングインタビュー
桜庭和志／高田延彦／柳澤龍志
ヒカルド・モラエス?／エンセン井上
村浜武洋ロングインタビュー
◎波動砲!　前田日明の人生相談
『人生は語らず』
◎黒いパンツの心意気PART2
木村健悟インタビュー
◎男プロファンに根強く残る
「女子プロ嫌い」の正体を暴け!
ファンのアンケート回答に
玉田凛映&府川唯未が大激怒!!
◎アレク&のものも結婚披露宴
インサイドレポート&独占手記×2

第9号

◎「アントニオ猪木・闘魂連鎖!　無礼講大特集!!」
前田日明／ザ・グレート・サスケ
高田文夫／春一番
久々に大炎上!　ターザン山本
燃える情念!　石川雄規
◎衝撃宣言!
さらばプロレスマスコミ業界病を吹き飛ばせ!!
◎前田日明
ラス前ロングインタビュー&炸裂人生相談
◎日プロOB
吉村道明&ユセフトルコ&遠藤幸吉&駿河海
◎各方面で大反響!
[格闘家からみたプロレス!] 朝日昇
◎「紙のプロレス」スーパースター列伝　谷津嘉章
◎高阪剛／佐野友飛
下田美馬&三田英津子インタビュー

第10号

◎特集「灼熱の地殻変動'98」
大和魂は連鎖する!!
前田日明vsエンセン井上
◎高田延彦／桜庭和志／松井駿介
冬木弘道（金村ゆきひろ&伊藤豪）
ロングインタビュー
◎社長&会長対談
ザ・グレート・サスケvs松永高司全女会長
◎『紙のプレイボーイ』発進!!
ダイアナ&宮内美穂
◎『紙のプロレス』スーパースター列伝
谷津嘉章／北沢幹之
◎衝撃!!　ターザン山本の
プロレスマスコミ表紙批評!!
◎新連載!!『女子プロ人生劇場』
全女第三の怪覆面・磯崎ともか

【購入方法だっつーんだ!】
●現金書留と郵便振替の2種類があるんだっての!!（バックナンバーは通販でしか買えないんだよっ!　書店じゃ買えないっちゅうの!!）
●現金書留の場合
〒151—0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3—11—3—702（株）ダブルクロス『RADICAL通販』係まで
●郵便振替の場合は用紙裏面の通信欄に希望号数を明記し、
00130—3—769154（株）ダブルクロスまで。
代金は創刊号=610円　2号=660円　3号〜10号=680円　送料1冊=310円　2冊=340円　3冊〜4冊=450円　5冊=520円　6冊以上=700円

PANCRASE × HYBRID WRESTLING

どっちが面白いか、ハッキリさせろ！ 飛ぶ鳥を落とす勢いの2人の気鋭ライターが「パンクラス9・14武道館決戦」をテーマに激突（追突）！

KING OF BONCRASIST

タイトロープマッチ

すこぶる好評の単行本、『U～多重アリバイ～』を手掛け、『スコラ』誌上では前田―高田対談を実現させるなど、いまや飛ぶ鳥を落とす勢いの〝仕掛人ライター〟ShOW氏。氏の「応援させてよ98」の次なるターゲットは、古巣ともいえるパンクラス。「9・14武道館は見逃しちゃならない大会なんですよ！」と、素晴らしく熱の入った、しかし気味悪さ丸だしの売り込みに負けて、急きょ2ページ取ることとなった。だが、そのShOW氏の2ページ独占に「待った！」をかけた男がいた！

「俺にもパンクラスを語らせてください～。でへへ」そう言って名乗り出たのは、かつてのダメぶりが嘘のように鳴りを潜め（？）、最近はプロレス・空手のみならず、風俗取材&エロビデオ評論の方面でも頭角を現している〝無仕掛人ライター〟中村カタブツ君（35歳）である。ライター観、格闘技観、パンクラス観はまったく異なるものの、お互いライバルとして引くに引けない2人の対決を本誌は即決でマッチメイク。21世紀型の素人投稿ページ「PRIDE.O」のプロ版ともいえるこの対決、ジャッジは貴様だ！（ごめん、「貴方」と間違えました）。

膠着状態のパンクラスに「ブレイク!!」

ShOW

今回、「NOBBY」こと山口日昇編集長に頼んで、急きょ、パンクラスのページを設けてもらった。

なぜかといえば、9月14日、日本武道館で開催されるパンクラスの5周年記念大会を、どうにか僕なりにバックアップできないかと考えたからだ。

確かに、僕はパンクラスの永久会員であることもあり、リングスに行けば「本当はパンクラスのほうが好きなんですよね」といわれ、高田道場に行けば「気をつけろよ。Showちゃんはパンクラスの回し者だから（笑）」とからかわれてしまう始末。きっと僕自身が厄介な雰囲気を醸し出しているのだろうが、かといって、これがパンクラスに行っても決して歓迎されるわけではなく、パンクラスにさえも厄介者と思われているのは伝わってくる。

原因は、『スコラ』誌上で前田日明vs髙田延彦対談を実現させたからなのか、『U 多重アリバイ』（スコラ刊）でパンクラスを揶揄するようなことを書いたからかは定かではないが、僕は少なくとも〝敵〟のつもりはない。

つまり元々、僕らマスコミと呼ばれる人間になど、団体における居場所はないのだ。

だからといって、スネていてもはじまらない。

7月20日、リングスの横浜アリーナの次は9月14日、パンクラスの日本武道館、それが終われば10月11日、KRSの東京ドームと、僕の応援ターゲットは決まっている。

なのに、特に最近の『紙プロR』には、パンクラス関連の記事は少ない。

しかしパンクラスが、「プロレス」を名乗る以上、観る側があってこそ、はじめてその空間が現出することは間違いのない事実なのだ。

いくら「ほっといてくれ!!」と船木誠勝にいわれても、そんな嘘に騙される僕ではない。

世の中の不況、不景気も手伝ってか、他の団体同様、現在のパンクラスの集客力は決して高いとはいえないのが現状。ほおっておけるはずがないではないか。

前述した通り、前田と髙田は対談をし、協力を約束し合った。さらに先頃、米国に活躍の場を求めた髙阪剛は、常々「U系は協力せざるを得なくなってくる」とあっさりと言い切る。その断言ぶりにこっちが驚いてしまうほどだ。

だが、鎖国するのもひとつの戦略。本心をいえば、孤高を気取っている場合ではないとは思うが、パンクラスが「組織として全日本を目指す」のもそれはそれで構わない。

ならば全日本を見習って、三沢光晴vs川田利明、小橋健太vs秋山準といっ

髙橋義生は鈴木みのると対戦。藤原組時代に一度だけ実現している

たカード同様、パンクラスシスト同士による激しい闘いをマッチメイクしてほしい。パンクラスでその対戦カードに相当するマッチメイクを次々と実現させなければ、有言実行にはならないのではないか。

そう思っていたら、鈴木みのるVS髙橋義生戦が発表された。他にも渡部謙悟vsバス・ルッテン、山田学の復帰戦、4月以来の首都圏見参となる船木の試合など盛りだくさんの内容。

そして、メインには新王者、ガイ・メッツァーVS柳澤龍志の「キング・オブ・パンクラシスト」タイトルマッチと、パンクラスは総力戦を挑んできた。

これでもまだ物足りない、というファンも決して少なくはないのかもしれない。

ただし、パンクラスの現状から考えれば、その危機感は十二分に僕には伝わってきた。

まるで膠着状態のパンクラスに「ブレイク!!」の合図がかかったようだ。

あとは停滞ムードを払拭するファイトを見せるだけ。

でなければ、僕がこの原稿を書いている意味もなくなってしまうではないか!!

ビバ！ パンパー（クラ）ス
中村カタブツ君（35歳）

『紙プロ』誌上にパンクラスの記事がなぜか載らなくなって久しいが、みのる好きの僕としては非常に黙っていられない。以前、日明兄さんは「パンクラスはズルイんや」と言っていたが、僕に言わせてもらえば「パンクラスはウソつき」だ。それは自分たちのリングをこの世で最も過酷な勝負の場であるかのごとくいい、〝この世に残されたただ一つの四角いジャングル〟がごときに喧伝しているからだ。そう言った側面は確かにあるかもしれないが、裏を返せばそこはルールで完璧に守られきった地上における最も安全でスポーツライクな勝負の場なんである。

パンクラスは例えばこう反論するかもしれない。「どこが安全な場なんだ！鈴木みのる、山田学、髙橋義生ほかケガ人がこれだけ出ているんだぞ」と。だけど、ケガというものはアクシデントであり、道を歩いていても起きることだ。横断歩道を青信号で渡ってる最中、車にはねられることと意味あい的にはなんら変わりない。日常レベルの危険さを派手に騒ぎ立てるところにパンクラスのウソの源があるのだ。

だから彼らのリングは、例え激しくとも人生をまるごと賭けねばならない〝四角いジャングル〟ではまったくない。彼らのリングはベビーベッドなのである。床から一段上がり、まわりは柵で囲まれてるという見た目のみならず、両親という名の信者が赤ちゃんの一挙手一投足に注目し、一喜一憂するところまで見事に一致している。ぬるい空間である。

両親から「ほら、可愛いでしょ」と赤ちゃんを見せられてこっちは内心白けるという構造まで一緒だ。

だがしかし、そんなぬるい空間に今年の4月、異変が起きたのだ。船木という一族郎党誰もが認める可愛い赤ちゃんが一族及び近所の人々が見守る中、大事なタイトルマッチというお遊戯の場で期待通りの行動をしなかったのだ。よちよち歩きからそろそろ立つだろうと、みんなが固唾を飲んでいる時に立つ気配すら見せなかったのだ。

これは白ける。

期待通りにしてくれない赤ちゃんに近所のおばちゃんたちは冷たい。残っているのは親族だけだ。つまりそれが最近の観客動員数の減少なのである。

そして来る9月14日、パンクラスという赤ん坊たちは「今度は立つもん」と、日本武道館というデカイ会場で近所のおばちゃんたちをもう一度集めようと計画した。

さて、立てずに転んで鼻血を出すのか、見事に立って喝采を受けるのか、それはまだわからない。だが、一つ言えることは、例え転んだにしろ、そこで鼻血の味を知るだろうし、立てば少し高い視点を手にすることができるということだ。

いずれにせよ、人々の世話を受けなければ生きることができない皮かむりの赤ちゃんたちは、その日必死になって立とうとすることだろう。また、立とうとしなければ飢えて死ぬだけだろう。もっとも死んだところで僕にとっては知ったこっちゃないけど。

しかし僕としては転んで泣き叫ぶ姿をぜひ見たいので、そういう意味で9・14武道館は非常に注目している大会なんである。

ちなみにちょっと前までベビーベッドにいた僕はオムツ着用ながらも立ったもんね。頑張れパンパース！ もといパンクラス！

バス・ルッテン相手に破格のデビュー戦を飾る、超新星・渡部

試合ぶりも考え方も勢いにのる柳澤龍志は、王者、ガイ・メッツァーに挑戦！

池袋コミュニティ・カレッジ
青空プロレス道場

ナマの紙プロ見せたろか!! 「紙のプロレス講座」大成功記念!!

読者の皆さん『紙プロ』がプロレス講座をやってたって知ってました? 西武の池袋コミュニティ・カレッジというところで、なんと5回も開催してたんですよ。あまりに反響が大きいもんだから、急遽10月から再び講座が開かれることになったんです。次回は、な、なんと全10回! 今回は第3回目から第5回目までの様子を赤裸々に報告したいと思います。(チョロ)

道場リポート

第1回 4月23日
「猪木とは何か?」
特別ゲスト 石川雄規

第2回 5月13日
「プロレスマスコミの現在と未来」

第3回 6月10日
「UWFとは何か?」
特別ゲスト ターザン山本

第4回 7月1日
「『格闘技』と『プロレス』の愛憎関係」
特別ゲスト 花くまゆうさく&椎名基樹

第5回 7月8日
「プロレス者って何だ?(仮)」
特別ゲスト 高野拳磁

第3回 6月10日
『UWFとは何か？ そして生まれた馬場最強説』
特別ゲスト ターザン山本

Showちゃんの『U～多重アリバイ～』風に言えば、今年は新生UWF旗揚げから丸10年を迎えた年であり、更にはUの象徴的存在でもある前田日明の引退を控えた年でもある。もう一方の象徴、佐山聡も新たなUの発進を試み、高田延彦はヒクソンとの再戦を控えている。そんな年だからこそ「山本、お前がUなんだよ！」ことターザンと一緒に「UWFとは何か？」についてみんなで考えてみよう。

今日も寅さんスタイルでキメてきたターザン。葛飾区のファッションリーダーでもある。

馬場さんは史上最大のセメントレスラーなんですよ！

遅れること30分、もの凄い形相をしたターザンが入ってきた。何事かと思い、尋ねると「新小岩の駅で爆弾騒ぎがあったんですよォ～。おまけに池袋に着いたら道に迷っちゃって頭に来たから帰ろうかと思ったよ！」と早くも大炎上。まあターザンの場合、道に迷ったら本当に帰ってしまうから怖いんだけど。道場生たちは「またターザンかよ」という表情の者も何人かいたが（中にはご親切にブーイングまでする命知らずの者もいた）、「UWFというのは馬場と猪木の世界をぶち壊すという情熱に燃えた集団だったわけ、だから面白かったたんですよ！（早くも興奮してドンドンとテーブルを叩く）」とハイテンションシ・ターザンの生テーブルドンドンを体感すると、「あ～本物だ。炎上！ 炎上！」と一同はすっかりターザンのペースに巻き込まれ、満足げな表情に変化していった。まさにターザンマジック（マン）。

居酒屋でもターザン大炎上。「鈴木みのるはいいプロレスラーなんだよぉ～。ただ勝利至上主義ではいかされないんですよォ～」（居酒屋でもドンドン）

ナマケモノとプロレスラーは同義語みたいなもんだから（ターザン）

本誌・吉田が「ボクUWFはビデオで一回見ただけなんですよ。UWFより鶴田の方が全然面白かったし」と言うと、ターザンは「鶴田もいいんですけど、ジャイアント馬場だけだよ、Uもプロレスだって言えるのは！ 馬場さんはずっとプロレスやってきたから言えるんだ。馬場さんは史上最大のセメントレスラーなんですよ！（ドンドン）」と衝撃のシューター馬場発言が飛び出した（その理由は来た人の特権ということで、ちっと教えられません）。さすがに道場生もボクも目が点になっていると、「UWFの選手はナマケモノなんですよぉ～。労働時間は一ヶ月でたったの10分ですよ！（ドンドンドン）」。とこれまたフライング。〝生フライング〟の連打に打たれて、終わってみればフラフラの道場生であった。

第4回 7月1日
『プロレス』が好き？『格闘技』が好き？ どっちも好き？ なんで？
特別ゲスト 花くまゆうさく&椎名基樹

「近頃、プチ格闘技ブームと言われている。街を歩けば大和魂、シューティング、バーリトゥード、K―1Tシャツもやたらと目に付く。一方のプロレス界はどうだ？ nWo、全日、リングス、みちのく、バトラーツ等々プロレス側だって負けてはいない。プロレス側の人たちは、今の格闘技界をどう思っているのか。また逆に格闘技側の人たちは今のプロレス界についてどう思っているのか。何か言いたいことはないのか。その謎を解けばプロレスがますます面白くなるはず。きっと。

全日の選手のファッションセンスがたまらなく好きだという椎名氏と小島聡の練習方法が気になる花くま氏。

『感動させてよ！』は楽しみにしてますよ（笑）（花くま&椎名）

今回のゲストは、本誌「リングの汁」でもお馴染みの花くまゆうさくさんと、同じく『ザ・検証』でお馴染みの椎名基樹さん。花くまさんはグレイシー柔術アカデミー、椎名さんは木口道場で練習している。つまり2人とも格闘技をやる側の人たちなのだ。と同時にプロレスファンでもある。（花くまさんは最近少しプロレスインポ気味…）。時期的に『PRIDE3』の話題から話は始まった。花くまさんは会場には行かなかったようで「ホント行かなくて良かったですよ。行ってたらメイン見て怒ってたかもしれませんね」と髙田に厳しい発言（一部自主規制）の連発。山口日昇がいくら今の髙田の素晴らしさを変

桜庭、高阪、菊田で日本最強を決めてヒクソンにあてればいいんですよ。

化球まじりに説明しても、花くまさんは「高阪とかが最強だって言うんだったら、別に何も文句はないんですよ。高田とかが言うから面白くないって思うんですけどね」とやっぱり高田がお嫌いのよう。でも、ここまで嫌う人がいるもの高田の高田たる所以だろう。時計の針は午後8時。本来ならボクとカタブツ君とで『猪木寛至自伝』に出てくる、人参ジュースをガブ飲みして我が息子をバイアグラ状態にする実験を試みるはずだったが、寛至の、いや肝心の人参を忘れてしまったため、ドタチュウ（土壇場で中止）。講座も中盤にさしかかった頃、いきなり道場の扉が開いた。なにっ、道場破りか！　ここは若頭のボクがいっちょ懲らしめてやろうと歩を進めると、そこには、な、なんとトンパチの小野武志がいるではないか。「どうもお疲れさまです」ボクが勢いよく啖呵を切ると、小野武志は大人しく後ろの席でマンガを読みはじめた。一安心、一安心。

そしてこの日、偶然発覚した衝撃の事実が（そんな大袈裟なものではないが）。ゲストの二人が共通して楽しみにしていることがあった。それは『週プロ』の「感動させてよ！」。二人ともシッシーの出ている『サムライ』もしっかりチェックするほどのシッシーマニアだったのだ。羨ましいのは何処へいっても人気者のシッシーである。花くまさんは最後に「桜庭、高阪、菊田で日本の最強を決めてヒクソンにあてればいいんですよ」と言った。菊田（水道橋博士似）ファンのボクとしては桜庭、高阪と共に菊田の名前が挙がったことで大満足。

その時既に講座の時間は30分オーバー。講座担当の西武・山口さんの冷ややかな目を気にしながら退場する道場生たち。そして花くまさんの手にはボクが上げたトラック野郎キャップがしっかり握られていた（自己満足）。

クラブ帰りに突然フラッと立ち寄ったトンパチマシンガンズの小野武志。山口日昇に前へ呼ばれると馬場さんのモノマネを披露した。

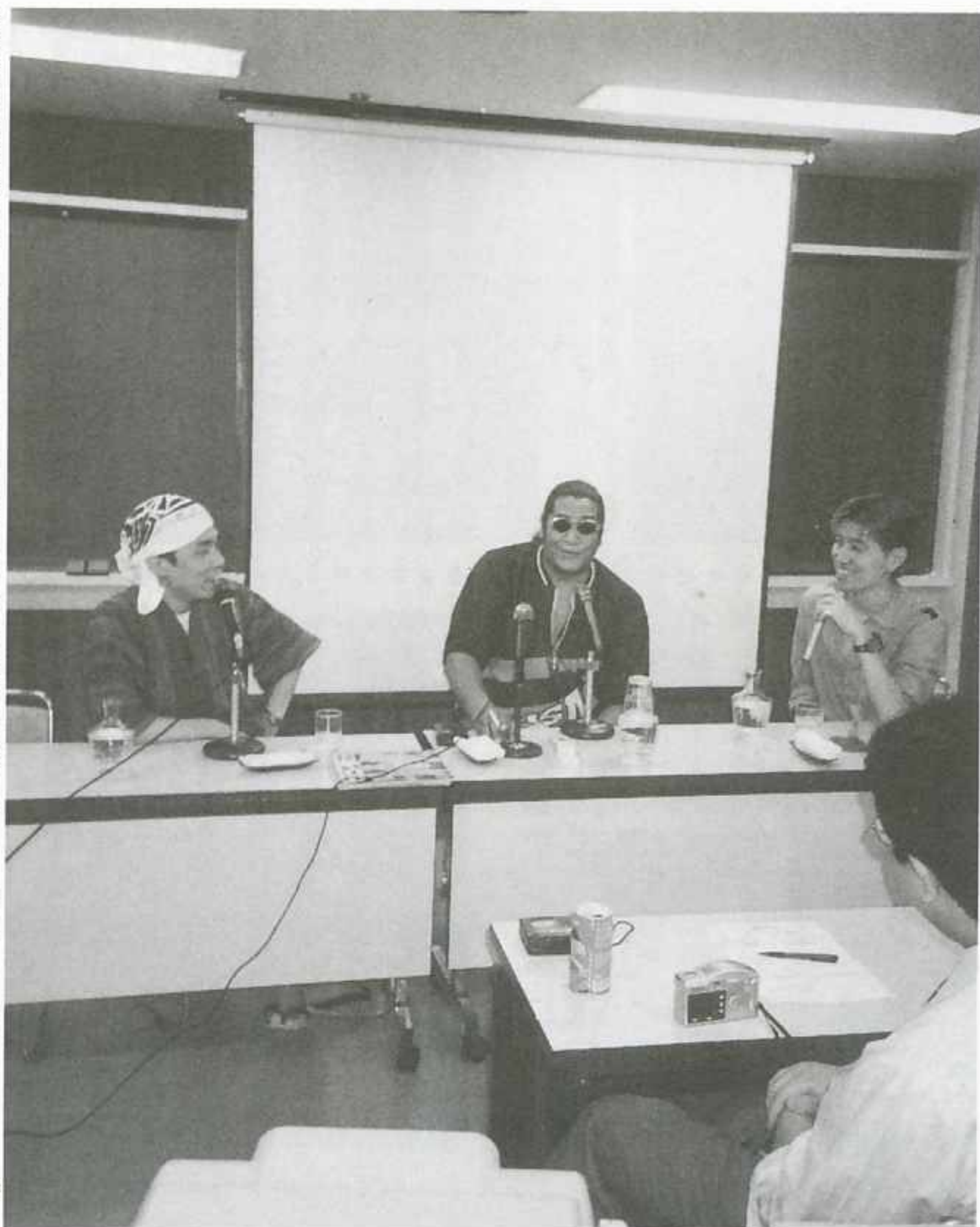
第5回　7月8日『ねえねえプロレス者って何？　誰？　俺？（仮）』

特別ゲスト　高野拳磁

『青空プロレス道場』も気が付けば今回で最終回。ラストに相応しいゲストを迎え、有終の美を飾ろうとしたものの、相変わらず直前になってもゲストは決まらない。困った。まあボクが困っても仕方がないが。編集長のヤマグチサンが最後の切り札として電話を掛けたのは、人間バズーカ・高野拳磁だった。確かに最後に相応しい大型ゲストだ！

嫌いなレスラー？ちょう……かな。蝶野じゃないよ（笑）（拳磁）

いきなり「オーバー・ザ・トップ」が大音量で流された（俺がCD流しただけだけど）。拳磁は『紙プロ』が誇る（大きさだけは）女人間山脈・ジャイ子とともに入場してきたが、（さすがに身長182センチのジャイ子も拳磁の前では心なしか小さく見えた様な気もする）さすがにデカイ。やっぱりレスラーはこうでなきゃ。席に着くなり拳磁は言ったね。「灰皿持ってこいよ！」。エエッ！っていうかレスラーだろっ拳磁。…でも煙草吸ってるレスラーなんてたくさんいるし関係ないか。冬木、大仁田とかは、雑誌でよく煙草吸ってるとこ写ってるし、最近では西村〝無我〟修も、煙草吸ってますってカミングアウトしてたし。

一服して落ち着くと、いつもの様に拳磁節が繰り広げられた。特に本誌・吉田豪との絡みは抜群に面白かった。新日入門時の話を遠くを見つめながら懐かしそうに「あの時はねぇ新間（寿）さんに、入門したら前田とオマエの二人のでかいタッグが夢なんだよって言われてさ」こう言うと、すかさず吉田が突っ込みを入れた「二代目東京タワーズみたいな感じですね？」拳磁は間髪入れずに「何それ！　その言われ方、すっごい嫌！　病気みたいじゃん。吉田ぁ、なんかお前がすっごく嫌な奴だと思えてきたよ。あとさぁ、オマエさぁ俺たち以上にレスラーのこと語るだろ。それもスッゴイ嫌。まだまだ頭じゃ負けないよ。オマエなんかにもね。フッフッ」。個人的に吉田豪が突っ込まれるのを見れただけで大満足。拳磁はその後も全日話、ファッション観、喧嘩話まで延々と語り倒してくれた。最後の一言もまたカッコよかった。「でもお前らさぁ、オレなんかの話で良かったの？」心配ない！　道場生は大満足だったぜ（いや、これホント）。

直接会うのは一年ぶりぐらいだという山口日昇と拳磁。ちなみに拳磁は、講座のゲストを依頼された時、ムササビこと野上彰と飲んでいたという。拳磁とともに野上の次に上がるリングも気になるところだ。

7月8日『RADICALバズーカで炎上飲み会(仮)』

参加者 高野拳磁と39名の酔っ払いども

(煙草を買ってきたノブに向かって)オマエさぁ、座敷犬みたいだなぁ。(拳磁)

『青空プロレス道場』も無事終了しました。皆さんお疲れさん。かんぱ～い！ 酒だ、酒持ってこ～い(まあ一番下っ端のボクが持ってこなきゃいけないんだけど)。毎回毎回、講座が終わる度に飲み会を開いていただけあって、ボクらの知らないうちに道場生同士はすっかり打ち解けていた。隣のテーブルでは一人の女の子を巡り何人もの野郎どもが果敢にアタックをし続けている。結局みんなことごとく自爆に終わっていたが(ざまあみろ)。そしてふと横を見るとグラスに並々と注がれた焼酎を瞬時(俊二)に飲み干す男が一人。高野拳磁だ！ 拳磁の酒の席での話はいろいろと耳にしてはいたが……。カタブツ君は拳磁に「焼酎4杯持ってこい」と言われ、何のためらいもなく水を4杯持っていき、「お水お届け！」と言うと、拳磁に「オマエさぁ、ホントにカタブツだなぁ」と言われる始末。その勢いで拳磁はたいして酒も飲めないカタブツ君にイッキを立て続けに3杯要求。さすがにレスラーから言われたら断れず、必死の形相でそれをなんとかクリアしたカタブツ君。その後ピクリとも動かず、死体と化していた。この日、講座の時から拳磁に付いていたのがノブ。煙草を買いに行かされ、それを手渡すと拳磁は言った「オマエさぁ、座敷犬みたいだなぁ」。その時からノブ(改め座敷犬)の嫌いなレスラーランキングに拳磁が初登場1位でランクインしたとのこと。

『RADICALバズーカで炎上飲み会(仮)』は朝の5時まで続いた。みんなグッタリしている中、さすが拳磁、何一つ変わらず(人にイッキの強要はしたが)しっかりとした足取りで家路についた。

拳磁に散々イッキさせられたカタブツ君(35歳)。トイレに駆け込み、1時間。恐る恐るドアを開けてみると……し、死んでた。

ラストに相応しく参加者は過去最高39名。ちなみに真ん中はスーパー女子高生・武田いづみちゃんだ。次回は君の参加を待ってるよ!

左から原クン(28歳・銀行マン)、ジャイ子(26歳・大女)。原クンは女子プロ、インディー系の会場で容易に発見できるはず。

プ・プ・プ プロレスクイズ～!! 大解答

『紙のプロレスRADICAL.NO10』にて実施した、プロレスクイズですが（金がないことでは、末端のインディー団体にも負けない『紙プロ』が30万円も払うって言ってるのにも拘わらず）、応募総はたったの50通。しかも正解者0人。ちなみに中級者、上級者問題は一通も応募はありませんでした。そのうえ読者ハガキでも散々叩かれてしまう有り様（難しすぎる、調べればわかるようなクイズはあんまり好きじゃない、ページの無駄使い、プロレスクイズはオレのアイディアだ何かくれ等々）。本来なら一問ごとに解答&解説を入れたいところですが、反響もないので簡単な解答だけを列記します。（問題がわからない人は前号を買ってくださいね）

初級問題解答

Q1 A（左はアレクサンダー大塚選手です） Q2 A（ヒクソン・グレイシー） Q3 B Q4 A（ホントにA兄貴です） Q5 B（サンダルとスリッパが交わって生まれたのがサンダリッパ） Q6 C（サムはK-1に出てます） Q7 B（笑瓶は芸人、京平はレフェリー） Q8 C（日明兄さんVS"ヒットマン"ブレット・ハート。今でもみたい！） Q9 A（ひっかけ問題。マシンが白鳥になるなんて誰も想像しないですよね） Q10 B（わからなかった方は『紙プロ本誌18号』にサスケ夫人、村川メリーさんインタビューが載ってます。お薦め!） Q11 A（そのまんま） Q12 B（今でも売ってます） Q13 B（三沢は虎年） Q14 B（しかもパンクス） Q15 C（あの顔でセールスされたら怖くて買っちゃうかな） Q16 A Q17 C Q18 A Q19 B Q20 B Q21 B Q22 B Q23 B Q24 C Q25 A（京都出身の伊藤孝子さん）

今回、正解（政界）はなし！

中級問題解答

Q1 A Q2 A Q3 A Q4 C Q5 B（トペ） Q6 A Q7 C 初代王者は"メキシコの鉄人"レイ・メンドーサ。二代目は"ギリシャの黒鷲"ジョン・トロス。猪木は三代目のチャンピオン。 Q8 C（キッドの初来日は国際プロレスでした） Q9 B Q10 影かおる（ダンプ松本の影武者） Q11 C（Rintamaでは表紙になってます） Q12 C Q13 B Q14 C Q15 B（上田はつめたい試合も強かった） Q16 ダイナマイト・キッド Q17 超合金戦士 Q18 出会い Q19 スーパー宇宙パワー（今号でインタビューしてます） Q20 高千穂明久（今号でインタビューしてます） Q21 サムソン（冬木でもクツワダでもない） Q22 M・ミラノ&M・グランデ Q23 心強い乱闘要員 Q24 ディック・マードック Q25 皆さんご存じの通り、勝者は前田日明。

上級問題解答

Q1 後藤政二（現ターザン後藤） Q2 上田馬之助 Q3 放送は午後1時～2時50分＝視聴率は46%でした。 Q4 マイティ井上 Q5 ハルク・ホーガンVSロディ・パイパー Q6 グレート小鹿、大熊元司、ロッキー羽田、石川敬士、キム・ドクの5人です Q7 ミスター林 Q8 鳥居ユキ Q9 マジック・マン Q10 ビンス・マクマホン Q11 ドン荒川 Q12 小路晃 Q13 貴ノ花 Q14 クラッシャー・コワルスキー Q15 超能力仮面 Q16 パトリオット Q17 レッドブラウン Q18 煮しめ Q19 伊藤政則 Q20 ジャンボ鶴田 Q21 トルトゥガー（いや、これホント） Q22 シリーズ2作目で老トレーナーが死んでしまうシーン。 Q23 日本相撲協会横綱審議会 Q24 THE NOTORIOUS,BOVVER BIRDS Q25 Aとe（20分時間切れ。前田は「プロとして闘った山本に勝ちを譲りたい」との発言をしたが、判定は覆らず前田日明の勝利）

RADICAL BOUT REVIEW

紙プロ的 RADICAL観戦記

あのー観戦記なんですぅ～

超名物!!

トンガ プリンス

トンガッテ鬼

Step The SPWF サマーシップシリーズ

8/1（御殿場青果市場）SPWF

極私的ベストバウト

1位　谷津嘉章の完全脱力マイクアピール

2位　谷津嘉章&高智政光vsグレート・センセイ&クラッシャー・レイボーン

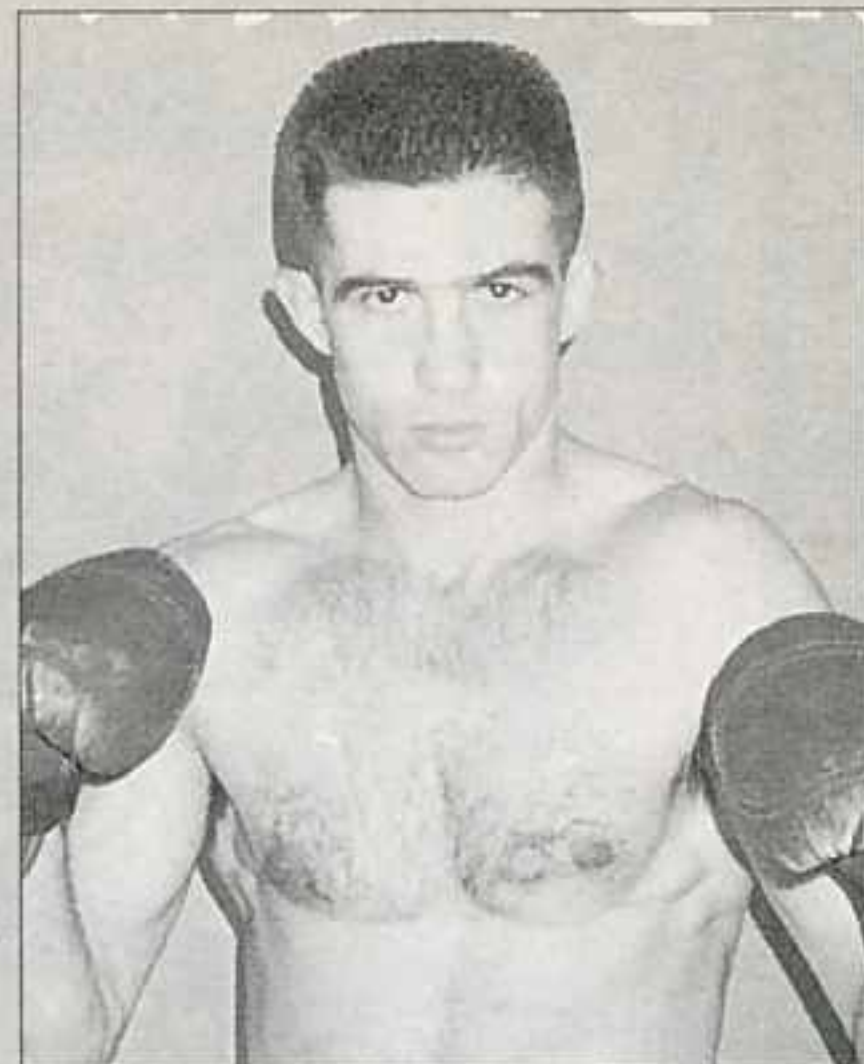
3位　嵐&大刀光vsウンモ星人&紫炎龍

午後は○○おもいッきり、谷津嘉章!!

谷津元気!! 本誌の核爆弾インタビューが発端となって街の至るところで谷津ブームが巻き起こっている様子。何しろ流行に敏感なサスケ社長までもが「これからは谷津さんの時代だ! うん」なんて言ってるくらいだ。もちろんボクも谷津嘉章全面支持派。それを受けて（かどうかは知らないが）谷津が動き始めた。何しろ目ぇつぶって30秒の男である。その気になれば早いもんである。

これまでマスコミを利用することなく（当然試合日程も殆ど掲載されず）地道にSPWFヒストリーを積み重ねていたのだが、ここにきて積極的に外へアピールをし始めたのだ。ウチの会社にまで「谷津ですけどぉ、今度のタッグリーグよろしくお願いしま～す」とフランクに電話まで掛けてきてくれたし。谷津嘉章全面支持派のボクは「いかねば!」と御殿場青果市場へ向かった。

「当日券はこっちだよぉ」代表は自らチケットを売っていた。SPWFが総力を挙げたタッグリーグ戦なだけにド派手な入場式が行われた（青果市場で）。選手を代表して谷津にマイクが渡った……ってなかった。矢口にマイクが渡った。「選手を代表してってぜ～んぶ言われちゃったからもういいわなぁ（苦笑）」と照れくさそうにリングを降りていった。試合後、再び矢口に「おい谷津、負けたらヒゲそれよ!」と挑発されると、負けじと「矢口、おめえヒゲ歴何年よ～。俺はなぁ、16年はやしてるんだど～」更に「あっそぉ。そ～ういう試合やらせたらオレ強いよ～」と、ここでも最強宣言。

アマレスに強烈なプライドを持ち、己のヒゲにも強力なプライドを持つ谷津。望むべくはもう一つの〝PRIDE〟。（チョロ）

『Las Grandes Viajes（大航海）』

7/29（後楽園ホール）
ワールド修斗

極私的ベストバウト

1位　宇野薫vsスボンコ・セコリエビッチ
2位　桜井速人vsロニー・リヴァノ
3位　川口健次vsアンテ・ユーリシッチ

これが男の"野太い"闘いってもんです!!

他人を殴りつけるのは楽しい。それは格下の相手を自分の思うがまま、手の平で遊ばせるように弄ぶ、まさに遊びと残虐性が同居した時だろう。だが、これはとても闘いとは言えるしろものではない。いわゆるカマセ犬との対戦とはこんなものなのかもしれない。

だが、本来人を殴るのは極端に難しい。つきつめて言えばそれはトドメを刺せるかどうかの瀬戸際にまで追い込まれた時だ。そこまでいかなくても命ごい、もしくはグロッキーになってる人間に二撃三撃を加えることは非常に嫌なものである。

"怖い"人間はそれができる。"怖い"人間は躊躇しない。

今回クロアチアの英雄、ブランコ・シカティック率いるティガージムの男たちが修斗に初参戦した。戦争を経験し、何人もの兵士にトドメを刺してきた"怖い"男たちが修斗のリングに上がってきたのだ。

宇野薫と対戦したスボンコ・セコリエビッチはそんな男の一人だ。開始早々に放った右のハイキックは宇野のガードの手を痺れさせた。どう見ても完全に極まったと思える腕十字も力と我慢で切り返した。驚愕の瞬間が次々と訪れ、観客は、ベストバウトと言われる試合が通常持つ"熱"とは異質な"戦慄"に酔わされた。その"戦慄"を宇野はすぐ間近で受け止めきり、勝利をものにした。こういう野太い闘いは素晴らしい技術を持つ者同士の闘いとは別の凄味を伝えてくれる。

ティガージム第2の刺客アンテ・ユーリシッチは片手に水のボトルとタオルを持ち、まるで銭湯に行くかのごとく登場し、これはこれで別の凄味を見せつけた。クロアチア勢恐るべし！（ブチ）

『野望～終わりなき挑戦～』

7/26（後楽園ホール）
LLPW

極私的ベストバウト

1位　神取vs前川&脇澤
2位　イーグルvs沖野
3位　紅&佐藤vs前泊&土屋

「Lでは新人は育たない」もうそんなことは言わせない

この日のカード発表時にまず驚いた。何故変則タッグ？　そして何故神取vs前川&脇澤？　うーん、すっごい気になる!!　コレは見なければ!!　ってことで会場行ったんですけどね。満員になると思ったんだけど……。だってこのカード、堀田戦より気になったもん。意味不明で。

そんなジャイ子の予感的中、メチャメチャ面白かった。豊田戦云々抜きにしても面白い！　特にワッキーこと脇澤が頑張ってました。ワッキーってこんなに元気だったの？　神取相手に飛ぶわ、関節技仕掛けるわ、もう大ハッスル。ちょっと見ない間に成長してたのね。神取にあそこまで向かっていければ充分合格です。

この日は、他の試合でも若手が光ってました。まず、紅と組み、土屋&前泊と対戦した佐藤めぐみ。猛毒隊に投げられまくる姿を見て、「100発投げ」という言葉（某団体でイジメの一環として行われていたシゴキ。みんなで交替で1人を投げまくり、受け身を取らせる）を思い出しました。でも佐藤は耐え続けた。反撃のチャンスも全くモノに出来ず、技術面ではいいトコなしだったけど、紅の手を借りずに頑張る姿にグッと来ました。

そして師匠、イーグルとシングルで闘った沖野小百合。「ヒールの若手は伸びる」とはこのことか、と思わされる一戦で、良かったのは沖野が「胸を借りる」っていう姿勢で行かなかったコト。30分間、ただ我慢してのドローじゃないんです。実際、イーグルがヤバイ場面が何度もあったし。

「LLでは新人は育たない」とロッシー小川氏は著書で記していましたが、この日の試合を見ればそれは間違いだと気付くことでしょう。立派に育ってます。

（立派に育ちすぎのジャイ子）

『ヤングジェネレーションバトル'98』

7/25（東京FMホール）
格闘探偵団バトラーツ

極私的ベストバウト

1位　折原昌夫vs小野武志
2位　池田大輔vs岡本衛
3位　モハメド・ヨネvsマッハ純二

イカレ社長の目隠し経営は11・23両国に風穴を開けるか？

この日、11月におこなわれる噂のバトラーツ両国大会が発表された。その目玉企画としておこなわれるのが『B-CUP（バカップ？）』、またの名を猪木イズム世界一決定戦と勝手に命名させてもらう。「プロレスがゴールデンタイムだった頃の興奮を取り戻そう」という大きなテーマがあるのだ。

猪木イズム継承を勝手に提唱している石川&サスケは、どちらも小さな団体を率いている。俗に「インディー」と呼ばれる世界でのことだが、その中でも突飛なことを考えさせたら1、2を争うイカレた頭の持ち主だ。

確かに、バトラーツの後楽園大会は超満員を続けてはいるが、いきなり両国は無理があるんじゃないのか？　しかし、石川は「成功しようが、失敗しようが、かまわない」と語っている。この時点で、経営者としてのイカレっぷりは誰もが認めるところであろう。

その前後、新日本プロレスのビッグ・サカこと坂口征二社長が、どこかのインタビューで「もう、今年のプロレス界、下半期は何にも起こらないだろう」と語っていた。

これは問題発言だ。「何も起こらない」のは新日本の問題だろう。何にもないんだったら、おもしろいことをやるのが仕事ではないのか。ファンの興味を失わせてしまってどうする？

「利害を超越して、誰にも出来ないこと、誰もやらないことを、夢としてそれに挑戦する!!」これがアントニオ猪木のロマンだった。いまや、新日本にロマンはない。石川やサスケこそ、プロレスにロマンを求める真の闘魂伝承者である。まあ、ロマンのせいで猪木は多額の借金を作ってしまったわけだが。（ノブ）

RADICAL BOUT REVIEW

『インディーワールドVol.2』

7/22（後楽園ホール）

インディー活性化委員会

極私的ベストバウト

1位　折原昌夫＆パロミノ vsTAKAみちのく＆アジアン・クーガー
2位　谷津＆奥村＆板倉 vs藤原＆剛＆中野
3位　市来貴代子＆千春 vs中野知陽呂＆藤井巳幸

今ならまだ間に合う 君もアジアン・クーガーに乗れ！

専門誌（紙）によると、この日の目玉はWWF帰りのTAKAみちのくなんだそうだ。ボクもそれについてなんら異存はない。シッシーではないがTAKA vs折原の一戦などは是非とも見てみたいカードであるし。がしかし、ボクが最も注目するのはTAKAとタッグを組むアジアン・クーガーなのである。

この日の後半3試合はカラーボールを引いて試合順を決めるというインディー活性化委員会オリジナル・ルール？が採用された。くじ引き（ボール引き？）の結果、5試合目を引いてしまったクーガーのメイン登場はなくなり、客席からは「あ〜あ」。観客もその試合をメインで見たいという声が多かったようだ。ボクも、クーガーのかつての師匠でもある谷津嘉章や、藤原、剛を抑えてのメイン登場を期待していたのだが。

そして何より驚いたのは、〝クーガー〟コール時の声援と紙テープがTAKA、折原を上回っていたことだ。どこへ行ってもクーガーの会場人気は高いが、彼等を上回るこの声援はここ1、2年のクーガーの飛躍的な成長がファンに届いているからであろう。

肝心の試合は、ユニバ時代一緒の時期があったかどうか定かではないがTAKAとの息のあった連係、各種ギロチンなど、その動きの端々から感じられる天性のセンスの良さは一見さんにも確実に伝わったはず。

「瞬間瞬間、素晴らしい動きをするけど技と技のつなぎが甘い」と折原は言っていたが、人並み外れた空中殺法に加え、折原の言うそれを克服すれば、黙っていてもメインを張れるレスラーなのである。（チョロ）

『CAPTURED〜前田日明リングスラストマッチ〜』

7/20（横浜アリーナ）

リングス

極私的ベストバウト

1位　人前で他人の金的に水をかけるギルバート・アイブル
2位　握手を拒否されただけでキレるアイブル
3位　ポール・ヴァレランスの動きの悪さを笑うアイブル

金的は冷やすのが一番!!

金的を蹴られたら水で冷やすのが一番らしい。金冷法というものがあるのだから、たぶん間違ってはいないだろうし、はっきり言って効きそうだし。

この日の第3試合、ポール・ヴァレランスに金的を蹴られて苦しむヨープ・カステルは同門のギルバート・アイブルによって局部に水をかけられて元気を取り戻し、見事ヴァレランスを撃破した。すべてはアイブルの魔法の水のお陰？では決してないと思うが、効果は高かっただろう。この効果は一人、カステルのみならず見ているこっちにも際だったアクセントを与えた。金的を蹴られるのは特別珍しいことではない。珍しいのはそこに水というアイテムを持ち出すアイブルの類稀なセンスなのだ。

金的を蹴られたのを見てボトルを掴み、ニュートラルコーナーまで走って、痛みに耐える盟友に水をかける。この一連の流れの中にアイブルの喜怒哀楽が凝縮している。まずは蹴った相手に怒り、蹴られた友を心配し哀しむ。そして回復した友の闘いを楽しみ、その勝利を喜ぶということである。ちょっと強引？

だが、しかしだ。他人の苦しみを俊敏に関知し、そしてそれをポジティブな楽しみに変換して共有できる骨太の男の姿は見えてくる。そんな男が第1試合で見せたファイトとは相手の顔面ばかりを執拗に膝蹴りで狙うというデンジャラスな闘いだった。理由は簡単。アイブルが差し出した握手の手を対戦相手のアリョール・ベーコフが払いのけたためだ。このナメた態度にアイブルは男としてのケジメを即座にそしてキッチリつけたというわけだ。

まさに闘争心がビンビンに勃ちっぱなしの格闘バイアグラなんである。素敵だ！（ブチ）

『ジャパン・グランプリ'98』

7/19（後楽園ホール）

全日本女子プロレス

極私的ベストバウト

1位　豊田真奈美＆中西百重 vsZAP・I&ZAP中原
2位　前川久美子vs高橋奈苗
3位　黒猫・元川vs脇澤美穂

先輩の顔面を竹刀でひと突き！ 極悪新人・中原、戻ってこい！

この日は、極悪新人・ZAP中原が後楽園で初めてセミに登場。中原はZAP・Iとタッグを組んで、何かと因縁の豊田真奈美＆中西百重と激突した。当然、注目は中原vs豊田のカラミである。

この2人、お互いを嫌いあってるさまが、試合の随所に見て取れた。特に豊田は、他のレスラーに対するような情け容赦は一切なく狂ったように竹刀で中原を殴り続ける！　中原もやり返すが、相手は日本一大人げのない女・豊田だ。分が悪い。気後れしているようだった。「殴られすぎなんじゃないの？」というところで、異変は起こった。

ZAP・Tから竹刀を受け取った中原、一瞬顔色が変わったと思ったら、何のためらいもなく豊田の顔面を突いた！「迷わず突けよ、突けばわかるさ！」といった勢いだ。場馴れしてるね。

突いたときの表情がブチ切れていて、非常にいい感じ。「先輩だろうが、関係ねえ！　やるときゃやるんだよ！」といった覚悟が見えた。もう、最高！　ところが、その後は返り討ちにあい、またもボコボコに。フォールを取られた後、ZAP・Iにまで殴られ「弱いヤツはいらねえんだよ」と怒られてしまう。見所はあったが、結局は顔面突きのシーンのみ。まだ中原にはセミ・ファイナルの荷は重すぎたようだ。

と、ここまで書いてきたが中原が現在、失踪中だという。非常にもったいない。あんなに肝っ玉の座った新人は、そうざらにはいないはず。だが、逃げてもスーパースターになったレスラーはいっぱいいる。女子プロレスラーで「逃げよう」と思ったことのない人を捜す方が大変だ。誰もが通る道でなのだろう。関係者の話によれば、中原には帰る家もないらしい。せつない話だ。（ノブ）

写真提供／ナイタイスポーツ

『JUNE BRIDE〜梅雨をブッとばせ〜』

6/30（北沢タウンホール）

DDT

極私的ベストバウト

1位　宇宙パワーに日本語を喋らせたTM

2位　ウエディングドレス姿のダイアナ

3位　男らしい二瓶組長

これこそインディー? シモキタ禁断の一夜

会場に向かい下北沢駅の改札を出ると、そこにはターザン山本が。待ち合わせみたい。駅前にいるなよ。ジャイ子びっくりしちゃうじゃん。動揺を隠し、とびきりの笑顔で挨拶して1人タウンホールへ。うわーっっ。こんなに小さいトコだったの？　何故かきれいなギャルがたくさんいるし。ホントにプロレス会場？

この日のDDT対二瓶組の6人タッグはなんと、二瓶組が負ければダイアナを、DDTが負ければリングを渡さなきゃいけない、団体生命を懸けた試合だったんです。ドキドキですねー。結局DDTが勝ち、二瓶組長は男らしくダイアナを差し出そうとするんだけど、高木も男らしくそれを拒否。そうこうしている間にダイアナは控室に帰っちゃうの。結局、高木が二瓶組の実力を認め、これからも切磋琢磨していこうってことで大団円となり、組長はDDTにジャイアント・ダイアナ（女装したドレス姿の髭ヅラ男）をプレゼント。逃げるDDT軍。ダイアナもリングに戻ってきて、めでたし、めでたし、って言いたいトコなんですが……

試合後のやりとりがとにかく長い。書いてて長かったもん。いつもこうなの？　それも含めた試合をみんな楽しみにしてるっていうのも解らなくはないんだけど。

もちろん、二瓶組長の男っぷりは楽しみだったし、実際、男らしかった。ちょっと怖いけど。ダイアナも写真で見るよりずっと可愛かったし。（ジャイアント・ダイアナはジャイ子にやらせて欲しかったな。ジャイ子の方が大きいんだもん。現在180センチ。）だけどやっぱり長すぎ。ちょっと物足りないくらいの方がまた見たくなるもん。その辺の微妙なサジ加減が大切なんです。試合だけだって充分魅せられるんだから。　（ジャイ子＝入店2日目）

『FIGHTING INTEGRATION』

6/27（東京ベイNKホール）

リングス

極私的ベストバウト

1位　田村潔司vs髙阪剛

2位　滑川康仁vs　トロイ・イッテンソン

3位　成瀬昌由vs山本健一

ゼイタクにも、また「獣の精」が降りてくるのを待ち望んでしまう

「リングスという森」には「獣の精」と「妖精」がいる。

獣の精は、例えば『前田vsフライ戦』という姿になって現れ、妖精の方は、例えば『田村vsハン戦』となって立ち現れた。

6月27日にも妖精は、『田村vs髙阪戦』となって立ち現れた。ひどく存在感があり、タメ息をつくほど美しい妖精である。

つまり、『田村vs髙阪戦』は、「美なき闘いは無能なり、闘いなき美もまた無能なり」を地でいく闘いであり、リングス・スタイルの現時点での完成型であり、観客の視線に晒されることによって成り立つ「プロ格闘技」の理想型を見るような闘いだった。

「木を見て森を見ない」という言葉がある。

「マエダアキラという木」を見続けなければ、森は見えてこないと思っていたときもあったが、いつの間にかリングスという森は、ぐんぐんぐん広くなっていったようだ。

時期はずれのお中元として、もっとこの闘いの面白さをお届けしたい気もするが、〝その場にいる者しか共有できない空気〟があったことをご報告するに止めたい。ま、ドキドキしたし、ワクワクしたし、色気を感じたゼィ！　ということである。

しかし。ゼイタクなことに、どーしてもワタクシは「獣の精」がリングに降りてくるのを待ち望んでしまう。獣の匂いをリングスという森で嗅ぎとりたいのだ。なにも血なまぐさい闘いだけ見せろ！　といっているのではない。だが、スポーツという概念におもねた綺麗さである必要はなにもないのだ。

回りながら進むこと。つまり〝転がり続ける運動体〟であるためには、獣の精が運んでくる測定不可能な力は必要だ。21世紀でも、〝臭気〟が漂うナマな闘いを見たいものである。　（日昇）

『PRIDE.3』

6/24（日本武道館）

KRS

極私的ベストバウト

1位　桜庭和志vs　カーロス・ニュートン

2位　高田延彦vs　カイル・ストュージョン

3位　マーク・ケアーvs　ペドロ・オタービオ

身体の柔らかさ」と「脳みその柔らかさ」の両輪を見事に転がした桜庭

桜庭和志は、ズバリ言って非常に面白い男である。

格闘技者としての重要な武器である「身体の柔らかさ」を身につけているのはもちろん、脳みそも非常に柔らかい。

つまり、身体が柔らかい人は脳みそも柔らかいし、脳みそが柔らかい人は身体も柔らかい。よって、強い人は頭もいい。頭のいい人は強い、という公式が成り立つのだ。ただし、この公式は自家製である（正解率は高いと思うけどね）。

さて、この日の桜庭は、カーロス・〝カッコイイです（by和志）〟ニュートンを相手に、まったく怯むことなく、「身体の柔らかさ」をフルに活かしたマット捌きで対応。と思えば、「脳みその柔らかさ」で相手の意表を見事に突く打撃も冴えわたる。「身体」と「脳みそ」の両輪をフル回転させて、ニュートンの〝ボール〟が回り出す一歩手前で封じ込んだ。そして最後は桜庭のプライドでもある「技」でキッチリとフィニッシュ。

試合後、「あの試合はフィックス・ファイトだろう？」とガイジン関係者が尊敬の意を表しながら話していたが、そう思えるほど、両雄の激突は技術的にキレイに手が合っていたということだ。今年のVT系の試合では間違いなくベスト・バウトである。

来る10・11の桜庭の相手は噂のアラン・ゴエスになるのか、グレイシー一族になるのかはわからないが、今度は「柔らかさ」と背中合わせにあるはずの桜庭の「カタさ」を見てみたい。

〝ヘラヘラ〟と背中合わせにある〝激しさ〟が噴出する闘い。桜庭はそういう一面も持っているはずだし、そういう桜庭を見れると想像するだけで面白いではないか。でもこれは、桜庭が1回負けないと見れないかな（ニコニコ）。　（日昇）

『太陽の光をいっぱいあびて〜光合成完了〜』

6/24（北沢タウンホール）
UNW

写真提供／ナイタイスポーツ

極私的ベストバウト

1位　セッド・ジニアスvs佐野直
2位　鴨居長太郎vsタノムサク鳥羽
3位　ジニアス君の核爆弾トークショー

時代の先っちょをいくレスラー！不思議の国のセッド・ジニアス

折しもこの日、日本武道館では『PRIDE.3』が行われていた。「迷ったけどジニアス見に来ちゃった」などと言っているファンも多かった。そういうボクも直前まで迷っていた。ジニアスを見るか、IWAで谷津……、いや『PRIDE.3』に行くか。ジニアスは、表面上は浦島太郎状態を装っていた。「プライド？　なんですかそれ？　僕、アメリカ行ってたんでよくわかりません」ジニアスは終始そんな調子だったのだが……。

この日の目玉「ジニアス君の核爆弾トークショー」でのジニアスは、核爆弾とはいかないまでも幾つかの爆弾を仕掛けていった。それは猪木寛至への挑戦であったりするのだが、観客の反応は思いのほか鈍く、爆弾も小爆発に終わってしまった。

鴨居長太郎がタノムサク鳥羽を相手に壮絶な乱打戦を繰り広げている頃、『PRIDE.3』ではゲーリー・グッドリッジがダイナマイトパンチをブンブン振り回していた。

内藤恒仁と幸村剣士郎がクルクル回転するレスリングムーブを見せている頃、『PRIDE.3』では桜庭和志とカーロス・ニュートンが歴史に残るバーリ・トゥードマッチを展開していた。

そして『PRIDE.3』リング上の髙田延彦が黒いマウスピースをくわえている頃、ジニアスは真っ赤な薔薇をくわえていた。そして不敵な笑みを浮かべていた。

髙田がストゥージョンを秒殺している頃、セッド・ジニアスは佐野直相手に一方的に技を掛けまくり、最後はスパインブリーカー・オブ・ジニアスで同じく秒殺。ジニアスとPRIDE。非て似なるものなり。（チョロ）

『BATTLE GENESIS VOL.4』

6/20（後楽園ホール）
リングス

極私的ベストバウト

1位　髙阪剛vs山本健一
1.5位　滑川康仁vs豊永稔
1.8位　金原弘光vs坂田亘

ニューカマーが続々登場！後楽園は活気溢れる予告編だ

この日のリング上に集結した顔ぶれは非常に新鮮でバラエティに富んでいた。金原やヤマケンは言うまでもなく、後楽園ではお馴染みの郷野、この日デビューした滑川、髙田道場からの初参戦・豊永……実験的なカードが勢揃いだった。

まずは郷野。安定した強さと落ち着きぶりは、カッコいい。是非、ジャパン勢との対戦も見てみたいものだ。

滑川vs豊永は意地と意地がぶつかり合う非常にいい試合だった。新弟子がなかなか育たないRINGSで坂田亘以来の新人デビューということで、先輩の期待も大きい。セコンドには高阪と山本（宜久）がついて、声を飛ばしている。田村や成瀬も見守る中、反対側では佐野や安達コーチがセコンドに付き、桜庭が遠くから見守り、客席にはエンセンがいるという、総合格闘技の輪が出来ていた。試合は、互いに1エスケープ同士という好勝負。裁定は審議委員へ委ねられることに。前田は、レフェリーが顔を向けると同時に両手をバッバッと振って、あっさり引き分けの表示。審議委員の審査は非常に動物的なスピードで行われた。

そんな前田の速攻審査よりも、ものすごいスピードで展開したのがメインの髙阪vsヤマケン。本誌9号で髙阪が語っていたように「フリーファイトの進化のスピードは、猪木さんや前田さんの引退で早まります」という言葉をじつに見事なかたちで証明することになった。2人ともキレ味鋭い、しなやかな動きでめくるめく攻防を繰り広げてみせた。

いろんな新しい動きや、元気者が新しい動きを作り出している。この日の興行はリング上の顔ぶれと同様、ファイト内容も変貌していくというエネルギッシュな予告編だった。（ノブ）

『スペル・エストレージャ'98』

6/18（後楽園ホール）
FULL

極私的ベストバウト

1位　新間寿＆ジャイアント・ドスカラスvsピエローJr.＆ビシャノⅣ
2位　ブラソス対決
3位　タルサン・ボーイのセクシーダンス

亡霊は復活するのみ！新間復活は「こっくりさん」だった！

最近のWWFは、プロレス雑誌の記事を読んでるだけで楽しめる。バカバカしいというか、ホントにくだらない。最近、いちばん面白かったのはプロ顔負けのごつすぎる身体をしたマクマホンJr.とストーン・コールドの抗争だ。マイクで罵りあい、ベルトを剥奪したり、控室でストーン・コールドが警官に逮捕されたり……バラエティー番組のノリで制作されているようだ。

一方、日本では新間寿がプロレスラーとしてデビューした。63歳とは思えない、驚異の肉体で堂々と試合をやりきってたのだ。とにかく、この日の興行は最初から最後まで新間ワールドだった。

全選手入場式後に、幻の参議院議員・新間正次がゴキゲンな名古屋弁で挨拶したり、島田楊子が出てきたり、ツネはリング上から中学校の同級生に誕生日の挨拶をし始めたりと、もうやりたい放題。

するとターザンが出てきて、素晴らしいことをリング上から吠えた。「ボクと新間さんは、新日本から追放され、抹殺されたもの同士です。ボクらは亡霊なんです！『老兵は去るのみ』という言葉がありますが、『亡霊は生き返るのみ』なんですよぉ〜」と、すっかり炎上している。この日の会場に漂う重く暗い空気の正体は、これだった。FULLの復活は、新間、ターザン、そしてジャイアント・ドスカラスこと人間バズーカの亡霊を復活させる「こっくりさん」の儀式だったのだ。これからも野上、宮戸、ジョージなど続々と復活していくのだろうか？　新間がリングに上がるということは、日本マット界の亡霊たちの大決起する予兆かも知れない。「見てはならないものを見てしまった」というような興行だった。（ノブ）

書評は平和ではない
書評は戦いである
武器のかわりが毒舌であるだけで
それは地上における最も激しい厳しい
自らを捨ててかからねばならない
戦いである――（ネール元インド首相の娘への手紙）

吉田文豪人生劇場

書評の星座 PART2

「反響のない原稿は書かない」という勝手なポリシーに従い、『プロレスマスコミ観察雑記』を連載中止としたストイックな筆者が細々と続ける、「賛同させてよ！」（前号の不人気ページ）と言われれば「賛同できないよ！」とキッチリ答えるような、NOと言える日本男児のための書評コーナー。

猪木寛至自伝 An Autobiography of Antonio Inoki 新潮社

猪木寛至自伝（アントニオ猪木／新潮社）

本来、政治家とは綺麗事を言ってナンボという職業である。ゆえに我らの木村健悟兄ィが先日の選挙で惜しくも落選した（ちなみに出馬宣言は本誌が最初だった）のも知名度や学歴の低さなんかでは決してなく、何でも素直に話しすぎるという人間的には正しい姿勢が政治家的に問題があったために違いない。世の中、そういうものである。

それは当然、現役に限らず元・政治家であろうとも同じ事なのだが、やはり猪木だけは例外であった。

なにしろ猪木はたとえどんなダーティなことであろうとも、聞き手やファンが喜んでくれるのでさえあれば素直に何でも暴露してしまうのである。凄いぞ、猪木！

猪木名義の著書の中では最高峰に位置すると思われるこの自伝。数年前に障害者プロレスの映画を作ったことで知られる昭和のプロレス者・天願大介監督が構成したためか、いつもより余計に猪木が暴露しまくっているという、一人一冊必携の素晴らしき名著である。

どうもプロレス雑誌的には**「馬場が（力道山から）受け継いだのは、あの葉巻だけだ」**だの**「正直に言おう。私は藤波を後継者だと考えたことは一度もない」**だのといった「キラー猪木のひとりごと」部分ばかりをピックアップしているようだが、ボクに言わせれば最も重要なのは下ネタなのだ（ゆえに馬場系では、馬場に**「その当時は好きな人がいて、それでも一緒になれないという悩みも持っていた。彼がアメリカへ行っている間に誰かが別れさせたのだと思う」**という発言の方が重要）。

たとえばブラジルでの少年時代の場合では、こういうことだ。

まずは**「ドラム缶に沸かした風呂」**に入ったとき、**「どういうわけだがムスコがぐんぐん大きくなって」**きたために**「俺は体も大きいから、あそこまで大きくなってしまった…」「これは異常だ」**と勃起しただけで**「悩みに悩ん」**でしまったことや、**「自分を慰めることも知らないので、ただただ夢精していた」**ことまで、いきなり素直に告白する。

さらにプロレス界に入ってからも、**「大木金太郎に連れられて遊び場に行って、無事童貞を捨てた。大木さんには誠に感謝している」**という17歳での童貞喪失以降は、**「福岡に巡業に行ったとき、中州に女遊びに行った。金を払いベッドに寝て女を待っていると、いつまで待っても女が来ない。何のことはない、女に騙されて金だけ取られたのだ」**などと、かつて猪木バッシングが吹き荒れていた当時、佐藤・元美人秘書にあれだけ売春問題を糾弾されたというのに、懲りることなく赤裸々な売春告白を次々と明るみにしていくのである。凄ぇ！

中でも最もシビレたのが、**「リキパレスの隣が連れ込みホテルだった」**ため**「私も留守番で覗いているうちに、すっかり興奮してしまい、もう我慢できなくなって渋谷の町に女を買いに走った。で、朝帰りしたところを運悪く力道山に見つかって、怒鳴られてしまった」**という、男らしくも非常に間抜けなエピソードだ。

後に東京プロレスの事務所を**「渋谷の連れ込み宿」**に設置したのも、きっと若手選手のことを考えての配慮だったのであろう、きっと。

その後も、生年月日が全く同じ最初の彼女と2人が20歳になった夜に結ばれたことから、アメリカ遠征中での17歳の家出妻との交際や売春婦との交渉話まで、いちいち克明に完全再現。

挙げ句の果てにはモンゴリアンストンパーに親切心から人参ジュースをジョッキで6杯飲まされて**「異変が起き」**、**「ムスコが元気になってしまい、三日三番立ちっぱなしになってしまったのだ。これには困った。試合のときも一向に衰えないのである」**という素晴らしすぎるバカ話まで公開する始末なのだ。

どうやら元気が売り物の猪木は、股間にも元気な闘魂が宿っていた様子である。まさに闘魂棒。

他にも大手宗教団体・GLAの高橋伸次が**「アリの守護霊は物凄く強い！パンチを食らえば一発で目が潰れます」**と予言したかと思えば試合の前日に急死したことや、会社の経理に金を持ち逃げされた猪木が**「もう新日本も潰れると思い、ヤケクソになってディスコで踊りまくった」**ことなど、これまで聞いた事もないような衝撃の話が次々と登場。

それだけでも十分に定価以上の価値があるというのに、勢いに乗って二度も繰り返した離婚の原因まで堂々とカミングアウトしているのだ。

なんとアメリカ人だった最初の女房との離婚原因は**「東南アジアを転戦し、試合が終わった後は恥ずかしい話だが私は幹部たちに誘われて連日夜の街に繰り出していた」**ためであり、二度目

の女房・倍賞美津子との離婚原因は**「たまたま外国から知り合いの女の子が私を訪ねてきた。結局、一緒に泊まったのだが、そのとき美津子は」「雨の中、傘もささずに、マンションの前でずぶ濡れになって」「私の帰りを待っていた」**ためらしい。切ない話である。

それにしても、こんなことまで素直にカミングアウトする政治家もおそらく猪木だけだろうが、そんなプロレスラーだって確実に猪木だけなのだ。

写真週刊誌に浮気を狙われたときも、咄嗟に逃げておきながら**「すみません、写真撮らせて下さい」**と言われると**「私もバカだから、断ればいいのに撮らせてあげた」**りする猪木を、ボクは全面的に支持する次第なのである。

ドージョー010

（原タコヤキ君／光進社）

010って何？　という疑問を誰もが抱かずにはいられない（SMAPのアルバムタイトルが元ネタらしい）不可解なタイトルだが、肝心の中身は自信を持ってお勧めできる、昭和の新日的な古き良き道場観を否定するかのような道場開放ムーヴメントの波に乗るレスラー&格闘家たちのインタビュー集である。

……って、これは別に花くまゆうさく先生や浅草キッド、松本ハウスといったお笑い界などのビッグネームと共にボクもコラムを書いているから言うわけでもないので、念のため。

個人的にはアレク（サンダー大塚）がバトラーツ道場について**「他のスポーツクラブなんかに比べたら、設備がまず整ってないじゃないですか。練習終わって汗だくになって、でもシャワーも浴びられないっていうのはやっぱりダメだと思うんですよ」**と語っているにも関わらず、そのすぐ後で**「練習で汗だくだくになっても道場の水道代のことを考えてシャワーを浴びずに帰る！　そういう道場思いの人たちにはぜひ来てもらいたいね」**と臆面もなく言い出すニンジャ2号ことバトラーツのインチキ・レフェリーのユージ・シマダが最高だ！

なおニンジャ2号曰く、バト道場とは**「あくまでもアクティブ、そしてしなやかに歌ってって感じ」**だそうである。こういうインチキなことを言わせれば日本一だね、この人は。合格です！

弾圧

（ターザン山本／双葉社）

「プロレス界に非常ベルが鳴っているのに、誰も気付かない！」「俺の人生にも一回ぐらい幸せなことがあってもいいよな！」

そんなプロレス史に残る歴史的名言を長州から直接聞き出したにも関わらず、その長州によって見事なまでにプロレス界（というか『週プロ』）から追放された落武者亡霊・ターザンによる、ちょっと時期外れの長州本。

いつものように**「インタビューをしようとしたら、長州の右手には煙草があった」**だの**「私が『週刊プロレス』の編集長を辞任することになった最大の原因は、ベースボール・マガジン社が無能だったからだ」**だのと派手なフライング発言を繰り返した挙げ句、取材拒否の原因となったとされる東京ドーム興行『4・2夢の懸け橋』に対しても最初は長州が大いに乗り気で**「頑張れよ！　ただし天龍には気を使えよ。へそを曲げさせないようにな……」**とわざわざ気を使って注意してくれていたことまであっさりと暴露するから、さすがはターザン。

そこまで親切にアドバイスされていながらも結局は天龍を激怒させるんだから、ある意味じゃ本当に凄い男である、いやまったく。

それにしても長州とターザンといえば**「山本、Uはお前なんだよ！」**というこの本でも当然ながら取り上げられている長州の名台詞を抜きにしては語れないのだが、ここにも大きな誤解が存在するとボクは推測している。

長州に「Uはお前だ！」と言われたターザンは、「そうなのか！」と自覚した瞬間から暴走機関車ぶりに拍車がかかっていったと思われるのだが、ボクに言わせれば長州の真意はそんなものではなかったはずなのである。

新日にカムバックしてからの長州は、猪木という巨大な存在に対して牙を剥き、そしてひたすら猪木になろうとしていた。やがて、それが無理だと気付いたときに「力道山になる」と方向転換をしたことが国籍、性格ともにベストマッチしたために、現在の地位を築くことに見事成功。ゆえにマスコミ対応なども力道山テイストになっていったと推測されるわけである。

そしてこの「Uはお前だ！」発言は、長州はまだ猪木になろうとしていた頃に発せられたものなのだ。これはどういうことなのかといえば、ズバリ言って駄洒落なのである！

つまり、長州は「山本、お前はUがどうとかいうけどな、俺に言わせりゃ『YOU』は『お前』の意味だというか、ダハハハハハ！」という程度の猪木チックなギャグを飛ばしたかっただけだったんじゃないかと、ボクは確信しているのだ。要するにユセフ・トルコの口癖として知られる、「UWF？　ユーだかミーだか知らないけど」と大差ないはずなのである。

勇気を出して一世一代の駄洒落を言い放ったにも関わらず「そうか、俺がUだったのか！」とバンバン机を叩いて勝手に炎上するターザンを見て、長州は「いつか潰してやる！」と心に誓ったのに違いない。そう考えながら読むと非常に興味深い一冊なのである。

プロレス・格闘技あの謎が解けた実はこうだった!!

（プロレスマスコミ精鋭チーム／東邦出版）

表紙やタイトルだけで完全に読者を読む気にさせなくしてしまうという、非常に珍しい一冊。ハッキリ言ってこの装丁と著者名から推測すると、プロレス知識の浅い著者がレベルの低いホラ話を適当に書き殴っているのに違いない――そう思われて当然なのである。

実は**「佐山のスポンサーとのトラブル」**や**「冬木のWAR離脱の真相」「ターザン後藤のFMW離脱の真相」「全女分裂の真相」**（京子が裏切ったので、み

んなアジャ派になったとのこと。そうなのか？）といった、それなりの業界裏話をそこそこ暴露しているにも関わらず、表紙だけで勝手に舐められてしまうのは完全にマイナスだろう。結局、本なんて見た目で判断されるものでしかない。稀代のダメ本『前田日明よ、お前はカリスマか？』が売れたのも、それだけの理由に過ぎないのである。

ブル中野のダイエット日記
（中野恵子／ブックマン社）

「ベビーフェイス（新人）のとき、いい役と悪い役に別れる」というファンタジー溢れる表現を見ればわかるように、プロレス知識があまりないと思われる人物（ダイエット・ライターか？）が構成したためなのか、ある意味では女子プロ版『ケーフェイ』的な面白味も意図せず出てしまった不思議な一冊。

アジャと闘っていた頃のいわゆるブル全盛期にしても、**「試合が終わったら、みんなで焼き肉屋さんに集結、脂身の多い上カルビをどっと注文して、怒濤のようにワーッと食べて、お酒をガンガン飲んで、カラオケで盛り上がって、そこでもグイグイ飲んで、最後にまた思いっきり食べて帰る」**などと回想し、いきなり三禁の一つ「禁酒」を獄門党ぐるみで大っぴらに破っていたことを、まずはあっさりと公言。

まあ、大酒飲んで大飯喰らうというのは、昭和の男子レスラーみたいで非常に好ましい行為でもある。そういう意味では全く問題なしだ。

かと思えば、ついでにこんなことも告白開始。

「あれだけ好きだったお酒もキッパリ止めることができたのに、ただ一つ、どうしても止められないものがあります。タバコなんです。決してヘビースモーカーじゃないんですが、1日1箱（20本）というのが、プロレス時代からの習慣でした」とのことなのである。

これで結局は二禁目まで破ったことになるのだが、ターザンによると長州だって吸ってるんだから問題なしだ！獄門党というワルのキャラクターに徹する以上は、大酒飲むのも煙草吸うのも芸のうち。ブル中野、合格である。

女子プロレス新世代総登場！
（メディアワークス）

女子プロの若手のみに取材したインタビュー集という、近頃の女子プロ界の逆風ぶりを考えると売れるわけもないと思うが、それでも個人的には評価してさしあげたい一冊。

なにしろ初期キューティ鈴木チックな「絶叫」路線の芸風をとことん極めたかのような現在長期欠場中の貧血女王・高橋麻由美が発する怪しげな毒電波の素晴らしさに、心からシビレを感じてしまった次第なのである。

貧血で毎日ブッ倒れていた文科系少女（趣味は古代遺跡やピアノ、演劇）という、新生全女所属らしいとんでもないバックボーンを持つ彼女。

巻末アンケートによると、**「これまでの人生で一番嬉しかった」**のは**「女に生まれたこと」**であり、**「一番悔しかった」**のは**「好きな人を取られたこと」**、**「一番腹が立った」**のは**「人に騙されたこと」**、**「一番悲しかった」**のは**「人に裏切られたこと」**だそうである。

人生を感じさせるコクに溢れまくった回答の数々に、どうにもズバ抜けまくったセンスを感じずにはいられない。

これまた現在失踪中の中原奈々も含めて、つくづく心から復帰が待たれる裏ビッグ2である。

ついでに言えば、好きなものに**「イエローモンキー、すごいよ！マサルさん、女囚さそり（梶芽衣子のみという指定付き！）」**を挙げている、プロレス界では珍しく真っ当なセンスを持ったJWPの渡辺えりかも合格だ！

U多重アリバイ
（Show／スコラ）

世の中には大きく分けて文章を書いている人間とそうじゃない人間の二種類が存在する。

ところが本来なら文章を通じて何かを発表するべき側なのにチャンスがないまま世間に埋もれている金の卵がある反面で、人様の前では決して文章なんか書いてはいけない側だと気付かずにのうのうと原稿で飯を喰っている奴もいたりする。この作者・Show氏がどちら側なのかはわざわざ書く気もしないんだが、それが現実なのだ。まったくもって世知辛い世の中である。

唯一、ターザンがShow氏に**「お前はこの世界に向いてないから田舎に帰れ！」**とズバリ言い放ってくれたり、座談会の部分でウチの山口日昇がShow氏の駄目ぶりを糾弾してくれている部分だけは溜飲が下がる思いで読めるのだが、その座談会の扉でも眼伏せを入れた自分たちの顔写真を選手と全く同じレベルで掲載するという不快な編集センスを発揮してくれるのだから、不愉快極まりない。目障りなのである。

まあ、『スコラ』誌に掲載されたU系選手のインタビューをまとめた内容自体は、別にボクがどうこう言う筋合いのものでもないだろう。**「前田日明っていう男は、自分で難しい本を読んで、その意味がわかってない」「山崎一男っていう男は、俺らを気にしてるフリをして自分のことしか考えてねえ」**などと無闇に吠えまくる中野龍雄なんかは確かに面白いし。

だが、新ネタとして「藤原対佐山」という誰がやっても確実に面白くなるはずの対談を実現しておきながら、いいギャグが炸裂するたびに**「一同　大爆笑」**だの**「一同やっぱり大爆笑」**だの**「一同それでもやっぱり大爆笑」**などの余計な文章を挟み込むお寒い編集センスでいちいち笑いを消していくのは、本当にいただけないのである。でしょ？

他にも**「ク○」**（糞）などと余計なところを伏せ字にしておきながら、以前ボクが本誌に掲載した佐山インタビューや藤原＆荒川対談ですでに掲載したネタを**「これ、載っけていいのかわかんないけど」**という発言付きで載せるセンスもお話にならない。最低だ。**「ウゥ〜ウルウル」**などの不快な言語センスを炸裂させながら**「坂本竜馬、出てこーい」**と言い出す**「あとがき」**的なものを、**「やっぱり松田聖子こそ『プロ』だと思う」**という追伸で最後に締めるのも問題ありますよ（前田調）！

この編集を担当したスコラ氏は本書で**「あとは、この本を『紙のプロレスR』の書評がどう扱ってくれるのかだけですよ……。どうせセンスないモン」**とボヤき、Show氏は**「そうスネるなよ。大丈夫、俺の大好きな変わり者の吉田豪ちゃんだもん」**とわけのわからないことを語っているが、ボクが言いたいのはそういうことです！

断言します。ボクは本誌で『S多重アリバイ』をやります！　こんなレベルの低いことされて誰が黙っていられるよ！　でしょ？　ボクが言いたいのはそれだけです！　SWS万歳！

ARSION OFFICIAL VIDEO
VISUAL FIGHTER SERIES vol.1
APHRODITE
in 府川唯未
アフロディーテ YUMI FUKAWA

VISUAL FIGHTER SERIES VOL.1
APHRODITE in 府川唯未
府川、ビデオでもおもいっきりファイトしています。
TOVS-1335　税込¥3980
カラー　ステレオ　30min.　セル／レント
制作・販売／東芝EMI

坂井ノブの ENTERTAINMENT WRESTLING VIDEO

ブタ料理を涙目で食べる府川にビジュアルファイターの意地を見た！

一般誌やテレビなどでの露出度が男女問わず一番高い団体がアルシオンであることに異論を挟むプロレスファンはいないだろう。いる？　冷静に考えりゃそうかもね。

『トゥナイト2』を始めとするアダルト寄りのメディアから『FRIDAY』などの写真週刊誌に至るまで、とにかく幅広い活動ぶりはハイパー・ビジュアル・ファイティングの看板に恥じないものである。

ついでに言わせてもらうなら、ワールドカップ直後にアジャの友人・ラモスをリングサイドに招待したり、常にベクトルが世間に向いてるという点も見逃せない。「アラン・リードをリングに上げる！」と宣言したり、映画『トイレの花子さん』のキャラクターをリングに登場させるサスケと同じ方向を見ているのだから。

そんな中、アルシオンのビジュアル・ファイター4選手（府川、大向、浜田、奥津）のビデオと写真集が4連発で発売される。毎月1人ずつ4ヶ月に渡り話題を提供し続けるという、じつによく練られた戦略なのである。

というわけで、今回このページで紹介するのが、その第1弾『APHRODITE in府川唯未』だ。全編サイパンロケで撮影したこのセクシービデオはとにかく遊び心満載。アイドルビデオの王道を行く、ある意味ベタな作りながらも、ひとつひとつの企画が新鮮に見えるから不思議なもの。

オープニングでは海岸線を一生懸命走ってきた府川が、カメラ前で立ち止まり「こんにちわ、府川唯未です」とあいさつするだけのものなのだが、がっちりハートを掴まれてしまった。

こういったアイドル・ビデオものは強引に客の興味を引かなければならない。だから、当然どんな手段を使ってでも飽きさせてはならないのである。ビデオ制作は闘いなのだ。確かにお約束（ぎりぎりセクシーショット等）の部分はあるが、常に見るものの想像力を超えた部分で勝負を仕掛けなければいけないのである。

そういった意味で、サイパンの抜けるような青い空の下でなぜかカメラ目線で黙々とシャンプーをする府川という絵は当然OK。多少のムチャはボクが許す！　しかも府川の照れ具合がナイス！　ホテルの長い廊下をチャリンコで爆走する府川という、『スクールウォーズ』のオープニング場面へのオマージュも元ヤン府川がやることによって映像に深みが出てくるというものだ。

最後に収録されているプールへの落としっこやメイキング映像も普段じゃ観れない表情ばかり。非常に楽しめる作りとなっている。その中で、小ブタの丸焼きの料理が出てくるシーンがあるのだが、そのことについて興味深い記事を発見したので紹介しよう。「（写真集の）最後のページ（＝このビデオの背中の写真）を撮る時が大変だった。（中略）その時ちょうど私の後ろでパーティー用の小ブタが殺されてたんです。その声を聞いたらかわいそうでかわいそうで……。涙があふれてきちゃって大変でした。だから少しウルウル目なんです」（『ドンドン9月号』より）。このビデオの中に府川が殺されたブタと思われる料理を半分涙目で食べているシーンが収められているのだが、そういうことだったのか！　それでもけなげにブタ肉を食べきる府川にプロの意地を見た！　心に染みるいいシーンである。さすがはビジュアルファイター、映像の中でも府川は闘っていた。

これが写真集最後のページとほぼ同じカットのビデオの背中の写真。

インディーだって押さえ込み!

マット界の流れが一目瞭然!

今回は『紙の前田日明』(絶賛発売中)製作のため、殆どプロレスを見ることなく日々過ごしてしまった。お陰でマット界の流れも今一つ掴めないままお届けするコーナー!

nちょうの(マット界)出来事!

8/1深夜1時。「もしもしチョロさんいます?」「はい、チョロです」「今日の天龍と武藤はどっち勝ちました?」「天龍です」「橋本は?」「勝ちました。ところでどなたですか?」「あっすみません。読者です。はじめまして」「は、はい」「チョロさん、これからも試合結果聞いていいですか?」「は、はい。わかる範囲であれば」。これって"ちょうの出来事"効果? それともチョコレート効果? ナメられてるだけ? 何でもいいけどさ。

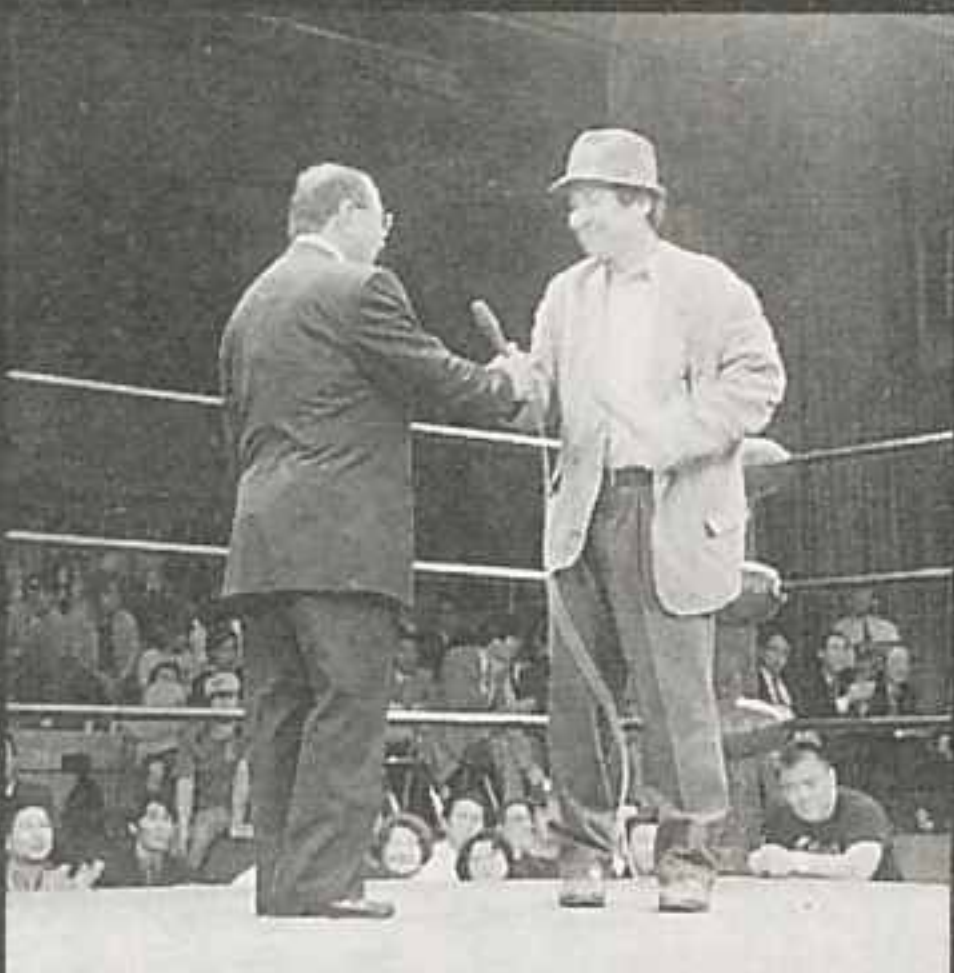
1998 6.14〜8.12

JUNE

6・14
【IWA】"東洋の神秘"ザ・グレート・カブキが引退を表明した。その理由は「肉体の限界ではなく人生の区切り」だそうだ。「蛇手」といい、最近の「少~しだけ」といいカブキの"指技"は僕らを何度もいかせてくれただけに何とも惜しまれる引退である。

6・17
【革真浪士団】/クラブチッタ川崎■ターザン後藤と"骨のあるヤツ"らとの5人掛けが行われた。後藤はいつものように片っ端から叩き潰していったが、その中で光っていたのがアジアン・クーガー。ミスマッチと思われた後藤戦でイスまみれになりながらもトペコン大連発などで会場人気一番の意地を魅せてくれた。メイン後の番外戦で後藤が折原自慢のモヒカン(しかも前髪)をハサミでバッサリ。暫くの間、折原は髪を立てられなくなってしまった。①

6・18
【FULL】/後楽園ホール■注目は何と言っても新間寿のデビュー戦。とても63歳とは思えぬ"パンパン"な肉体で立ち向かって行ったものの最後は豪快な(?)ツームストーンでカウント3。ダウンしたままマイクを向けられると新間は「プロレスラーは……ス、スゴイ!!」と、非常に説得力のある一言を発した。②、③

①折原はこの後、髪を切られた腹いせに後藤に抗議の電話をいれる。

②新間と二人で新日追放同盟をアピールするターザン。彼のファイトも見てみたい(ホントか?)

③マスクも取らず、マイクアピールもせず、完璧にG・ドスカラスになりきっていた人間バズーカ。

6・22
【スポーツ平和党】参院選の目玉候補者として"ゲイ"のレオ・ゴンザレス氏(本名・高野照雄)の出馬を発表した。同党ではA・猪木が出馬しないことを明らかにしてから「誰を候補者に立てるのか?」で注目が集まっていた。彼女(彼氏?)は六本木のゲイクラブ『ママひげ』の従業員で、シャンソン歌手としても活躍中 ♪わぁたしぃは〜じ〜んせいのだぁいこ〜ん、やくしゃ〜(熱唱!)。

6・24
【PRIDE.3】/日本武道館■ヒクソン戦から約8ヶ月振りにリングに登場の高田延彦。ハイキックで「そんなに吹っ飛ぶか?」というぐらいに吹っ飛びながらもヒールホールドで勝利。高田元気! 桜庭も元気! 敗れたヤーブローも元気!(彼女同伴)④、⑤

6・25
【アルシオン】府川唯未、大向美智子、浜田文子、キャンディー奥津参加の水着ショーが開催された。同時に写真集、ビデオが発売される。

④「おうおうおう、座りやすそうなイスじゃねーか。ありがとさん」

⑤「あ〜、どっこらしょ。何でも聞いてよ。疲れちゃったな〜もう」

⑥アルシオン水着ショー。どこで噂を聞きつけてきたか会場には何故か中村カタブツ君(35歳)の姿が……。

なかでも大向がヤバイ、ヤバイ！（もの凄いメイクです）⑥

6・30

【みちのく】正式復帰を前にザ・グレート・サスケがバトラーツ道場で公開練習を行った。その際石川社長にサスケマスクを被せ、みちのく8月シリーズへの参戦を要請したサスケ。これを快諾した石川社長だが、果たしてみちのくマットにザ・グレート・アントニオ・サスケは登場するのか!?。⑦

JULY

7・1

【武輝道場】北尾光覇の引退記者会見が電撃的に発表された。北尾は引退について「やっぱり相撲の考えになってしまいますが、相撲では引退を決意したときが引退であって、引退試合はありません。自分も引退試合はありませんから」とのことで、北尾（双羽黒）の事実上のラストマッチはキャプチャー「地下室マッチ」新宿ACBホール（収容人員150人程度）VS北原光騎と決定した。日本プロレス界で1、2を争うビックマンが、これまた1、2を争う小さなライブハウスでさよならを告げるなんて…北尾らしくていいや。まあ相撲の考えでいうと、この後、当然断髪式が行われるとは思うが。

⑦「みちのくで暴れてるんだってな」「六本木でも行って遊んでろ!」

7・2

【リングス】山本健一が念願のジムを設立することになった。その名称は日明兄さんの名著から取った『パワー・オブ・ドリーム』。日明兄さん得意の「オレが女ならお礼に一発ヤラしてあげるんやけど」攻撃が炸裂した成果か!? あい〜や、あい〜や。⑧

⑧ジムの場所は自由ヶ丘から徒歩10分、奥沢からは徒歩2分。あい〜や!

7・2

【スカイパーフェクTV発足記念パーティー】この日のパーティーで壇上に高田延彦（高田道場）、船木誠勝、鈴木みのる（パンクラス）の三選手がそろい踏みするというシーンが見られた。しかし高田と船木＆鈴木は挨拶も交わさず、目も合わせず、ついには船木は足早に会場を後にしてしまった。日明兄さんはどう思う？

7・4

【新日本】ケンドー・カ・シンがいまだ決まらないタッグパートナーについて「タッグのベルトは俺が一人で2本巻く。パートナーはTAKAみちのくかディーン・マレンコだったら組んでやるよ!」MASAは？ ジョーは？ ダメか。

7・5

【ネオレディース】8月14、15、16日の後楽園三連戦に〝女怪物〟ニコル・バス（34）が初来日することが発表された。ボディービル全米チャンピオン、更にニューヨークの暴走族の女ボスでオマケに逆バイアグラ効果もあるという彼女は、身長188cm体重105kg。しかもヒップは計測不能というから恐ろしい。その体格は武藤敬司とほぼ一緒というからさあ大変。さすがに女性というだけあって、武藤より少〜しだけセクシーではあるが、果たしてバスをストップさせることができるのは誰だ？ サスケか!? それとも浅野ゆう子!?

7・6

【WCW】デビュー以来連勝街道大バク進中のビル・ゴールドバーグがNWOハリウッド派のスコット・ホール相手に全盛期の谷津を思わせる両脚タックルから得意の〝ジャックハマー〟（ブレーンバスターの体勢からのパワースラム）でフォール。続いてハルク・ホーガンと対戦し、これも両脚タックルからの〝ジャックハマー〟でホーガンを撃沈！ ゴールドバーグはUSヘビー級王座に続きWCW世界ヘビー級王座も奪取し、WCWのトップに君臨した。会場は4万人の大「ゴールバ〜グ」コールで包まれた。WCWではゴールドバーグVSヒクソンへ向けて動き出しているらしい（USO）。

7・6

【UFO】この日、スポーツ平和党の応援演説にミスター・ウォーリー現れるとの情報を掴み、ウォーリーを探せとばかり渋谷へと向かった『紙プロ』練習生・ジャイ子（身長182cm絶賛成長中）だったが……帰ってくるなり「ウォーリーは探せなかったんですぅ〜。だって、いながっただんだもん（グスン）。うぅ〜（泣）おがあざんのうぞずぎ〜（泣）」ジャイ子はスグ泣く。

7・8

【大日本】『大日本・KOJIKA基金』の設立が発表される。小鹿社長（怪覆面G・K＆カンフー・リー）が出場時間1分につき自ら100円を積み立てるもので、収益金は阪神大震災被災者に贈られる。この日から小鹿社長は秒殺の山を築いていったという（嘘）。

7・9

【UNW】ジニアス君からのFAXが届きました。テーマは今後のUNWの方向性について。ポリシー★プロレスとは、スポーツと格闘技とエンターテイメントと芸術の集大成である。スタイル★フリースタイル＆グレコローマン＆キャッチアズキャッチキャンを主体としたリアルレスリング。演出★クラシックで現代の先っちょをいくプロデュース＆クリエイト。レスラーの最低基準①180cm、100kg以上。満たない場合は、観客がどよめくようなヘビー級にも負けない体を作り上げていること。②フリースタイル、グレコローマンができること。③しかるべきレスラー、団体からプロレスリングを教わっていること。④只し、他のジャンルにおいてプロとしてやっている者は例外とする。以上のポリシー、条件で行っていく為、一日（一興行）の試合数が極端に少なくなることがあるかもしれません。（原文まま）確かにジニアス君はこの条件を満たしていると思うけど、他にこの条件を全て満たすレスラーって誰かいます？

7・12

【木村健悟】参院選投票日のこの日、区議会議員でもある木村健悟夫人の洋子さんから電話が入った。「どうも、どうも。電話頂いてたみたいで」「あの〜開票時には健悟さんはどちらの方に？」「あぁウチの健悟はもう家で横になってますよ。間違っても当選はないからねぇ。開票の頃は飲みにでも行ってるんじゃないの」「エエッ！ そうなんですか？」「ちょっと待って下さい。今健悟と代わりますから」「もしもし健悟です。」「紙プロ」？じゃあ明日会見やろうか。今日はな、疲れたからもう寝るわ」「ハ、ハァそうですか。お疲れさまでした」。開票の結果、健悟は落選だった……。

7・14

【東スポ】リングスラストマッチを控えた前田を直撃！ 前田「今、体重は117kg。確かに多いけど筋肉が盛り上がってきたからね。これもワダッチ（和田良覚トレーナー兼レフェリー）のおかげだよ。ウェートトレーニングの指導をお願いして以来、筋肉のハリが違う。彼にオレがオンナなら、お礼に一発ヤラしてあげるんやけどな、ハハハ…」桜庭、エンセンに続きワダッチにまで…。

7・19

【UFO】『狂人乱舞・神威〜アントニオ猪木と若者の1、2、3、ダァー』このイベントについてはP61からに詳しく載ってます。⑨

7・19

【北尾光覇】キャプチャー・ACBホール大会（観衆150人＝超満員）で北尾光覇引退試合が行われ、北尾は北原光騎を破り引退試合を勝利で飾った。一部媒体でこの日の試合開始が3時となっていたので、少〜し余裕を持って会場に向かったのだが、何と試合開始は1時で既に後片付けの真っ最中であった。悔しい、非常に悔いが残る。北尾の引退試合を見逃すなんて……。聞けば今度の「PRIDE.4」

⑨電撃ネットワークのダンスを真剣な表情で眺めるアントン。この後、それを真似てご機嫌に踊り出す。

⑩7・20前田リングス・ラストマッチでの山ちゃんとドールマン。

で10カウント・ゴングが鳴らされるという。北尾のプロレス人生はドームで始まりドームで終わる。「今まで応援、ドームありがとう!! なーんつってな、ダハハハハー!」。北尾万歳！

⑪「向こうの女性と結婚したら、いきなりグリーンカードなんで、一発狙ってみますわ（笑）」

nちょう界（マット）の出来事！

7・19

【フジテレビ】「全日本女子プロレス中継」が「格闘女神Athena」としてリニューアル。番組内では4団体8選手参加のスタジオトークが行われ、グリズリー岩本に憧れるJWP・大隅沙理の「私はSM嬢になりたい」という衝撃的な発言が飛び出した。その数日後、大隅の退団が発表された。なにがなんだか……。

7・21

【UFO】六本木の路上でアントニオ猪木が、K―1ナゴヤドーム大会での安生戦で醜態をさらした小川直也に日本刀を突きつけ「お前にはプロとして一番大事な命懸けということがわかっていない。オレに命を預けられるか！」と一喝しその場をあとにした。⑫

7・22

【リングス】髙阪剛が8月1日渡米し、今後はシアトルに拠点を置き活動していくという。日明兄さんの付き人から漸く卒業か。⑪

⑫神妙な顔をして猪木から日本刀を受け取った佐山だが、猪木が立ち去ると「面白かったですね～」と大喜び。

海援隊マネージャー、ヤマグチサン。控室からスッポンポンで出てきたので慌てて撮影。（7・22イン活）

7・28

【アルシオン】／タイガードリーム誕生記者会見■キャンディー奥津が佐山聡（タイガーキング）公認のタイガードリームに変身。キャンディーはマスクを被った方が可愛いと、もっぱらの評判。

7・31

【新日本】／ジュニアタッグリーグ戦■ケンドー・カ・シンは安良岡の不甲斐なさに激怒して一言「何だ、あの役立たずは！ 明日からオレのパートナーはミスター・ウォーリーだ!!」見たい！／G1クライマックス・トーナメント1回戦■安田忠夫vsビッグ・タイトンの一戦は前夜祭からヒートアップしていた。タイトンが「ヤスダよりオレの方が動きは早いし、クレバーだぜ」と口撃すれば負けじと安田も「（タイトンの方が）ちょっと大きいだけで、頭は僕の方がいいんで頭で勝負したいです」とクレバーに切り返した。その言葉通りタイトンとの頭脳戦を制し、2回戦に進出した。この調子でヤスティ？ G1初制覇だ！ が、小島のラリアットで負けた。

AUGUST

8・1

【新日本】／ジュニアタッグリーグ戦■ケンドー・カ・シンは安良岡の不甲斐なさに激怒して一言「何だ、あの役立たずは！ 粗大ゴミとして捨てるぞ!!」

8・1

【SPWF】この日開幕の『タッグリーグ戦』で何とベルトならぬ〝体毛〟が賭けられることになった。谷津が言うには「賞金やベルトよりも、男の威信を賭けようじゃないか。眉毛からシモの毛まで体毛カットマッチだ」とブチ上げたというもの。なんだかよくわからないけど谷津がやる気になってきた。

8・8

【UNW】「土曜サウナ・プロレス　粉ミルクを飲んで3倍大きくなろう！」ジニアスの猪木戦へのアピールもなく（唯一のアピールはメインに登場したトーキョートム・ジュニアぐらい）、全4試合、1時間半ほどの非常にあっさりとした興行だった。次は9月30日、大会タイトルは『時代の先っちょをいくプロレス』。究極のストロングスタイル・現代版ルー・テーズvsカール・ゴッチ　セッド・ジニアスvs内藤恒仁。うん。確かに先っちょだ！

8・9

【パンチ田原興行】／クラブチッタ川崎■リングアナウンサー・パンチ田原が結婚披露宴を兼ねたプロレス興行を開催。メインのミックスドマッチではアレクサンダー大塚がパーマンで登場し、ついで元川恵美は鉄腕アトムで登場。石川雄規が井上京子ペイントで登場すれば最後は井上京子までペイントで登場（っていつもか）。⑬

8・12

【バトラーツ】／TFMホール両国大会発表記者会見■この大会の大目玉としてB―CUPトーナメントが開催される。会見でサスケは「ビクター？ またぁ、ドッキリでしょ。ビクターの名前をはがしたら、その下に田中稔ちゃんとか書いてあるんでしょ。ガッハッハッハッ！ それに俺はBカップじゃ物足りないな～。せめてDカップかEカップはないとな～。ん～物足りない」負傷中のサスケ社長だが、相変わらず口だけは絶好調！ ボブ・バックランド（ボブ矢沢ではない）と〝妖鬼Jr〟グレック・バレンタインも参加するこのトーナメント。果たして優勝は誰だ！

8・12

【リングス】「ツヨシ～!! しっかり～」の声援でファンにすっかりお馴染みの髙阪選手のお母様である髙阪フミ（フミ髙阪）さんが、雑誌「リラックス」（マガジンハウス刊）誌上で新連載される人生相談に回答者として登場。悩み事は遠慮せずにフミに聞け！

純二vs速人のマッハ対決が見たい。レフェリーは文朱。（なーんつってな）

⑬ケーキ入刀ではレザーフェイスが現れ会場を盛り上げた。正体は●●メド・●ネ。

格闘か？ 芸術か？

参院選で、K-1で、千葉海岸で、中国で

UFOが飛んだ！

離陸編

いま、一番飛んでる格闘芸術団体

UFOの動きが丸わかり!!

構成／坂井ノブ
text by Nobu Sakai

本誌がやらねばどこがやる？ 宇宙の果てまで追っかけます

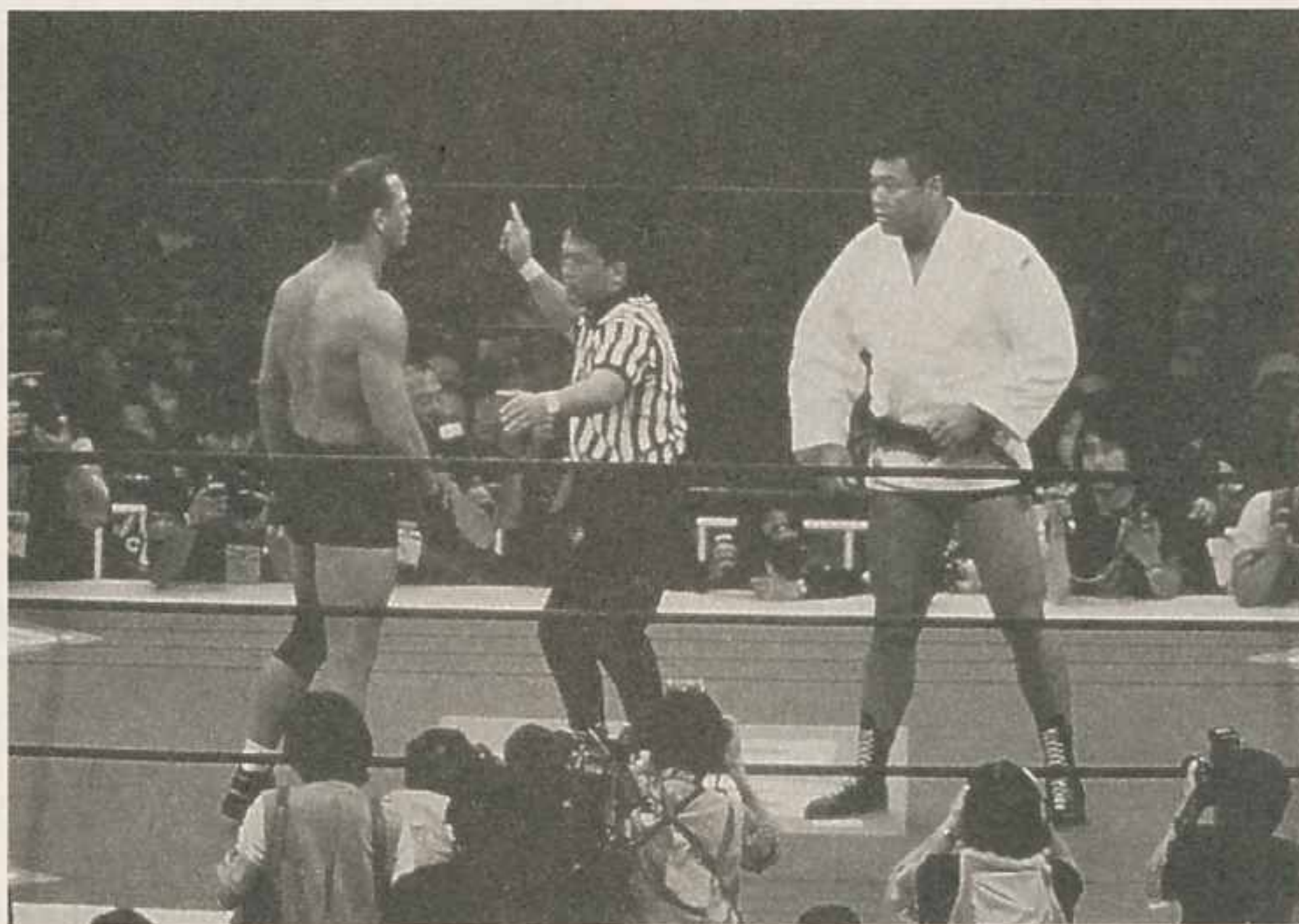
全国1200万のUFOファンの皆様、ごきげんいかがでしょうか？ ありとあらゆるフロレスマスコミがUFOやMr.ウォーリーを敬遠して、ヘージを割かないという状況で、本誌がやらずにどこがやる!? 思う存分UFOを読み込んでください！ 新日本という足枷が外れて以来、様々なジャンルをクロスオーバーしつつ、自由自在に飛び回る宇宙船となったUFO。そのUFOの船長がアントニオ猪木なんだからおもしろくねえわけがねえんです！ 政治だろうが、K－1だろうが、フロレスだろうが、「おもしろいことを見つけだしてきて遊ぶ」という子供のような行動ハターンが、メチャクチャおもしろいです！ おっと、「遊ぶ」という言葉を悪いように捉えられちゃうと困るんです。とにかく世界中で、この人達こそいちばん人生を謳歌してますよ。だって、何やってるかを調べてるだけで5時間笑えるんだから。Mr.ウォーリーのことが気になって夜も眠れない人、必読！

リングの上のUFO PART 1

迷走！ 迷走！ また迷走！

4.4 東京ドーム

98年4月4日、東京ドームで最後の現役として試合に臨んだ猪木。この日の、この大会がUFOのプレ旗揚げ戦と考えていいだろう。

試合後の記者会見で、突如『UFO』の名称を発表。この5日後、小川と共にK-1のリングに初登場。

同じく98年4月4日、猪木と対戦したかった小川だったが、ドン・フライに破れる。いずれにせよ、UFOで猪木vs小川は見たい！

UFOの足跡

●**4月4日【新団体UFO決定】** 引退試合を終えた猪木は、「アリが名誉会長を引き受けてくれることになった。幸運な船出だ」と明かした。これまで世界格闘技連盟と仮称してきたが、正式団体名をUFOと決定。

●**4月9日【K-1表敬訪問】**『K-1 KINGS98』に観戦に訪れた猪木と小川。小川は沖縄でスパーリングしたフグにトロフィーを渡し、猪木はアーツ、ホーストに花束を贈った。

●**4月13日【アメリカ移住】** 猪木が新たな拠点となる米国ロサンゼルスに出発。UFOの正式発進へ向けて、基盤づくりにかかる。UFO名誉会長になるモハメド・アリ氏と正式契約。

●**4月23日【一時帰国】** 猪木はUFOの現地法人を設立し、参加選手数人と契約を済ませ帰国した。

●**4月27日【引退パーティー】** 猪木引退記念パーティーが都内のホテルで行われた。パーティーに先立ち猪木はUFO設立構想の会見を開き、世界柔道無差別級王者のラファエル・クバツキ（ポーランド）のプロ転向を発表した。猪木がUFOの創設を発表。

●**4月29日【スポ平再結成】** 猪木が、消滅したスポーツ平和党を再結成し、政界に再挑戦することになった。

●**4月30日【党首辞任】** 都内ホテルでスポーツ平和党の再始動会見が行われ、7

格闘か？ 芸術か？

小川なら何をやっても許されるのか？坂口社長を殴るぐらい許してあげたい！

はじまりはドン・フライとの引退試合後の記者会見だった。この日から、世界格闘技連盟の名称を変更、新団体の名称はＵＦＯ（発音はユー・エフ・オーではなく、ユーフォー）と発表した。席上、猪木から20世紀最大の英雄・モハメド・アリの名誉会長就任も発表された。

ＵＦＯは様々な異なるジャンルから、超大物といわれる人たちをドンドン巻き込んでいる。特別顧問役として、先日のワールドカップ中継で不甲斐ない日本代表をブッた斬り、喝采を浴びたラモス瑠偉がＵＦＯに乗った。この他にも、シュワちゃんことＡ・シュワルツェネッガー、ヒロ・ヤマガタなどもＵＦＯの搭乗者たちである。この手の戦略を打たせたら、現在のプロレス界がどう逆立ちしても叶わないスケールのでかいことをしでかすのが猪木である。でも、なぜシュワちゃん？　まったく見当もつかないところから、よく連れてきたものだ。プロレスと格闘技とサッカーの枠を超え、そこに絵画とハリウッド・スターまで加わるのだから、もはや何の団体だかわかりゃしない。ホントに佐山が言うようにゴルフの団体なのか？　とにかく、ありとあらゆるジャンルの人たちを巻き込みながら転がっていくのが、ＵＦＯなのである。

この日を境に新日本という足枷が外れたＵＦＯ＝猪木が「迷わずいけよ、行けばわかるさ」とばかりに爆走を始める。それが結果として小爆発したのが、6月5日日本武道館での小川vsビッグ・サカ暴行事件である。

何があったのかは知らないが、この映像をテレビ朝日は放映しなかったし、我々も現場にいなかっただけに何とも悔やまれる。だが写真を見ても分かるように、小川は坂口を掴む際、親指を立てて、目突きを狙ったと思われる。猪木の闘魂が見事に伝授されている証拠だろう。まさに、「小川なら何をやっても許されるのか？」状態。こちらとしても気分的にはＶＩＶＡ！　小川！　である。「社長を殴る」という非常識ながらもレスラー的な行為に関しては全面的に支持したい。現役時代から、猪木に関しては相当頭を悩ませたと思われる坂口がこの件にご立腹する気持ちも分からないでもない。しかし、どの選手よりもでかいくせに反撃しなかったのはちょっと寂しかった。

さて、ここで両者のコメントを紹介してみよう。ますは小川から。

「もう後戻りはできないし、後悔もしない。坂口さんは確かに恩人だが、武道館で『勝手にしろ』と言われた時、何か猪木さんまで侮辱された気がして手を出してしまった…。オレは柔道界、サラリーマン時代の縦社会がイヤでプロに転向したのに、プロレス界も結局一緒。このままではサラリーマン時代に逆戻りしてしまうと思って、男のロマンを感じるＵＦＯを選んだ。これは自己改革、世代の代表として行動を起こしたんです…」。

一方の坂口社長は「（小川は）情けない…。武道館の翌日、事態を知った猪木さんから連絡をもらい『とんでもないことをした。悪かった』と謝罪された。今から事を荒だてるのも嫌だが、とにかくマスコミ立ち会いの場所で小川に土下座でもしてもらわん限り、会社としても個人としてもＵＦＯとの関係は白紙にしたい」と怒りを新たにコメントを出している。

ここで黒幕視されている猪木は、小川との面会を拒否し、佐山を通じて謹慎処分を通告した。うなだれる小川に佐山は「5日の武道館大会での不祥事はＵＦＯとしても無視するワケにいかない。よって小川は、会長の許可が下りるまで謹慎処分。当分の間、試合も事務所に顔を出すのも禁止」と猪木が下した処分を発表した。

6.5 日本武道館

新日の武道館出場を拒否した小川に事情聴取したビッグ・サカだったが返り討ちにあう。黒幕・猪木の陰はちらつくものの、小川がホームリングを失ったのは痛かったはずだ。ＵＦＯの旗揚げが心から待たれる。

月の参議院議員選挙に全日本女子プロレスの堀田祐美子が立候補することになった。出馬が噂されていた党首の猪木は、同党からの離脱を宣言。

●**5月6日【小川断食】**　ＵＦＯのエース・小川が、6日から京都府内で〝断食修業〟の山ごもりに入る。

●**5月6日【猪木待った】**　猪木が小川の新日本プロレス6・5日本武道館大会参戦に待ったをかけた。「小川を改造したいので、その結果を待ってからにして欲しい」との理由。

●**5月11日【減量成功】**　小川が東京・六本木の猪木事務所に姿を見せた。ホオはゲ

nちょう（マット界）の出来事!

参院選にUFOが出現!!

世の中が乱れ、混乱したときこそウォーリーの出番!

7.10 渋谷ハチ公前

この日は猪木と二人して、正式に応援演説に参加。横で退屈そうなのはUFO代表・佐山さんです。どこがどう政治と繋がっているのかわからないが、凡人には到底図りきれないスケールで遠謀していると思われるミネラル革命の話などを元気に延々1時間話し続けた。機舌など、選挙戦最終日は、雨が土砂降りの中、約20秒しかしゃべらなかったのに。今日の猪木ング名フレーズ「え〜、私はやれと言われれば、この場で脱いでもいいです！　見たいのであればオチンチンをだしても構いません！」「脱げ〜！（観衆の声）」「お前らホモか！」

この3日前、政見放送で演説し、裏返った声で「イ〜チ、ニィ〜、サ〜ン、ダァ〜ッ！」とやってしまい、ちょっと痛々しかった猪木の実兄・快守。政治以外の話をさせると、さすがに血は争えないのか、肩の力の抜けた爆笑トークのオンパレードとなる。この日も猪木が到着するまでは延々と群衆をいじり続けて約30分持たせてしまうのだから大した話術である。「え〜、今日、渋谷の街を街宣車から眺めておりましたが、女性の方でも非常にブスが多いんです。それはなぜか？　みんな、どこか笑顔がないんです！明るく元気に笑顔で毎日を過ごしていればいいんです。ほら、笑ってみて！　このお嬢さんも一気に美人に見えるようになったでしょ？」と非常に失礼っちゃあ失礼なトークで場を作ったところに、猪木が群衆のど真ん中を突撃しながら入場してきた。

7.9 新宿東口

新宿や渋谷の駅前にてコスチューム姿でチラシを配りまくった全女軍団。イカレ、いやイカシてる……。

「体罰について」質問してきた学生に「この世で唯一公認されている暴力がA・猪木ビンタです」と力説。「え〜、では今日は私がビンタを……」唯一じゃなかったのか？

元AV女優・桜木ルイも選挙に応援参加。街頭でビラ（読プレ参照）を配っていた。

UFOの足跡

ツソリ落ち、体重も130キロから121キロまで落ちた。

●**5月13日【米国へ】** 小川がロスへ出発。猪木と共にトレーニングのため。

●**5月20日【会談拒否】** 米国修行中の小川が、新日本坂口征二社長の会談要請を拒否した。小川は、現在、ミネアポリスのレイガンス道場で特訓中。ロサンゼルスに滞在する坂口社長の申し入れに無視する姿勢を示した。

●**5月24日【雲隠れ】** 米国修行中の小川が雲隠れ。滞在先のホテルにも帰って来ていない。定時連絡も断っている。同行している猪木も音信不通。佐山は「何しているんだか、見当がつかない」と困惑の表情を見せる一方で「でも、猪木さんも一緒ですからネ…」と意味深な言葉。新日プロ幹部は23日にミネアポリス入りする予定。

●**5月25日【絶縁】** ミネアポリスで、小川が倍賞鉄男、マサ斉藤新日プロ取締役に絶縁状を叩きつけた。東京の猪木事務所に、小川本人が連絡を入れてきたもの。

●**5月29日【説得】** 米・ロスから帰国した猪木が、小川直也に緊急帰国指令を出した。猪木は自身の黒幕説を全面否定。小川と新日プロとの関係修復のため、交渉の席に着く。

●**6月3日【帰国】** 小川が3日、新日プロ幹部との最終交渉のために緊急帰国。小川は「ケジメをつけに帰ってきた」。

格闘か？　芸術か？

UFOからの使者・Mr.ウォーリーは選挙で遊ぶアゴ怪人（by東スポ）！

4月27日、猪木が突如としてスポーツ平和党の再結成を表明した。これによりＵＦＯは政治という異次元空間にも突入する。

さっそく翌28日、大勢の報道陣が見守る中で、活動再開について、やる気マンマンの表情で語っていた猪木。「混乱期の今こそ私の出番」「もう一度、裸になって頑張る。自民党にも野党にも出来ないことをやりたい」と出馬表明とも取れる抱負を語った後、突如として党首辞任を表明。これには報道陣、関係者、そしてスポ平の幹事長までも泡を食った。しかも段取り変更が相次ぎ、会見終了後に堀田祐美子（全女）の出馬表明が行われるドタバタぶり。

一方、猪木ＵＦＯとの因縁深まる新日からは、あらゆるマスコミに先駆けて本誌8号で選挙出馬をほのめかしていた木村健吾が、民主党からの出馬を決意。バイクで全国を走り回るというかなり男らしいのだが、いまひとつ実態のつかめない選挙活動で話題を呼んだ。

結局、スポーツ平和党からは猪木の実兄・快守の他、全女の堀田、六本木のゲイクラブ「ママひげ」勤務のレオ・ゴンザレスこと高野レオらが混迷の日本を救うべく出馬。この3人、演説を聞いてみて共通してたのは、みんな「私は政治のことはわかりません！　でも、日本を元気にしたいんです」という主張だった。

この調子では苦戦を強いられるかと思われたスポ平だったが、思わぬ救世主が登場する。ＵＦＯからの使者・Mr.ウォーリーである。

日本全国選挙真っ盛りの6日、米国の猪木から「小川の練習相手を送る」というメッセージが届く。そこに現れたのは、『東スポ』が言うところの「アゴ怪人」だった。一般スポーツ紙では「サル芝居」、「苦肉の話題作り」とさんざんな書かれっぷりだったが、そんなちんけな批判を超えた次元で、これはやばかった。

さて、この日の猪木の実兄・快守率いるスポ平は、渋谷のハチ公前で街頭演説を展開していたのだが、驚くべきことに政治の話は一切なし。変わりに、

「今日、これからここにＡ・猪木が現れます！　どこかにいるかもしれません。みなさんで探してみてください！」

とひたすら小１時間あおり続けた。すると、やがてMr.ウォーリーがふらりと現れた！　葉巻をくゆらせながら周囲を徘徊している。観衆は一斉に猪木コール。しかし、快守はすかさず叫んだね。あれだけ「探してください」と言っておきながら、

「あれは猪木ではありませ～ん！　ヒゲもじゃで葉巻を持ってるということは……キューバのカストロさんじゃありませんか！　あれはカストロ将軍です！」

要するに、猪木は『ウォーリーを探せ』をやりたかったのだ、渋谷のど真ん中で。政治という、遊びとは縁遠い世界に、土足で、しかも変装して遊びにゆく男・猪木。スケールのデカい遊び人である。

これが噂のシャンソン歌手のレオ・ゴンザレスだ！　演説の際は必ず「人生は大根役者」という自作？のシャンソンを披露する。

この日の見所は、何と言ってもスポ平の兄がＵＦＯの弟へ送ったエールのビンタ！　快守は肩車の上から一撃！

7.12 スポ平

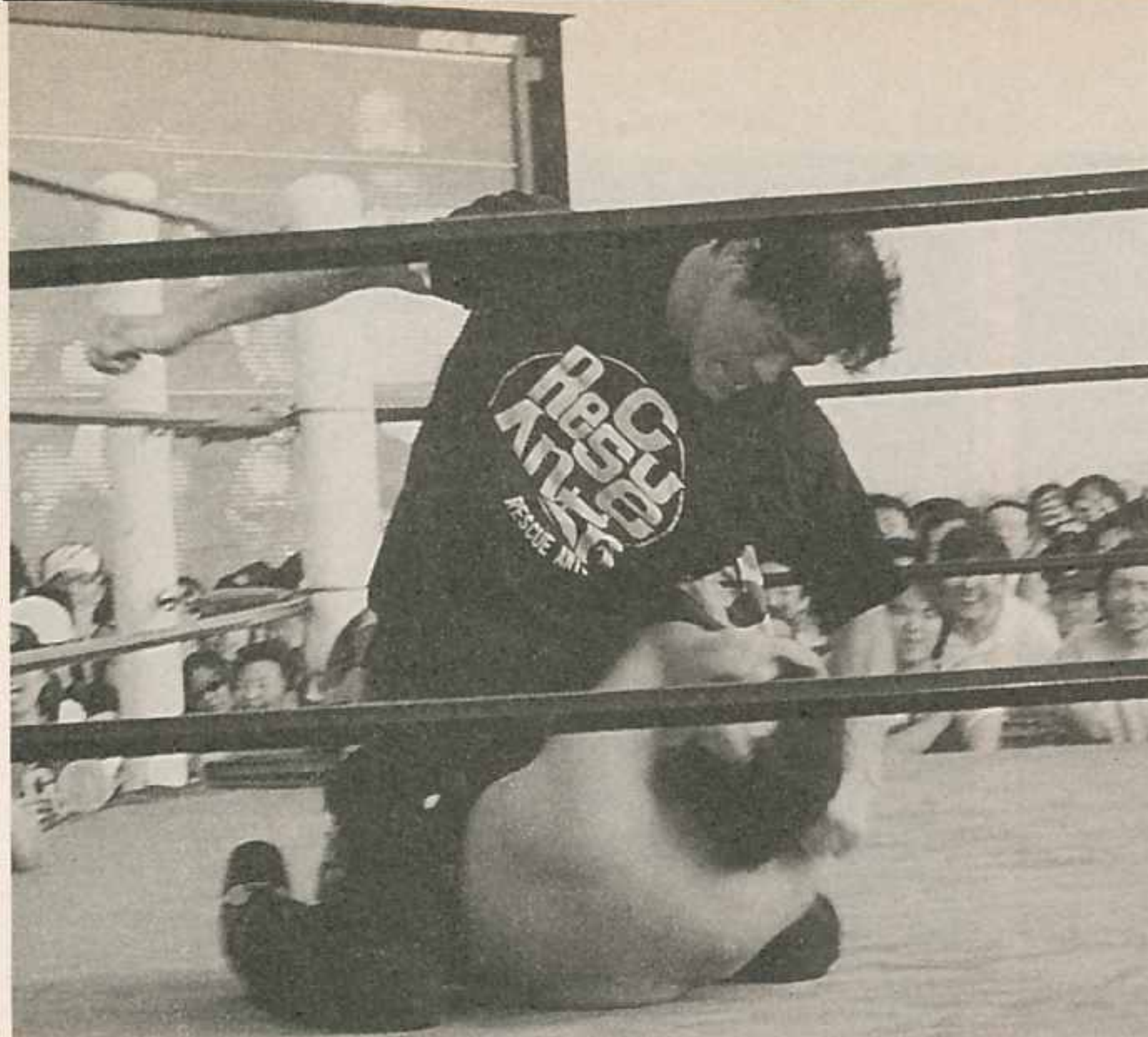
選挙当日、スポ平事務所ではお菓子やジュース、さらにはビールを振る舞いながらリラックス・ムードで開票速報を眺めていた。苦戦が予想されたが、予想以上の健闘に一時、事務所も色めき立ったが結果は全員落選だった。堀田は、政治には何も興味がなかったところからのスタートだったと振り返った。途中、挫折しかかって松永会長に「もう出来ません」と直訴したそうだが、「オレに任せろ！」と励まされたという。頼もしいぞ、会長！　一方、快守はMr.ウォーリーやシャンソンや女子プロで話題をかっさらった活動を振り
返り「日本の国民は頭が固いというか、まあ、元気があってよかったんじゃないの？」と振り返った。じつはスポ平は「フランスや中国の大新聞の一面でユニークな党」として取り上げられていたそうだ。「ひょっとして将来、ウチの党が政権を取ったらＡ・猪木を大統領にするかもしれない」と次に向けて怪気炎をあげていた。

「猪木さんも分かってくれてると思う。今後も猪木さんについていく」と厚い信頼を寄せている。

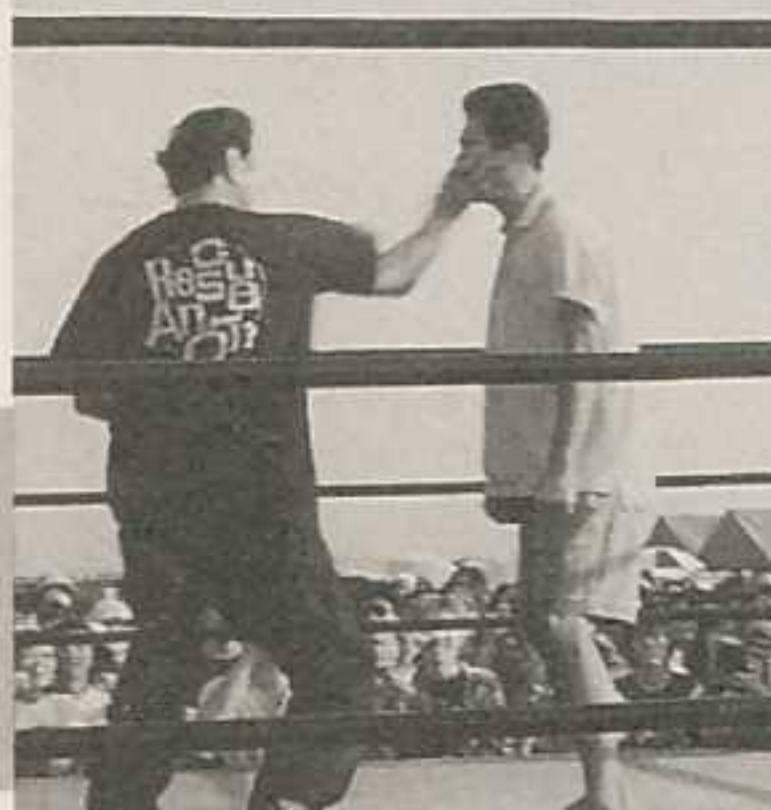
●**6月5日【暴行】**小川が、坂口社長と今後の活動について話し合いを持った。しかし、話がかみ合わず、坂口社長は、「今日は帰れ。ウチの大事な試合の日に、くだらん話はできん。来週、事務所に来い！　帰れ！　勝手にしろ！」と言いながら小川をドアの方へ押し出した。「ふざけんなよ！」怒鳴り声をあげた小川は突然、左手で胸ぐらをつかむと、そのまま押し倒した。イスに倒れ込んだ坂口社長は、そのまま壁に激突。なおも殴り掛か

7.18 千葉・金田海岸

宇宙人・キラー猪木が木更津にあらわれた!

千葉の海岸にUFOが着地!!

ちょっとでも格闘技の素養があって、極めにくる素人に対しては、一切の容赦なくナックルを顔面に落とし続けるキラー猪木! 相手が苦しがって、なんとかアゴを上げてギブアップを訴えようとしても、そのアゴにパンチを叩き込んでいくので、どうにもならない。で、冷静になって考えてみるとこのリングにはレフェリーがいないのだ。すべては猪木の腹ひとつ。猪木が殺意を抱けば、素人であろうと誰であろうと関係ない。止める者がいなかったわけである。そんな状況で猪木に挑むド素人の勇気だけは大したもんである。しかし、素人相手にキラーに変身する猪木の大人げなさも最高にステキだ!

さっきまで「殺しあいではないので、安全性を重視して掴めるグローブを開発しました」と言っていた人間とは思えないキラーぶり。思いっきり素手で、掛かってくる素人を徹底的に殴り散らした。

「いつ、何時、誰の挑戦でも受ける」という言葉はウソではなかった! 途中からは闘魂注入希望者がいっぱいいたが、これだって容赦はない。どこまでも元気な猪木ングである。

フライvsジョンストンのエキシビション・マッチは特別レフェリーを猪木が務めた。普段の試合よりもスパーリングに近い内容だった。

数千人の群衆を引き連れながら場内を徘徊。もちつきスペースの前で立ち止まると、突如もちをつき始めた。カメラマンのリクエストにも大して答えず、一心不乱に鬼気迫る表情でもちをつきまくった後、「いいもちがつけた」と無表情で呟いた。

UFOの足跡

ろうとする小川を、同席していた倍賞常務が制止した。小川はその後一言も発せずに関係者入口の車に乗り込んだ。助手席には佐山が待っていた。二人は厳しい顔のまま会場を後にした。

●**6月8日【謹慎】** 坂口社長を殴打した小川が猪木事務所を訪れ会見を開く。ところが頼みの猪木は、佐山を通じて謹慎処分を通告。一方、坂口社長は「マスコミ立ち会いの場所で小川に土下座でもしてもらわん限り、会社としても個人としてもUFOとの関係は白紙にしたい」と怒りの発言。

●**6月10日【支援】** nwo軍の総帥、蝶野正洋が10日、小川支援を表明した。

●**6月22日【相談役】** 新日本の株式総会が22日行われ、会長を辞任した猪木は相談役に就任した。

●**6月23日【解除】** 猪木が米国からパソコン通信を通じて、小川の無期限謹慎処分を29日に解除し「アメリカでトレーニングを再開させる」と伝えてきた。猪木は「UFOの本拠地はラスベガスの近郊にある街で市を挙げての大きな上陸になりそう」と、こちらは相変わらずにぎやか。また、モハメド・アリ、アーノルド・シュワルツェネッガーに続いて画家のヒロ・ヤマガタ氏もUFO仲間に加わったという。

●**6月29日【解除】** 小川に科せられていた謹慎処分が解かれた。小川は、新日と

格闘か？ 芸術か？

「いつ、何時、誰の挑戦でも受ける!」猪木がド素人に鉄拳制裁マッチ!

Mr.ウォーリーの衝撃冷めやらぬ7月18日、千葉県木更津の金田海岸であまり告知もないままに1万人規模のビッグ・イベントが行われていた。それが「狂人乱舞・神威」である。

この大会のプログラムには「素人がリングに上がって、猪木とスパーリング」という、突拍子もないアトラクションが組まれていた。猪木が素人とスパーリングするならば、何かが起こらない方がおかしい。本誌は当然、総勢5名のスタッフを送り込み総力を挙げて取材を敢行した。だが、こんなに面白すぎるアトラクションがあるというのに、記者を送り込んでいたプロレスマスコミは本誌のみ！ 他誌はカメラだけだった。もったいない話だ。

当日の会場では、横浜銀蝿やBro.Korn&Ikuraちゃんのライブそして、世界を股に掛けて活動するアントンレスキューの発足式など見所は山のようにあったのだが、なんといっても最大の見所が、猪木だったことは言うまでもない。

まずは、ドン・フライとブライアン・ジョンストンのエキシビション・マッチを猪木が裁き、そしてUFOグローブの考案者である空手の先生が紹介されたり、10月に旗揚げ予定であることが発表された。告知が一通り終わったところで、キラー猪木は現れた。

「え～、私はいつ、何時、誰の挑戦でも受ける、ということを言って参りましたが、今日は誰でもいい、オレに挑戦するヤツはいないかーっ!!」という声に一斉に手が上がる。会場には地元のヤンキーと思われるガラの悪そうな連中が大挙して押し掛けていた。猪木は、その中の1人をリング上に呼び寄せ、スパーリングを開始した。

当然、ド素人が相手では話にならない。当然の話だが、あっさり極められてしまう。その後も2、3人がリングに上がったが、それは従順な闘魂注入の志願者たちでしかなかった。ビンタを喰らって素直に帰っていった。しかし、その次に上がったヤツこそが、キラー猪木の最初の犠牲者となった。

比較的がっしりした体格のその男は、鋭いローを入れて牽制。その瞬間、猪木の目の色が変わった。素早くテークダウンを取り、2、3発耳の後ろに拳を叩き込み、肩で相手の顔を圧迫！ もうタップするしかない。会場は、あまりの凄味に静まりかえり、挑戦者は耳から血を流していた。プロレスラー、しかも猪木にケンカを挑んでタダで済むハズがない、キレイに畳まれるのが関の山なのだ。55歳になっても、素人相手にも一切手加減しない猪木のプロフェッショナルな姿勢は、もう最高！

そんなところで会場全体が「さあ、いいもの見たから帰ろうか……」という雰囲気になりかけたときに、また1人志願者が現れた。この日、結成されたアントン・レスキューの隊員である。場の雰囲気を読めない上に、アントン・レスキューのくせして猪木に挑戦してしまうこの男、素早い動きで猪木のバックを取ってしまう。すると猪木はすぐさまひっくり返し、マウント・ポジションから情け容赦ないパンチを、アゴや耳につるべ打ち！ 相手がタップしてからも殴り続けるその姿は、まさにキラー猪木！ 挑戦者は泣いていた。猪木、素人を泣かす！ これが観れただけでも、非常に満足。お腹いっぱいだった。

この路線でいけば、猪木がよく語る夢の試合、東京ドームの観客1人ずつと対戦していくという1vs6万人興行も実現可能ではなかろうか？ UFOは夢の詰まった団体である。

Bro.KornとIkura ちゃんのジョイントライブが行われたさま。そこに乱入した猪木を激写！ ラテンの血が騒いだか、非常にノリノリだ！ 猪木が踊っているぅ～、こんな猪木は見たことないぃ～。

バスケット・コートに現れた猪木は、車椅子の中に交じってバスケに参加！「ジャンプ！ ジャンプ！」というハウス・オブ・ペインの曲にあわせて巨体を揺する猪木！ いいものを見た。後で猪木の素人制裁マッチを見た車椅子の人たちが、「ホント、猪木さんは強いよなあ」と語っていたのが印象的だった。

当日は電撃ネットワークの南部虎弾とギュウゾウが駆けつけて、Bro．Korn&Ikuraちゃんのライブに花（火）を添えた。こんなステキな3ショットも実現！ そして、猪木は横浜銀蝿のLIVE後にもステージに登場。嵐としばしトークを繰り広げた。
●今日の猪木ング名フレーズ
「元気ですかーッ!? え～、最近、私はローラーブレードに凝ってまして、サンタモニカでブロンドの美女を従えながら走っております」

アントンレスキューは、この日が発足式だったにもかかわらず、何とこの日のうちに解散。隊長の落合君と猪木のトーク・バトルは1時間半に渡って繰り広げられた。緊張と感激でボロボロの落合君は「え～っと」とトークの4分の3を唸り続けた。10分ぐらいかけて落合君がひとつの質問をすると、「え～、彼の言ってることがよくわからねえんですが……」とあっさり斬って捨てる猪木ング。すごいぞ！

の決別を改めて宣言。

●7月1日【宣言】土下座要求から口を閉ざしていた坂口社長が、「大阪ドームも札幌も出場させない。ちょっと勘違いしているようだが、向こうから謝罪しない限り、うちとは一切関係なし」と明言。

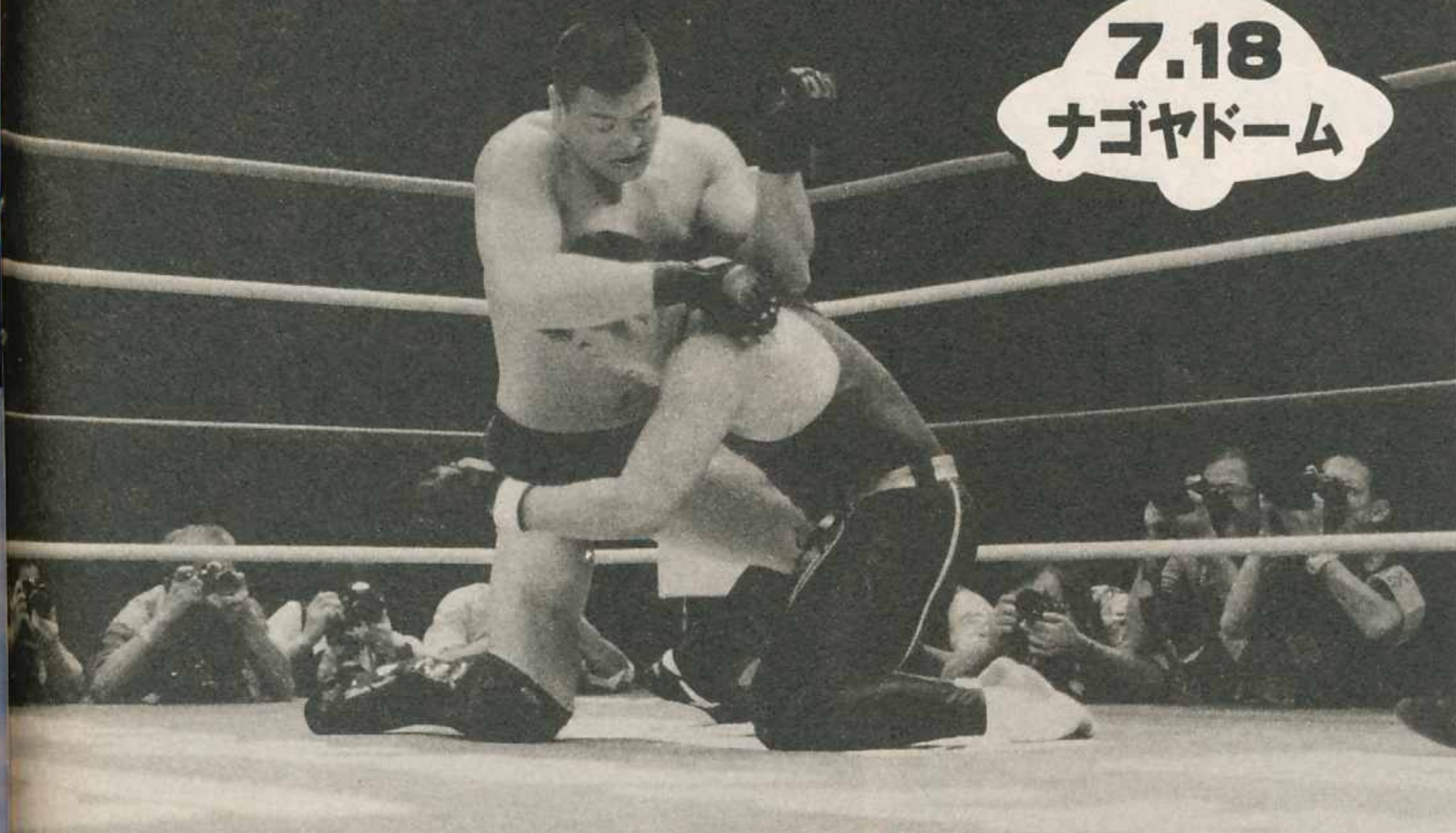
●7月6日【Mr.ウォーリー】アントニオ猪木が変装姿で帰国。成田空港まで出迎えた佐山聡、小川直也らをア然とさせた。その後、午後6時、スポーツ平和党が選挙活動を行っている渋谷・ハチ公前に姿をを現し、そのまま姿を消した。

●7月9日【呼びかけ】みちのくプロレスのザ・グレート・サスケが第2回覆面ワ

nちょうのマット界出来事!

未知との遭遇!?

リングの上のUFO PART 2

7.18 ナゴヤドーム

小川3ヶ月半ぶりの実戦だったのだが、安生のインサイドワークに翻弄されてしまう。特にサミング気味の掌底にブチ切れ、お返しに肘と頭突きを叩き込み、結局は反則負けを喰らう。この試合前、猪木からは「ケンカしてこい」と威って多言われた小川。もっとやっておけばよかったとしきりに反省していた。

7.9 京王プラザホテル

この日はツケヒゲはやめて、地毛で勝負のMr.ウォーリーこと猪木。「最近、Mr.ウォーリーっていうのが流行ってるらしいから、あやかって」ということらしい。小川のK-1参戦が急遽決定。ヒゲが間に合わなかったのがちょっと嫌だったみたいだが。

7.21 六本木

K-1のであまりに不甲斐ない試合内容に猪木が怒った！　真剣を片手に「結果はどうでもいい。プロとしていちばん大事な大切なものをどうやって伝授したらいいか悩んでいる。大事なのは命がけでやること」（猪木）というわけで、真剣を小川の頭上にかざし、「真剣を持ったことあるか？」（猪木）「いいえ」（小川）「上から叩き切られたらどうする？　逃げるか？　預けられるのか？」（猪木）。「はい」（小川）というわけで、佐山に刀を託した。佐山は「これを会長だと思って頑張りま〜す！」。

UFOの足跡

●**7月9日【復帰戦決定】**　ウォーリー姿で猪木、小川が会見。7月18日ナゴヤドームでの復帰戦を発表。

●**7月18日【K-1参戦】**　この日K-1マット初参戦の小川が「UFOオープニング特別試合」で元キングダムの安生洋二と対戦。小川はUFOルールで戦いながらヒジ打ち、頭突きルール違反で反則負け。

●**7月21日【説教】**　六本木の路上で、猪木が土下座する小川に真剣を突きつけプロ魂を伝授。

●**7月23日【少林寺】**　小川が28日に中国・北京に渡り約1ヶ月間、少林寺修行を行うことになった。「少林寺がプロ化を計画しており、その養成機関が北京にある」（猪木）ため北京の少林拳道場へ。

●**7月28日【出発】**　小川は28日に、一方で18日のK-1ナゴヤドーム大会で安生洋二に無残な反則負けを喫した屈辱に爆発寸前。安生に10月予定のUFO旗揚げマッチ参戦を要求し「トーナメントで借りを返したい」と怒りの報復戦をブチ上げた。

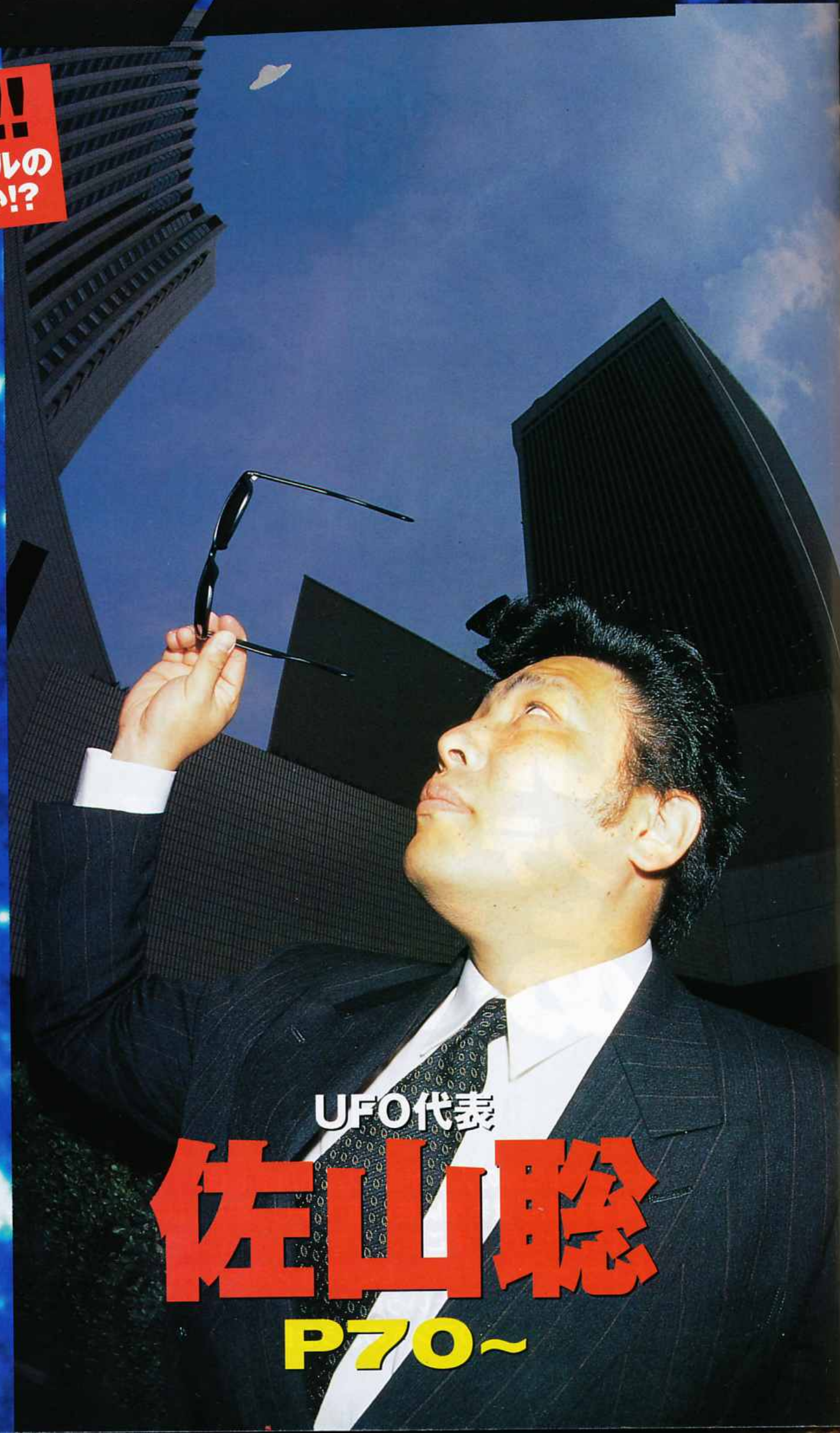
●**8月7日【帰国】**　無期限の少林寺修行に出発した小川が7日にも帰国の予定。猪木から帰国OKが出たため。

格闘か？ 芸術か？
FIGHT or ART
それとも
格闘芸術か？

UFO飛来!!
マット界に宇宙的スケールの
ビックバンは起こるのか!?

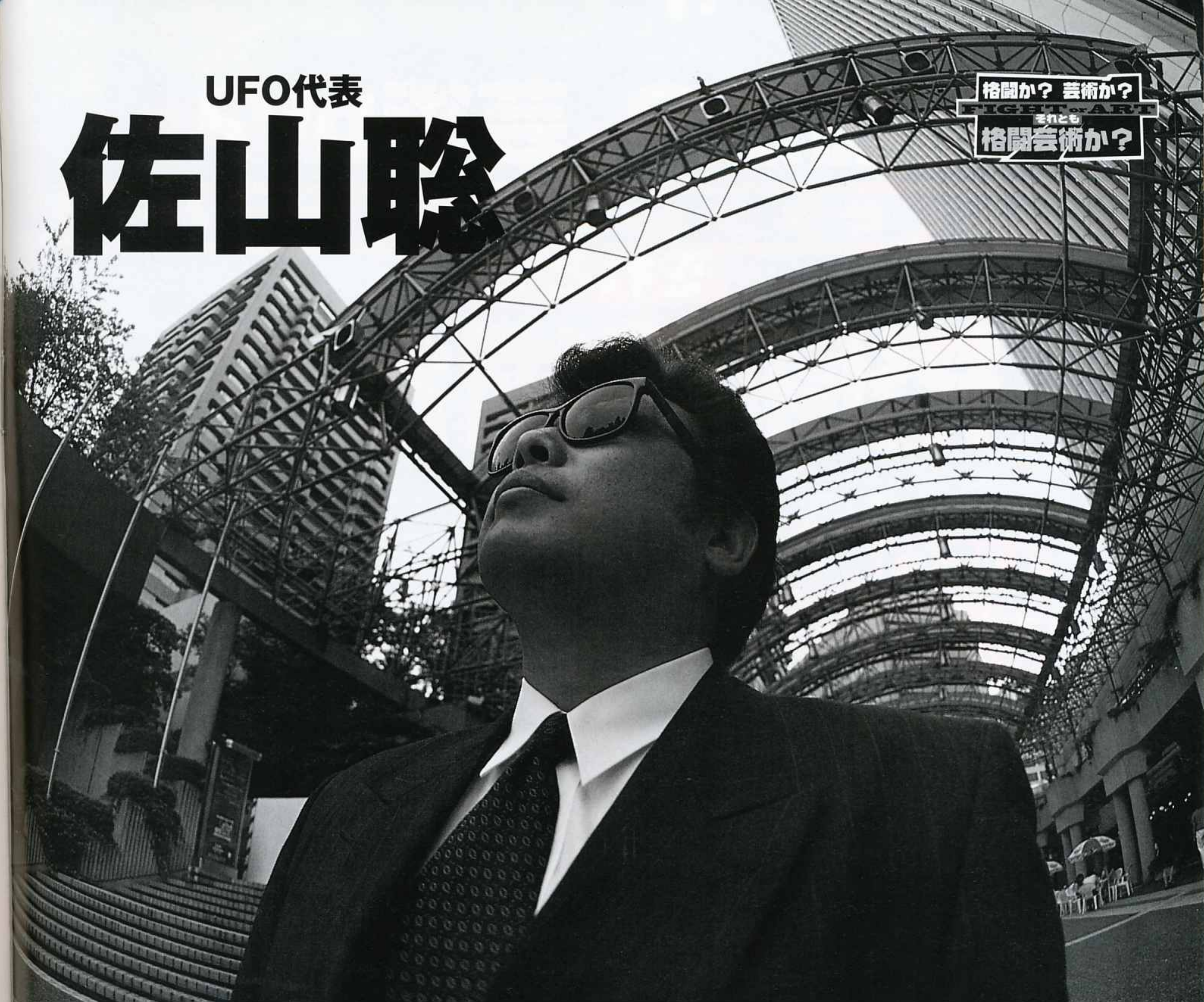
ANOTHER GUEST

宇宙からの使者
スーパー宇宙パワー様
P77~

夢工場からの使者
福田雅一様
P82~

UFO代表
佐山聡
P70~

UFO代表

佐山聡

格闘か？ 芸術か？
FIGHT or ART
それとも
格闘芸術か？

いまUFOは隠れてるけど『インデペンデンス・デイ』みたいにある日ドーン！と来るんですよぉ

突如、Mr.ウォーリーなる謎の人物が出現し、小川直也はK—1の特別試合に出陣した。相変わらず話題豊富な世界格闘技連盟「UFO」周辺ではあるが、なかなかその全貌は姿を現してはくれない。そこで、現・UFOジャパン代表でもある佐山聡氏に今後のテーマとプランを聞いてみた。そこでは「プロレス」や「格闘技」の枠には収まらない、いや、もはや「格闘芸術」という枠でさえ収まりきれない壮大なスケールの展望が語られたのだった。キミのフシ穴のような目に「UFO」は見えたか？

聞き手／山口日昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／遠藤政文
photographs by Masafumi Endo

佐山　見て見て、これね、新兵器。（実て）まずは携帯電話入るでしょ。バッグを開けたらコンピューターが入ってるしね。（バッグを開けて見せる）ほらねぇ。

——凄い！　とんだ新兵器ですね（笑）。

佐山　（突然、携帯が鳴る）で、ちょうど電話もかかってきたしね。（携帯に出る）もしも〜し。はいはい。大丈夫ですよぉ。そうですか。……あ、先生!?　オスッ！　申し訳ありませ〜ん！　だって風邪だったんだもん。オスオスオスッ！　なんで急に出てくんのぉ。怖いよぉ〜。明日は映画だもん、藤原紀香と。わかりましたぁ。オスッ！　怖いよぉ〜。ご説明にいきま〜す。失礼しま〜す！　オスッ！（携帯を切る）もう、いやんなっちゃうなぁ、突然、トシちゃん（新格闘術藤原道場・藤原敏男氏）に代わるんだも〜ん。

——もう一つの素敵な師弟関係ですね（笑）。

佐山　だってねぇ、この前トシちゃんねぇ、いきなり川口に飲みに行こうって言うんだよぉ。「藤原紀香がいるから来い」だって。もうウソに決まってるじゃないのぉ。ねぇ（笑）。

——それで「明日は藤原紀香と映画を見に行く」という切り返しだったと（笑）。

佐山　そうそう。目には目を、ウソにはウソで切り返さないとねぇ。（急に何かを思い立ち、素早く携帯をかける）もしもし〜。あのさ、あのさ、そこでさ、藤原道場でさぁ、昼間にチャンコを作ってるんでしょ。あの中にさ、ヒ素を入れといてくれない。ヒ素、ヒ素。ダイジョブダイジョブ。トシちゃんだけ食えばいいんだから（笑）。しといてしといて！　しといてくださ〜い。（携帯を切る）アハハァ。もうトシちゃんもUFOですから。よろしくお願いしま〜す。

——しかし、ヤンチャですねぇ。それにしても「チャンコにヒ素入れといてくれない」って凄いな（笑）。

佐山　面白いねぇ、トシちゃん死んだら。アレ？　いまの話テープに入っちゃったのぉ？　ヤバイなぁ。トシちゃん読んだら怖いなぁ（笑）。もう書かないでよぉ、怖いよぉ〜。

——よろしくお願いしま〜す。（笑）

佐山　で、こういうものをつくったの（名刺を差し出す）。

——は、これ誰？　名前変えたんですか？　いきなり「近藤さん」の名刺出されても（笑）。

佐山　あ、あ、あ、間違えた。この人は昨日、一緒にゴルフをやった人だった（笑）。ボク、400ヤード、ピシッと出したから。前にね、420ヤード飛ばしたんだけど、それは追い風だったんですよ。で、今回は普通の風のないところで400ヤード。

——400ヤードはいいんですけど、新しい名刺見せてください。

佐山　あ、こっちね（「UFOジャパン代表」の名刺を差し出す）。あのね、UFOってゴルフの団体ですから。アハハハァ。

あのね、「UFO」ってゴルフの団体ですから。アハハハァ

——また始まったか。それにしても突き抜けてますよね、UFOという名称は。それがポコッと出るところがつくづく凄いですね、アントニオ猪木という人は。迷いが見えないというか（笑）。

佐山　さすがです。人の目をかえりみず（笑）。代表としてはたまったもんじゃないですけどね。非常に苦労してます（笑）。

——恥ずかしいんですか？

佐山　いやいやいや。そんなことないで〜す。

——で、佐山さんは、日々どんな仕事をされてるんですか。

佐山　あのね、日々名刺作ってるの（笑）。

——はっは〜。ゴルフをやって、名刺を作って。優雅ですね。

佐山　うん。

——「うん」って、いいんですが、それで！（笑）。みんな期待してるんですから。

佐山　ホント？

——ミスター・ウォーリーなんて衝撃的な人物（P65参照）が現れちゃったら期待せずにはいられないですよ（笑）。

佐山　あれは凄い企画力ですねぇ。

——アンド実行力。猪木さんは「面白い！」と思えば、歌舞伎の舞台にサンバを持ち込んじゃうようなことを真剣にやるタイプですからね。

佐山　アハハァ。いい表現ですね。オレ、ウォーリーが初めて空港に着いた時、叱られちゃってさぁ。「凄い変装だから。絶対誰にもわからないから」って会長（猪木）が言うから、「大丈夫でしょうね？　変な風にならないでくださいよ、お願いしますよ」ってボクは確認したんですよ

SAYAMA SATORU

Mr.ウォーリーが空港に着いた時、新聞記者に叱られちゃってさぁ

ぉ。それでも「絶対、大丈夫！」って言うから、間違いないだろうって思って、新聞記者を呼んで空港で待ってたんですよ。で、パッと飛行機から降りてくる変装した社長を見た瞬間に「やばい！」と思って（笑）。みんなバチバチバチって写真撮ってるけど、みんなは小川（直也）の凄い助っ人が来ると思って取材しに来てるわけでしょ？「これはヤバイヤバイヤバイ」って思って。で、最後に新聞記者に怒られちゃったんですからぁ（笑）。

——怒られましたか！「ふざけるのもいい加減にしろ」と（笑）。

佐山　「いい加減にしろ」とか言ってるから。助っ人じゃないことを怒ってるのかなぁと思って「ゴメンなさい、ゴメンなさい」って思ってね。そうしたら「おい、名前ぐらい教えろ！」だって（笑）。

——ガハハハハ！　そりゃあ、あれを見たら新聞記者だって名前が知りたくなりますとも。

佐山　それで会長に電話したら、ひと言！「ん？　ウォーリー！」だって（笑）。おいおいおい、『ウォーリーを探せ』じゃねえかと思って（笑）。もうビックリ。

——というわけで、UFOは旗揚げ前にして、早くも「何が起こるかわからない」というイメージがついてますね（笑）。

佐山　未確認飛行物体ですからねぇ。で、小川が中国から帰って空港に現れる時は、黒いカンフー着を着て、中国の編み笠みたいなの被って、フラミンゴ・ポーズを取れって言ってたんですけどぉ……やってくんなかったですねぇ（笑）。

——やっぱり、オーちゃんにはUFOイズムがまだ注入されきってないんですかね（笑）。

佐山　いや、よくわかってるんですけどね。それは単純に恥ずかしかったんでしょうねぇ（笑）。

——ホントにどこまでが冗談で、どこまでが本気なのか、その境目がまったくわからないですね。その辺がUFOということなんでしょうか。

佐山　は〜い。

——でも、その小川選手がK—1に出場して（7月18日・ナゴヤドーム、安生洋二との特別試合＝P68参照）酷評を浴びましたけど。

佐山　ヒドかったですねぇ。技術面やキック面とかそういう部分では、もの凄くよくなってたんですけど、試合に対する迫力とかはまったくなかったんで、それで真剣を持った会長に叱られましたけどね（P68参照）。

——六本木のド真ん中で（笑）。要するに、プロとしての凄みの部分を表現しきれてないということですね、猪木さんが常々言ってるように。

佐山　そうそうそう。

——あの試合で酷評を浴びたことで、小川選手は精神的に腐ったりしてないんですか？

佐山　あ、全然そういう人間じゃないですから。何があっても女に走る人間ですから（笑）。

——ガハハハハ！　走りますか！

佐山　ぜ〜んぜん、ダイジョブですから（笑）。でも、オーちゃんは面白い人間ですよ。けっこう常識あるしね。威張ったりしないし、素直だし。信じられないくらい素直ですよ。

——で、佐山さんは何があっても食い物に走ると（笑）。

佐山　いやぁ、もうねぇ、その通り！（笑）。

——ガハハハハ！　この間、前田日明さんと話をしてたら「オレも最近は五十貫デブやけど、佐山さんは百貫デブや」って言ってましたよ（笑）。

佐山　ヒドイなぁ。オレは痩せたよぉ（笑）。よぉし！　二百貫目指そう!!

——目指しますか。でも、いまのところ小川選手しか目玉がいないとなると、なかなか難しい状況ではありますよね。

佐山　そんなことないですよ。全部揃えてますよぉ。でも、それは言わない（笑）。もっともっと大きなことになりますよ。

——じゃあ、佐山代表の頭の中ではいまメンバー的にはだいぶリストアップされてるんですね。

佐山　もちろんもちろん。それなりに凄

SAYAMA SATORU

い選手を集めてますよ。

――「それなりに」って（笑）。もっと代表なんだから、ガツーンとアピールしてくださいよ（笑）。

佐山　アピールない。UFOだから。オレたち宇宙人だもん。

――あちゃあ！　いやでも真面目に〝この人たち宇宙人なんじゃないか〟と思う時ありますよ。

佐山　ありがとうございます～。

――猪木さんは、とくにそうだけど（笑）。

佐山　ねぇ。ボクは普通ですよぉ（笑）。

――ガハハハハ！　自分で普通って言う人ほど異常なんですよ（笑）。

佐山　いやいやいや。オレは会長みたいだったらショックだなぁ。あ、そんなことないで～す。アハハハァ。

――それでUFOは実際には、いつ姿を現す予定なんですか？

佐山　10月に中国とかインドとか言われてますけど、来年でしょうね。でもまだ、言えないで～す。でも、いろいろあるからね。プロレスもその中に含まれるけど、そういう問題じゃなくて、なんかあるみたいですよ。

――猪木的スケールの壮大な世界観を展開させていくってことですね。

佐山　ま、そういうことですね。理想は高いですよぉ。人類の平和を。うふふふ。

――人類の平和？　それと？

佐山　人類の平和と、う～ん……あとはなんだろう（笑）。

――出てこない（笑）。

佐山　いや、格闘技だけじゃないですから。精神的なものだとか、それからあと健康的なものだとかぁ。そういったものまで深く入っていくってことですね。国連の海外協力隊ですか？　そういったこともやりますしね。猪木イズムをもっともっと広げていこうってことですね。

――でも、早くUFOを発進させてくれないと、来年はとうとう1999年ですよ。ノストラダムスの予言だと、地球は来年の7月で滅びることになってるんですけどね。

佐山　それに滅ぼされないように、UF

格闘か？芸術か？
FIGHT or ART
それとも
格闘芸術か？

タイガーキング、ドン・フライ、小川直也、そして総帥・アントニオ猪木。いまは本当に未確認飛行物体状態のUFOだが、佐山聡代表の言葉を信じれば、水面下いや地球のはるか上空で何かが動き出しているのは間違いないようである

Oは立ち上がったわけですよ。

――はっは〜、なるほど！　そういうことだったわけですか。

佐山　そう。要するに、それ（笑）。

――「要するに、それ」でいいのか（笑）。

佐山　ノストラダムスの予言から救おうと、そういうのがUFOの一つですねぇ。だから、なんとかの魔王が降りてくるでしょ？

――アンゴルモアの大王。

佐山　それ、猪木さんじゃないかと思ってるんですけどねぇ、魔王！　うふふふ。

――ガハハハハハ！　世界を猪木さんがブッ壊して、猪木さんが作り直すと（笑）。

佐山　はぁい（笑）。

――実に痛快なファンタジーですね、それは（笑）。ところで、もうそろそろ真面目な話していいですか？

佐山　あ、は〜い。

――いわゆる〝格闘技側〟と言われる選手ってプロレスを嫌いますよね。そこには「オレたちはこんなに真剣にやってるのに、プロレスはなんであんなフザけたことやってるんだ」っていう思いが当然あると思うんですよ。

佐山　うん。

――佐山さんもプロレスを辞めた時っていうのはそういう気持ちってあったんですか？

佐山　ないよ。ただ、格闘技雑誌がプロレスを扱い出した時にはあったね。だから、「シューティングの選手なんか、身体が小さいくせに勝てるわけねえじゃん」って言われた時は「そんなことはないよ」っていうね。そういうイザコザはありましたよね。

――プロレス側からちょっかいを出してきたことに対して切り返したということ？

佐山　じゃないと、こっちから手は出さないですもん。

――いま「こっちから」って言いましたけど、佐山さんにとって、その当時は「あっち側」だったプロレスという土俵にリバウンドしてきて、UFOを立ち上げるという現象が面白いんですよね。時の流れというのは恐ろしいですね。

佐山　だってUFOはプロレスだけじゃないよ。格闘技もやるし、アマチュアの競技もやりますから。それにUFOは従来のプロレスらしいプロレスじゃないからね。いまドン・フライが新日本プロレスでやってるけど、うちのリングに来たらあんなもんじゃないから。だから、もっともっと面白いものになると思いますけどね。「こんなこと考えてたの？」っていうのがたくさん出てきますよ。

――だから、ゴルフばっかやってないで早くやってください！（笑）。

佐山　これからはゴルフだけじゃないもん。砲丸投げ。砲丸投げもやりますから。

――ガハハハハハ！　猪木さんのブラジル移民時代じゃないんですから（笑）。佐山さんは「プロレス」と「格闘技」は全然別物って常々言ってきましたよね。

佐山　別物。全然、別物。

――ところがいま、プロレスと格闘技が一部でリンクしだしてますよね。

佐山　う〜ん。どうでもいいの、関係ないで〜す。

――は？

佐山　だから、UFOっていうのはプロとしてのエンターテインメント性も突き詰めていくし、（シュートサインを出して）こっち側で世界一強いのも作るし、いろいろ全方向性に向いてますよ。もう、かなりの段階まで動いてますから。ある時期がきたらビックリしますよ。早くビックリさせてあげたいね。みんなUFOに「何をやってるんだろう？」っていう不安を抱いてると思うんですよ。でもね、中身は……何にもないです。

――へ？

佐山　だからダメかなぁ（笑）。

――ガハハハハハ！　煙に巻きまくりますね。さすが代表って感じです。

佐山　これから仕込みをかけていく時だから、何かあっても言えないですから。でも、ちゃんとしたことはやってますからねぇ。あと武道の方。

――武道！

佐山　格闘技を通して人間性ってものを作っていく。そっちの方も重視しようと。礼儀の問題とかね。だって、格闘技の選手だって「おはようございます」も言えないような人だっているわけでしょ。そういうんじゃなくて、ビシッとしたもの

おそらく宇宙と交信する佐山聡代表。アントニオ猪木総帥から、いつなん時どんな指令が来てもいいようにアンテナを張り巡らせているようである

を武道として捉えていきたいなと。

――でも、佐山さんと武道って一番合わないと思う人もたくさんいるでしょうね。

佐山　でしょうね。いつも「こんな人だと思わなかった」「もっとカタい人かと思ってた」って言われますからぁ（笑）。

――カタい、やわらかいの境目も、これまたUFO勢はわからないんですよねぇ。

佐山　でもボクが作るんですから、単に武道って言っても普通の武道じゃないですよ。いわゆる「型」をつくるとしても、普通の型はつくりませんよ。

――なるほど。佐山さんはまた新しいものをつくる楽しみを得られるわけですね。つくづく「守る」ことよりも「つくる」ことが好きなんですね。

佐山　だって面白いもん！

――じゃあ、「プロレス」とか「格闘技」とか、さらには「その二つを融合させる」ということにもこだわってないと。

佐山　そうで〜す。もうどうでもいいで〜す。

――「こだわりがある人間は強そうに見えるけど、実はこだわりがある人間ほど弱い」と猪木さんも言ってましたけどね。

佐山　ボクだってもっと理想が高いですから。その理想を考えてる人間にとってはどうでもいいんですね。そんなちっちゃいこと。ボクたちはエンターテインメントも格闘技もアマチュアも武道も共存しあってる世界ですからね。もう衝突とかそういうのはいらない、うん。もういらない。疲れますよ、小さなところでチョコチョコやってたら。うん。

猪木イズムであればね、強くなければ話にならないけどね

――なんかその言い方にはリアリティーがありますね。だけど大部分の人は、佐山さんの言うところの「ちっちゃいこと」にこだわってるのが現実ですよね。

佐山　そうでしょ。だけどその世界を気にしてる人って何人いるの？　そこにオレは入りたくないですから。みんなで食い潰しあいながら、小さいところでゴチャゴチャグルグルやってるとね、気が狂っちゃうよ。ドヒャーンッといかないと。

――ドヒャーンッと（笑）。

佐山　だって格闘技だなんだっていったってさぁ、誰が強いかっていったって、いまじゃ薬打ってる人が強いですよ。暴れたら手が付けられなくなっちゃうし、そんなの手を付けたくないもんねぇ。

――はっはー。

佐山　海外のアルティメット系の大会とかもそういうの多いけど、そうなっちゃったらつまんないでしょ。

――人間がやってる気がしないし、どの薬が一番強いかになっちゃう（笑）。

佐山　ね。誰がいい薬打ったかで強い弱いが決まってもねぇ。だから、アマチュアも武道も、技術的なものも精神的なものも含めてのものですから、ウチは。ビシッとした格闘文化っていうんですか。それを築きますよぉ。

――でも確かに「あれ？　マット界ってこんなちっちゃいもんだったのかな」と疑問に思うことはありますよね。

佐山　でしょ。猪木さんがやってた時代のスケールといまを較べると、あまりにもスケールが小さいでしょ。でも、猪木さんはあのスケールのままですから、そこに照準を合わせてるわけですよ。

――だけど、ある雑誌を読んでたら石井（和義）館長が「UFOのやろうとしてることはWWFやWCWのUWF化だと思う」って言ってましたよ。

佐山　う〜ん。でも全然違いますよ、それは。確かに試合のスタイルとしては近いかもしれないよ。館長もそう願ってるかもしれないし。（シュートサインを出して）こっちの世界に来てほしくないみたいなね。

――はっはー。

佐山　だけど行きますからね。だってオレが関わってるんだもん。弟子にどういうことを教えるの？　アマチュアの選手にどういうことを教えるの？　もう技術を知っちゃってるもん。その先生が何を教えるのぉ？　変なところでお茶を濁してらんないですよ（笑）。

――それを聞いて、なぜかホッとしてしまうのはナゼなんでしょう（笑）。

佐山　いまから、「やるよ、やるよ」って言ったらこれは偽物ですよ。なんでオレが黙ってるかと言えば、これは本物だからですよ。「UFOが来たよ、来たよ」って宇宙人の写真とか見せて回っても、全部ウソじゃないですか。本物は違いますからね。いきなり来るから。だから、いまUFOは隠れていますけど、『インデペンデンス・デイ』みたいに、ある日

焼き肉カルビサンドの看板をめざとく見つける佐山聡代表。いつなん時どんな食い物にも反応できるようにアンテナを張り巡らせているようである

格闘か？　芸術か？
FIGHT or ART
それとも
格闘芸術か？

ドーン！と来るわけですよぉ。でも、そうなったら悪役じゃん、オレたち（笑）。

——侵略者ですね（笑）。

佐山　侵略者か、オレたち（笑）。なんていうの英語で？

——インベーダーかな（笑）。

佐山　インベーダーだ、オレたち（笑）。でも、なんでもいいんですよぉ。疲れないことです。疲れたらなんにもできないですからねぇ。

——要するに、心地いい場所があればいいというわけですね。

佐山　そうですそうです。そうしないと、いい発想なんて生まれないですからね。これは全部、猪木の教えですよ。いま猪木がオレに何を教えているかっていうと帝王学なんですね。毎日のように国際電話が来ますけど、「人間ってこうなんだよ」って哲学的な話ばっかですもん。「ああ、なるほどなぁ」って。それでいまみたいな考えになってるんですね。

——宇宙からお達しが来るわけだ（笑）。

佐山　アンドロメダから「猪木だよ～だ」って（笑）。会長は〝ヨーダ〟かもしれない（笑）。

——『スター・ウォーズ』だ（笑）。

佐山　ダメだよぉ、こんなこと書いたら。怖いよぉ～。それでさ、オレがさぁ、デブったジャバ・ザ・ハットだったらショックだなぁ。ジャバじゃマズイなぁ。

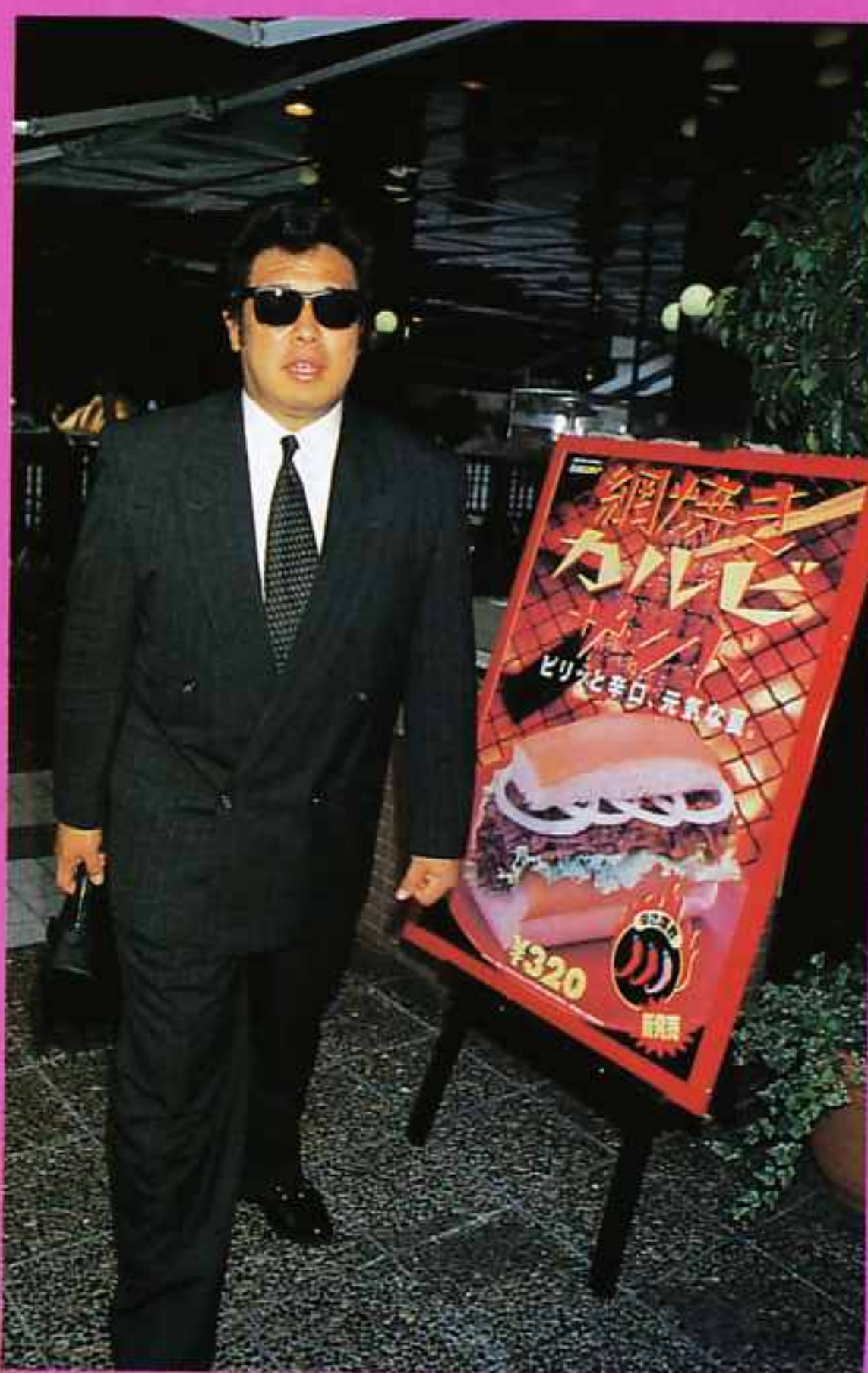
——ガハハハハ！　抜群に面白いな（笑）。

佐山　これが帝王学ですよ（笑）。でも、ホントに猪木さんを通じて一流の人と会う機会が増えたんですね。そういう人たちは凄いよぉ。やっぱり一流の人たちには、しっかりした哲学がありますよ。

——その哲学ってことでいえば、プロとしてリングに上がる場合、それが例えプロレスだろうが格闘技だろうが、最終的には闘いを通じて自分なりの哲学を突き刺す作業になってきますからね。

佐山　そうですねぇ。あ！　あのさあのさ、オレたちが侵略者だったら、『インデペンデンス・デイ』みたいに地球の人が突っ込んできたらどうしよう？　ババババッってやられちゃったらどうしよう？。

——知りません（笑）。でも、猪木さんは世間の人にどう思われようと関係ないというところでは、考え方そのものが「覚悟」ですよね。存在そのものが覚悟みたいなもんじゃないですか。佐山さんもある意味でそうだけど（笑）。

佐山　いえいえ。ボクは石橋を叩いて渡るから（笑）。あのね、やっぱり雲みたいなもんですから。雨を降らしちゃいけないところは降らせないですから。全部計算ずくですから。で、計算しきれない部分ってあるじゃないですか。どうなるかわからない部分。それは「どうってことないじゃないか」と思わないと次に進めないですから。そういうことなんですよ。いい加減ですからねぇ（笑）。だけど、ボクがプッツンきたら怖いですけどねぇ。もう、このガラスを壊して持っていっちゃうタイプですけどねぇ（笑）。

——しかし、自分から振っといて、自分で落とすの好きですね（笑）。最近、プッツンきたことはあるんですか？

佐山　ありますよ～。人生を学べば学ぶほど純粋になりますから。怒りが純粋なものなんですよ。だから……まあ、どうでもいいんですけどね（笑）。

——なんでそこまで話して、途中でどうでもよくなるんですか！（笑）。

佐山　あのね、猪木さんの凄いところはね、例えば詐欺師だとしたら……猪木さんが詐欺師って言ってるわけじゃないよぉ（笑）。ふつうの詐欺師にしても3個か4個先は読んでる。でも、猪木さんは50個ぐらい先を読んでる感じですからね。だけど、ちょっと計算が狂う部分が出てくるでしょ。その部分が〝雲〟なんですよ。だから、コンピューターの世界でいうランダムを持ち合わせとかないと。ただ、「どおってことないよ」って時は、ホントに「どおってことないよ」と思っとかないとダメですよ。それで、やるところはやるでしょ。それが猪木さんですよ。

——デジタルとアナログという二元論じゃなくて、地続きなわけだなぁ。

佐山　そうそうそう。そういうことです、ちゃんとしたデジタルを作るにはアナログという余裕がなければ作れないんですよ。まぁでも、選手のうちは難しいこと抜きに打ち込んだ方がいいですよ。打ち込まないで、あーだこーだいろいろ考えるからおかしくなるんであって。

——じゃあ例えば、強くなることだけを考えているだけでは済まないプロレスラーは、これからどんなことに打ち込めばいいと思いますか。

佐山　わかんない。オレはUFOを強くするだけ。やっぱり猪木イズムであれば、強くなければ話にならないけどね。

——プロレスラーといえば強くなければいけないと。

佐山　ウチはね。他は知らない、わからない。

——しかし、「プロレスと格闘技」の問題にしても、「本気と冗談」「カタイ、やわらかい」とかの問題にしても、猪木さんという人は、わざわざギリギリの所にテーマとプランを置きますよね。この表現は村松友視さんのパクリだけど（笑）。

佐山　昔はアナログだけだったんだけど、デジタルが出てきて、より突き詰めて、いいものをつくることができるようになったんでしょうかね。とにかく、いい時代を作りたいですね。

——やっといいこと言ってくれた（笑）。

佐山　みんなで400ヤード飛ばす時代。

——ガハハハハ！　またそれだ。

佐山　オレ、タイガー・ウッズより飛ぶからね。これ、書いといてよぉ。これが一番重要なんだから。うふふふ。

【8月11日、東京・全日空ホテル近辺にて収録】

SAYAMA SATORU

スーパー宇宙パワー or 木村浩一郎

教えて木村さん!!

ヒクソンを持ち上げたのは
宇宙のパワー？
それとも格闘技の力？

この男（宇宙人）、FMWでデビューをし、W★INGでは格闘三兄弟を名乗る。前田日明とも肌を合わせ、ヒクソンと闘ったかと思えば、高野拳磁とデスマッチをしてみる。現在は、DDTマットに上がりつつ、シューティングジムを率いてたりもする。この宇宙的幅の広さは一体何処からくるものなのか？　今、宇宙の謎にせまる!!

聞き手／チョロ
interview by Choro
撮影／戸成嘉則
photographs by Yosinori Tonari

今一番強いのは高阪選手じゃないですかね。勝てる気しないッスもん。

——ところで宇宙パワーさんの格闘技のバックボーンになるものというとなんですか？

宇宙　ヤッパリアマレスデスカネ。

——ヒャヒャヒャ（笑）。ちゃんと宇宙語になるんですね。宇宙さんはアマレスにこだわりがあると。

宇宙　ッテイウカ、コダワリガアルノハ、クミワザデスネ。

——アマレスといえば前号で谷津さんのインタビューをしたんですよ。谷津さんは、「キックボクサー、相撲取り、柔道家あたりとやるのが一番得意なんだよ」って。それで「一番難しいのがアマレスだな。アマレスとやると〝毒対毒〟だからな」とか言ってましたね。

木村　アア、ヤツサンデスカ（ワライ）。デモ、アマレスッテイウノハ、カンセツガナイジャナイッスカ。

——確かにそうですね。……すみません、俺、宇宙語得意じゃないんで、やっぱり木村さん呼んでもらえます？

宇宙　アアイイデスヨ。チョットマッテテクダサイ。

木村　ちわッス（笑）。もうどっちでもいいッスよ。宇宙でも木村でも。

——エッ！　いいんですか？

木村　俺が言うんだからいいッスよ。

——ありがとうございます（笑）。

木村　確かに谷津さんはアマレスのトップクラスの選手ですけどね。谷津さんが凄いのは、重量級では片脚タックル、両脚タックルはなかなか入らなかったんですよ。その中でタックルとかを平気で難なくこなしてたんですよ。そういう意味じゃ運動神経抜群なんじゃないですか。でもそれで「余裕だぁ」って言われても、どうかなぁ（笑）。

——最近はアマレスのトップクラスでも極める技術を持たないと勝てなくなってきましたよね。

木村　そうッスね。勝てないッスね。でも真面目に谷津さんとかが取り組めば勝てるんじゃないですかね。下地は一番ある人ですから。ただ真面目にやるかどうかなんですけどね。

——ヒャヒャヒャ（笑）。

木村　そう思いますけどね。

——突然ですけど、宇宙パワーはUFOには乗らないんですか？

木村　宇宙パワーではUFOはないッスよ。佐山さんは、いくら宇宙パワーだって言っても宇宙仮面って言うんスよ（笑）。

——ウヒャヒャヒャ（笑）。

木村　いつもオレと会うと、「宇宙仮面早く取りなよ〜」って言うんですよ。

——一緒に練習はしてるんですか？

木村　たまにですけどね。

——小川（直也）選手はどうですか？

木村　強いですよ〜。ただ柔道には足関節がないんで、取れたりもしましたけど、でもアレで足関節とか覚えたら誰もかなわないんじゃないスか。

——はぁ！　佐山さんから、宇宙仮面じゃなく木村浩一郎個人としてUFOへの誘いはあるわけですね。

木村　そうッスね。でも近々UFOの道場が出来るんで、それには協力してくれと言われてるんで、道場には行こうと思ってるんですけど。

——ところで木村さんのプロレスの師匠って誰になるんですか？

木村　師匠は別にいないんですけど、プロレスを最初に教わったのが大仁田さんでしたね。でもそれでちょっとバカにしちゃったんですよ。リッキー・フジとかとスパーリングやって余裕で勝っちゃったりしましたからね。三宅（綾）とか上野（幸秀）とか。

——余裕で勝っちゃいましたか（笑）。

木村　みんな強さを持ってて、その上でプロレスをする。そうすれば何やってもいいんスよ。いざという時に強さを出せるのがプロレスラーだって思ってましたから。

——そうでなきゃ困りますけどね。木村さんはリングスにも出てましたよね。最初は（グロム・）ザザ選手とやったんですよね？

木村　そうです。でもザザはメチャ強いッスよ。っていうかロシアの奴らはおかしいくらい強いッスよ（笑）。

——ザザ選手もアマレスですよね。

木村　だって奴は世界選手権出てる人間ですからね。その辺は谷津さんが言った〝毒に毒〟っていうのわかりますよ。やっぱアマレスはアマレスには勝てないッスよ。勝てないっていうか、一番嫌いなタイプですよ。

——はぁ〜。次が長井（満也）戦ですよね。確か30分近くやりましたよね？

木村　28分5秒です。

——またしっかり覚えてますね（笑）。

木村　長井戦は自分が試合投げちゃったんですよ。当時は今みたいに技術がなかったんですよ。関節も全然やってなくて……。でもそこで、秒殺されて大差があったら、俺は多分リングスに入ってると思うんスよ。

——それはどういうことですか？

木村　大学の卒業試験で何も身体を動かしてない僕が、出来ちゃったじゃないですか。そこでちょっと勘違い入っちゃったんですよ。

——勘違いしちゃいましたか（笑）。でもその後もリングスには結構出てますよね。前田さんともエキジビションでやりましたし。

木村　そうッスね。でも今は対抗意識がありながらも、みんな仲がいいじゃないですか。

——そうですね。今は流派が違っても、一緒に練習しようっていう方向ですよね。

木村　そうッスよね。当時はそういうのがなかったから、ひねくれちゃったのかもしれないですね。途中で、もういいんじゃないかなって。もう俺も就職して真面目になろうかなって（笑）。

宇宙パワーの宇宙語によるマイクアピールにも注目。「オマエラ、ゼンゼン、ツヨクナッテナイナ〜」。

92・3・26、エキジビションながら前田日明と対戦。前田、ヒクソン、この二人と対戦しているのは、高田、安生、山本、そして木村ぐらいなものである。

92・1・25、リングス初の日本人対決として長井満也と対戦した木村。さすがに大学の卒業試験と二足の草鞋はキツかったのかＫＯ負けを喫している。

——ひねくれちゃいましたか（笑）。

木村　だからリングスでも俺が強ければ良かったのかもしれないですけど、あんまり強くなかったし。

——エッ！　強くなかったんですか？

木村　強くないっスよ。俺、自分で強いと思ったこと一度もないんで。

——エエッ！　一度もないんですか？

木村　ないッス、ないッス。つえーなーんて一回も思ったことないッス。

——でも俺より弱い奴はいっぱいいると（笑）。

木村　そう。（横にいるＤＤＴの選手を指さし）コイツら弱いッスよ。

——それじゃあ木村さんが今強いと思う選手って誰ですか？

木村　高阪選手は、マジで強いと思うんですよ。今一番強いのは高阪選手じゃないですかね。勝てる気しないッスもん。絶対しない！（キッパリ）。

——また断言しますね（笑）。他に強いと思う選手って誰かいます？

木村　桜庭さんとかは、技術は上手いと思うんですけど、どうかなぁと思って。荒っぽいファイターとやったら、どうかなぁと思って。だってカメになるの彼ぐらいでしょ。相手がたまたま殴ってこなかったらいいッスけど。

——（ゲーリー・）グッドリッジとか（タンク・）アボットだったら間違いなく殴ってきますよね。

木村　そうそうそう。そういう部分でどうなのかなぁと思うんスけど。

——ホント上手いって感じですよね。

木村　メチャ上手いッスよね～。でも桜庭さんも良かったッスよね、今みたいな時代になって。桜庭さんも従来のプロレスだったら全然ダメですよね（笑）。だから格闘技はよくないッスよ。強いヤツたくさんいますもん。「最強、最強」はもういいッスよ。

——確かに、モノサシの規格が統一されてないのに、誰々が最強っていうのも無理はありますよね。それで格闘技をやってる人は……。

木村　プロレスが嫌いでしょ！

——多いですよね。木村さんも、最初プロレス界に入ってみて幻想が崩れたっていうところがあったんですよね。

木村　プロレスは好きですよ。ただ中に勘違いしてるヤツがいるでしょ。おとなしくやってればいいんですよ。おとなしく。

——おとなしく（笑）。

木村　テメエ弱いクセに何吠えてるんだよ、っていう奴。そういう奴はちょっとね、シバキたいと思いますね。

——シバキますか（笑）。

木村　でも強さオンリーで押し切るのはプロレスでは難しいじゃないですか。ただタイガーマスクは強さもあったじゃないですか。

——それで魅せてくれましたしね。

木村　それなんですよ。俺が目指してるのは。

——木村さんは昔から、プロレスと格闘技は別物と言ってますよね。

木村　ずっとそう言ってますよ。

——まったく別ものですか？

木村　俺は、プロレスのリングに上がればプロレスラーで、格闘技のリングに上がれば格闘家だと思ってるんで。ただ練習でやってることは一緒ですよ。俺はプロレスの練習は一切してませんから。

——エッ！　木村さんはプロレスの練習は全くしてないんですか？

木村　ロープワークとか受け身とか大嫌いなんで。でも出来ますからね。出来るって言うと語弊がありますけど、まあポーゴに教わってますから（笑）。

——エッ！　ポーゴ選手に！　ポーゴ選手はコーチとしてはどうでした？

木村　厳しかったッスよ。試合前練習３時間ですよ。ホント地獄ですよ。ＴＮＴとかアイスマンとかと一緒に（笑）。徳田（光輝）なんかいつもやらないんですよ。「ヒザ痛い」とか言って。ムカつきますよ、あのバカ。それでルチャの時間があったんですよ（笑）。

——ルチャの時間ですか（笑）。

木村　あったんですよ。それで斉藤彰俊が出来なくて、キレちゃって、「もういい、こんなのは!!」って突然キレてね。あの時は爆笑しましたね（笑）。

——木村さんはどうしてたんですか？

木村　俺は結構そういうの上手いんですよ。

——ルチャも自信があると？

木村　柔軟に。結構出来るんですよ。自分でも器用かなと思うんですよ。ルチャもいけるんじゃないかなぁって（笑）。

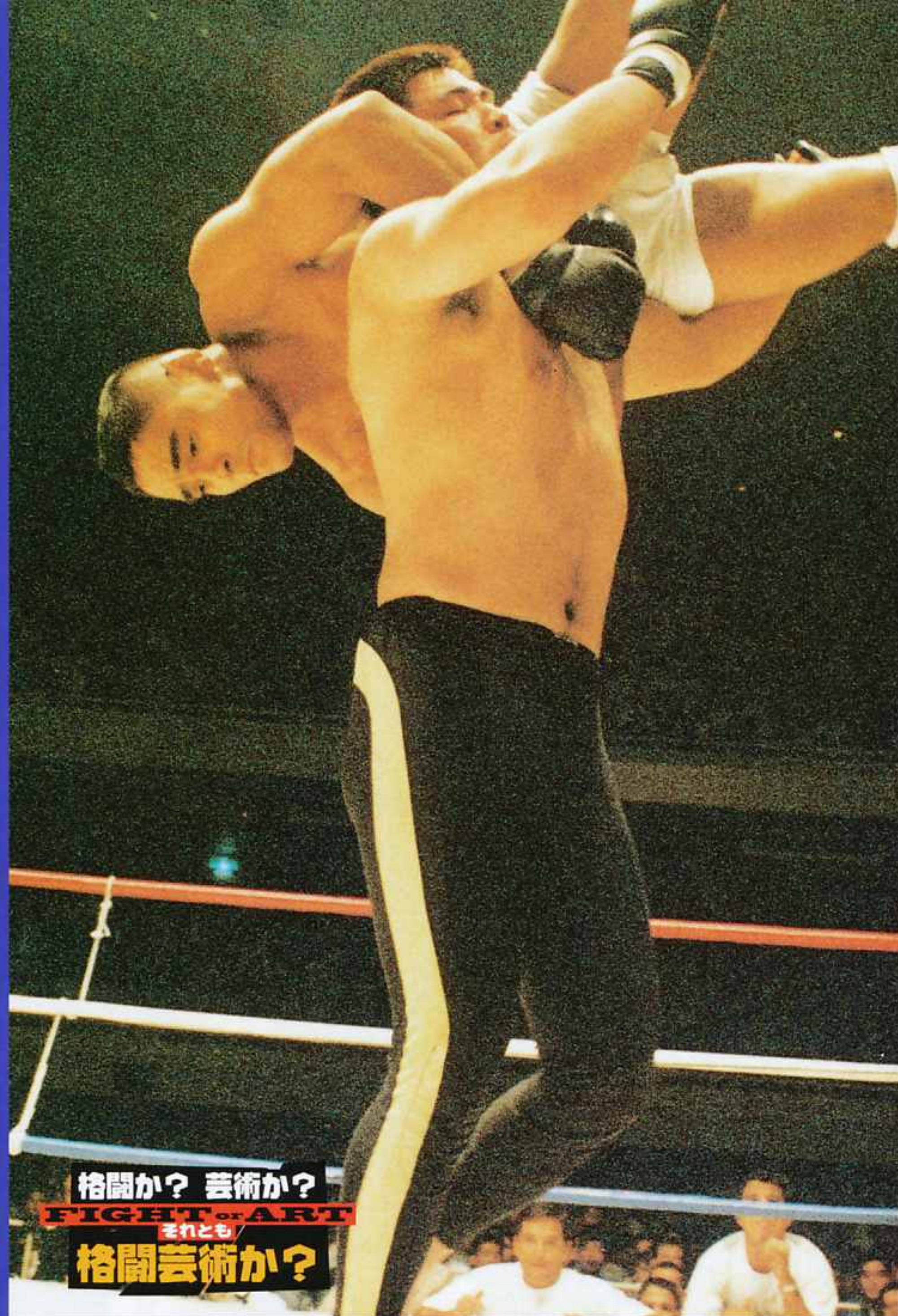
——でも木村さんは、プロレスは難しいって言ってますよね。

木村　だからプロレスが一番難しいんですよ。それは今でも変わりませんよ。

——宇宙パワーはしばらく続けるつもりなんですか？

木村　マスクをするとプロレスの幅が広がるじゃないですか。マスクを脱いでもプロ

95・6・19、冴夢来プロレス後楽園大会。当時、木村と同じくチーム・ウルフの一員だった秋山文生が断りもなく剛竜馬の冴夢来プロレスに入団した。それに激怒した木村らがメイン終了後、突如乱入し、秋山を半殺しにしてしまった。その完全に常軌を逸していた行動は“興行破り”と言われ、マット界に波紋を投げ掛けた。

格闘か？ 芸術か？
FIGHT or ART
それとも
格闘芸術か？

95・4・20、バーリトゥード・ジャパン・トーナメント一回戦、木村は元K—1戦士＆ボブスレー・オリンピック代表のトド“ハリウッド”ヘイズに不覚を喫してしまうが、選手の棄権もあり念願のヒクソン戦を実現させた。得意のタックルでヒクソンを宙に浮かせた木村だったが、最後はスリーパーで無念のタップ。

レスラーなんですけど、ただ木村浩一郎っていうのは、なんかカラーがあるじゃないですか。

—ヒクソンとやってますからね。

木村 ヒクソンとやったっていうのもあるし、興行破りとかもしましたし。

—あ～、ありましたね、興行破り（笑）。ヒクソンとはまたやってみたいですか？

木村 やってみたいですね。でも俺だけですよね、ヒクソンに自分から仕掛けていったのは。

—ですよね。持ち上げましたからね。

木村 持ち上げて自分の中では落としたつもりだったんですけどね。あ～、ホントに道場破り行こうかな（笑）。

—あの時より確実に強くなってるっていう自信があるんですね。

木村 あの時よりは確実に強くなってますよ。ヒクソン戦の時はちっとも練習してなかったスから。

—エエッ！ ちっとも（笑）。でもあの時ヒクソンは、木村さんとの試合前に控室で「次はキムラか、強敵だな」って言ってるんですよ。

木村 ほんとッスか。でもあの試合終わった後、ヒクソンの子供に、「パパ（宙に浮かんで）遊園地みたいだったね」って言われたらしいッスよ。クソガキ、絞めようかと思いましたよ（怒）。

—でも、ヒクソンにとっては強敵だったわけですよ。

木村 自分がアマレス出身だったからじゃないですかね。ヒクソンにアマレスの技術はないですからね。あのタックル切れないと泣いちゃいますよね（笑）。あのへぼタックルで倒れちゃいけませんよ。

—高阪選手も桜庭選手も言ってましたけど、「やればいけるんじゃないか」ってみんな結構言いますよね。

木村 レスリングが強ければ倒されることはないと思いますよ。桜庭選手とかも倒されるとは想定はしてないでしょうね。俺もそれはしてませんから。

—倒されない自信はあると。

木村 レスリング的な技術で言えば、今の格闘技界で頑張っている選手の方が上でしょうね。ただその後の極めの段階ですよね。そこからヒクソンが何を持っているかわからないんで。ただ今度やるんだったらもっとマジメになりますよ。

—マジメに練習しますか（笑）。

木村 でも常にそういうことを想定してプロレスと格闘技は常に紙一重の所に置いておかないといけないですよね。身体も精神面も。

—プロレスと格闘技はまったく別のものと言いながらも、紙一重に置いておかなければならないということですね。

木村 そういうのって難しいですよね。だから要は、リングスやパンクラスの選手っていうのは、練習も試合も同じ動きじゃないですか。

—そうですね。

木村 ということは同じ線上にいられますよね。例えば、俺のやってるプロレスは、それとは違うことをしなくちゃいけないんで。そうすると身体もそうですし、例えば格闘家の身体で、プロレスの攻撃を受けたら、ウワーッってなりますからね。今、船木選手がラリアット受けたら、痛いでしょ（笑）。

—そりゃ痛いでしょうね（笑）。

木村 そういう意味では、リングスとかパンクラスとか高田道場の選手は羨ましいですよね。

—いま宇宙パワーでやってるプロレスもあるから、幅が広いんでしょうけど。勝手な意見なんですけど、宇宙パワーでバーリトゥードの大会に出て欲しいんですけどね。

木村 若松（市政）さんは本気で言ってましたからね、「木村さん、アルティメットは宇宙パワーで出て下さい」って。喰らわすぞ！ 出るわけねェだろ、視界これしかないのに（怒）。

—プロレスの幅の広さが、同時に深さであるという幻想を証明するためにも、宇宙パワーで出て欲しいんですけどね（笑）。例えば入場の時だけでも宇宙パワーで出てきたりとか。

木村 ブーイングされたりしてね（笑）。プロレスはそういう発想が出来るんで奥が深いじゃないですか。でも「ＰＲＩＤＥ」とかの試合っていうのは一回やっただけで終わっちゃうんですよね。例えば俺がヤーブローとかとやって勝ったら、ガーッと持ち上げられるじゃないですか。でも格闘家は、例えばこの間ヤーブローに勝った選手って誰？って感じじゃないですか。

—確かにそうですね。

木村 「名前言ってごらん」って聞いても一般の人は知らないじゃないですか（笑）。だからそういう意味じゃかわいそうッスよね。

ヒクソン戦の時はちっとも練習してなかったスから。

その辺がプロレスラーを嫌うところじゃないですか。絶対そうッスよ。でもみんなプロレスラーがどんだけスゴイかわかってないッスよ。喧嘩してどっちが強いかっていったらプロレスラーですよ。喧嘩で腕ひしぎ十字やったりヒザ十字やってるの見たことないスからね。

——確かに喧嘩でヒザ十字は滅多に見ませんね（笑）。

木村　身体も違うしね。俺もそういうのを口にしちゃうから格闘技の方から嫌われちゃうわけでしょ。じゃあ逆にオマエらプロレスやれんの？　飛んだり跳ねたり出来るの？　じゃあ流血出来る？　ロープワーク出来る？　そこだけでしょ、要は。

——逆に言えば、それがあるから別ものという見方もできますよね。

木村　だから、分けるなら分ける、くっつけるならくっつけるで、お互い刺激しない方がいいんですよ。それをUWFが出現しちゃったから、ゴチャゴチャしてくるんですよ。

——でも、今の格闘家はUWFに憧れてやり始めた人が多いですからね。

木村　そうッスよね。でも格闘家に出来ないことをプロレスラーがやってるからいいんじゃないですか。逆に言えばプロレスラーが今、格闘家になっちゃってるわけですからね。

——まあ一部だとは思いますけどね。

木村　要は俺なんかが取り上げられるのは、格闘技の世界にいた人間が、宇宙パワーやったり、宇宙語喋ったり、末端のインディーと言われる団体を引っ張っていったり、そういうのが面白いだけでしょ。でもそんなの俺が好きでやってるんだから、ほっといてくれって感じですよ（笑）。

——ほっといてくれ（笑）。

木村　それで妨害されたら絶対潰しますよ。ホントに難クセつけられるのが大っ嫌いなんですよ。だから根底にある強さの部分と、やるべきことをしっかりやってれば、あとは何をやってもいいんじゃないかっていう。ほっとかれたらホントは困るんですけどね（笑）。

——正直ですね（笑）。

木村　でも、ナメられるといけないから、ウチの選手でも度が過ぎれば怒るし、ふざければ殴るし、練習ついてこなけりゃ、ボコボコにするしね（笑）。

——その辺は佐山イズムですね（笑）。

木村　それは当たり前だと思うんですけどね。でも昔ほど格闘家はプロレスのことを言わなくなりましたよね。

——最近はあんまり聞かないですね。

木村　ちょっと前まで格闘家はプロレスラーを見て、「お前ら弱いクセになに威張ってるの。じゃあ、出て来いよ」っていう意見だったでしょ。でも最近は格闘技の方にも光があたってきたんで今はおとなしくしてるわけですよね。あとプロレスラーの強さを認めてきたっていうのもありますよね。それに今はプロレスラーも格闘家を刺激しませんよね。ひょっとしたら勝てないかもってわかってるんですよ、プロレスラーは。

——わかっちゃうんですか？

木村　いやマジメに。身の程知らずというか、でかいこと言ってマスコミ煽って、その状況作られたら終わりですからね。だからプロレスラーはホント練習しないと勝てませんよ。

——それ用の練習をですね。

木村　個人差にもよりますけど、半年なら半年マジメにやれば、そこそこは強くなるんじゃないですか。あとやっぱり技術吸収っていうか、人に教わるっていうのは、自分のプライドを捨てないと出来ないじゃないですか。

——高田選手は35歳になってマルコ・ファスの所に行きましたけれども。

木村　大変ですよ〜。これから覚えるんでしょ。だってヒクソンなんて子供の頃から宙づりにされたり、回されたりしてるんですよ（笑）。だからやっぱり環境もありますよね。でも高田道場とかいい環境ですよね。今度そういうところにも顔を出したいなって思ってるんですよ。企画して下さいよ、『紙プロ』で。

——それは面白いですね。宇宙パワーの日本全国道場巡りとか。

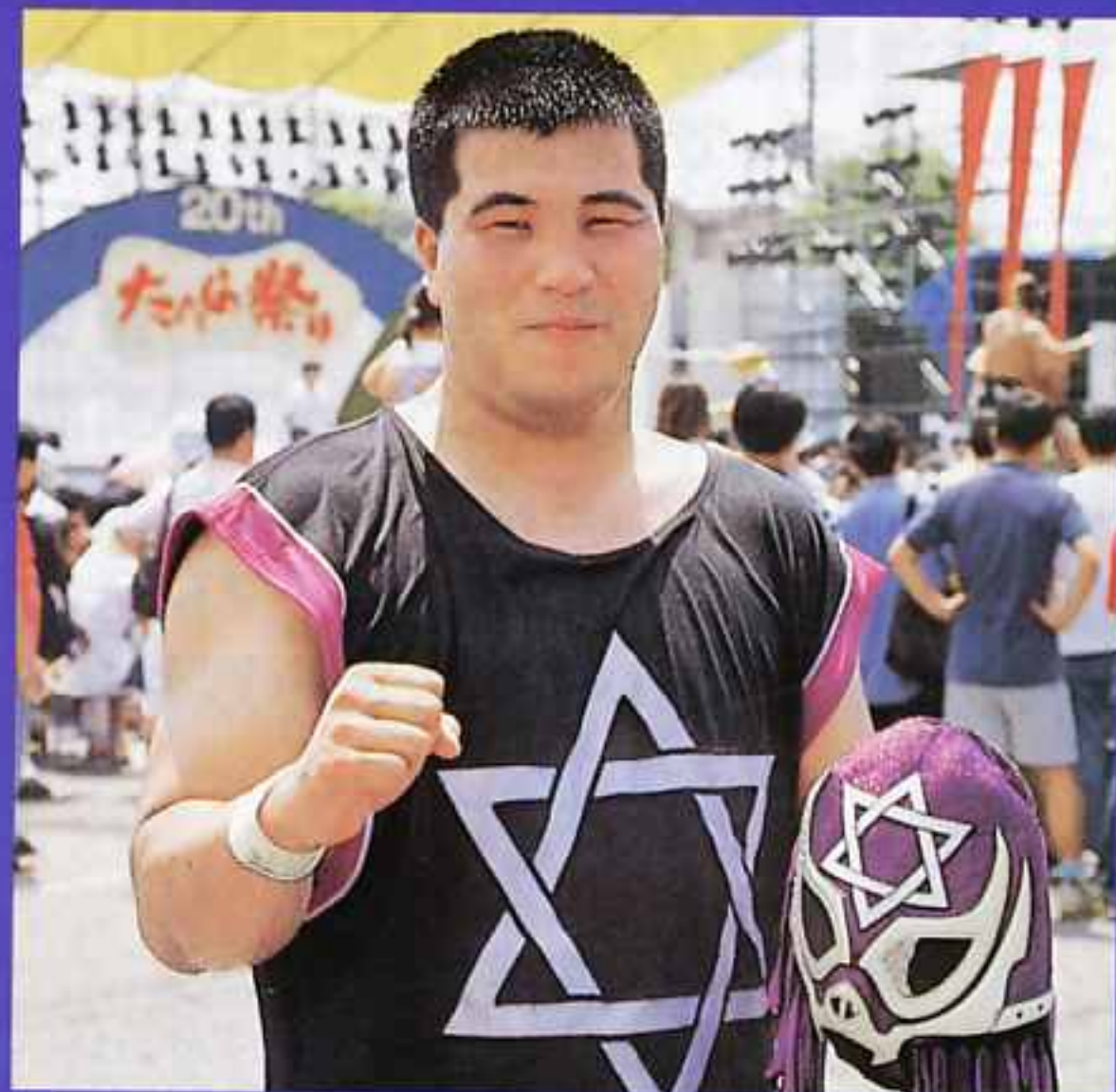
宇宙パワー　ソレ、イイッスネ。

——ところで宇宙さんの出身地はどこでしたっけ？

宇宙パワー　……モクセイ。アッテマスヨネ？（ワライ）。

——合ってます。今日はありがとうございました（笑）。

【8月2日、川口市のうなぎ屋さんにて収録】

スーパー宇宙パワーは、宇宙的な破壊力のキックとスペースサブミッションを武器にDDTマットでは敵無し状態!!

木村浩一郎■昭和44年11月18日、群馬県出身。高校時代はアマレス全国大会２位。その後サブミッションアーツ・レスリングで三年連続優勝を成し遂げる。FMW〜W★ING〜RINGS〜新格闘プロ〜西日本〜フリーを経て現在はDDTで活躍中。と同時にシューティング北関東ジムをも率いる実力者である。
スーパー宇宙パワー■本名・宇宙力　出身地・木星　身長183cm〜40m　体重98kg〜250t　血液型・不明　主にDDTマットに現れる。

DDT日程

9／12　お祭りプロレス
板橋区大山都税事務所前特設リング

9／29　北沢タウンホール
大会タイトル「星に願いを……dramaticな夜に乾杯!」なお、この大会は9月生まれの方は全員入場無料となる。入場時に写真貼付の身分証明提示のこと。更に当日が誕生日の方には、DDTからバースデープレゼントを企画中。このバースデーイベントは毎月行っていく予定です。
お問い合わせ【DDT】03-3356-8493

インディーのアマレス王が格闘技を斬る！

福田雅一 インタビュー

総合格闘技を含んだものがプロレスなんです！

福田は、その輝かしいアマレスのキャリアと恵まれた体格で大器の呼び声も高い。何と言っても、我らが毒舌大将・谷津嘉章が本誌前号に掲載したインタビューで、他団体にもかかわらずなぜかいきなり「後継者」に指名したほどの逸材なのである。今回、新日帰りの福田に格闘技についての質問をぶつけてみた。さばさばとした受け答えの中に見え隠れする、アマレス出身者独特のプロレス観を読み取れ！

構成／**坂井ノブ**
interview by Nobu Sakai
撮影／**戸成嘉則**
photographs by Yosinori Tonari

福田　今日の取材って、『紙プロ』さんでしたっけ？　なんか谷津さんのインタビューがメチャクチャ波紋を呼んでるんですけど（笑）。いろいろ言われちゃいましたよ。でも、谷津さんとちゃんとしゃべったことは1回しかないんですけど。おかしいなあ……。

――1回しかしゃべってないのに後継者に指名されちゃったんですか？

福田　高校、大学の先輩だから、そう言っていただけるのは光栄なんですけどね……。

――アハハハ！　福田さんはアマレスで高校、大学と輝かしい戦績を残して、卒業後はプロへと進むわけですが……。

福田　知ってますか？　僕が始めにリングス入ったこと。

――はい。

福田　いま、『ワールド格闘技』の編集長をやられてる樋口郁夫さんに「リングスどうだい？」って言われて。それでテストを受けて、合格しました。

――入ってみてどうでした？

福田　入って初日に股割りでじん帯を切っちゃたんですよ。内出血になりまして……。僕は医者に行かしてもらいたかったんですけど、行かしてもらえなくって。

――相撲の世界では股割りって、まずじん帯を切るもんだってどっかで聞いたんですけど。

福田　場所がちょっと違ってたんで。考えが甘かったんでしょうね。

――ある程度はレスリングを活かしたU系の闘い方がしたいっていう気持ちはあったんですよね。

福田　したいっていうよりも、その方が

6月5日に幕を閉じた新日Jr.の祭典「ベスト・オブ・ザ・スーパージュニア・」にシリーズ出場。現場監督の長州からは、「しょっぱい身体しやがって」とさんざん言われたらしいが、愛情の裏返しでもある。アマレスの絆は深い。素人には踏み込めない世界なのか。

楽……っていうか覚えることが少ないって感覚ですかね。受け身よりも。

――格闘技とかアマレスとかやってた人ってプロレスに対して偏見持ってる人が多いですよね。

福田　僕もありましたよ。プロレス大好きだったのに大学のときは見なかったですもん。格闘技を純粋に見てたから。固かったんでしょうね、考え方が。

――はじめはいろいろプロレスに幻想をもってたりしたんですよね。

福田　だから、タックルとか、部分部分で見るとアマチュア出身の選手はもちろんうまいですけど、それ以外の選手は、例えばU系の選手でもヘタクソなんですよ。

――俺の方ができるぞ、と。

福田　そしたら「なあんだあ」ってなるじゃないですか。キックとかそういう優れた部分もあるのに、そこは見ないで……。そういう部分でプロレスをあんまり見なくなって。で、パンクラスができて「なるほどな」っていうところがあったんですよね。パンクラスはアマレスに似てますから。

――じゃあ、なんでパンクラスにいかずにリングスに入ったんですか？

福田　う〜ん。それはリングスを紹介されたからっていうか……。そのぐらいの感覚だったんですよ。だから、そこが「俺は甘い」って自分で思ってるんです。

――最近、格闘技側の選手が「本当に強い選手が『プロレス最強』というはいいんだけど、強くもないのに言うな」という類の発言が目立ちますよね。それを60キロ、70キロの選手が言うんですね。なんでこの人たちはこんなに自信を持ってるのかなって思うんですけど（笑）。

福田　勝てそうだなって思うんでしょうね。だけど、やっぱり体重差は大きいですから。技術があって体重差があったらどうですかって聞いてみてください。

――以前の福田さんと同じように偏見を持ってるんでしょうね。

福田　僕も大学生のときは、そういう感じだったんですよ。だけど、プロレスがあってほかの格闘技がクローズアップされてるってことがわかってないんですよ。

――福田さんが見てプロレス向きのシューティングの選手っていますか？　例えば佐藤ルミナ選手なんかは？

福田　ちっちゃ過ぎますよ。

――そうすると朝日昇選手も。

福田　ダメでしょ。エンセン（井上）さんぐらいですよ。あとは慧舟會の選手ぐらいですね。

――福田さんにとって「ホントに強い」っていうのは、どういう感じになるんですか？

福田　以前、長州さんが安生（洋二）さんがやった時に、なんかスパーリングのような試合だったですね？　ああいう動きですね。極めるとこまでいかないんですよ、要は。

――相手をコントロールして極めさせないということですね。やっぱりアマレスがベースで体重があればかなり強いということですよね。いま、総合格闘技の世界でアマレスの重要性がクローズアップされてきてますね。アルティメット大会ではマーク・ケアとか、マーク・コールマンとか活躍してますけど。

６月14日にはキャプチャーの地下室マッチにも出場。ニーハオと対戦した。プロレスの振り幅を楽しめるのも福田に才能があるからこそである。

福田　彼らは自分たちのアマレスの技術に関節技とかを取り入れて、お金儲けになったらいいなって思ってるだけですよね。

——福田さんはああいう闘いには興味はないんですか。

福田　あんまり僕はああいう競技自体、好きじゃないんです。

——ケンカの延長線上みたいなイメージがあるわけですか？

福田　相手次第ですね。自分の経験のためとか、自分の名前が上がるならば出てもいいです。ただ、いまの練習じゃ、出たくないですね。最低半年か1年は練習をしないと出れません。小さい団体でもプロレスラーって名前があるから、もし負けたらそれだけでも迷惑がかかっちゃうじゃないですか、他の団体に。

——いざ、バーリ・トゥードとなるとアマレス技術だけでは太刀打ちできませんか。

福田　アマレスは極めることは出来ませんから、アマレスの選手をいきなりバーリ・トゥードに出しても勝てないと思いますよ。ロマンはあるけどナンセンスですね。

——ロマンあるけどナンセンス（笑）。これまでのアマレス選手、例えば谷津さんは、完全に「俺はアマレスを汚したくない」と言い切りますよね。

福田　で、プロレスはプロレスと。

——そう。完全に分けて考えてますね。その後の高橋さんや桜庭さんとか、完全にアマレスをベースにプロレスを考えてる。福田さんのポジションって、その中間ですよね。

福田　そうですね。どっちとも言いたくない。まあ卑怯なんです。でも、新日の選手ってその中間ができるんですよね。

——福田さんとしては、強さをうちに秘めたプロレスに軸足をおいた道なのか、それとも強さをさらけ出す格闘技の道に進むのか。これからどっちか専念する気はないですか。

福田　どっちに進むって話じゃないですね。1本の道なんです。分かれてないんです。バーリ・トゥードもできて、受け身もできてっていう。だから、欲張りなのかもしれないですね。

——でも、それが本来のプロレスラーの姿なんでしょうけどね。アマレスを出身者の中で一番柔軟な考えですね。

福田　そうですか？　まあ、谷津先輩のインタビューを読んでて凄く残念なのは、自分のやってる職業を悪く言うっていうのはねえ。ホントにそう思ってるのはわかるんですけど。誰が強いとかじゃないんですね。U系の選手でも格闘技の経験がない選手がアルティメットで勝てれば、それは凄いことだって思いますよ。だから、高田（延彦）さんは野球出身ですから、高田さんが勝てれば凄いことだと思いますよ。ホントにプロレスに入ってからだけの練習だけで勝ってたわけですから。それが一番わかりやすいじゃないですか。

——福田さんが、いま取り入れたい格闘技ってありますか。

福田　ボクシングかキックボクシングですね。

——打撃ですか。

福田　最低でもその防御だけは覚えたいですね。バーリ・トゥードだったらボクシングって有効ですからね。総合格闘技を含んだものがプロレスなんですよ。

——そうですね。でも、猪木さんはいま格闘技の方に目が向いているんですよね。

福田　現在のプロレスに危機感を感じてるんじゃないですか？

——「新日本プロレスがプロレス＝闘いであるということを忘れてる部分が非常に大きいというか」と常々言ってますよね。実際、新日本もね、パッと見ただけではストロングスタイルな部分は陰を潜めてますよね。

福田　でも、客足は伸びてるわけですよ。そういう興行面での実績を考えたら、凄いなっていう部分もあるし。

——団体としての軸足をどこに置くかだと思うんですけど、夢ファクは将来的にはどこに置くつもりですか。

福田　俺は不況に強いのがいいです。

——アハハハ！　不況に強いレスリング（笑）。やっぱり現状はつらいですか。

福田　みんなで頑張れば、よくなりますよ（笑）。

【98年8月3日、熊谷・夢工場にて収録】

福田雅一■足利工大付属高校、日大のアマレス部に所属。国体で2位になり、エスポワール（20歳以下）の大会で優勝を成し遂げる。レッスル夢ファクトリーでデビュー。身長１８８センチ、体重102キロ。谷津の「後継者」発言で困惑の日々を送る26歳。

多重アリバイ S

multiple ALIBI "S"

1990.9.29

1992.5.22

第1回 アポロ菅原 PART1

平成も10年目を迎えたいま、いったいどれだけのプロレスファンがSWS（メガネスーパー・ワールド・スポーツ）のことを覚えているか定かではない。Sとは何か？　真夏の夜の隅田川の花火のように激しく盛大に打ち上がったものの、やはり花火であるがゆえにあっけなく散り去った幻の団体である。プロレス界初の複数道場制、大規模なスポンサーの参入、実験的な数々の試合スタイルなどいま頃になって各団体が取り組んでいることをじつは7年も前に実現させていたのである。不況の波に晒される現在のプロレス界よ、いまこそSに学べ！

聞き手／吉田豪
Interview by Go Yoshida
撮影／浜田孝一
Photographs by Koichi Hamada

Sは数々のトラブルを抱えていた。異なる団体から選手をかき集めたせいで、試合スタイルの違い、プロレス観の違いが対立と派閥抗争を生み、それが原因で団体を滅ぼすことになる。アポロ菅原は、ある意味でその犠牲者と言ってもいいだろう。事件が起こったのは第二次UWF崩壊直後の91年4月1日の神戸大会。アポロは鈴木みのると対戦、リング上で「や〜めた」と言い残し試合を放棄した。これを報じるマスコミは完全に鈴木（＝UWF）支持、アポロ（＝SWS）バッシング一色。菅原への取材は一切なく、鈴木のコメントだけが誌（紙）面に大きく取り上げられた。当時は、『週プロ』がSから取材拒否を受けていたこと、UWF神話もリアリティを失っていなかったことなどから、業界内にも悪いイメージが少なからずあったのも事実。

鈴木は、この事件をキッカケにバンクラス幻想の根幹となる「いつ、何時、誰に対しても自分を曲げない男」というイメージを植え付けることに成功したのだった。逆にアポロは、この日以来、リング上でとくに目立った活躍はしていない。えらく差が付いたものである。それでもアポロは、あの日、あのリング上で何があったのかを公には一度も語っていないのだ。「何かがおかしい」と、本誌編集部は思う。

一方的に、そして盲目的に「鈴木が正しい」と誰もが信じて疑わなかったあの事件から7年経ったいま、アポロ菅原が初めて「あの事件」の真実と自分自身を語る！

アポロ菅原■昭和29年2月10日、秋田県出身、O型。昭和54年9月17日九州九電記念体育館、vs高杉正彦戦にてデビュー。国際プロレス崩壊後は全日本、パイオニア、新日本、SWS、NOW、フリー、NOW、東京プロレス、フリーという順番で各団体を点々と放浪。

——昨日、あるプロレス評論家の方に話を聞いたら、「菅原さんは常識人だ」とおっしゃってたんですよ。

アポロ そうですか（笑）。

——さっき菅原さんは「自分で自分のことを常識人って言う奴は常識人じゃない」って言われてましたけど、ご自分では常識人だと思いますか？（笑）

アポロ そうは思ってないけどね。

——ですよね（笑）。では、まず素朴な話なんですけどプロレス入りのキッカケの話をうかがいたいんですが。

アポロ 13歳の頃からプロレスラーになりたくて。月刊時代の『ゴング』とか『プロレス&ボクシング』をず〜っと毎月買ってたから。『ゴング』は創刊号から持ってたよ！ 秋田に住んでたから1日遅れだけど『東京スポーツ』も買ってたし。

——マニアですねえ（笑）。

アポロ 雑誌読んだりすると、プロレスラーはケタ外れの身体をしてる。食事の量も物凄いから、「これは無理かな」と思ったよ。実際に見るとそうでもなかったけど（笑）。

——はあ（笑）。プロレス入りが遅かったのはそういう理由なんですね。それから遠藤光男さんのジムでボディ・ビルを始めるわけですか？

アポロ ボディ・ビルは14歳から始めたんだよ。まあ、ブルーノ・サンマルチノがドラム缶を潰す記事を読んだりして、「ウワァ〜、すげえなあ」と思ってね（笑）。そういう話が大好きなの。

——ダハハハ、「俺もやれるようにならなきゃ」って。

アポロ そうそう。その頃、菊池孝さんがレスラーの食事とかを紹介していてね、あういうのを読むのが大好きで。

——「馬場の主食は肉です」とか、そういうノリのヤツですよね（笑）。あれはいま読んでも面白いんですよ。

アポロ そうそう。その頃、ボクシングも好きでね。モハメド・アリが日本に来たときに「アリの食事」っていう文章が出て読んだんだけど、それがものすごく質素なんだわ。朝はコーヒーとトーストだけで、夜になってようやくステーキ200グラム。それで衝撃を受けたね。

——まあ、ボクサーは体重制限とかありますからね。

アポロ そのとき「プロレスは奥が深いんじゃないかな？」って思った（笑）。

——なんだかよくわかんないですね

多重アリバイ S

multiple ALIBI "S"

サブミッションで試合してる団体より昔の練習の方がきついと思うよ

（笑）。それで、どうしてまた国際プロレスに入ったんですか？

アポロ　それ以前にも、プロレス入りのチャンスはあったんだけどね。19歳の頃かな。ジムにちょうど新日本プロレスの関係者が来てて「菅原くん、プロレスやってみないかい？」って言われたんだけど、生のレスラーを見たことがなかったもんだから「身体も大きくないし、厳しいと思います」って断っちゃって。昭和48年頃だよ。いま思うと、あれがチャンスだったかな。ハッハハッハ！

——チャンスを逃しちゃった、と。

アポロ　あの時、入ってたらいま頃このへんにいたはずなんだけどねぇ（と選手名鑑の新日の欄を指さす）。もったいなかった。

——ダハハハハ！

アポロ　その後2、3年はプロレスのことを一切考えなかったね。でも、どっかで「プロレスをやりたいな～」と思って。まあ、プロレスを生で見たことなかったんで「じゃあ、見に行こうか」って思い立って、全日本、新日本、国際と全部見に行ったんだ。それで思い立って「やってみるか」と思ってね。**遠藤**（光男）会長に相談した。

——遠藤さんは国際のレフェリーやってましたもんね。

アポロ　「どこでもいいよ」って言われたけど、会長がいる国際プロレスに決めたよ。これも何かの縁だろうということで。そのとき冬木（弘道）選手と面接を受けたのが同じ日だった。

——子供の頃から力自慢だったんですよね？

アポロ　いやあ、俺は力なんか自慢しなかったよ。でも、中学1年のときにトロッコは持ち上げたけどね。

——へ？　トロッコを持ち上げちゃうんですか？　なんでまた……。

アポロ　それは好きだった。

——好きだったって（笑）。

アポロ　でも、昔の人はそういうもんじゃないの？

——その力はケンカとかにも向かってたんですか？

アポロ　ケンカは何回かしてたけど、基本的には心優しいからね。

——それがこういう職業に就くというのも因果ですね。例えば、力道山先生は「プロレスはケンカなんだ」という感じで、心構えを弟子に叩き込んできたわけですよね。

アポロ　もちろんそうですよ。でも、普通の人とケンカするわけじゃないからね。

——国際プロレスというのは所属選手に話を聞くと、みんな「いい団体だった」って言うんですよね。

アポロ　まあ、お金があればもっとよかったね（笑）。

——夢はということですね。国際時代は若手レスラーということで、あまり楽しめなかったと思うんですけど。

アポロ　そうだね……。まあ、いまだから言えるけど、俺はあんまり練習も好きじゃなかったしね（キッパリ）。

——ダハハハハ！　でも、ボディー・ビル出身の選手って、この世界では「ボディー・ビルで作った身体はニセモノだ」ってよく言われがちじゃないですか。

アポロ　あったね。そう言われるのも悔しいから、高校の頃アマチュア・レスリングをやってたんだけど。やっぱりね、力がある者が勝つんだよ。これはハッキリ言える！　闘いっていうのは、ようするに力をいかに利用できるか。ボディー・ビル出身者には力を活かしきれない選手も多いから、そこが弱点なんじゃないのかな。

——やっぱりポイントは力プラス技術ですよね。国際の道場はどういう感じだったんですか？

アポロ　ボクらがいたころは、埼玉県与野市にあって、いまの道場とそんなに変わらないよ。1階にリングとかトレーニング器具が置いてあって、上の階は10人くらいが生活する合宿所。

——いや、場所の話とかじゃなくて（笑）。新日の道場と全日の道場ってファンの抱くイメージって、かなり違うじゃないですか？　新日は血みどろの練習、全日は受け身の練習みたいな。国際の場合は、どうだったんですか？

アポロ　国際が崩壊した後、ボクは一時期全日と新日にも在籍しましたけど、自分たちのやってきたことが劣ってるとは思わなかった。だいたい同じようなもんじゃないかな？　やり方は少し違ったけどね。新日の道場の匂いはビリビリしてて好きだったよ。

——国際プロレスの道場ではアマレス式の練習もなさってたんですか？

アポロ　というよりも極め方の練習だね。足や手のいろんな極め方を常に練習して。いま、サブミッションで試合してる団体もあるけど、昔の練習の方がきついんじゃないかと思うよ。ああいう試合が受けてるんだから、時代も変わったよね。

——国際といえば、（カール・）ゴッチさんが初来日した団体でしたしね。

アポロ　国際もホントに厳しいところだったよ。エースの（ラッシャー）木村さんは毎日来るし、（アニマル）浜口さんとか、（マイティ）井上さんとか若松（市政＝将軍KYワカマツ）さんが厳しかったねえ。

——ワカマツさんも厳しかったんですか。極める技術はどなたがコーチされてたんですか？

アポロ　鶴見（五郎）さんが教えてくれたの。

——あっ、鶴見さんだったんですか⁉

アポロ　「プロは極めなきゃいけない」ということでね。アマチュアは結局、強ければフォールすればいいだけなんだけど、それじゃなんにもならないから。下になってたって上の人をパッと極めちゃえばいいわけだから。冬木選手ともよく練習したよね。だからね、これはあんまり載せてもらいたくないんだけど、極めあいで5分10分ぐらいで勝負が決まってたまるかと俺は思うよ。

——ほお！

アポロ　力がある程度違えば30秒で極まっちゃうんじゃないかな？　でも、どっちも同じようなテクニックを持ってたら1時間あったって極まんないよ。明日の朝までやったって極まんない！

——で、国際が崩壊したとき（昭和56年）は、どういうお気持ちでした？

アポロ　俺の場合は、遅いプロレス入りだったんで、親兄弟の視線は冷たかったよね。で、国際が羅臼（北海道）で崩壊して、実家の秋田に帰ったら「ほら見たことか」って言われちゃって（笑）。俺は俺で楽観的だから「これ以上悪くはならないだろう」と思ってさ。でも、親が心配する顔は、つらかったなあ。

——国際から全日に移ってみて、ギャップはありましたか？

アポロ　う～ん……。どっちかっていうと、俺は外様だからね。疎外感はあったよ。

——で、国際血盟軍ですか？

アポロ　あれはあんまりね。自分でもプロレスというものが良く分かってなかったのかな。あのときにああいう選択をしたのは、流されたんだな。自分の意志じゃなかったよ。いまの考え方を持ってれば、しないね。

——で、たしか長州さんのジャパン・プロレスが全日に来たことで……。

アポロ　そう。クビ。俺と高杉（正彦）選手と剛竜馬ね。でも、恨んじゃいないんだよ。プロの世界だから。そこでハジキ飛ばされる自分は不甲斐ないなとは思ったけど。俺、けっこう常識人でしょ？

——ええ、非常に（笑）。それで、しばらくブランクを置いてパイオニア戦志（平成元年旗揚げ、平成4年オリエ

俺がSWSに入ったのは23番目だよ。そんなに遅かったらポジションはないよ！

ンタルプロレスへ、それも平成5年に活動停止）でカムバックする、と。その間は何をなさってたんですか？

アポロ　いろんなことしてたけど言わない（笑）。まあ、人に使われるのはもう嫌だなと思ったよ。プロレスに対する考え方も変わったよね。

——つまり、距離を持って冷静に見れるようになったというか。

アポロ　そうだね、かなり冷静だ。

——パイオニアを選んだのは、かなり冷静に考えた末での選択だったんですね？

アポロ　そうでもないんだよ（笑）。これがレスラーの弱いところ！

——そうなんですか（笑）。

アポロ　例えば「上がるリングがあるんだけど出てくれないか？」って言われたときに、レスラーっていうのは弱いんだよね。心を動かされちゃうんだ。好きなんだよね、やっぱり。そのためには、身体を鍛えなおしたりとかするわけさ。

——旗揚げ戦にはベスト・コンディションにもっていったそうですね。

アポロ　まあ、そのとき出来る限りのベスト・コンディションなんだけどね。もう、生活を投げうってでも身体を鍛えちゃった。

——生活と両立出来ないんですね。

アポロ　いまの人たちは器用だよね。器用だけど、そんだけのもんしか出来てないんじゃないの？

——いいですねえ、菅原さん（笑）。そういうインディーの土台は菅原さんたちが作られているんですよね。

アポロ　いや、元祖を作ったのは剛竜馬だよ（笑）。

——剛竜馬WITH菅原さんって感じですか（笑）。

アポロ　あれは10年近く前だね。旗揚げ戦で大仁田選手と剛選手の試合があって、その2ヶ月後に大仁田選手はFMWを旗揚げしたんだよ。彼も頭がいいから「これだったら俺がやった方がいい」と思ったんじゃないの？

——ある意味では大仁田さんにおいしいところを取られちゃったんですね。

アポロ　だから国際プロレスらしいんだ。吉原（功）社長もアイデアはなかなか良かったらしいけど、それをうまくビジネスに転化できないんだよ。

——つくづく早過ぎた団体ですよね。

アポロ　いまでも国際があったら、いい団体だったんじゃないのかな。あの頃、ガイジン選手と日本人選手がタッグを組むなんてすごく画期的なことだし、すごいアイデアなんだよ。いまだったらよくある話だけどね。常に先駆者だったんだけど……。

——「パイオニア戦志は国際イズムを受け継ぐ」っておっしゃってたじゃないですか。吉原さんもかなりのパイオニアだったけど、菅原さんたちもパイオニアってことで、あまりにも受け継ぎ過ぎちゃったんですね（笑）。商売が成り立たないところまでも。

アポロ　う～ん。アイデアをうまくお金にチェンジ出来ないね。綺麗事じゃないけどさ、お金のことを言わない人が多いけどプロはお金だからね。

——まったくその通りです！

アポロ　昔から「お金のことを言うヤツは精神的にダメだ」とか言われてきた。某雑誌も「金権プロレス」とかいろいろ叩いてたけど、結局お金なんだよね。みんな、お金稼ぐために入ってきてるんだから。

——ゴッチにしても（ルー・）テーズにしてもギャラをもらったらまず実際に確かめるらしいですから。それが普通なんですよ、あちらの国では。

アポロ　日本人は心から入っていく部分があるけど、そんな考え方はどんな社会にもないよ。記者の人にしても仕事があるとしたら、まずは報酬から考えるよね？　プロレス界は不思議なんだよ。「頼むよ！」って言われるけどさ、「実際の話、これはいくらになるんだ？」って聞いてもなかなか教えてくれない。

——そこが玉虫色なんですね（笑）。

アポロ　でも、いい色になったことはないんだよ（笑）。金額を提示することで自分の価値が決まっちゃうわけだからさ。

——パイオニアから離れたのは、北尾さんとの関係から？

アポロ　離れた……う～ん（約30秒唸る）、いろいろあるんだけどね。まあ、話せないこともあるからさ。

——その前にもTPG（たけしプロレス軍団）のコーチもしてましたよね。

アポロ　あれは浪人時代にやったんだよ。あれはシャボン玉だから、何でもなかったんだよ。当時、上田馬之助さんとストロング金剛さんがTBSで番組に出て……。

——『風雲たけし城』ですね。

アポロ　そう。俺と上田さんの共通の知人がいて、その人を介してよく話をしたんだよ。そのときに出た話でさ、「暇なんだったら、少し教えてやれば？」っていう感じで。

——それで、いまでいう邪道&外道さんやデルフィンさんのコーチだったことになるんですよね。

アポロ　いま考えるとね、俺でよかったのかな（笑）。

——ダハハハハ！

アポロ　いまは彼らに教えられることばっかりでね（笑）。

——でも、あるプロレス評論家の方も「菅原はいろんな選手を育てた。そこにスポットを当てろ」って言ってましたよ。菅原さん自身もボディー・ビルの基礎があったから、やっぱり身体を作ることから始めさせたんですか？

アポロ　トレーニングに関しては、初日から妥協させなかったからね。あ～、あれ持ってくりゃよかったなあ、チクショウ！

——あっ、TPG用の練習メニューを書いた紙が残ってるんですね。

アポロ　そう。もしかしたら、一流どころのプロレスラーと闘わなきゃいけない可能性もあるわけだから。そういう人たちにも失礼のないようなレスラーを作らなきゃいけないと思うわけ。だから、けっこう厳しかったんじゃないかな。（ウォーリー・）山口さん（現ヤマグチサン）のところの道場でやってたんだよ。

——マニアックスですね。それがあったから、あの人たちもあの位置で、いまでもやってるわけですよ。

アポロ　まあ、基礎は身に付けたかもしれない。でも、その後は彼らのセンスだよ。それは俺の力が及ぶところじゃないから。認めてますよ。

——あの3人はTPGの中でも優秀な生徒だったんですか？

アポロ　14人ぐらいいたけど、みんなよかったよ。俺もナメられちゃったら困るからさ、最初にプロレスラーがどういうものかを教えるために全員2分ずつ相手にしたんだよ。「俺を極めてもいいからさ」って。かかってきたけど、全員極めた（キッパリ）。そしたら少し納得したみたいだったよ。

——なるほど（笑）。最初に実力差をハッキリさせておくわけですね。

アポロ　「俺がいろいろ口で言っても疑問があるだろうから、ひとつやってみよう」ってね。でも、みんな強かったよ。柔道何段ってヤツもいたから。

——そのTPGの面々よりも、その後に菅原さんがコーチをなさった北尾さんは、また凄かったわけですよね。

アポロ　横綱は凄いよ！　なんか引退して、青年実業家になるんだって？　もったいないよねえ。

——ボクも何度かインタビューさせてもらったんですけど、あの人も変わった方ですよね（笑）。それに格闘家としての資質は最高ですから。

アポロ　あれ以上の男はいないだろ。俺がいままで見た中で、強さはNO.1じゃないかな。相撲だけじゃないよ。地力の強さは最高よ。こんなこと言うと生意気なようだけど、俺は一度やればだいたい相手の強さって推し量れるのよ。横綱には（勝つのは）絶対無理じゃないかなと思ったもん。まあ、横綱のプロレス界でのいろんな経過を見てきたけど、リング上での成績はちょっと寂しいよね。

——同感ですね。素材が完璧なのは確

かなんだし。で、菅原さんがコーチされたのはやっぱり身体作りですか？

アポロ もちろん身体作りもやったけど、プロレス技もコーチしたよ。

——北尾さんと極めっこもしてたんですか？

アポロ いやいや、俺じゃ極められないよ。でも、ポイントだけは教えたね。ルー・テーズ道場で練習したときはマーク・フレミングもコーチをしてたんだよね。だけどフレミングがじれったい教え方してると、テーズさんがリングに上がってきて「こうやるんだ！」なんて教えてくれたりして。あの情熱は横綱もホント喜んでたよ、「すごい人だなあ」って。

——最近、セッド・ジニアスさんがバッシングしたりしてますけど、やっぱりそういうい面も多々あるわけですよね。

アポロ う〜ん……。そういう面があるにしても、ルー・テーズという人は偉大なんだよね。そういうこと！ いま思うとテーズ道場から帰ってきた当時の横綱といまの小川（直也）選手をやらせたいよ。どんな試合になるかわからないけど、注目度はNO．1じゃないかな？

——大失敗になるか、めちゃめちゃ面白くなるかのどっちかでしょうね。

アポロ （ウーロン酎をグイッと飲み干して）失敗しないよ！

——ダハハハ！ そのへんのラインで新日に入るわけですね。

アポロ そう。

——ケロちゃん（田中秀和リングアナ）が「菅原さんは、新日のスピードについてこれなかった。でも、ついてこれるようになったところでSWSに行った」って書いてましたけどね。

アポロ ついていけてなかったと思うよ、最初はね。だって、あのとき1年ぐらいブランクがあるわけだし、それは認めるよ。認めるけど、ちょっとコツがわかってくればうまくいくもんで、あとは体力勝負になったら負けないという確信はあった。いまから10年前だから、気力も充実してたしね。

——新日とはスタイルの違いを感じましたか？

アポロ 基本的にはあまり変わらないと思うけど。緊張感があって、道場の雰囲気がそのままリングに出てるよ。

——新日時代に、いちばん仲の良かった人は誰だったんですか？

アポロ いちばんお世話になったのは、小林（邦昭）さん。越中選手とかね、そういう選手と馴染むのは早いんだよ、俺。

——ダハハハハ！ 目立たないけど味のある選手ですよね。そして問題のSWSに移るわけですけど。

アポロ そうだね。あのときに知り合った東洋の空手マンもね……。

——えっ？ 東洋の空手マン？……ああ、青柳館長ですか。

アポロ そうだよ（笑）。いまでもお付き合いさせてもらってるしね。俺は90年3月からその動きを知ってたんだよ。何か動いてるのはわかったんだ。

——それはワカマツさんからですか？

アポロ うん、まあ……。いろんなことでね。で、俺はやっぱり入るのが遅かったんだな。

——そうですよね。

アポロ この世界は早い者勝ちの部分があるんだよ。新日本にお世話になったから、逆に（新日本を）出るのが遅れちゃったみたいな、ね？

——それがSWS内部での位置関係を作ってしまったわけですね。

アポロ 俺は23番目に入ったんだよ！

——23番目でしたか（笑）。

アポロ 23番目に入ったらポジションなんてないよ！ この世界のルールを少しはわかってるからさ。

——ワカマツさんが1番でしたよね。

アポロ もちろんそうだよ。でも、俺が新日本にいたとき、天龍さんやカブキさんがメガネ（SWSの愛称）に移ったときでも気持ちは微動だにしなかった。新日本でやってやると思ってた。ただし、あの事件がなかったらね。

——なんですか、「あの事件」って？

アポロ あの事件だよ、知ってるだろ？ なんで、そんなの知らないの？

——そんなこと言われても（笑）。

アポロ まあ、いいや。こんなのカッコつけて言うことじゃないけど、青森県十和田で起こった長州さんと横綱のケンカだよ。

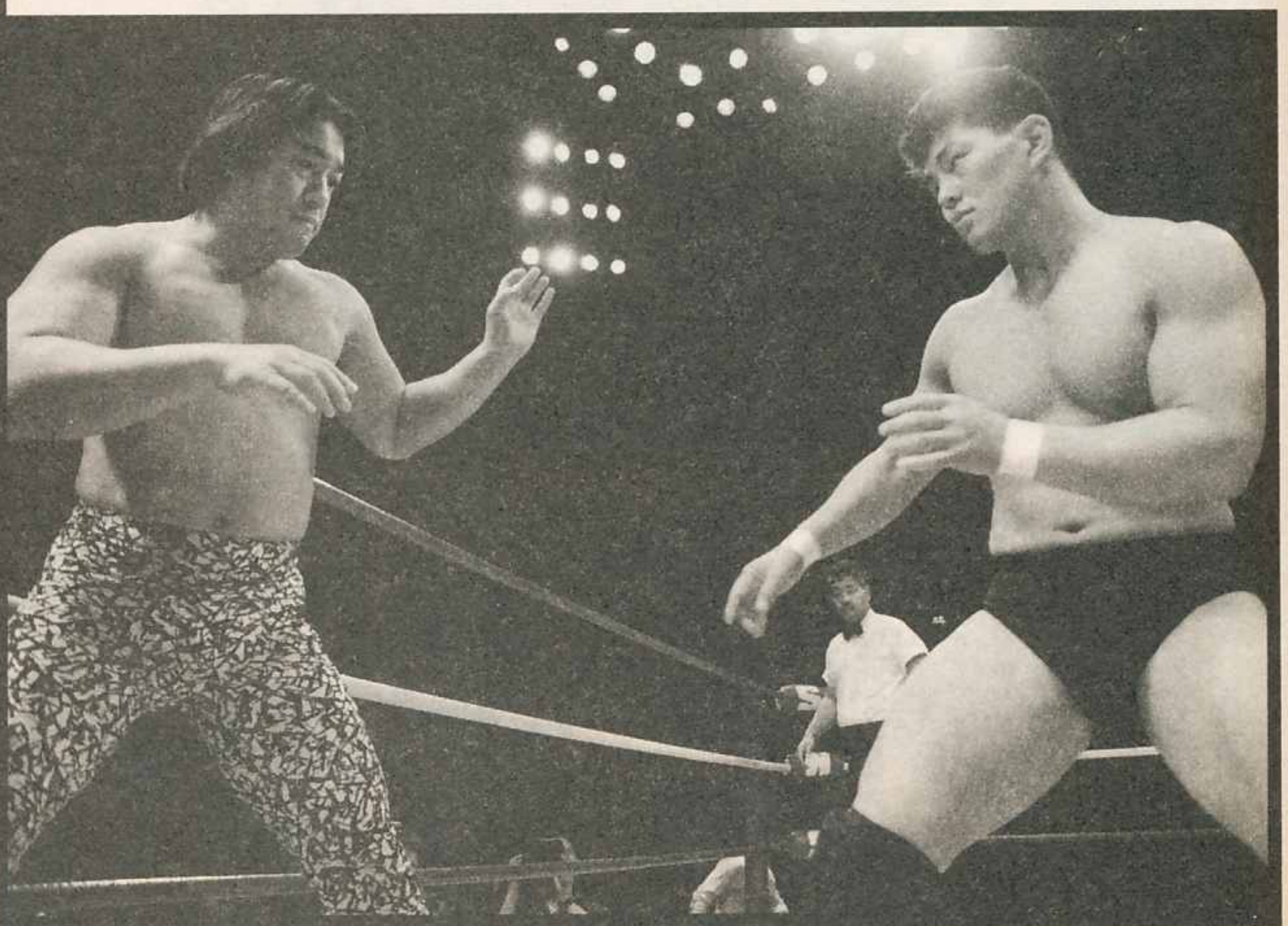
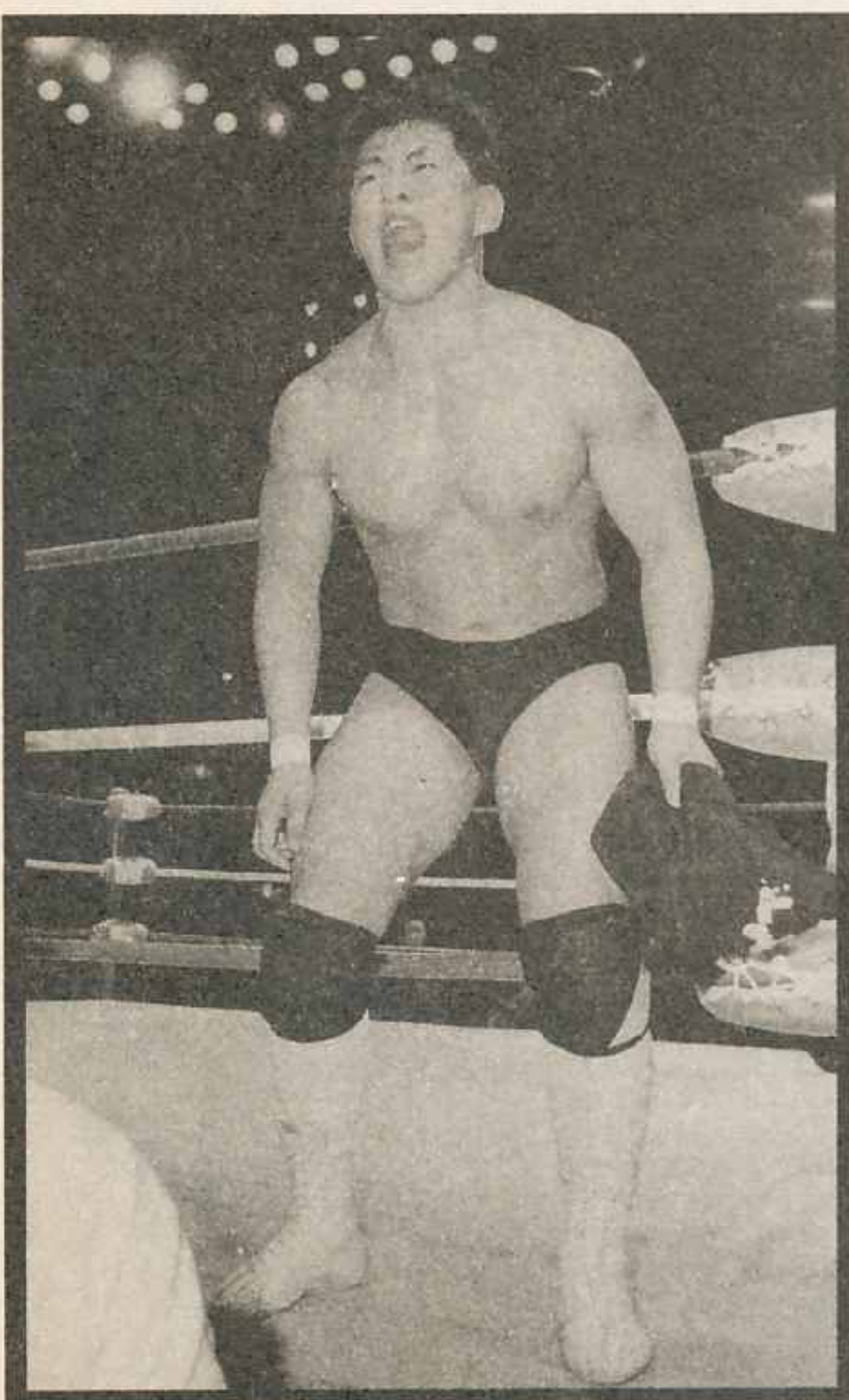
——ああ、北尾さんが言ってはならない暴言を吐いたとされている事件ですね。以前、ボクは北尾さんからコメント取ったんですけど、そしたら「俺は長州さんとは仲いいよ」と思いっきり言い切られてしまいました（笑）。

アポロ ……これ、書くんでしょ？ 書くんだったら言いたくないなあ。

——書ける範囲で言って頂ければ、僕らも対処しますんで。

アポロ いや、俺もそこまで心を許さないよ（笑）。でも、揉めたことは確かだからね。まあ、普通に考えてね、長州さんが横綱に吐いた言葉っていうのも当然なんだ。うん、当然なんだよ。

——北尾さんが試合に出る、出ないという問題から発展したんです

多重アリバイS
multiple ALIBI "S"

91年4月1日・SWS神戸大会のvs鈴木みのる戦。この試合から、UWF崩壊で打ちひしがれた純粋なU信者は船木&鈴木たちに希望を託し、それが後にパンクラスの源流となっていく。「オレはこんな試合をしにきたんじゃないんだ〜!」と鈴木は号泣した。

よね。

アポロ　そのこともあるしね。当然のことだと思うよ。その問題もあって、新日本の中の俺の立場も怪しくなってきたんだよ。

——「北尾を教育したのはお前なんだから」っていう見方をされたんですか？

アポロ　いや、子供じゃないんだからさ、そこまでのことはないだろうけど。横綱についてきたと思われてるわけだから、「横綱がいなくなればお前はどうなるんだ？」っていうね。そういう空気はわかるよ、自分で。90年8月頃には「もうダメだな」って思った。それでメガネと接触したんだけどね。

——それにしても、いま考えてもSWSの理念は正しいんですよね。

アポロ　俺は逆に聞きたいんだけど、メガネは何をやろうとしたのかね？　いろんなレスラーがメガネの行動は正しかったって言うけど。

——ボクが思うのは、「あの人とあの人が闘ったらどっちが強いのかな？」っていう素人レベルの思いをそのまま現実化させちゃった部分ですね。「天龍とUWFと闘ったらどっちが強いんだろう？」っていうような。プロレス的な知識がない分、大金を使って純粋なファンの気持ちを現実化させたのがSWSですよ。「この団体、おかしいな」と思ったのはいつ頃からですか？

アポロ　東京ドーム大会（91年3月30日）。それと中1日置いての神戸ワールド記念ホール（91年4月1日）。あの頃は絶対おかしかった！

——東京ドームではそんなに問題が大きくはなかったと思うんですけど、やっぱりギクシャクはしてたんですか？

アポロ　うん。これでいいのかなって思った。

——で、神戸で菅原さんは問題の試合に臨むわけですけど。

アポロ　別に問題でもないでしょ（キッパリ）。

——ダハハハハ！

アポロ　あの試合の前、3月の半ば頃に道場で田中社長がみえられて、俺とたまたま話をしたんですよ。そのときに「今度の試合は期待してますから」って言われたんだけど、「いや～、社長。鈴木みのる選手との試合は正直言って困っちゃう」って答えたの。「どうして？」って、「タフな闘いになることは間違いないけど、厳しいものがありますね」って言ったんだよ。

——田中社長は、それがなんでなのかわからないわけですよね。

アポロ　そのときに田中社長が、そういうものをある程度、理解していただければ、ね。

——まあ、田中社長はホントにファンのままだと思うんですよ。それが原因で、いろんなトラブルを起こしてしまったんでしょうけど。

アポロ　でも、それもいまから考えれば、何とも思ってないよ。でも、あのときは、俺も鈴木選手を信用してなかったんだな。

——お互いにそうだったような気はしましたけどね。

アポロ　これ（テープ・レコーダー）止めたらホントのこと話すよ。

——う～ん。じゃあ、なるべくギリギリの話をお願いします（笑）。この事件に関しては、菅原さんの方があまりにも悪く言われ過ぎてると思うんですよ。うちの雑誌は、それを立体的にして見たいなと思うんですけど。

アポロ　いろいろ言う人もいるだろうけど、どうなんだろうなあ？　まあ、言えばスッキリするだろうけどな（ニヤリ）。でも、鈴木選手はいまも活躍してるわけだからさ。

——この試合に関しては「鈴木は正しい」という声がほとんどなんですけど、その前後の記事を探してみても、菅原さん側の意見がまったく出てないんですよ。多分、菅原さんには菅原さんなりのプロレス観があってああいう不思議な試合をやったハズなのに、それもないままになっているわけですよね。

アポロ　はあ～、そうだなあ（と宙を見つめる）。これを証拠を残してしゃべるのは厳しいんだよね。あの試合自体は、どうのこうのじゃないんだ。

——それに、あの試合のマスコミでの書かれ方って媒体によって本当にバラバラなんですよ。

アポロ　俺は、あのときマスコミに対して物凄い不信感持ったよ。あのことを書いてある新聞や雑誌は、俺は読んでないよ。だけど、まわりの人が俺に教えてくれるからね。自分からマスコミにしゃべるのも手段かもしれないけど、マスコミの人たちだって「菅原に話を聞いてみようか」っていうのもあってよかったんじゃないのかな。でも、マスコミがなんでそれをしなかったかっていうのも少しわかるんだけどね。俺がキチッとしゃべったら、大変なことになるもんな。

——大変なことですか！　例えば、『週刊ゴング』だと、菅原さんが鈴木選手にガンガンやられて完全に逃げ腰になっていたと書いてあるんです。

アポロ　ホントに見て、そう思うんだったらそれはそれで結構。

——ところが『ファイト』だと菅原さんが完全にキレてケンカごしの蹴りを入れたことになってるんですよ。

アポロ　あのときいちばん冷静だったのは俺だよ！　レフェリーよりも冷静だった。

——あのときはファンも冷静じゃなかったと思うんですよね。

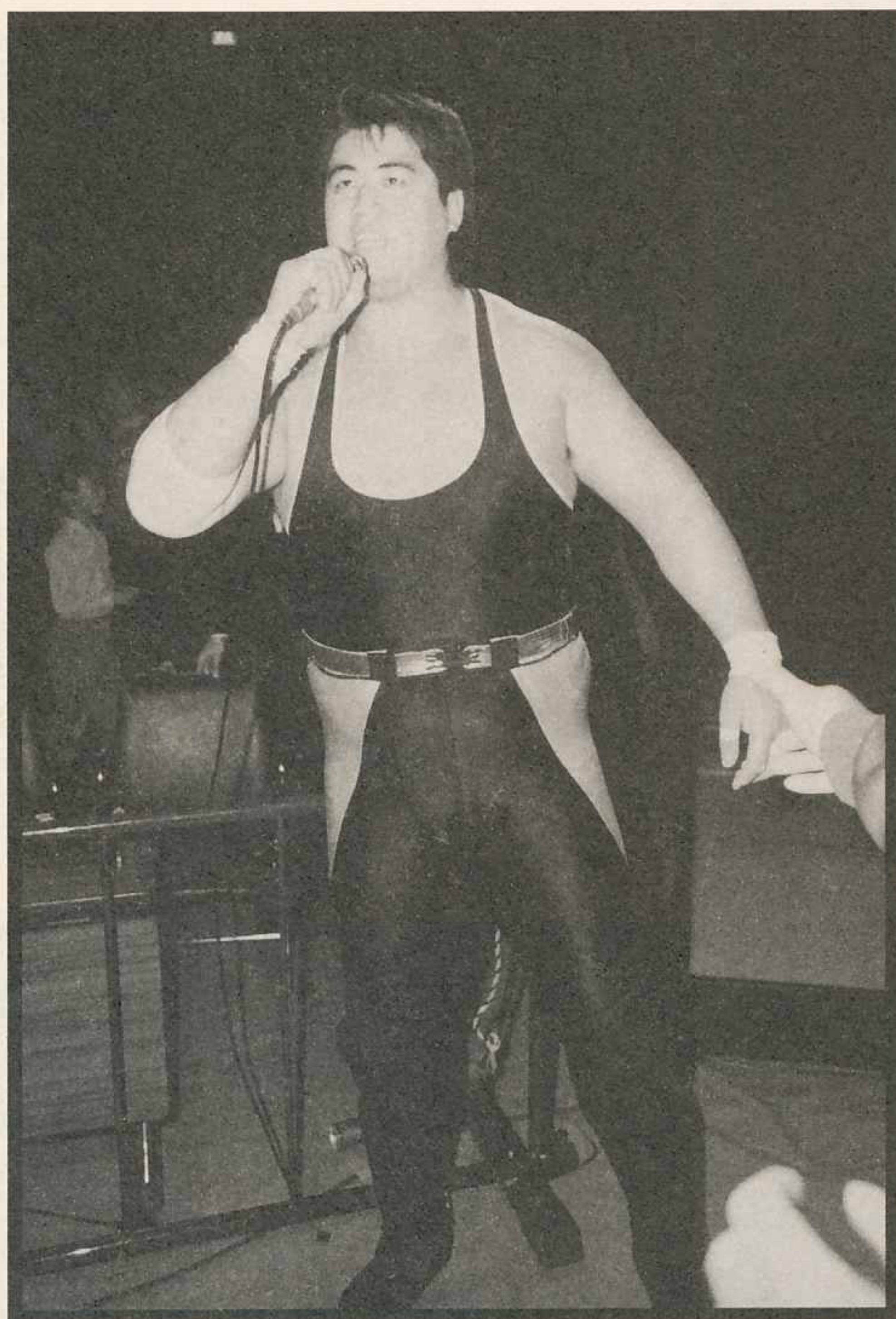
アポロ　わかってる！　だから、あの試合はいろいろ難しかったんだって。俺は、あの試合に関しては一点の曇りもないね（キッパリ）。

——自分がやったことに対してですね。カッコいいなあ。ボクは断固として支持しますよ！

アポロ　これ（テープレコーダー）を止めたら言ってやるよ。なんでそういうことになったのか。

——ダハハハハ！　もうちょっと話を聞いてからお願いします（笑）。菅原さんの方から指を折ろうとしたと、後に鈴木さんは証言してるんですよね。だから、UWFでもやらないような掌底とキックを出したんだと言ってるわけですが、それは事実なんですか？

アポロ　それは捉えようだね。

——どっちが仕掛けたかっていうのは、双方の見方があると思うんですけど。あるプロレス評論家の方によると、どうやら「あの頃はUWF幻想に若い

91年4月1日・SWS神戸大会で起こった、これまたプロレス史に残る大事件。北尾がジョン・テンタとの試合中、突如マイクを掴み「八百長ばっかりしやがって！　この八百長野郎！」と空前絶後のマイクアピール。プロレス会場で最も言ってはならない単語を吐いたかどで北尾は解雇となる。

に臨むわけですけど。

アポロ 別に問題でもないでしょ（キ

どうやら「あの頃はＵＷＦ幻想に若い

91年4月1日・SWS神戸大会で起こった、これまたプロレス史に残る大事件。北尾がジョン・テンタとの試合中、突如マイクを掴み「八百長ばっかりしやがって！この八百長野郎！」と空前絶後のマイクアピール。プロレス会場で最も言ってはならない単語を吐いたかどで北尾は解雇となる。

多重アリバイ S

multiple ALIBI "S"

記者が毒されて、『古いプロレスラーはダメ、U万歳』になっちゃった」ってことみたいですけどね。

アポロ ……まあ、俺がホントのことしゃべったらホッとすると思うよ。

——う〜ん、もうちょっと続けさせてください（笑）。その事件のときも、『ゴング』で連載してる「三者三様」だけは非常に面白かったんですよ。菊池孝さんは「菅原はレスリングしようとしてるけど、鈴木がUでは使ってない掌打と蹴りしか出さなかった」と。そうすると竹内宏介さんが「鈴木がこんなように自分の我を押し通し続けたら、必ず手痛い報復を受ける。プロの実力は奥が深い。ケンドー・ナガサキや鶴見五郎やカブキなどと闘ったときに必ず痛い目にあうだろう」と締めているんですけど（笑）。

アポロ そこまでいかなくていいよ。俺で十分だったんだよ！

——なるほど。UとSが絡むという時点で難しかったと思うんですよね。

アポロ 難しいよ、そりゃあ。だから対戦が決まったときに「参ったなあ」と思ったもん。

——藤原（喜明）さんだったら、両者の中間をとったような試合が出来るじゃないですか。でもあのときの鈴木さんはまだ若くて頑固な時期だったから、難しいとは思うんですよ。

アポロ でも、俺はね、最初に彼の気持ちは尊重したつもりなんだけどね。その理由は、いま言えないんだけど。いろんなことあったんだ。

——なるほど（笑）。

アポロ 彼らが強さを求めてやるんだったら、それはそれで結構だと思うからね。ボクはそういうこと好きですよ。

——つまり「だったら、俺もそういうスタイルでいくぞ」ということだったんですか？

アポロ （ニヤッと笑って）そうじゃないんだよ。それは本末転倒してるよ。

——鈴木さん曰く「鼻っ柱をヘシ折ろうと思って、いきなり仕掛けてきたんじゃないのか」と試合後におっしゃってるわけなんですけど。

アポロ まあ、コメントの仕方がアマチュアだからしょうがねえな。

——ダハハハハ！　ちなみに『ファイト』の井上義啓編集長（当時）は「菅原は情けない。ああいうときには、パンチのひとつも入れなければレスラーではない」ということでしたね。

アポロ そりゃあ、いろんな見方があるさ。だけど、一応俺はプロレスのビジネスを守ってる男だよ。プロレスのビジネスを守ってる男なんだよ、ホントに！　それについて、俺のことを叩くのは構わないよ。だけども、ね？　だからといって一方的に鈴木選手の発言だけで記事が成り立ってるのはおかしいよ。

——試合中に菅原さんが「や〜めた」と言われたわけですけど、あれはどういうことだったんですか？

アポロ あのときの試合はね、リングの外に出たら20カウントで負けなんだよ。なのにレフェリーが10カウントで終わらせちゃったから、「お前、リングアウトは20までだろ？　バカ野郎！やってられるか！」って言ったんだよ。それはどっちが正しいかっていったら、俺の方が正しいよ。レフェリーがカウント11以降は数えられなかったのかなあ（笑）。

——ダハハハ、なるほど（笑）。

アポロ まあ確かにあの時代は、時流はあっちに向いてたからね。

——そりゃあ完全にあっちでしたからね。いろんな雑誌読んでも「鈴木が勝つのは当然だ。問題はどういうふうに勝つのかだ」って書いてましたよ。

アポロ メガネの選手だって、ちゃんとやったら俺が負けるなんて誰も考えないだろう。やめてくれって（笑）。まあ、プロレスしたらアポロ菅原は弱いと思う。でも、それだけじゃないと分かってる人は分かってるよ。そういうことなんだ。なかなか歯切れは悪いけどね。

——だからUの側からだけじゃない意見を、今日は聞きに来たんです。

アポロ あのとき話を聞きに来てたら、バシッと言ってたかもしれないね。

——ちなみに前田（日明）さんはあの事件前に「『何でもありだったら俺もやるぜ』ということでガツンとやられるかもしれないから、それは気を付けたほうがいい」と言ってたんです。それが現実化したのがあれじゃないかとボクは思っていたんですけど。

アポロ ……（約20秒固まる）。俺はプロレスで育ってきてるからね。彼らの気持ちはわかるんだ、俺には。だから理解してもらうための布石は打ったはずなんだけどね。

——へ？　布石ですか？

アポロ ちゃんと打ってる。ハッキリ言ったらね、俺の要求を鈴木選手が飲んでたらあんな試合にはなってないと思う。あんな後味の悪い結果には、ね。

——特にこの日は後味が悪いと言われることが2つも起こってますね。北尾選手のジョン・テンタ戦でのいわゆる「八百長野郎発言」もこの日の出来事ですから。

アポロ あれにも参ったねえ。

——あれも菅原さんにとっては頭の痛いことだったみたいですけど（笑）。

アポロ 事実とはかけ離れたことをマスコミに書かれた感じもするしね。どっかで悪者を作りたかったのかなあ。

——菅原さんは、北尾さんの試合を見られてたんですか？

アポロ 見てたよ。

——おかしいなって感じたのは、どの辺りからですか？

アポロ 最初からおかしかったよ。でも、ホントのことをあなたに理解させることは簡単なんだよ。「なるほどぉ〜」って拍手が起こるよ（笑）。でも、絶対言えない部分もあるから、だからテープを止めたら話すよ。

——わかりました！　じゃあ、そろそろ止めますか（笑）。

（テープ一時中断。目からウロコが100枚ぐらい落ちるような話が5分間繰り広げられたが、残念ながら掲載は不可能……なのかな？　とにかく行間を読め！）

——うおぉ〜、そういうことだったんですか！　とにかく、鈴木みのる選手との試合に関しては、世間で言われてるような試合ではない、と。

アポロ 俺に言わせたら、核心を突いた記事はひとつもなかったんじゃないのかな。でも、記事なんて何ひとつ読んでないんだけどね（笑）。

——ダハハハハ！　当事者の鈴木選手は「ふざけんな、バカ野郎！と言いたい。あの人とは2度と試合したくない」と言ってたけど……。

アポロ それでいいんじゃないの？

——だけど同じ団体の船木選手だけは「鈴木がレスリングの攻防をやる気がないように見えた」とコメントしているから、ＵＷＦサイドとしてはいちばんおもしろい見方ですよね。これなんか、どうですか？

アポロ いや〜、俺も船木選手が広告に出てる健康体力研究所のプロテイン飲んでるんだからさ（笑）。船木選手は青森出身でしょ？　俺は秋田だからね。全然、悪い感情は持ってないよ。ただ、藤原さんは岩手だからな、困っちゃうよな、ハッハッハッハ！

——藤原さんと船木選手とは袂を分かってますからね（笑）。

アポロ まあ、俺の人生、貧乏クジだから。だからってへこんでるわけじゃないしね。俺は楽観主義だから。

——鈴木選手は完全にこの試合をステップにしたと思うんですよ。「こんな試合をしに来たんじゃない」って泣いたことで、結果的にUWFの純粋性をアピールできたわけじゃないですか？　「俺たちはどんなリングに上がっても曲がったことはしない」というイメー

俺に言わせたら核心を突いた記事はひとつもなかったんじゃないのかな。

大リーグの伊良部やサッカーの中田は大好き！ マスコミを殴っちゃうの大好き！

ジを観客が植え付けられたというか。

アポロ まあ、こういうこと言うのもなんだけど、俺の方がいっぱい試合してるわけだしさ（笑）。強い選手ともいっぱいやってるよね。

——どこかで「この小僧っこが！」っていう思いがあったわけですね（笑）。

アポロ （慌てて）だ〜から、そんなこと言ってないでしょ！ カットしといてよ！

——ダハハハハ！ でも、それはいい話ですよ。今日は、その話を聞けただけでも良かったです。

アポロ 普通に考えれば、俺の話の方が説得力はあると思うよ。あのときの俺の身体とかコンディションを見てみろって！ 体重だって俺の方が20キロ重いんだし。俺は相手の技量を推し量る力は持ってるよ。

——あの試合の後はSWS内部でもいろいろあったんですよね。カブキさんと天龍さんが辞表を出したりして。それは八百長野郎発言を受けてということですか？

アポロ う〜ん。八百長っていう言葉は、ホントに生臭いよね。

——そうですね。北尾さんはプロレスとは全く関係ない部分で、相撲時代の話を指して「八百長」って言っただけだっていう噂は聞きましたけど（笑）。

アポロ しゃべって説得出来るものはないかもしれないけど……だけど、このボタン（テープレコーダーの一時停止ボタン）をプイッと押せば、ホントのことがわかるかもしれないよ。

——ダハハハハ、止めれば話せる（笑）。

じゃあ、ボクがちょっと押せばいいんですね。わかりました（笑）。

（テープ一時中断）

——そうだったんですか！ 勉強になるなあ。あの状況だと当然、菅原さんはマスコミ不信になるわけですね。

アポロ なるよ。だけど、マスコミの人に取材してもらっててマスコミの人のことを悪く言うのも嫌なんだよな。

——いえいえ、お好きなだけどうぞ。

アポロ そうだなあ、まあ5分5分とは言わないけど、せめて4対6か3対7くらいのフェアさはほしいよ。そういう基準を持った人が取材をしていただきたいというのはあるよ。10対0みたいな感じだもん。

——特に菅原vs鈴木戦と北尾選手の八百長発言なんか、そうだったわけですね。

アポロ （ウーロン酎をグイッと飲み、グラスを勢いよく置いて）言っとくけどさ、俺の方が人生長く生きてるんだよ！ ね？ 伊達に長く生きてるわけじゃないから、いろんな考え方も持ってるんだって！ 一直線なものの考え方もいいかもしれないけど、やっぱり受け止めることも大事だよ。ね？

——何度も言うようですけど、双方の言い分を聞いてナンボなんですよね。

アポロ 聞くにしても、聞く力がないと何を言ってもこれ（右耳から入って左耳に抜けていくジェスチャー）だよ。

——取材前に菅原さんの発言を読んでおこうと思ったんですけど、驚くほど出てないんですよね。あんまりインタビューを受けないタイプなんですか？

アポロ 自分から「聞いてください」とは言わないよ。俺は23番目のレスラーだよ！ そのレスラーがおこがましく言うわけにはいかないさ。会社が、「お前、反論してやれ」って言うんだったらやるよ。だけど一応、SWSというのは巨大な組織なの。その組織の中で、一選手が自分からしゃべるのはおかしいでしょ？ 俺からそんなこと言い出したら、俺がクビになっちゃうよ。「余計なことするな！」って。

——それゆえに発言の機会がなかったんですか？

アポロ う〜ん。まあ、取材の申し込みがあれば受けたと思うよ。

——それなのにマスコミ側も菅原さんの意見を聞こうとしなかった、と。

アポロ うん……。マスコミの人も

「レスラーっつうのはどんなに飲んでも酔っぱらわないんだよ。ほら、次持ってきて！」と次々とグラスを空にしていくアポロさん。

「この試合はおかしいよ」と思うんであれば、当事者に話を聞くのは当然だと思うし。

——いままで1回も聞かれなかったんですか？

アポロ 1回も聞かれなかった（キッパリ）。

——異常ですよね。

アポロ 他のスポーツだってそうじゃんか。見てりゃわかるよ。「言いたいことあるのに、言わせてもらえないんだろうな」って。

——わかりました！ それで『週プロ』選手名鑑の「好きな有名人」の欄にサッカーの中田（英寿）選手って書いてあったんですね（笑）。

アポロ 最近、ますます好きになった。申し訳ないけど、マスコミを逆手に取って無視するような態度が大好き！

——完全に小馬鹿にしてるから最高ですよね。これでわかりましたよ、謎が（笑）。「なんで中田なんだろう？」って思ってたんですけど。

アポロ よくぞ、俺の思ってることをやってくれてるなって。

——じゃあ、やっぱり伊良部なんかも大好きですか？

アポロ 大好き！ 殴っちゃうの大好き！ 大きいものに付随するヤツは好きじゃないの。ボクはゴマスリが下手だから。ゴマなんかするぐらいだったら、俺は腕立て伏せやってるよ！

——いや〜、今日は5個ぐらい一気に謎が解けましたよ（笑）。

アポロ （話を聞かずに）俺にはわかるよ！ 中田選手が日本のサッカーをいい意味で変えようとしてる！ 狂人と言われる人がいろんなジャンルにいるけど、そういう人たちは本気で変えようと、伸ばそうとしてるよ。

——菅原さんがSWSの社員だったがゆえに言えなかったことを、彼らはやっているということですね。

アポロ 同じレベルで言ったら、向こうに失礼だ（笑）。俺はリングの上でもいろんなことを表現したいと思うけど、「アポロ菅原というのは、こういう人間なんだ」っていうのを理解してもらえれば嬉しいよ。俺だって、もう現役生活20年になるんだから。

——鈴木戦の真実とかを中田選手のようにいろいろ言いたかったわけですよね。伊良部のようにバカなことを書くマスコミのボールペンを叩き折ってみたり（笑）。

アポロ バカとは言ってないよ。俺が言いたいのはマスコミの勘違いであり、洞察力不足だよ。

——あとは取材力ですかね（笑）。

アポロ え？ 俺は人間が練れてるから、そういうことは言わないよ（笑）。

——ダハハハハ！

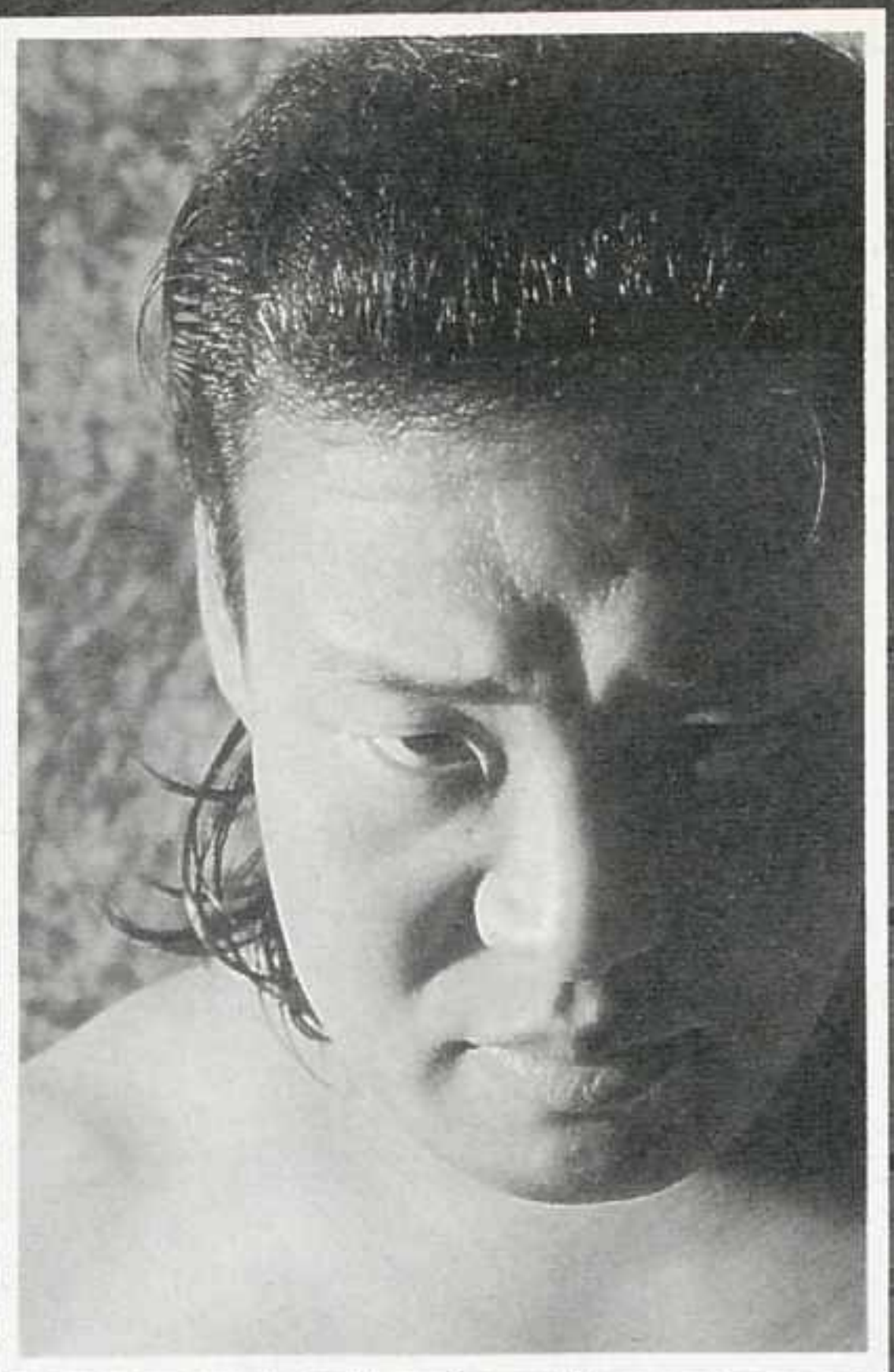
アポロ いや、でもね、いままで何百回って取材を受けてきたけど、今日は楽しい！

——ありがとうございます（笑）。

※浴びるように焼酎を飲みながら、まったく酔わないアポロ菅原。プロレスラーの強さの一端を見せつけられた。こんな調子で核爆弾トークはまだまだ続く！ 次号では、ついに因縁のあの人物に挑戦状を叩きつける！ なお、このインタビューは読んだら5人以上の人に勧めてください。勧めてあげないと、読まなかった人が可哀想です。

【98年7月27日、東京・千駄ヶ谷のとある居酒屋にて収録】

バトラーツ、11・23に両国進出決定!!

拳の先に…そしてバチバチの先にあるものとは何だ!?

いまこそイカレ社長の源流を凝視せよ!

石川雄規 4年前の 発掘インタビュー

モハ! モハ! モハメド・ヨネ! いや、ヨネのリングネームを書いてどーする。えっと、もとい! 不況の波を受けるマット界の中で5・27には後楽園ホールを掛け値なしの超満員にし、モハ、モハ、モハやビンボー団体というレッテルだけでは括れなくなってきたバトラーツ（いまだビンボーはビンボーなんだが）。今度はなんと11月23日、勤労感謝の日に両国国技館に進出するというのだから世の中まだまだ捨てたもんじゃない、というか実に驚きです。そういうことで、バト両国進出（相撲ではなくプロレスで）を記念して、94年5月に発売された途端に爆発的反響を呼び、現在は品切れ状態になっている『猪木とは何か？ キラー編』に掲載された石川社長のインタビューを完全版として超再録。初々しさの中に萌芽している“熱”。蒼き鮮烈さの中にブスブスとくすぶる“イカレ具合”。石川雄規は今後どのような“闘い”に挑もうとしているのか。その辺に注目していただけると非常に幸いだ! ナーシャッ!!

まあ、私もイノキングになりましたが、石川クンもトーイから脱皮してユーキングになればいいというか。なーんつってな。ダーッハッハッハ。なれんのかーッ!

『猪木とは何か？　キラー編』より

94・4・8／東京足立区（当時）・藤原組道場にて収録
聞き手／山口昇
撮影／笠井青二才（94年分）
遠藤政文（98年分）
斉藤ユーリ（イノキング）

―どうでしたか、広島での試合は（94年4月4日・広島・アントニオ猪木＆馳浩vs藤原喜明＆石川雄規戦）。猪木さんとは去年の公開スパーリング（93年12月5日・後楽園）以来、2度目の対決といっても差しつかえないと思うんですが。

石川 いや、でも全然違いましたね。花道からガウンを着た猪木さんが『炎のファイター』のテーマ曲で入ってくるわけですから。

―それをリング上から見てるわけですからね。

石川 いや、まさにそんな感じですよ。

鳥肌ものですよね（笑）。

―その時にどんなことを感じました？

石川 時代に間に合ってよかったなと。まあ、その時はそんなことは思わないんですけど、いまから考えれば、そういう気持ちもあったかもしれないですね。望んではいたけれど、ボクたちの世代ではとても猪木さんと同じリングには上がれないだろうと思ってましたから。それが実現した。そのことにすごく感謝してます。

―花道を進んでくる猪木さんを見てるときは、威圧感は感じましたか。

石川 威圧感というか、やっぱり凄いものがありますよね。存在感というか。

―じゃあ、試合中に受けた技で覚えてるものあります？

石川 延髄斬りを一発、それから、フィニッシュでスッと後ろに回られてスリーパー。ちょっとそれくらいしか覚えてないですね。

―ボクはこの試合を現場で見てないんですけど、猪木さんと絡んだのは2度でしたよね？

石川 2度絡んで、馳さんにタッチして、最後に猪木さんが出てきて終わったって感じじゃなかったかな。

―突然、目を突いてきたりしなかった？（笑）。

石川 それはないです（笑）。

―試合中も猪木さんの威圧感というのは感じるんでしょうね？

石川 ビビるとか、威圧されるというのとはちょっと違うんだけど、アントニオ猪木という〝存在自体〟とぶつかってる感じですね。とにかくデカイ怪物ですよ、アントニオ猪木という人は。その怪物に接するという感じがしましたね。怪物とコンタクトを取るというか。普通のレスラーとはまったく違いますね。

―それはなぜなんでしょう。

石川 言葉では言い表わせないんですけど……猪木さん独特の〝匂い〟というんですか。

結局、それに対する嗅覚を持つ人がファンになってノメり込むんでしょうね。「なんだかわからないけど、いい匂いするなぁ。何なんだろう、この匂いは？」っていう感じで。

―刺激的だけど甘い。甘いけど毒があるという。

石川 そうですね。井上陽水の歌でありますよね。「♪探しものは何ですか？」というのが。そんな感じです。

―ああ、「夢の中へ」ですね（笑）。去年、猪木さんとスパーリングした時にも「夢の中にいるようでした」って言ってましたもんね。あの時は、控室前で猪木さんに「華を持たせてくれてありがとう」と言われて石川さんは泣きましたよね。

石川 実はあの言葉で泣いたわけじゃないんですよ。スパーリングが終わってカメラマンが写真を撮ってる時に、「おい、一緒に写ろう」と言って肩を抱いてくれたんですよ。それがたまんなかったですね。

―なるほど。いわゆるUWF第3世代の中で猪木さんと闘ったことがあるのは、船木（誠勝）選手と鈴木（みのる）選手と石川選手だけ。そういった意味では貴重な存在なんですよね。

石川 そうですね。

―それで、あのスパーリングの後に「あんなボディー・シザース、いままで喰らったことがありません。割り箸で挟まれたようでした」って表現してたでしょ（笑）。あれは石川さんらしくて笑ってしまいましたね。

雄規

時代に間にあってよかった。アントニオ猪木という存在と接するのは、怪物とコンタクトを取るという感じでしたね

94・4・8、インタビューを受ける石川雄規のたたずまいには、まだあどけなさのようなものが残っている。デビューしてまだ3年、藤原組の若頭だった頃である

石川 いや、割ってない割り箸あるでしょ。それを広げてパチンとやられたような感じなんですよ。痛いですよ！　カツン！　と一瞬で入るんですよ。

―カツン！っていう感じはわかるなぁ。猪木さんって〝カツン！〟って感じですよね（笑）。瞬発力なんですかね。

石川 センス。もっとデッカイものがあるんでしょうけど、まず第一に挙げられるのがセンスでしょうね。

―猪木さんって基本的に、球技とかやる上での運動神経ってほとんどない人だと思うんですよ（笑）。かなり昔、『芸能人野球大会』で、猪木さんがファーストを守ってたんだけど、サードからの送球とかみんな胸で受けてしまう（笑）。

石川 いくらなんでも、そんなわけないじゃないですか（笑）。

―いや、ホント。猪木さんって球技とか向かないと思うんだよね。

石川 藤原さんもそうですよ。球技って好きじゃないですもんね。

―野球のうまい人ってプロレスラーに向かないんじゃないかなあ。

石川 ボク、うまいですよ。

―あ、うまい。ハハハ……うまい人でもいいですよね。そりゃそうだ。馬場さんだって野球うまいんだから（笑）。ただ、運動神経と運動能力っていうのは別のものですよね。

石川 ああ、ボクも運動神経ないですよ。でも運動能力は根性でつきますよ。『炎のファイター』聞きながらスクワット3千回やってましたからね（笑）。

―それ、プロになってから？

石川 いや、中学の時とか。高校の頃は自習の時間に教室から出てスクワット千回やったりしてましたから。「やばい、次の授業始まっちゃう。でも800回だから、あと200回やっていこう」とかいって、次の授業に遅れていったりして（笑）。

―ところで、後楽園でのスパーリングや広島でのタッグマッチで、猪木さんに「石川雄規」という存在を植えつけられたと思いますか。

石川 広島の試合では、猪木さんは「藤原とは今後の絡みもあるし、石川ぐらいだったら馳、お前全部やっておけ」っていう感じだったらしいんです。でも、最後にボクがヘロヘロになってる時に、猪木さんが「馳、代われ。俺が仕留めてやる」って最後に僕に手を加えてくれて。馳さんが「それが今回の石川の最大の成果じゃないか」って言ってくれたらしいんですけど。

―自分からも猪木さんに技を仕掛けたんでしょ？

石川 ええ、ローキックを。猪木さんとパッと向かい合って、猪木さんに「さあ、蹴ってこい、この野郎！　蹴ってこい、この野郎！」って言われたんで。

―「蹴ってこい、この野郎！」（笑）。思いきりよくいけたんですか。

石川 すごく弾力性がありましたよ。猪木さんはすごく若い感じがしますね。もちろんレスラーだから肉体的に若いのは当たり前なんですけど、それにしてもさらに若いですね。あの年にしては肉体が凄いです。

―グラウンドでの攻防は？

石川 う～ん……あんまり覚えてないなあ。とにかく夢中でしたからね。役者の違う人たちの中に僕がポツンといるわけですから。

―相手のパートナーの馳選手なんかは体力的に脂が乗ってる時だし、技術も当然ある。でも、それとは違った何かを猪木さんには感じるわけですか。

石川 そうですね。猪木さんのは一種のオーラですね。

―まあ、猪木さんのプロレスというのはひと言では言い表わせないんだけど、猪木さんのやってきたプロレスを守っていきたいと石川さんは言ってますよね。

石川 はい。猪木さんにはいろんな引き出しがあるってよく言われるけど、試合中もそうですよ。探しものを探すために、あっちこっちの引き出しを開けるんだけど、「ないな、ないな？　どこなんだ？」とやってるうちに負けちゃうという感じで。

―例えば、石川さんのファンや、猪木さんを知らない世代のファンの中には「猪木を潰せ！」

自体"とぶつかってる感じですね。とにかくデカ
イ怪物ですよ、アントニオ猪木という人は。その

てしまいましたね。

とかいって、次の授業に遅れていったりして(笑)。

知らない世代のファンの中には「猪木を潰せ!」

と思ってる人もいるかもしれないんだけど、石川さんの中にはそういう気持ちは湧いてこないんですか?

石川 どうですかねえ……。湧いてこないと言っちゃったらレスラーとして失格ですからね、金星は欲しいし(笑)。でも、そういうニュアンスじゃなくて、わかるじゃないですか。「これは絶対にかなわない」って。だけど、かなわないなりに何か自分を残さなきゃいけないと。それがプロレスですから。だから勝てれば一番いいんですけど、もし勝てなかったら、どうやって自分を輝かせるのか、それが"闘い"だと思うんですよね。もし技術的にかなわないんであれば、存在感として勝たなきゃいけない。そんな感じはしましたね。

——石川さんが圧倒的な力を身につけた時に、猪木さんと対峙したとしましょう。その時は潰しますか?

石川 その時は潰すというか越えなきゃいけないですよ。いつか越えようと思って見続けた山ですからね。それは相手に「参った」させたから越えたとか、そういうことじゃないと思う。でも、もしかしたら一生かかっても越えられないかもしれない。例えば、父親が年を取ってヨボヨボになった。でも殴れない。そういうもんじゃないかなと思うんですよ。例えば、僕がいま藤原さんからギブアップを取ったとして、それまでボクは何百回とギブアップ取られてるんですよ。だから僕が何百回も取り返すまでは勝ったとは思えないですよね。それは歴史の重さであり、生きてきた人生であり、そういったとてつもなくデカイものと闘うわけですから、そう単純にはいきませんよね。そして、その人を越えた時に、その人が背負ってきたものを僕が全部背負わなきゃいけないんですから。

——その猪木さんに憧れてプロレスラーになったわけだけど、猪木ファンになったのはいつから?

石川 おそらく(モハメド・)アリ戦の頃。小学校5~6年生でしょうかねえ。

——時代がUWFを経てもズッと猪木さんのファンだった?

石川 そうですね。

——いまでも石川選手は猪木さんの悪口を言われると怒り出すそうですね。

石川 そうですね(笑)。猪木さんは悪くないですよ。

——一連のスキャンダル(93年に勃発した、

石川

94・4・4広島。とうとうアントニオ猪木という存在とコンタクトを取った石川雄規。この4年後の同じ4・4に猪木はリングから去った。やはりこの偶然性には"何か"が介在していると思われる。"イノキという概念"は4年の月日を経て、完全に石川に入り込んだ

政治家としての金銭疑惑等)とかでも?

石川 はい。「猪木だったら何をやっても許されるのか?」って言われると「いいんだよ!」って言ってやりたくなりますよ。

——「許しきる!」と(笑)。そこまで猪木さんに惹かれたのは何なんでしょう。

石川 う~ん、なんでしょうねえ(笑)。

——男が女を好きになる瞬間とはまた違うでしょう。

石川 違うかもしれないけど、恋心という意味では同じですね。

——恋心ねぇ。ファンになったのは、アリ戦を見て感動したということなんですか?

石川 感動したとかそういうんじゃなくて、気づいたら虜になってた。この試合が良くてレスラーになろうと思ったとか、そういうきっかけがあったんじゃなくて、なんかポツン、ポツンと影響を受けながら、勇気を与えられてきたんですね。

——アリ戦の他に印象に残ってる試合というと?

石川 ウイリー(・ウイリアムス)戦、あとは試合中に猪木さんがボロッと涙流した時があったでしょ? ブロディ戦かな。ああいう涙というのは猪木さんならではじゃないかな。

——プロレスをプロレスとして、あるいはプロレスを格闘技として見てるというよりも、「アントニオ猪木」を見てたんですね。

石川 そうですね。だからボクシングとか他の格闘技には全然興味なかったですね。

——そうなると、プロレスラーになろうと思ったのはいつ頃ですか?

石川 本気で取り組んだのは、高校に入ってからでしょうね。もちろん中学の時も自分で勝手に練習してましたけど。野球部でありながら、腕立て伏せを狂ったようにしたりとか(笑)。

——狂ったように(笑)。石川さんの好きそうな表現ですね。

石川 ハハハ。自分の将来として真剣に考えたのは高校に入ってからですね。

——その頃は、まぁいまでもそうなんだけど、プロレスって世間から八百長って言われたりとかしてましたよね。影響力もいまと比較にならないくらいあった裏で、その頃は逆にそういう声も大きかったでしょ。そういうのはまったく気にならなかった?

石川 僕のまわりにはそういうこと言う奴はいなかったですね。僕が怖かったから、という説もあるけど(笑)。でも、いい奴ばっかりでしたから。そういうこと言ってたのは大人だけでしたね。

——あ、大人だけ。大人って嫌ですねぇ(笑)。石川さんは子供の頃から身体は大きかったんですか。

石川 いや、小さいですよ。中学に入った時は158センチでした。松田聖子と同じだったんで、いまでも覚えてるんですよ(笑)。

——松田聖子と同じって、凄い比較だな(笑)。

石川 だから『青い珊瑚礁』を歌っている松田聖子を見て、「ああ、カワイイな」と思って、レスラーになったら松田聖子に会えるなと思って。猪木さんに会いたいのと、松田聖子に会いたいのと、その二本柱で突っ走ってきた感じですね(笑)。

——実にイカれた二本柱だ(笑)。その二本柱を軸にして、高校で柔道をやり始めたわけだけど、大学では何をやっていたんですか?

石川 アマレスを1年間やりまして、ちょうどOBの人がシューティングをやってたんですよ。それでキックとか関節技をやった方がいいかなと、そっちもやりだしたんです。

——関節とかキックは好きだったの?

石川 好きというか、レスラーになるのであれば、「やらねばなるまい」と思って。

——関節技ができるのが、まずレスラーの基本だと。

石川 そうです。

——その関節とかキックが主体となったスタイルのUWFというものに関して、いま感じることはありますか。

石川 そんなにこだわりは持ってなかったです。ただ、神様的存在のカール・ゴッチさんに憧れてましたからね。そのゴッチさんがUWFの象徴という形になってましたから、そういう意味では意識しましたけど。

——最初に新日本を選ばずにUWFから枝分かれした藤原組を選んだというのは、石川さんの中で何か意味があったんですか?

石川 高校生の時、新日本に行ったんですよ。山本小鉄さんが会ってくれまして、大学でも行ってアマレスやって、チャンピオンにでもなったら来なって感じで、門前払いですよね。それでシューティングをやるようになって、ゴッチさんと出会った。憧れでしたから、「ゴッチさん、フロリダに行っていいですか?」って言ったら、「いいよ」って、それだけなんですけどね。猪木さんに憧れて、その猪木さんの源流はゴッチさんでしたから。

それで自費でゴッチさんの所に行って、(ミスター)空中さんに出会って、帰ってきた頃にUWFが揺れ始めて、そのうち藤原さんが旗揚げしたから「じゃあ、やってみるか」という感じで。いま考えたら、藤原さんも猪木さんの用心棒みたいなことして光を放ってた人ですから。きっとこれも何かの縁でしょうね。

——藤原組長に対する思いというのも、猪木さんから流れてるものですか?

石川 ええ、そういう匂いというんですか、憧れの同じ香りがしたんですよ。人間ってそういう嗅覚で巡り合っていくんじゃないでしょうかね。

——藤原組を選んだのも、きっと目に見えない何かがあるんでしょうね。で、自費で行ったゴッチ道場はどうでした?

石川 道場はないんです。

——ああ、自宅でしたね。

石川 ええ。自宅に庭があって、ガレージの車が追い出されて、中にマットとか器具とかが置いてあって。その頃、ゴッチさんは膝の手術をした後で動けないし、マレンコさんが道場やってるから、そこで面倒をみてもらえと紹介されて、そっちに行ったんです。そのうちゴッチさんも毎週マレンコ道場に来てくれるようになって。

——ゴッチさんと初めて肌を合わせた時のことっていうのは覚えてます?

石川 これこれ、こういう技だ、こういう技だって見せてくれるんだけど、それが恐ろしいんですよ。

——恐ろしい! どんなふうに?

石川 本当に完璧に極まるから! もちろん折れたりしないんですけど、なんかの弾みで自分がバランス崩したら折れるな、というくらいまで極まるんですよ。だから、ビビリまくりですよ(笑)。

——ジタバタしたら大変なことになるんだ。

93・12・5の猪木との公開スパーリングを報じる『週プロ』の記事には「よかったな、トーイ…」というタイトルが付けられていた。まだまだこの頃の石川雄規という存在は"トーイ"というニックネームが似合う、猪木に憧れるグリーンボーイだった

石川　危ないですよ！　怖くてジタバタできないですよ（笑）。

——話に聞くとゴッチさんは力も怪物的なんでしょ。

石川　怪物的ですよ。「レスリングは力じゃない」とか言ってるけど、凄いバカ力を持ってるんですよ（笑）。確かに力は使わないで、うまく極めるんですけど。

——ゴッチさんとはプロレスの話をじっくりしました？

石川　ええ。ゴッチさんがたまに（ラリー・）マレンコさんの家に遊びに来るんですけど、そういう時には安い缶ビールをいっぱい買っておくんです。だけど、ゴッチさん話が長いから、みんな逃げちゃう（笑）。それで僕が話し相手をして、2時間ごとに同じ話になったりしてね（笑）。でも、楽しくてずっと話してましたけどね。

——ゴッチさんはその頃、プロレスに対してどんなことを言ってたんですか。

石川　プロレスに対してというか、トレーニングの心得、人生の心得、そういう感じでしたね。

——よく、ゴッチさんは常に人を殺すことを考えている、とか言われるけど、それホントなんですか？

石川　面白い話があるんですよ。ゴッチさんが日本に来たときに、浅草を一緒に歩いたんですよ。縄がかかってるデッカイ鳥居の所で、ゴッチさんが腕組みしてる。「ゴッチさん珍しいでしょ？」って言ったら、「いや、あの縄なんとかトレーニングに使えねえかな」って言ってんですよ（笑）。灯籠とか見てても「この石を持ち上げたら筋肉つくな」とか、そんなことばっかり考えてる（笑）。あとは昔、控室でルー・テーズに向かって、「いかにして犬を早く殺すか知ってるか？　膝を落とすんだ」とか真剣に話してるそうですね（笑）。テーズさんは「なんだこの人は？」とか思ってたらしいですよ。そういうことを真剣に話すところがゴッチさんらしいですね。

——感動的なジイサンだよなあ（笑）。やっぱり圧倒的な人ですね。ある種の″キ○ガイ″だもんね。世間から″バカ″とか″キ○ガイ″とか呼ばれる人って、感動を呼び起こすんですよね。

石川　そうですね（ニヤリ）。

——そういえば去年の暮れの『猪木とは何か？』のイベント（93年12月25日に芝浦で開かれた紙プロ主催のオールナイト・イベント）では石川さんにもサスケさんと一緒にゲストで出てもらったんだけど、猪木さんがエイズの話とか、コンドームの話とか、アフリカ飢饉の話とかをもの凄いエネルギーでもって話してる。それだけでもある種唐突なのに、話の途中で突然「ところでキミたちの夢は⁉」って石川さんとサスケさんに聞いてきたでしょ（笑）。

石川　驚きましたよ！（笑）。

——突然、ピシッ！　という感じで来ますからね。猪木さんの場合、話の唐突さにも、迫力が爆発すると同時に色気が滲み出るから不思議なんだけど。

石川　ええ、まったく。ボクはその時、「人の人生に影響を与えてしまうようなレスラーになりたい」って答えたんですけどね。

——あの時に思ったんですけど、急にそういう問いかけをされて、プロレスに対する考えを即答できるというのは、これは常にプロレスのことを考えてないと答えられませんよね。石川さんは自分の中で固まってる考え方ってあるでしょ？

石川　もう昔から凝り固まってますからね（笑）。

——芯はあるんだけど弾力性もある？

石川　それを守るためだったら、いくらでもフニャフニャ曲がりますよ。だから、一見フニャフニャしてるようで、「これだけは」という大事なものは守ってますから。

——そういう意味からいうと、石川さんが最終的に藤原組に残ったっていうのはどうしてなんですか？

石川　それはさっきも言ったように嗅覚じゃないですか。猪木さんに憧れ、そのムードを藤原さんが持ってたんじゃないかと思います。

——Uから分かれたリングスとかUインターとかパンクラスにはそういった嗅覚は感じなかった？

石川　そんなに感じませんでしたね。カラッと割り切ってしまうプロレスより、しっとりと濡れてるというか、なんかわからないような部分があった方が好きなんですよ。「こうなんだ、俺たちはこういうことをやりたいんだ！」というんじゃなくて、「俺はこれやりたいんだけど、どうだろうね？」と人それぞれが悩んでしまうような、問いかけるプロレスをやってみたいんです。

——ファンに謎かけをしたいんだ。

石川　謎かけがいいですね。僕も猪木さんにずっと謎かけをされてきましたから。

——例えば藤原組長が、藤原組の興行で新日本の石沢常光選手と30分時間切れ引き分けという試合をしましたよね（93年7月21日・後楽園）。その時は会場中に「？」が充満しましたもんね。

石川　そういう得体の知れないものに対して、「何なんだろう？」って考えることで人間は知恵が発達すると思うんですよ。それができるのがプロレスというジャンルの一番凄いところですよね。人間の知恵を発達させてしまう。教科書なんかじゃ教えてくれないことを教えてくれる。

——でも、いまのプロレスってけっこう教科書通りですよね。

石川　そうかもしれないですね。昔は個人のパーソナリティーというか、『アントニオ猪木』というとてつもないキャラクターがあったからできたんでしょうね。

——『アントニオ猪木というジャンル』ですよ。

石川　猪木さんを見ていた当時の自分にはない絶大なエネルギーが猪木さんにはありましたから。力が正義じゃないけど、力がなければ正義は何にもならない。そういう両方を兼ね備えて、世間に喧嘩を売ってるアントニオ猪木。自分もやりたいけど、まだできないことをやってる猪木さんに憧れていたんです。

——極真の大山倍達総裁じゃないけど、″正義なき力は無能なり、力なき正義もまた無能なり″って感じですかね。ウイリー戦が好きだということですけど、極真空手に興味は持ちませんでしたか？

石川　極真は確かに当時、すごく流行ってたし、″地上最強の喧嘩空手″っていう謳い文句が良かったですよね。「喧嘩が強いんだ、強くなるためにやってるんだ」というのは良かったですね。空手の先生が喧嘩しちゃいけないんだと子供に教えて、その子供がいじめられて死んじゃったことがあったんですよ。俺、その時に、長州さんじゃないけど、その教えた先生にクソぶっかけてやりてえ！　と思いましたよ。

——グワハハハハ！　ぶっかけますか。

石川　大切なのは、自分を守るために鍛えるんじゃないですか。そんなことも教えられないその師範はバカですよ！　生きる価値ないですよ！　死んだ方がいいですよ！　そしたら俺が墓にクソぶっかけてやりますから！

——それ、長州さんに著作権の侵害だって怒られますよ（笑）。

石川　長州さんのあの発言は大好きで、あの論争の意見に賛同したとかそういうことじゃなくて、あのボキャブラリーが好きだなあと思ってねえ（笑）。あれでまた大ファンになりましたよ。長州さんって試合中に叫ぶじゃないですか、「このクソたわけ野郎が！」とか。リングサイドで見てて、普通、そういう言葉使わねえだろうって。それがいいなと思って（笑）。口悪いですよねえ。

——長州さんには猪木さんの匂いって感じます？

石川　どうなんでしょうかねえ……。こればっかりはちょっとわからないですね。実際に肌合わせたことないし。ただ、あきらかに他の選手と違うのは、猪木さんの悲しそうな雰囲気ですね。長州さんは元気溌剌ブチかます、って感じですよね。藤原さんはじっくり「俺は俺だぜ」って職人的だし。猪木さんはそれでもないなんか違う……プロレスを一人で引っ張っていながら、「俺、こんなことしてていいのかな？」「俺の居場所はこれなのかな？」っていうようなことを、いつも自問自答しながらギリギリのところで闘ってるようなイメージがあるんですよね。この世に生を受けて、命が天に帰るまでの間の、いろんな葛藤ですね。修行をしてる人なんだなという感じがします。

——うん、「ギリギリ」というのは凄くよくわかりますね。以前、ターザン山本さんも言ってましたけど、猪木さんのあの哀しそうな表情は、「俺は何でプロレスラーなんていう職業を選んでしまったんだ」というコンプレックスにも見えるんですよね。

石川　村松友視さんの『ファイター』っていう本の表紙がそれをよく表わしてるんですよ。消え入りそうな中でうつむいてるアントニオ猪木、僕はあれが一番好きなんですよ。

——コンプレックスというと悪い意味に捉えられがちだし、猪木さんも当然、プロレスに全身全霊をかけてやってる。だけど、その奥底には、「プロレスラーなんかイヤだな、こんな痛いのイヤだな。何でこんなことしなきゃいけねえんだ。もっと他にやりたいことがいっぱいある」という哀しさみたいなものが出てるんですよね。

雄規

98年の石川“イカレ社長”雄規のハジけた勇姿。11・23の両国ではいかなる情念を現出させてくれるのか。怒りと呪い、それが情念。石川雄規の怒りと呪いは、「バトラーツが両国なんて100年早い！」と思ってる“バカたち”にも向けられることになる

デビューする前からコップの“陰”を描いてきた石川雄規。今度は“実”、つまり石川雄規の描くコップが11・23の両国にいよいよ姿を現すことになる

石川　そうですね。

——それに比べていまのレスラーというのは、ハッキリというか、実に簡単に「プロレスが好きだ」って言いますよね。

石川　そういえば猪木さんって、プロレスが好きだっていう話をしたことないですよね。

——「プロレス？　早くやめてえな」とかね（笑）。猪木さんは大らかで、陽気で、華がある。でも、ある側面では精神的な暗さというと変だけど、生きる哀しみみたいなものが滲み出てるんですよ。

石川　陰。陰があるから、実っていうものがあるんですよね。ボクはいま絵画を習っているんですが、絵を描くっていうのもそうですよね。ボクの絵の先生が言ってるんですけど、「コップを描くんじゃなくて、〝陰〟を描け」。つまり、〝実〟を描くんじゃなくて、〝実〟の裏に潜んでいる〝陰〟を描きなさいって。人生における〝陰〟のデッサンというのは、「人間とは何だろうか？」「自分はどうして生きてるんだろうか？」そういうことを考えることだと教わったんです。

——自分自身への問いかけですね。

石川　ええ、自分への問いかけなんだって言われました。ボクが絵を習ってるのは、おばあちゃんの先生なんですけど、90歳でまだ描いている。その人はプロレスを全然知らないんですけど、アントニオ猪木という人にすごく興味があったって言うんですよ。それで、ボクとの試合のビデオを見せたら、「虚が転じて実を成してる」って言うんですよ。「いまの時代、〝実〟ばっかりを追ってる人がいる、それは〝陰〟のデッサンをしてないからだ。だから人に感動を与えられない」って言うんですよ。ふと思ったら『風車の理論』と同じなんですよね。ビックリしましたよ、ボクは。

——いや、ボクもビックリしちゃいますよ（笑）。その先生の言う「虚と実」の意味を「風車の理論」に当てはめてしまうところが、石川さんは凄いなあ。それは普段から「猪木的なモノの見方」をしている証しですよ。〝実〟ばかりを追ってる人というのは、つまるところ、〝陰〟が見えない人でしょう。そういう、世間の多くの人には見えない〝陰〟が猪木さんにあるんでしょうね。だからこそ〝実〟が見えてるということに世間の人はなかなか気づいてくれない。

石川　そういえば、すごく鮮烈に覚えてるシーンがあるんですよ。タッグマッチだったんですけど、猪木さんが藤波さんに初めてフォールを取られた時（85年12月12日・仙台・猪木&坂口征二組vs藤波辰爾&木村健悟）、あの時の猪木さんがすごく不思議な表情をしたんですよ。

——なんというか、ちょっと笑うようなね。

石川　そうです、そうです。全身、鳥肌立つぐらいゾクッときましたね。

——確かにあれは印象深いなあ。ちょっと首をかしげるような。

石川　そう。首をかしげて、ちょっと悲しそうな、でもなんかフッと解き放たれたような不思議な表情でしたね。だから俺、試合の攻防よりも、猪木さんのそういう表情の一つ一つが鮮明に記憶に残ってるんですよね。

——石川さんは藤原組のプロレスについて「相手を仕留める技に説得力があることと、どんな派手な技を持ってる人にでも『たまには付き合ってあげるよ』という包容力みたいなものを大事にしたい」と発言してますよね。他のUWF系の団体が、どんどんフィクションを排除していくという方向性の中で、『包容力』というのは逆の方向に捉えられてしまうこともあるでしょう。

石川　フィクションを排除するというのはいいことだと思うんですよ。お客さんとの闘いですから、その中でお互いに切磋琢磨して昇り詰めていくというのは、それはそれでいいと思いますよ。

——でも、フィクションを排除していくという方向性の中で、「？」がなくなってしまうことが嫌なんでしょ？

石川　そうですね。それはなんか寂しいですね。「？」を自分の中にも残しておきたいし、「？」をお客さんにも投げかけてみたいし。

——船木、鈴木選手が藤原組から離れてつくったパンクラスの場合も、いま現在は、いわゆる〝秒殺〟という明快さだけが浮き上がっちゃって、「？」が消えかかっている気もしますよね。

石川　うん、ちょっとね（笑）。

——ただ、あのスタイルを「そんなことは道場でやってればいい」と、簡単にひと言で片付けてしまうような人にも、結局「？」も見えないような気もしますけどね（笑）。

石川　そうです。それは思想が違うだけであって、ああいうスタイルが好きであればそれでいいし、ボクはそういうことには関係なしに猪木さんが好きで、藤原さんが好きだという、そういうレベルなんですよ。

——それは実にいいレベルですよ。いい周波数というか。藤原組の中でも一番頑固者だったでしょう。

石川　そうなんですよ（笑）。

——そうじゃなければ、たった一人で組長についていかないでしょ（笑）。

石川　ハハハ。だって「人間の感動」以上のものってないでしょ。「この思想を信じる」とかいうことよりも、「この人が好き」っていう方が凄いエネルギーになると思いますよ。

——いまの新日本についてはどう思ってますか？　猪木さんの影は落ちてますかね。

石川　ちょっと違った感じですよね。猪木さんが常に前線にいるわけじゃないですから。それは仕方ないんじゃないですか。また、そうしていかなければいけないんじゃないですかね。その時代のトップの人が引っ張っていかないと。

——石川さんにとって新日本のリングに上がるということは楽しみですか。

石川　そうですね。ヤングライオンの選手たちとやれますしね。まだ永田（裕二）選手とは一騎討ちやってないんですよ。

——ああ、それは面白そうだな。

石川　やりたいですねえ。

——永田選手や石沢選手というのはヤングライオンの中でも光り方がひと味違うという感じはしますよね。

石川　ボクも永田選手と石沢選手には何か感じるんですよ。

——それは石川さんの言う〝匂い〟ですよね。そういう選手が放つ光が鈍い感じで光ってるというのも、その対極に小島（聡）選手のような明るいタイプがいるからでしょうね（笑）。

石川　いまの時代の流れというか、そういうカラーみたいですよね。

——そういう時代の中では、石川さんは古いタイプの選手になってしまうかもしれないけど、とにかく石川さんには、猪木さんのような圧倒的な選手になってもらいたいですね。

石川　なれますかね？

——なろうと思わないとなれないですよ。

石川　それはそうだ（笑）。とにかく圧倒的な存在になりたいですよ。

——猪木的なモノの見方でプロレスを考えてる人、プロレスをやってる人ってなかなかいないですよ。そういう意味で石川さんは貴重ですから。じゃあ最後に、「ところで、石川さんの夢は⁉」（笑）。

石川　（ニヤリと笑みを浮かべて）「人の人生に影響を与えてしまうようなレスラーになりたいです！」。

〈94年4月8日／東京足立区（当時）・藤原組道場にて収録〉

〝実〟ばっかりを追ってる人がいる。それは〝陰〟のデッサンをしてないということ。だから人に感動を与えられない

石川

8・12TFMの会議室にて、11・23両国大会正式決定が記者会見で報告された。やれんのかーッ!!

■このところ、圧倒的な爆発力を見せつけファンの喝采を浴びる裏で、「猪木のモノマネ」「バッタもん」などという罵詈雑言も浴びてきた石川雄規。

●しかし、この再録インタビューを熟読していただければ、単なる猪木のモノマネではなく、〝イノキという概念〟を身体に取り込み、オリジナルの〝イシカワ・ユーキ〟を独特の感性でもって作り上げているのがわかっていただけるのではないだろうか。え？　わからない？　わからない人はわからないでけっこう。わからないヤツがバカなんだ！　ダーッ！（『バカ』の部分は石川社長風に、ヨダレを垂らしながら目一杯の力を込めて発音してください）

▼〝トーイ〟から〝ユーキング〟へ——。わからない人には、そのステップアップぶりを両国大会で十二分にわからせてあげます。ね、社長？

必読連載第9回

石川雄規の『闘いの美術館』

あるいは『第二の故郷』

その日、三軒茶屋のスーパータイガージムではカール・ゴッチさんが特別ゲストとして指導をしてくれていた。おそらく全ての会員が、伝説の〝神様〟カール・ゴッチを目前にし、全身を尊敬と憧れによる緊張に包まれていた。ゴッチさんは初めて会った我々に対し、たいへん気さくに、そしてとても丁寧にアドバイスをしてくださった。『関節技は波に揺れる船の甲板に転がる石のようなものだ。一刻一秒変化する状況に常に対応できなければならない』ゴッチさんによって展開される技の流れは、まさに神業だった。

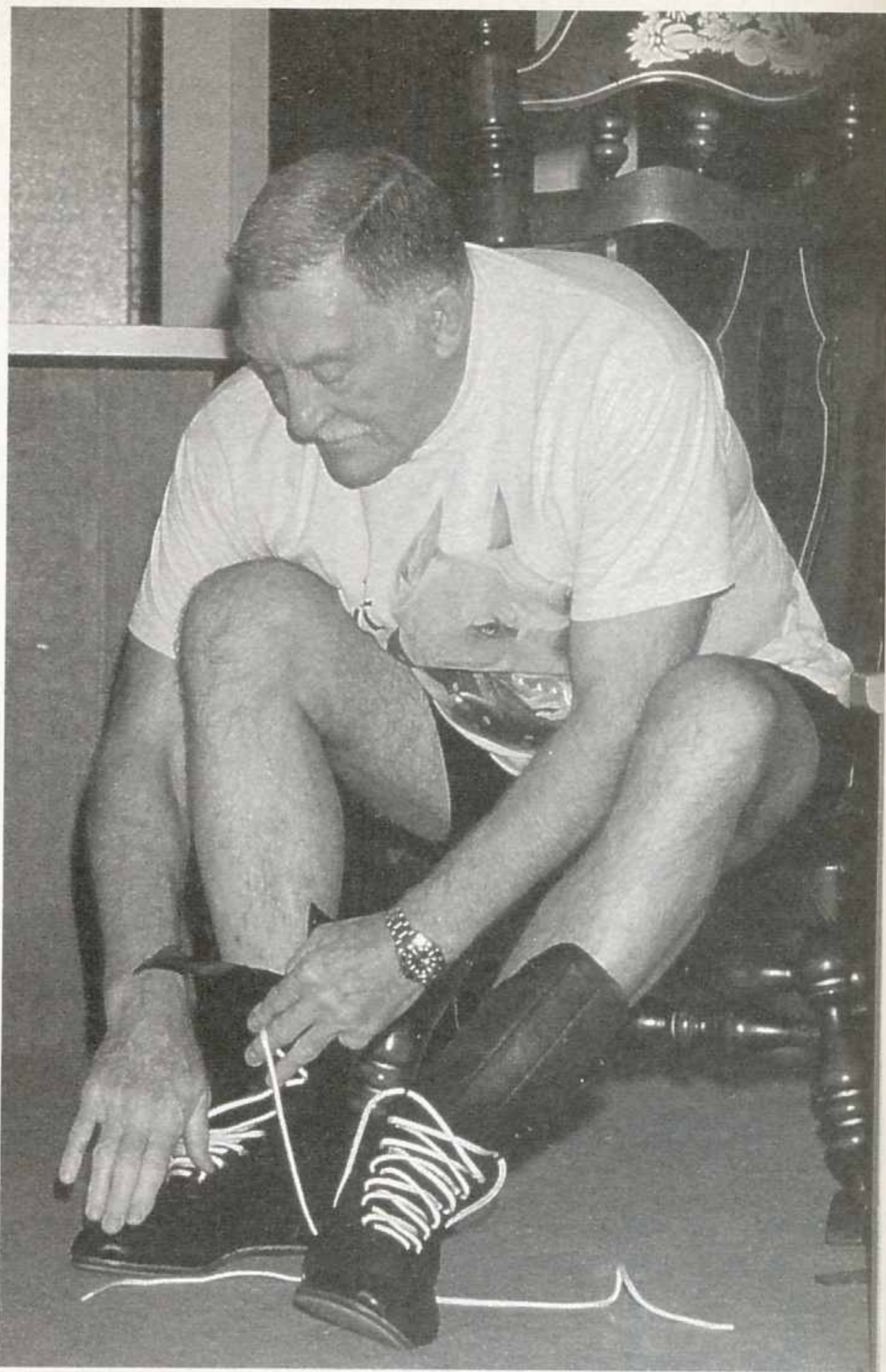
練習の合間の雑談中、ゴッチさんは私を見つけてこう言った。『ボーイ、ユーの筋肉は見栄えは良いがニセモノだ。ウェート・トレーニングばかりやっているだろう？』その通りだった。当時レスラーを目指し、とにかく体を大きくしたかった私はそうするしか方法を知らなかったのだ。『これをやってみろ、これはできるか、これはどうだ？』ゴッチさんは次から次へと変わった練習方法を紹介し、四苦八苦する我々を見ては『ヘイ、ボーイ、どうした？　こんなオールドマンだってホラ、このとおりちゃんとやれるんだぜ』そういって本当に嬉しそうにいたずらっぽく笑った。

練習を終え、帰ろうとするゴッチさんとほんの一瞬だけ二人きりになった。すぐ目前でゴッチさんが階段を降りている。この瞬間しかチャンスはない、本能的にそう感じ、勇気を振り絞って声をかけた。『ミスターゴッチ』。神様は歩をとめて私を振り返ってくれた。『こ、今度ゴッチさんのお宅に伺っていいですか。あなたの練習と技を教えてください。お願いします』拙い英語でそう一気にしゃべった。ゴッチさんは一瞬不思議そうに私の顔を見た後『O.K.』そう言ってウインクをしてくれた。

あれから1年が経っていた。ようやく家を探し当てたとはいえ、はたして私のことを覚えていてくれるだろうか。いや一介の名もないアマチュア会員のことを覚えていてくれる筈はない。どうしようか……。今更ながらそんな心配をしつつ、エラ夫人に案内され、玄関先のゴッチさんのところまで歩を進めた。私はアポなしの突然の訪問の失礼を詫びた後、自己紹介の代わりにこう言った。『ゴッチさん、あなたに言われた通り本物の筋肉に変身してきました』。ゴッチさんは暫くその言葉の意味を探したあとじっと私の目を見つめ、突然あの時のことを思い出してくれた。『OH!　あの時のボーイか！　ジーザス、クライスト。いったいどうやってここがわかったんだ？』目を丸くするゴッチさんに、すでにタクシーの運転手のドンから事情を聞いていたエラ夫人が、私の代わりに説明してくれた。『なんてこった、信じられん……。まあ、とにかく入りなさい』家の中に足を踏み入れた瞬間、アメリカン・ピット・ブルがはしゃいで足元にじゃれついてきた。世界一獰猛だと云われるこの犬の歓迎に私が固まっていると、ゴッチさんは大笑いして『ジャンゴ!!』そう一喝して彼を別の部屋に閉じ込めてしまった。

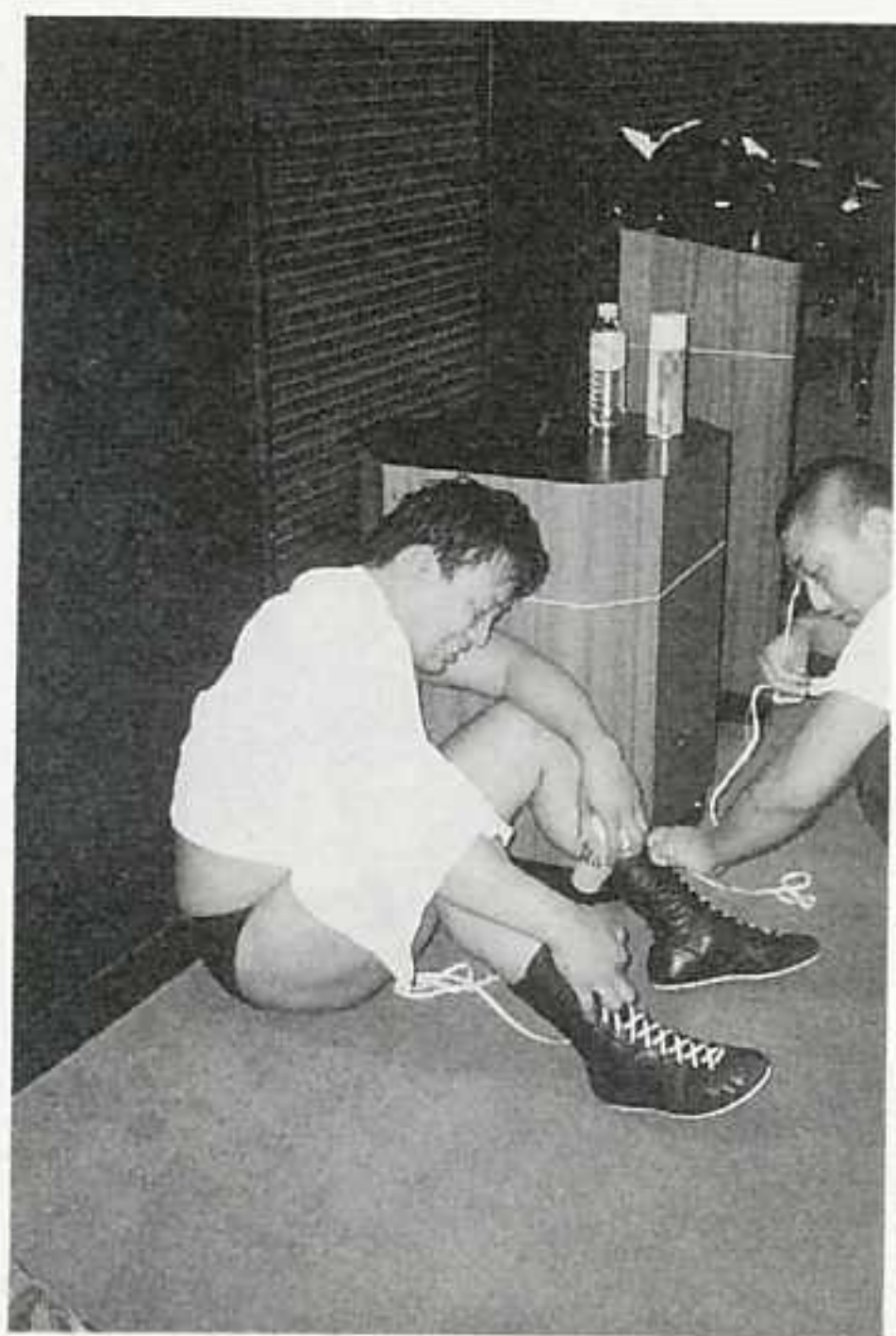
日本製の飾りや置物に囲まれたオリエンタルな居間でゴッチさんは私にワインを勧め、『でも、レスリングの話はどんなワインよりも私を酔わせてくれるのさ。それで……？』そう言って私の相談事を切り出してくれた。私は片言の英語で、自分がプロレスラーになりたいこと、その為にどうしてもゴッチさんの指導を受けたいこと等を一生懸命説明した。ゴッチさんは『うん、でもアメリカのプロレスリングはもはや腐っている。日本が一番だと思うが……。実は私はつい先日、両足の親指を手術したばかりで思うように動けないんだ。自分自身のリハビリで手一杯であるのが本音だ。私の親友のマレンコがレスリングスクールを開いているのでそこを紹介してあげよう。私も時々教えに行くことにするよ。彼の電話番号を教えるから電話してみなさい』と言った。

話が一段落し、宿泊先が決まったら連絡をする約束をして表に出ると、そこには先ほどと同じ運転手、ドン・ドーチェが待っていてくれた。ゴッチさんが気を利かして同じ運転手を呼んでくれたのだ。『話はうまくいったかい？』『YES.おかげさまで。どうもありがとう』そう答えるとドンは満足そうにうなずき、『GOOD!』そう言って微笑んだ。『ところで、宿泊先は決まっているのか？　値段はどのくらいのところがいいんだ？』そして彼は親切にも自分の常宿を紹介してくれると言った。

絶望の淵から一転して未来に明確な道が開けた一日。漸く、窓の外をながれる風景をゆったりとし

『ゴッチさん、あなたに言われた通り本物の筋肉に変身してきました』

た気持ちで眺めることができた。遥かに広がる平原には緑の木々とオレンジ畑が連なり、いたる所に沼や湖が濃紺の水面に強い日差しをキラキラと反射させている。道端の木から栗鼠が駆け降りた。私が感激していると『沼にはアリゲーター（巨大なワニ）もいるんだ。それから…おっと！』ドンは急ブレーキを踏んで前方を指さして笑った。『それからあいつも』道路の真ん中、そこにはなんとアルマジロが歩いていたのだ。『初めてみた……』目を丸くする私に、『可愛いからといってこいつをさわったりしてはダメだよ。病気をもってたりするから』。なるほど、日本でいうところのキタキツネみたいなものだろうか。アルマジロを横目に見ながらしばらく行くと、タンパの町並みが見えてきた。

『ここだ』ドンは車を停めてフロントに行き、私をマネージャーに紹介してくれた。そして別れ際『何か困ったことがあったら連絡をよこしな』そう言う彼から名刺を渡された。勘定を払おうとすると、彼は顔の前で軽く手を振って『いらないよ、往きに十分もらったから』。そんなことはなかった。ただほんの少しだけチップを多めに渡しただけだった。『でも……』言いかけた私の言葉を遮って『それに、メーターを倒してなかったからいくらかわからん』彼はそう言って笑った。感激で言葉が見つからなかった。『GOOD LUCK! SEE YOU.』彼はそう言うと私の右手を力強く握った。『THANK YOU FOR EVERYTHING.』彼の後ろ姿を見送り、手にした名刺を見てみるとイエローキャブのNO.11。手書きで"Don Doche"。彼の名前が記されていた。

部屋に入ってベットに寝転び天井を見ると、ふと腹が減っているのを思い出した。そういえば、タンパに来てからこの2日というものろくな物を食べていない。この土地は鉄道は走っておらず、そのくせだだっ広い為、自動車がないと　どうにも不便なのだ。歩いて行くにもこの炎天下では目的地に着くまでにきっと干からびて倒れてしまうだろう（それほど気候は暑く、更に困ったことに近所にレストランも無かったのだ）。缶詰を買ったものの缶切りが売っておらず、つまりは自動販売機のジュースとポップコーンしか食べていなかったことになる。

近所を捜索がてら公衆電話からゴッチさんに電話をして、宿泊場所の住所と電話番号を伝えた。マレンコさんに電話をしなければと思ったけれど、全く会ったことのない人に、ましてや英語でどう話したらいいか心の準備がまだできず、とりあえず明日電話することにした。あまりにもいろいろなことがあった一日だった。さすがに疲れたのだろう、その日は横になるとすぐに深い眠りに就いた。

翌朝、ノックの音で起こされた。私はびっくりしてドア越しに尋ねた。『Who is it?（どなたですか）』返ってきた答えに更に驚かされた。『MALENKO. This is Larry Malenko.』

今日電話するつもりだったマレンコさんが訪ねてきてくれたのだ。

（つづく）

岡本　なんかいいことないっスか。最近、いいことないんですよ。ハァ〜。

——どうしたんですか、いきなり（笑）。

岡本　燃えたぎるような恋がしたいんですよ。

——何言ってんだ（笑）。

岡本　昔、「もしも空からお金が降ってきたら」って歌があったじゃないですか？

——「もしもピアノが弾けたなら」でしょ（笑）。

岡本　世が世なら全日本不幸選手権に出たいくらいですよ。この前、全財産を盗まれたんですよ！　某団体の手伝いに後楽園ホールへ行ったとき、ウエストポーチを盗まれたんですよ。全財産が入ってたんですよ！　保険証、免許書、カード、携帯電話、メガネ、CDウォークマン、矢沢永吉のベスト盤。

——ガハハハハハ！　まさにベスト。

岡本　そう、自分のベスト・オブ・98年が。3冊持ってる『成り上がり』のうちの1冊が入ってたんですよ！　水道橋の駅のゴミ箱まで全部探しましたから。

——災難ですねえ。なんか顔面も傷だらけですね。

岡本　あと鼻が溶けちゃって。

——へ？　鼻って溶けるんですか!?

岡本　カリフラワー耳ってあるじゃないですか。レスラー用語で「耳が沸く」って言うんですけど、あれと一緒で「鼻が沸く」って感じで。医者には「極めて珍しい症状だ」って言われて。

——岡本選手は試合中の壊れっぷりも最高ですよね（笑）。突然、「プア〜！」って雄叫びあげたりして。普段から壊れてるのかもしれないけど（笑）。

岡本　まあ、前から忘れっぽいんですよ。ホントに人を恨んでても翌日には「いやぁ、どうも！」って感じなんで。

——じゃあ、前から壊れてたんですかね（笑）。

岡本　瞬間的には「殺すぞ！」って思うんですけどねえ……。

島田　ん〜、元気にやってる!?

——誰かと思えば島田さんですか。

島田　最近、火の玉見たらしいよ。

岡本　この前のお祭りプロレスの日（7・26）にですね、自分イビキがうるさいんで、1人で車の中で寝てたんですよ。そしたら車がガタガタ揺れるから目を開けたら、火の玉が飛んでるんですよ！　パニックのうちに夜があけたんですけど。

——相変わらずイカレた団体ですねえ（笑）。

岡本　（石川）社長のオモチャですよ。

——ストレスたまるでしょ？

岡本　いや、結構、楽しんでますよ。「いつかはやってやるぞ」と思うんですけど、次の日には忘れるんですよね。

——そういう忘れっぽい部分につけ込んで先輩はいろいろイタズラするんじゃないんですか。どんなことされてるんですか？

岡本　留守番電話に某社長と思われる人からイタズラ電話がかかってきたり、バック開けたら鉄アレイが詰まってたり、お化けは見るし、包丁で刺されたこともあるんですよ。

——ええっ〜！　誰ですか？

岡本　……小野さんに。包丁持ってるときに冗談で「刺すぞ、この野郎！」って言われて。「小野さんだからホントに刺すかな」と思ったら、見事にプチって刺されました（笑）。

——さすがトンパチ（笑）。岡本選手は永ちゃんばりに「キャデラックでタバコを買いに行くのが夢」だったりしな

おんぼろ団体バトラーツ、天下の国技館進出記念！

銃士が、いま熱い！

旗揚げ投書当初はプロレス界で1、2を争うおんぼろ団体だったはずバトラーツも、11月には身の程知らずにも両国国技館を開催するという。「おい、ホントかよ!?」とか言ってる間に、選手もすくすく育っている。本誌は創刊号で32ページものバト特集を組んだという誰にも自慢できない実績を活かして、その後バトラーツに誕生した新戦力の素顔に迫ります！

いんですか？

岡本　いいですね。コツコツと一歩一歩努力してですね……。

——コツコツやってたらキャデラックでタバコを買いに行けないですよ。

岡本　そうですね、じゃあ三段跳びぐらいで……。

——じゃあ、そろそろ締めましょうか。ビシッといきましょう！　今夜は？

岡本　最高！

——そこんとこ？

岡本　ヨロシク！　プア〜!!

ブレーキの壊れた成り上がり

岡本 衛

おかもとまもるプロフィール
■1972年11月7日、静岡県出身。平成7年FMW入門。翌年5月23日、vs黒田哲広戦でデビュー。平成9年6月、バトラーツに移籍。なお、引っ越しの際には川越から越谷まで自転車で移動。意地を見せるも、シマシマのシャツを着ていたおかげで身体がシマシマに焼けてしまい笑われる。口癖は「プァ〜！」。尊敬する人は矢沢永吉。身長180cm、体重95kg。

相撲か？　プロレスか？　それが問題だ！　おんぼ

バトラーツ情念三銃

聞き手／坂井ノブ
Interview by Nobu Sakai
撮影／遠藤政文
Photographs by Masafumi Endou

誰よりも最速！ マッハ純二

まっはじゅんじプロフィール■1971年8月21日、福岡県出身。平成9年バトラーツ入門。翌年2月7日、vs土方隆司戦でデビュー。話し方、特に独特の間が人気を博し、先輩たちのアイドルとなる。つい1週間前にパイレーツを知る。身長175cm、体重82kg。

―マッハさんはいくつで入門したんですか？

マッハ　そうですね。25歳です。最初は新日に受かったんですよ。

―同期には誰がいましたか？

マッハ　そうですね。大谷晋二郎、高岩竜一。

―Jr.でバリバリ活躍してる人たちですね。そういえばマッハさんはアニマル浜口道場出身なんですよね？　一時期、コーチもやっていたとか。浜口ジム出身の日高選手も「マッハは鬼コーチで声も掛けづらかった」って言ってましたよ。

マッハ　そうですね。たぶん、誇張されてると思いますよ。

―「いまとは全然違う」って（笑）。

マッハ　そうですね。現状は、こんなつもりじゃなかったんですけど。

―バトラーツでは、みんなのアイドルらしいですね。新弟子は芸を披露しなきゃいけないわけですよね、テング舞いとか（前号参照）。

マッハ　そうですね。昔から苦手なんですよね、そういうの。ボク、人と違うんですかね？

―小さい頃は、どんな子供だったんですか？

マッハ　そうですね。あまり目立たない、おとなしい子供でした。

―クラスの中では、どんなポジションだったんですか？

マッハ　そうですね。普通でした。

―いじめっ子、いじめられっ子という分類でわけると？

マッハ　そうですね。どっちかっていうとギリギリいじめられっ子だったのかな。

―身体は大きかったんですか？

マッハ　そうですね。病弱でした。

―趣味はなんですか？

マッハ　そうですね。懸賞応募が好きなんです。

―アハハハハ、地味だ（笑）。リングネームは派手なんですけどね。

マッハ　そうですね。本名でやりたかったけど、「嫌だ」とは言えないですから。

―インパクトありますけどね。

マッハ　そうですね。カタカナですからね。

―最後に両国への意気込みを聞かせて下さい。

マッハ　そうですね。気合いだーっ!!

―頑張って下さい。

マッハ　そうですね。あんまりしゃべれなくてすみません。ボクのインタビュー、3行でいいです。

―わかりました（笑）。

宇宙一生意気な新人 土方隆司

ひじかたりゅうじプロフィール■1978年5月17日、埼玉県出身。平成9年バトラーツ入門。翌年2月7日、vsマッハ純二戦でデビュー。マッハとは同期の桜。先日、7月18日後楽園ホールで行われた『キックガッツ98』で4代目タイガーマスクと対戦（VTルール）。身長175cm、89kg。

―え～、土方選手は……。

岡本　（隣の席からいきなり）彼はいいこと言うんですよ。

―それをこれから聞くんです（笑）。

岡本　そうか。じゃあ、失礼します。（おとなしく退場）

―いや～、岡本さんはおもしろい人ですね。

岡本　（ダッシュで戻ってきて）いま、椅子にぶつけて腕時計壊れちゃいましたよ！　なんスか⁉　WHY、なぜに？

土方　「WHY、なぜに？」じゃないですよ（笑）。誰の取材かわかんないじゃないですか！

岡本　ダメだもう……（とぶつぶつ呟きながら退場）。

―さ、気を取り直して始めましょうか（笑）。土方選手は普段は笑顔だけど、じつは相当悪人らしいですね。

土方　そうですね、ケンカ屋でしたね。近所で評判悪かったですよ。

―ケンカっ早い土方さんでも、バトラーツの道場じゃさすがにケンカ出来なくて、つらいんじゃないですか？

土方　でもキレるようなことがないですから。

―岡本さんは小野さんに包丁で刺されたって言ってましたよ。

土方　僕はそんなことないですよ。

―そのへんが世渡りが上手いと言われるゆえんですかね。

土方　そうかもしれないですね（ニヤリ）。瞬間的に「殺してやる！」って思ったこともありますけどね。そういうのを鎮めるときに、基本的にスケベですから、やりたい女の子のこと考えたりしてますよ。

―モテそうですもんね。土方フリークがいるって、もっぱらの噂ですよ。

土方　またウソばっかり（笑）。

―どんなタイプの女性が好きなんですか？

土方　年上のお姉さんがいいですね。イタズラしてほしいんですよ！

―何言ってんだか（笑）。

土方　8歳上の女性と付き合ったことありますけど、骨抜きにされましたよ（笑）。

―じゃあ入門してから一番辛かったことって何ですか？

土方　バーリ・トゥードでタイガーマスクに負けたの悔しかったですね。VTに関しては、ずっと臼田選手の練習相手をやってたんで。またショックの理由が大変だったんですよ（ニヤリ）。

―不敵で生意気な土方隆司がそんなにショック受けることってあるんですか？

土方　いや～、まあそれは置いといて。

―「勝ったら風俗連れてってやる」って言われてたとか？

土方　いや、勝ったらやらしてくれるっていう女の子がいたんですよ（笑）。

―なにがなんだか（笑）。

他人（レスラー）の苦労を噛みしめて味わう連載

女子プロ人生劇場

第2回

コマンド・ボリショイ

3日前まで交通事故で入院していたというのに、キツイお願いだったとは思うが無理を言って取材を行わせてもらった。入院中は考えることも多々あったと思うので、退院から日を開けない方がいいと思ったからだ。当日、ボリショイの足には包帯が巻かれ、松葉杖を突きながら現れた。見たところ少し落ち込んでいるようだった。波瀾万丈の人生を歩むボリショイに女の生き様を見ろ！

構成／坂井ノブ
interview by Nobu Sakai
撮影／和智正夫
photographs by Masao Wachi

福岡（晶）の家に向かってる途中だったんですよ。バイクで走っているところ、ウインカーも何も出さずに寄ってきた車に跳ねられたんです。傷口に白いのが付いたのかなと思って「ああ、汚れちゃった。最悪！」とか思ってたら、骨だったんですよ（笑）。まあ、慰謝料をいくらもらえるんだろうって感じで（笑）。

結局、足の骨折と擦り傷だった。身体が資本のプロレスラーが試合も出来ず、おまけに身体に傷まで残るのだから大事だ。落ち込むのも無理はない。大事故にならなかったのが不幸中の幸いだった。

福岡が車で急いで来てくれましたよ。まあ、相手の人も悪い人じゃないと思うけど……ビビってましたね。駆けつけてきた福岡なんか「テメェ、誰にぶつけたと思ってんだよ！」って怒鳴ってた（笑）。あとで「殴ろうかと思ったけど、夫婦だったからやめといた」とか言ってるんですよ（笑）。救急隊員に「そんな軽装で乗っちゃダメだよ」って私が注意されたんですけど、そこにも福岡が割り込んできて「そんなの暑いんだから当たり前じゃん！」とか毒づいてました（笑）。

福岡の非常に頼もしい、ちょっといい話だ。さすがはJWPの屋台骨を引っ張る女。一方、事故の当事者であるボリショイの対応は大人しい。

平和主義者なんですよ。昔はお兄ちゃんに「アイツとケンカしてみろ」とか言われてやってたけど（笑）。「オレの妹だったら勝てるはず」とか言っちゃって（笑）。

なぜ兄は妹にケンカをさせていたのか？じつはボリショイには両親がいない。妹を

2、3歳から養護施設でお兄ちゃんと暮らしてました

たくましくしたいという兄の親心からであろうと思う。

お父さんは早くに亡くなって、お母さんはいるんですけど、全然会ってないんですよ。別の男の人と暮らしてて、私たちは養護施設で暮らしてました。2、3歳からかな。小学校4年生ぐらいまでは家に帰りたくて、毎日泣いてたんですよ。でも、そのうち、私は私だなって考えるようにしました。

小学4年生で早すぎる自立の決意を固めざるを得なかった幼い日のボリショイ。切ない話である。

「次の夏には会えるかな」「冬には会えるかな」って思い続けるのに全然会えないと、そうなっちゃうものですよ。最初は見返したいという気持ちもあったと思うんですよ。「会いにこさせてやる」って。でも、そのうちバカバカしくなったんです。兄弟いっぱいいるし、誰かが面倒見てくれるだろうって（笑）。

呑気に語るボリショイだが、それにしてもヘヴィー過ぎる。いったい施設ではどんな生活を送っていたのだろうか？

クリスマスにはサンタが来ましたね（笑）。1ヶ月早いサンタが11月に来て、12月には別の近所の教会の人たちがプレゼントを個人個人にしてくれるんです。あと国鉄（当時）がもちつき大会やってくれてたり。みんなが思ってるより、恵まれてると思いますよ。

普通の子供が夢のない生活を送っているのに対し、そういったイベントを心待ちにする姿が無邪気でかわいらしいではないか。そういった自分自身の思い出が、ボリショイを突き動かす。

いまは巡業先で時間が空いたら、お菓子を持って施設に慰問に行ったりしてるんです。そしたら、そこの子たちがお礼のハガキを送ってくれるんですよ。そういうの読んでたら、嬉しくなって……いろんなところに行きたいですね。

山本小鉄に「好きじゃない」と言われてしまったボリショイ・キッド。

孤児院出身のマスクマンがプレゼントを持って親のいない子供たちを慰問する姿……どこかで読んだあの話にそっくりではないか。そう、ボリショイはまさにリアル・タイガーマスクである!! 自分と同じ境遇の子供たちのため、タイガーマスクを地でいく姿はアルシオンのタイガードリームにだって負けちゃいない。

『タイガーマスク』は読んだけど、あんまり覚えてないですね。それよりもプロレスに入ったのはジャガー（横田）さんと、デビル（雅美）さんの試合を見て衝撃を受けたからです。勉強するの好きじゃなかったから、「ケンカしてるだけでお金もらえるなんてラッキー」って思って（笑）。すごくお金を稼げるイメージがあったんですよ。普通にスポーツやってオリンピックに行くよりも儲かるなって。高校に行く必要はないと思ってました。

頼るべき親もいないボリショイは、憧れと、もう一方で自活のための仕事という意識を持ってプロレス入りする。苛酷な環境から抜け出すために、力で夢と金を掴み取る世界に身を投じたのだ。そして、現在ではJWPの道場でコーチを務めるまでになっている。新人を育てるという団体の背骨を担っているのだ。プロレス界のみならず、現在はいろんなところで人と人との関わり合いが減っていると言われているが、JWPはどうなのだろう？

「さあ、みんなで何かやろう！」というときに、下の子たちは自分たちのペースでやろうとしますね。「みんなでお風呂入ろうよ」って声掛けても、「いや、自分は入りません」とか（笑）。私はみんなで一緒に行動するのは好きですね。でも、1人でじっとしてるのも好きですけど。寂しがり屋なんです。いつも福岡の家に電話するんですけど、なかなかいない。だから1人で福岡の家の留守電に向かって、ギターを弾いたりして（笑）。最後には「ありがとう！」って言って電話を切る（笑）。気分的には「中島みゆき」なんですけど、福岡を喜ばそうと思って「GLAY」を歌ってます。

中島みゆきの気分で歌うGLAYとは、どういうものか一度聞いてみたいものである。施設出身というバックボーンと、ピエロのキャラクターがあまりにマッチし過ぎるために、いろいろ余計なイメージまでしょい込んでしまうこともあるだろう。

誰でも心の中に暗い部分は持ってると思いますよ。私の場合は、そういう部分を想像させることが多いんじゃないですか？ まあ、普段の私は違いますけどね。

確かに、淡々と自分の過去を語る姿に暗さはなく、人間的な強さを感じた。逆に、プロレスや人生についていろいろ思い悩むことはないのだろうか？

レスラーは入院して、ガラッと変わることが多い。ボリショイの今後に注目だ。

プラムさんの事故があったのに みんな何考えてるんだろう？

よく悩みますよ。ボリショイ・キッドはコミカルなことばっかりやってたんで、道場でやってるような勝敗にこだわるレスリングが出せないんですよ。「このままでいいのか？」って思ってました。

ＪＷＰの前身、ジャパン女子のコーチには鬼軍曹・山本小鉄がいた。当時は、新日流の実戦的なスパーリングでトレーニングを積んでいたのである。

小鉄さんは、ボリショイ・キッドが好きじゃないんです。まあ、当たり前ですね（笑）。「そういうレスリングは好きじゃない！」ってハッキリ言われましたから。でも、コマンド・ボリショイの試合を初めてご覧になったとき、大した試合じゃなかったと思うんですけど「よかったぞぉ〜!! ワキ固めの乗り方が」って熱心に褒めていただいて（笑）。やっとお気に召してもらえたみたいでした。ボリショイ・キッドはエンターテイメント性重視で自分のカラーを守っていきたい。

格闘技経験も豊富なボリショイ。柔道は１級、空手で３位にもなったことがある。

ボリショイは、女子プロレスに道場論的な強さは必要だと考えているのだろうか？

お客さんに提供できる何かがあればいいと思います。しっかり練習して、出来ることを精一杯やって弱いのはしょうがないと思う（笑）。リングに上がる価値があるか、ないかはお客さんが決めるから……。ただ、女の子でもあまりにも身体が出来てない子とか、基礎がない子が多すぎますよ。

男子プロレスも同じような問題に直面している。インディー団体の中には、決してプロレスラーとは認めたくない身体の選手もいる。当然、身体が出来ていないことで大きな事故にだってつながりかねないのだ。特に、ボリショイの所属するＪＷＰではプラム麻里子選手の事故があったばかりだ。

あの事故から技に対する考え方が変わりましたね。頭から落としたりする危険な技を結構使ってますよね？ ああいう事故があったのに、みんな何を考えてるんだろうと思うんですよ。えげつないことをしないと、人を引きつけられないんだったら、それはもうプロレスラーではないと思います。まあ、プロレスラーなんですけどね（笑）。デビルさんみたいに、片手を上げただけでパッと華があるというのが、自分が憧れたプロレスだったのに、いま自分がやってるプロレスはそうじゃないと思います。みんな命懸けてやってます。私も命懸けてますけど、危険な方向だけじゃないだろうと思うんです。雑誌とかでも危ない技を「凄い」って書いてるじゃないですか？ 私は凄いとは思わないんですよ。

女子プロ人生劇場

昔のレスラーは立ち振る舞いや、存在感で銭を取れたものだが、現在はレスラーと一般人の境界線が曖昧になっている。過激な技を出さないとお客も満足しないだろう。

ファンも付いてこないでしょう。

ボリショイもそれは感じているだけに、よけいに苛立つのだろう。よく女子プロレスラーは「プロレスを愛してるんです」という言葉で自分のやる気を表現する。

それも怪しいんですよね。そうやって言えば楽なんです、答える側の頭が悪いから。そうやって答えれば、それ以上難しいことは聞いてこないじゃないですか？ どの仕事でも「仕事に命を懸けてる」って言いますけど、出来ればその仕事で死にたくはないと思うんですよ。やるだけやって、もしそういう事態になっても後悔しないというだけであって、なにも死にたいわけじゃないと思う。お客さんにしても、危険な角度で落ちた技で喜んでほしくないんですよ。それは失敗か、何かしたはずなんですから、もっとよく考えてほしいですね。

ボリショイの顔つきが完全に変わった。同じ団体の仲間をああいう形で失い、プロレス界が本気で考え、変えていかなければならないことだが、そうもいかない部分があまりに大きい。復帰したら自ら先頭に立って変えていこうと思っているのだろうか？

のんびり構えたくないですね。私だって長く出来るとは思ってないし。身体が動かなくなるといろいろ考えますよ。入院してた病院で、隣のベッドのお婆ちゃんは流動食なんですよ。そういうふうになる前に、私も一生懸命噛んで食べようと思いました（笑）。で、そのお婆ちゃんに「死ぬときはどうやって死にたい？」って聞いたんです。

よくもまあ、そんなことを聞いたものだ。シャレにもならない。

「死ぬ3日前には、ウ●コとオ●ッコをあっちこっちに垂れまくって死んで、みんなに『せいせいした』って言われたい」って（笑）。そしたら、それを聞いてた娘さんが「誰がそれを片付けると思ってんのよ！」だって（笑）。そういうのっていいなと思う。

……今度リングに復帰するボリショイが、いったいどういう変わり方をしているか、非常に楽しみだ。

コマンド・ボリショイ■本名、生年月日不明。平成４年６月29日、後楽園ホールにてデビュー。ボリショイ・キッドというもう一つの顔も持つ。

全女30th記念企画

一夜復活 ダンプ松本 interview

今年で30周年を迎える
全女の長い歴史上、
最凶最悪の悪役・
ダンプ松本が遂に
『紙プロ』初登場！
リング上で極悪の
限りを尽くした
ダンプの根底には
何があったのか？
貧乏、イジメ、抗争、
嫉妬が壮大なスケールで
交錯する女子プロ界の
生きる伝説を知れ！

しゃべりだしたら止まらないゼ！
ダンプパニック!!

構成／坂井ノブ
interview by Nobu Sakai
撮影／松永源さん
photographs by Gensan Matsunaga

す。
私も命懸けてますけど、危険な方向だ

レス界が本気で考え、変えていかなければ

【JW

——女子プロレスに一時代を築いたダンプさんなんですけれども、もともとプロレスファンだったんですか。

ダンプ　うん、初めて見たのは小学校ぐらいじゃないかなあ。白黒テレビでやってた頃だから。

——白黒テレビ！

ダンプ　赤城（マリ子）さんとかがやってる頃。よく見るようになったのはマッハ（文朱）さんの時。

——マッハさんは歌も歌ってたし、あの時代のスーパーアイドルだったんですよね。「ワタシもああいうふうになりたいわ」とか思ってたんですか？

ダンプ　そう、マッハさんが好きで。高校一年ぐらいにビューティーペアが流行って。やっぱこれだと思ってオーディションを受けたんですよ。

——昔から悪いことばっかりしてたんですか？

ダンプ　「悪役だから悪ガキだったんだろう」とか言われるんだけど、普通。

——普通って言ってもいろいろあるじゃないですか。

ダンプ　普通よ（笑）。不良でもないけど、勉強もしない。

——一説によると、ダンプさんがプロレス入りした理由がお母さんの身体が悪くて、家を建ててあげるためにプロレス入りしたということなんですが。

ダンプ　そうだよ。家を建てるためにっていうか、貧乏だったんでお母さんを楽にさせたくて。とにかくお金持ちになりたかった。それで入ったの。普通のＯＬより女子プロの給料の方が倍以上いいって聞いてたから（笑）。

——お父さんはどうしてたんですか？

ダンプ　お父さんはいるんだけど、仕事しないグウタラだった（笑）。

——じゃあ、ダンプさんが一家を支えていくしかない状況ですね。

ダンプ　うん。プロレスラーって、そういう人多いんだよね。片親いなかったりとかさ。（長与）千種もそうだし。（ライオネス）飛鳥もそうだし。

——アジャ・コングさんもそうですよね。そういう状態だから家に戻れないという覚悟も半端じゃないだろうし。

ダンプ　みんな、辞めても普通の仕事できないからね。道路工事とか出来ないでしょ（笑）。

——辞められない状況でリングに上がるってことはリング上に出てくるものにも違いが出てくると思うんですよ。今の人たちとは、そういう部分が少し違うと思うんです。で、今日はいろいろ昔の資料を調べてきました。

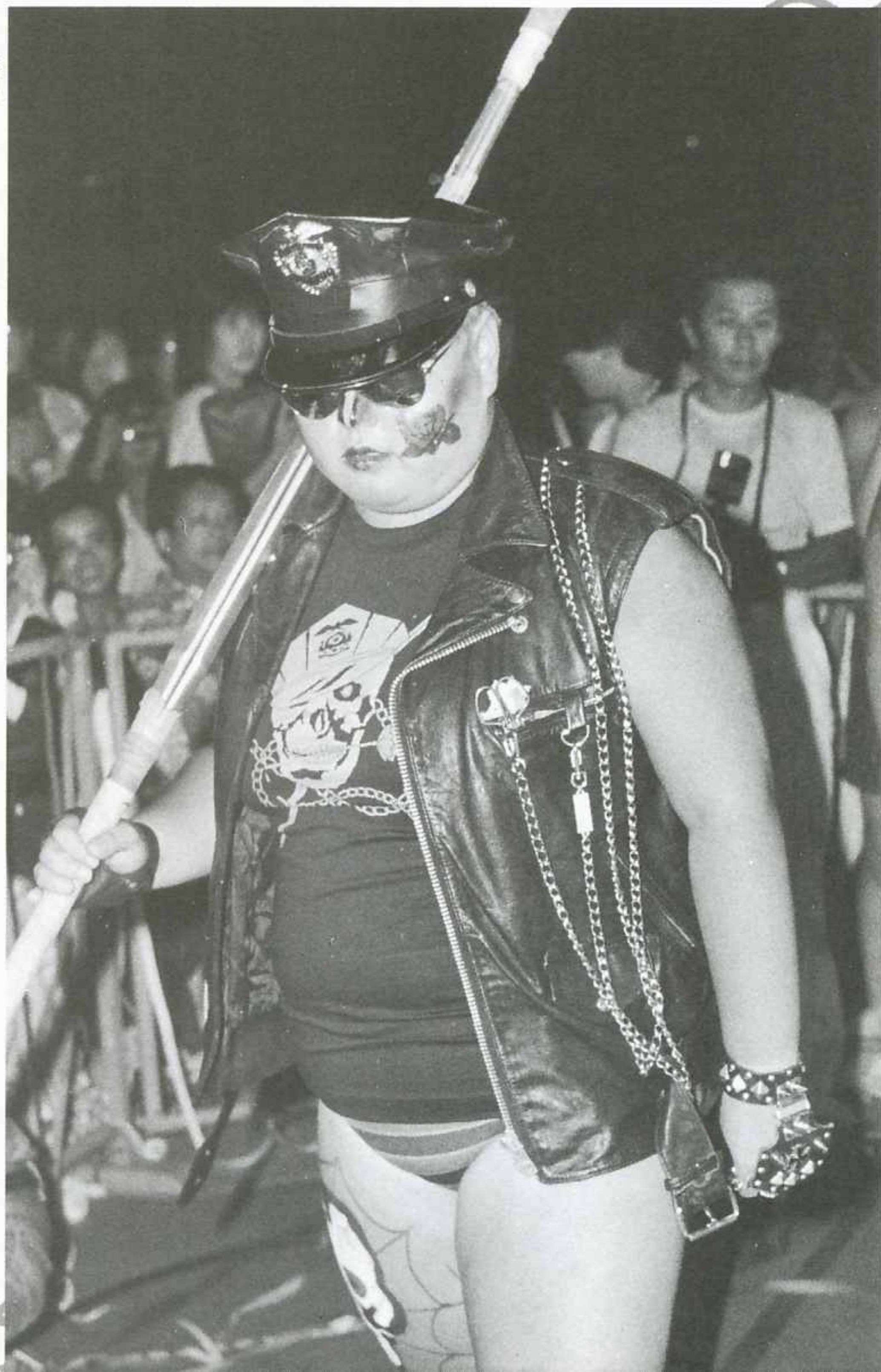
ダンプ　（資料を見ながら）懐かしいねえ、「特技・ウンコをすること」だって（笑）。ふざけてたのかな（笑）。

——アハハハハ！

ダンプ　あっ！　この写真（ビキニ姿で大森ゆかりと2ＳＨＯＴ）ほしいんだ。これは痩せてるんだよお（笑）。

——桃色豚隊（ピンクトントン）のセクシーショットですね（笑）。その資料にもあるんですけど、その頃はイジメがいまとは比較にならないぐらい凄くて、ダンプさんなんか亀の甲羅を背負わされて床に落ちてるパンを食べさせられたって伝説がありますよね。

ダンプ　それはね、旅館によくあるじゃない甲羅の置物とか。あれを背中に乗せられて、パンを投げられて食べさせられたの、ナンシー久美に（笑）。

ダンプは単なる悪役レスラーにとどまらず、芸能活動でお茶の間にも進出、画期的な成功を収めた。タコヤキラーメンのＣＭで「マジだぜ！」と吠え、小学生の間では流行語にもなった。

——ナンシー久美でしたか（笑）。

ダンプ　この前ナンシーさんに会った時に「あんた、アタシの悪口言ってるでしょ」って怒られたんだけど（笑）。

——他にも、そういうイジメはいっぱいあったんでしょうね。

ダンプ　うん。遊びの延長線みたいなイジメならいいんだけど。バスの中に洗濯物とか丸い干すヤツがあるんだけど、あれで干されて4時間ぐらいほっとかれたこともある（笑）。マミ（熊野）さんに（笑）。

——それがふざけたイジメだったんですか（笑）。愛はあったんですか？

ダンプ　愛はない（笑）。あのね、ひいきする先輩とひいきしない先輩っているでしょ。マミさんはみんな平等なの。私はかまわれやすいから、かまわれてただけ（笑）。マミさんでも亀の甲羅の時は「やめなよ」とは言えないのよ、やってるのが先輩だから。だからわざと「ちょっとここに電話してきて」って。

——仕事をくれるわけですね。

ダンプ　そう。仕事をくれてやめさせてくれるっていうね。もう本当に嫌になって辞めようと思った時、マミさんに「自分を捨てるか、プロレスを捨てるか、どっちかにしなさい」って言われて。じゃあ、「自分を捨てます」って答えましたよ。「みんなそういうふうにしてるんだから、できるでしょ？　みんな自分の意見ばっかりじゃ、団体ができないじゃない」ってマミさんに言われて。まあ、イジメられるようなこともしてたんだけどね（笑）。でも、ホント辞めなかったのはマ

全女30th記念企画

「自分か、プロレスか、どっちかを捨てなさい」と言われて自分を捨てた！

ミさんのお陰だと思うし。

――自分を捨てたことがダンプさんの成功に繋がってると思いますね。マミさん以外の先輩はどんな感じだったんですか？

ダンプ　ジャガー（横田）さんとかはね、ヒイキするの。当時、利美（ジャガー横田）さん派とデビルさん派っていうのがあって。最初はデビルさんのとこで遊んでたんだけど、飛鳥と仲良しになったから立野と自分と飛鳥は利美さん派になったの。だけど、普通は自分の派閥だったら守るじゃない、他の人になんか言われたら。自分だったらそういうふうにするんだけど、ジャガーさんはしないの。一緒になって怒るの（笑）。

――さすがに厳しいですね（笑）。

ダンプ　みんな一緒にリング作りをさぼってても、怒られるのは自分と千種なの。怒られないのが大森で2番目は飛鳥（笑）。千種は歩いてる姿だけで怒られたからね（笑）。

――なんでですか。

ダンプ　肩が怒ってるから。今はそうでもないけど、昔はガリガリに痩せて肩が衣紋掛けみたいだったの（笑）。普通に歩いていても肩を振って歩いてるみたいに思われるみたいで。「肩を振って歩くんじゃねえ！」って言われてた（笑）。だから、先輩の前で歩けなくて肩をすぼませて歩いて（笑）。

――理不尽な怒られ方ですね。

ダンプ　一度、泥棒が出たことがあったんだけど全部千種のせいにされたの。なぜかっていうと、会長とかが泥棒が出たって話をみんなにしてる時に、ちょうどそれがご飯どきで、千種はもの凄くお腹が減ってたと思うの。それで下を向いて茶碗蒸しを食べてたの（笑）。

――茶碗蒸し（笑）。

ダンプ　そしたら、「みんな話を聞いてたのに茶碗蒸しを食べてた」ってことで千種のせいにされて（笑）。

何をやっても目立ってしまうのが生まれついてのスターの宿命というもの。それがイジメられる原因なのだろうが。88年2月25日の引退試合では、最初で最後のタッグを結成した。

――メチャクチャお腹すいてたんでしょうね（笑）。

ダンプ　控室で千種が試合の時に先輩と会社の人が入って千種の持ち物を全部調べてるのを見たのね。心の中では思うじゃない、「なんで、そんなことまでするの？」って。だけど、下だから言えない。言ったら「あんたも共犯ね」って言われるし（笑）。そういうこともされてたよ。

――2人とも、それだけ目立ってたからスターになったんでしょうね。

ダンプ　千種はうんと嫌な思いをしてると思う。だから、クラッシュになった時に千種の方が断然人気があったし、やる気もあったしね。あん時にやめなかった結果だと思うよ。1回は辞めたくなる。それはプロレスとかじゃなくて、人間関係で辞めたくなることって絶対あるよね。でも、飛鳥と大森は絶対に思ってないはずだよ（笑）。

――でも、飛鳥さんは、自殺を考えたことがあるって言ってましたよ。

ダンプ　でも、2年目でタッグチャンピオンなんだから（笑）。

――まあ、エリートコースですよね。

ダンプ　上になった時に、壁に当たった時に乗り越える力がないから辞めようとするんだよ。「今頃辞めようなんて思うなよ」って（笑）。

――人気全盛期の時に一時期コンビを解消してましたもんね。

ダンプ　うん。でも、自分たちは下の時がもっと酷かったから（笑）。「アレに較べればマシだよね」って話をすれば平気なんだ。だから、辛い思いは最初にした方がいいよね。

――結果的にそういう人の方がスターになってますよね。

ダンプ　うん（笑）。どんな辛いことでも勝てるから。作られた人たち？　会社に持ち上げられた人たちっていうのはみんなダメだよね（笑）。

――会長も言ってましたよね、それは。

ダンプ　昔からそう。は絶対ダメみたいだよ。

――会長も「ダンプだけはスターになると思わなかった。腕立て伏せ1回もできなかったんだからね」って言ってましたよ（笑）。

ダンプ　でも、会長が私を入れてくれたんだから。（松永）高司さんが社長の時。兄弟で一番いい人だね（笑）。

――あっけらかんとしてますね。

ダンプ　うん（笑）。しっかりしてるね。いろんな意味で大きい人だから。社長が変わっちゃったからダメになって潰れちゃったんだろうね。「兄弟だから次は俺に社長をやらしてくれ」って（笑）。それで兄弟が2年交代で社長をやってるんだよ（笑）。そんな会社ってある？

――アハハハハ！　ムチャクチャですねえ！　夢のような会社だな（笑）。

ダンプ　でも頑張ってほしいよね、特に選手たちは。会社が株とかで失敗してこうなっちゃったんだから選手は関係ないよね。

――ダンプさんから見た経営陣ってどうなんですか。

ダンプ　よくないんじゃない。だって、会長なんて「今の夢は？」って聞かれて、選手のことは何にも言わずに「俺はクルーザーが欲しい」って言ったっていうからね（笑）。

――そうなんですよ！　でも、そういうとてつもないパワーがあるから、まだ全女も続いてるわけですよ。ダンプさんは、よく会長に連れられてクルーザーで海に行ったそうですけど、いろいろいい思いをしてるわけですよね。

ダンプ　メッチャいい思いをしてるよ。だってビューティーペアの時は2年間だったのにクラッシュの時は4年間人気が続いたでしょ。会社も全部建て直したし、隣りの家も買っちゃって駐車場にしたし、別荘買って、秩父の山も買って、クルーザーも買ってたからね（笑）。

――半端じゃない豪快さですね。

ダンプ　だからいつもクラッシュとかと「この事務所の柱はウチらの金！」とか話してたもんね（笑）。

――まあ、もちろんダンプさんたちにも還元されてたでしょうけど。

ダンプ　ただね、クラッシュはコンサートをやったりするから、それで金が入るはずなのね。だけど私は「極悪同盟の選手たちにも（金を）やれ」って会社に言われてギャラを引かれてたんだけど、選手たちに聞くと「もらってない」っていうのね（笑）。いま思うとそういうことをいっぱいされてるよ（笑）。

――ピンハネされてんですか（笑）。

ダンプ　だって引退式の1ヶ月前の旅の時、みんなは寝てるときに自分はデパートの屋上とかを営業に回ってたのにさぁ……。

――いいですね、デパートの屋上（笑）。

ダンプ　いまだったら、イベントでいくらぐらい入るかってわかるじゃない？その頃は「ダンプは悪役でギャラが高い」って言われてたのに一銭ももらえないから、一度言いにいったの。そしたらさ「おかしいんだよなぁ。興行師がよこさねえんだよな。もう少し待ってくんない？」って言われて、結局そのまま引退しちゃった（笑）。

――騙されやすかったというか、人がよかったというか（笑）。

ダンプ　あれだけでもすごく儲かったと思うよ（笑）。

――ホントにデタラメだな、全女は（笑）。

ダンプ　引退してから引退式のビデオが発売されてるしね（笑）。ほんとはいけ

ダンプ松本■昭和35年11月11日、埼玉県出身。昭和55年全日本女子プロレスに入門。ブル中野やコンドル斉藤らを率いて極悪同盟の首領として君臨。昭和63年に引退後はタレントとして活躍中。著書も多数アリ。

※松永高司全女会長は素敵なエピソードに事欠かない豪傑だ。眠らせておくのは惜しいので、松永会長の波瀾万丈の半生を一冊の本にします。発売はあの『ダディ』でお馴染みの幻冬社から！　詳細は次号にて。

「全女事務所の柱はうちらが稼いだ金！」ってクラッシュとよく話してたよ。

ないんだよね（笑）。

——あらかじめ契約してないとね（笑）。

ダンプ　で、それを言いに言ったんだけど、ビデオ5本貰って喜んで帰ってきちゃった（笑）。

——アハハハハ！

ダンプ　馬鹿なんでしょうね（笑）。

——それで話を戻しますが、ヒールになるきっかけというのは？

ダンプ　自分で選べるのね。で、自分はベビーフェースでやるのは無理だと思って。だけど、悪役だったら頑張り次第でなんとかなると思って最初から悪役にしたんだ。

——でも、マッハさんやビューティーに憧れたぐらいだから、ベビーフェースやりたかったんじゃないんですか？

ダンプ　でも無理だから。ベビーフェースになったら今頃辞めちゃっていないと思う。あんな中には入っていられないな（笑）。

——あの頃のベビーフェースというと同期だと長与さん、飛鳥さんとか。

ダンプ　あと大森。

——その上だと？

ダンプ　その上だとジャガー、デビル、ジャンボ。あとはナンシーさんとか、ミミ（萩原）がいたな。

——ミミさんって普段はどんな方だったんですか。

ダンプ　セクシーパンサーだよ（笑）。

——私生活でもセクシーパンサーだったんですか（笑）。いまはもう大変なことになっるみたいですけど（笑）。

ダンプ　マリア様になってるからね（笑）。誰とも連絡取ってないんじゃないかな。

——で、それでヒールになってからは、どういう先輩がいたんですか？

ダンプ　はじめブラック軍団っていうのに入ったのね。その頃、池下（ユミ）さんが一番上でマミさんがいてデビルさんがいて、タランチュラ、自分と（クレーン・）ユウさんがいたの。

——ええ。

ダンプ　それでブラック軍団から今度はデビルさんがトップになったでしょ。で、デビル軍団になって。それで自分たちが極悪同盟作った時に、デビルさんはベビーフェースにいっちゃった。

——先輩からヒールの心構えみたいなものは教わりましたか？

ダンプ　全然教わらない。これやっちゃダメ、あれやっちゃダメって言われ続けてきただけ。

——例えばどんなことですか。

ダンプ　凶器使っちゃダメとか（笑）。私はよく凶器を預かって渡す役をやってたの。石とかね（笑）。1回、石と間違えてタンポン渡したらウ〜ンと怒られた（笑）。エヘッ（かわいらしく笑う）。

8月14日川崎市体育館で行われた女子プロOB戦。あの頃のメイクでダンプは帰ってきた。

——なんでそんなマンガみたいな失敗してるんですか（笑）。

ダンプ　エヘヘヘ（かわいらしく笑う）、メチャメチャ怒られました（笑）。だから、それからは靴の中に入れるようにして（笑）。トイレだって、いつ行けるかわからないから。よく聞かれるんです、「生理中はどうするんですか」って（笑）。もう水着に染みてきたらレフェリーが教えてくれるから。だって、そんなの染みてたら汚いじゃん（笑）。エヘヘヘ。

——まあ客に見せるもんじゃないですよね。さ、綺麗な話に戻しますけど（笑）、現役時代は腕立て伏せ1回もできなかったっていうのは実話なんですか？

ダンプ　今もできない（笑）。腕立てできなくても違う力を使うからね。身体のでっかい人って腕立ては絶対にできないもん（笑）。で、マネジャーはボクシングとかやってた人だからそういうのがわかってくれるんだけど。先輩は「わざとできないフリしてる」とか言うのよ（笑）。ただね、リングに上がってスパーリングやると絶対にデブは強いのよ（笑）。

——体重ありますからね。

ダンプ　そうすると先輩は「そんな細い子に思い切り乗ったらかわいそうだろ！」って言うわけよ（笑）。

——アハハハハ！

ダンプ　デブいじめよね〜（笑）。

——デブだとつけこまれるスキが多いというか（笑）。

ダンプ　ホメられることがないの（笑）。

——損な役回りですよね。

※いまではすっかりなくなった壮絶なイジメの話から誰が喜ぶのかわからない強烈な下ネタ話まで屈託ない笑顔でしゃべり倒すダンプの爆弾トークはまだまだ続く！　昭和という時代のエネルギーが詰まった言葉の数々に胸が締めつけられて窒息寸前!!　次号では、リング内外で繰り広げられた壮大な派閥抗争&知られざる素人ヤキ入れ事件の真相が明らかに。乞うご期待！

【98年8月4日、都ホテル東京にて収録】

最強最後のレスラー降臨!!

本格格闘プロレス小説

無比人

Mubito

虚構と現実が交錯する
壮大な格闘ロマン

Illustration/中川雅博

【前号までのあらすじ】
プロレス専門誌発行人の千堂は、天性の格闘センスを持つ男、万無比人を半ば強引にプロレス界へと引きずり込んだ――。進むべき道を異種格闘技路線と定めた無比人は、空手の大会に出場し、M・ギブソンと対戦した。無比人は圧し気味の攻防を展開するも、不運にも反則負けを喫してしまう。続いて〝心臓破りの拳〟の異名を取る的場毅一郎と闘った無比人は、苦戦を強いられながらも最後はパワーボムで的場を下した。そして一カ月が過ぎ、無比人とK―1最強戦士との対戦が本決まりとなった。

(26)

ドアが開いて、巻が入ってきた。

千堂は、隅に寄せられた応接セットに無比人と氷見子といて、三人してトランプ遊びに興じていた。応接セットといっても形ばかりで、デコラのテーブルに背凭れのない丸椅子が四脚。慌てて起って行き、深く腰を折って巻を迎えた。

「先生。この度はなにからなにまで、本当に有難うございました」

「いや、なに。トイレまできたところが同じ通路の奥だとわかったもので、ちょいと万くんの試合前の顔を見せてもらっとこうかと思ってね」

いつにも増して巻は見事なばかりに肩から力が抜け、そして飄々とした印象でもあった。目が合うと無比人も腰を浮かせ、巻に会釈してみせた。

北の丸・日本武道館の選手控室で、無比人には個室が用意されていたのだ。この日、夕刻より火蓋が切られた〝プライド3〟も順調に試合数を消化しつつあった。

「空手の巻久生先生ね。お蔭さまで無比人が――」

氷見子は顔を合わせるのは初めてのはずが、それと察してか弾かれたように声を放って立ち上がろうとするのを手で制し、巻の方から大股に歩を寄せた。

「静かさのなかで自分一人の世界に引き籠っていると、そのようにお考えでしたら我々まで加わっての放縦極まる過ごしよう――さぞや驚かれたことでしょうが、これには些か説明を要しまして」

後を追う格好で随き従いながら、千堂は、ばつの悪さも手伝って口早にならざるを得なかった。

氷見子が空いた椅子を巻に勧めた。次いで千堂も腰を戻し、

「今日に限ってのことではないんですが、試合の前のひとときを彼は控室で――」

「トランプをやるのが万流のテンションの上げ方で、ゲームである以上周りも付き合わないわけにはいかん、ということなのだろう。つまり」

と押しかぶせるように巻。眼鏡ごしの目が笑っていて、

「レスラーやボクサーの中には、毛糸と編み棒を控室に持ち込んで時間一杯まで編み物に精を出す者、電球をガリガリ丸齧りしちまって景気付けをするといった変わり種などもいるということだから、トランプくらいでは驚くに当たらんよ、きみ」

千堂は言葉もなかった。

トランプ遊びのうちでもとりわけ無比人の好んでやるのが婆抜きと神経衰弱で、集中力の差でもあろうか氷見子も千堂もまったく歯が立たないのが常だった。

三人はトランプをテーブルに伏せて散らばせ、神経衰弱をはじめたところであり、

「続けて、続けて」

巻は傍観のけぶりを見せたが、にもかかわらず氷見子がさっさと両手でそれらを寄せ集め、彼の方へと体を開いた。改まった表情のうちに、

「万無比人のマネージャーの北海氷見子です。お見知り置き下さいまし」

「ほう、女性の身でねえ。大変でしょう、むくつけき男ばかりの世界では、色々と」

「それはありますけれど、でも、好きで選んだ道ですので」

「苦にはならんというわけか、――いや、なるほど。万くんもさぞや心強いことだろう、頑張ってくれたまえ」

「今後とも、どうかよろしくお願い申し上げます」

常になく畏まった風情で、膝の上に両手を揃えて置いたところなど借りてきた猫のようでもあり、氷見子とのプレーでその残虐振りに翻弄され続けの千堂としては、これが同じ人間なのかと訝らずにはおれなかった。

黒々した人工ペニスに初めてアヌスを刺し貫かれてほぼ二カ月、今や自分があの梶と同じくM男として完全に氷見子の前にひれ伏した事実を認めないわけにいかず、従ってプレーの出前が週一から三日に一度、更には一日置きと頻度を増しても千堂の裡では、抗しようなどとの意識はまるで働かなくなってしまっていた。

初体験のおののきのうちに我ながら情け

巨匠入魂 第11回

真樹日佐夫

本格格闘プロレス小説 無比人

ないほどの堪え性のなさで射精させられた後、結合を解くと氷見子は打って変わって菩薩のごときおおどかな目色となり、顔を近づけてきて千堂の頬に唇を這わせた。そうされてみてようやく、涙しているのを彼は悟り知った。あのとき、梶も涙を見せていたが……。頬をやさしく口で吸われながら敗北感と、これと背中合わせの恍惚感の底に得も言わず居心地のよい閑かな世界が広がっているのがなんとなく感じられた。

千堂に巻から電話がかかったのはそれから約一カ月後の五月末のことで、

――道場の方へ伺えばよろしいのでしょうか。

――午後に会いたいが。

――そうしてくれるか。ほかでもない、万くんをK―1の選手と対戦させるについて引き合わせたい人物がおるんで。

『四角いジャングル』社にいて千堂は昼休みを迎えようとしていたが、仕事を急ぎ、指定された三時より少し早くに西麻布へ着いた。

道場には三十年配の目付きの鋭い男が先着しており、巻によると前の年にヒクソン・高田戦を目玉とする〝プライド1〟を開催した興行元の関係者とのこと。電話での話し振りからK―1事務局の者を紹介される、と決め込んでいた千堂にすれば少なからず意外だったが、

――彼もやはり極真空手を永いことやってきて、つい最近離れたばかりで、ずっと後輩ながらいうなればOB同士か。そんなことからここへはその後もちょくちょく顔を見せていてだね、先日万くんの話をしたところが極真の選手よりもK―1戦士とやらせる方が実現の可能性は高いが、それもしかし異種格闘技戦で先方のリングでとなると今日明日ってわけにはいかぬだろう、ということで妙案を捻り出してくれた次第。

その興行元はK―1の一部選手たちともパイプを有し、ブランコ・シカティックを〝プライド1〟と三月に横浜アリーナで行われた〝プライド2〟にも出場させた実績がある、このシカティックと万選手のカードを例えば次の〝プライド3〟で組むというのであればいくらでも尽力できる、そう言って引き揚げたのがさっそくに今日、応諾の回答を持ってまた現れたのだと巻に事の経緯を聞かされて、得心した。

――シカティックといえばK―1の初代チャンピオンでもあり、佐竹雅昭、アーネスト・ホーストと立て続けにキャンバスに沈めたパンチの破壊力は国際式ボクシングのヘビー級でやっても充分通用しよう。相手にとって不足はないと思うが、どうかね。

――それはもう、願ってもないお話で。

〝プライド3〟は来月の下旬に行うとのことで、この興行元とは千堂のところもまったく行き来がないわけではなく、〝プライド1〟のときは招待を受けて真澄と観戦もしている。渡りに舟で、ここに無比人の参戦は決定をみたのであった。

「万くん、きみ」

巻の視線が流れた。

「シカティックについちゃ研究をしたかね、試合のビデオを見るとか――」

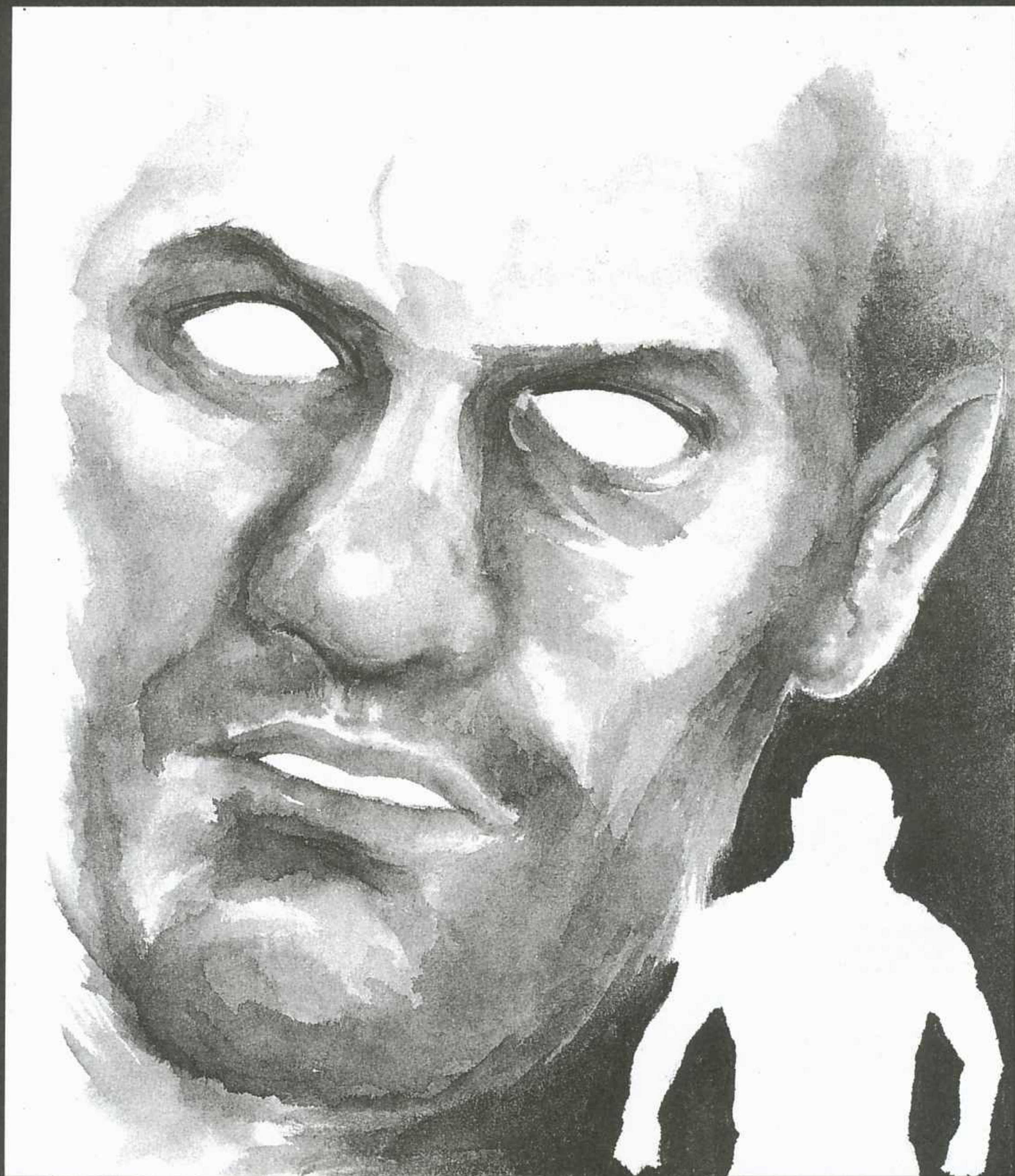
「別になにも」

と顎を突き出すようにして無比人。氷見子とは対照的に至ってリラックスした感じだ。

巻は小さく何度か頷いたところで、

「極真会館の大山倍達館長が若かりし頃、遠征先のアメリカでトム・ローソーと対戦されたときの話をご本人より伺ったことがあるが――」

「トム・ローソー、日本流に発音するとなるとタム・ライスですね。〝赤サソリ〟の異名を取り、日本にきて力道山と死闘を演じたこともある大物レスラーの」

千堂は、おぼえず横から口を入れていた。タム・ライスが空手の大山と真剣勝負をして敗れた、ということはなにかで読んでおり、専門の分野であるだけに自ずと上体が前へ

出た。巻の口許を注視する格好になった。
「そう、タム・ライスの方が通りはよいか。このライスに大山館長は散々手古ずらされた末に突きと蹴りのコンビネーションで逆転勝ちしたとのことだが、なにゆえ苦戦を強いられたか。館長曰く——一流どころのプロレスラーをリングで相手にした場合、なにより心しなくてはならぬのは、その異常なばかりの筋肉の付きようとロープワークの妙。大胸筋、上腕筋、大腿筋などの発達振りはほかに類を見ず、肉の上から叩いても蹴ってもなかなか致命傷は与えられないが、しかしながら顔面、喉、脇腹といったところはいかにレスラーといえども鍛えようがない。これらに的を絞って加撃するとともに、またロープの反動を利しての目まぐるしい動きにも幻惑されることなく、じっくり腰を据えて対するうちには必ずや勝機は訪れよう——すなわちプロレス恐るるに足らずの気負いがネックとなった、ご自身への戒めの言葉として受け止めていいんじゃなかろうか」
「空手から見てのプロレス攻略法というわけですね、大山氏が身を以て実証された……」
レスラー特有の肉体と、ロープへ自ら躰をぶつけることで彼らがリングを二倍にも三倍にも広くし得る、そこに着目した点が千堂には興味深かったが、空手と同じく立ち技系のシカティックとこれから異種格闘技戦をやろうとしているレスラー無比人に、なんだってそんな話を持ち出したのか。
疑問が氷解したのは、いや、すっかり長居をしたと巻が思い出したように言って腰を上げ、退出して少し経ってからである。
(——プロレス攻略法は、そうか、見方を変えるならばこれは立ち技系の弱点を示したものともいえるわけか！　空手の大山は筋肉の反撥力を計算に入れず闇雲に無駄打ちし、一方ではまたロープワークに翻弄されもしたから、タム・ライスに苦しめられた。言い換えるならレスラーは鍛えられない箇所を十全にカバーした上で、ロープワークを駆使し首尾よく寝技に持ち込めたら立ち技系のパンチも蹴りも封じられると、そこのところをかつての師の話に事寄せて示唆せんとしたのだ。そうだ、それに違いない……)
ドアがまた開いて、進行の腕章を付けた若い係員が顔を出した。
氷見子、千堂、無比人の順に席を起った。戸口へと向かいながら、
「稽古しているようだな、おっさん」
無比人が独りごつように言った。
「え？　誰のこと？」
千堂には判じかねた。
「おっさんだよ」
「おっさんって——」
「巻久生大明神さ。もう結構な年なんだろう、それにしちゃ立ち姿がすっきりしている。道場稽古を欠かしてない証拠だね」
巻の言わんとするところを汲んだものかどうか、あっけらかんとして無比人は応じた。
「ちょっと。骨折りいただいた先生に、お

本格格闘プロレス小説

無比人

巨匠入魂 第11回

真樹日佐夫

つさんはないんじゃない」
氷見子が横目で軽く睨んだ。いつもの彼女に戻っていた。
三人は控室を出た。

(27)

闇が深い。
手前に河川敷。その向こうに水の流れが、か黝い広がりのなか、はっきりとはしないまでも眺められる。千堂は土手の上の道に佇ち、川風に吹かれながら目を凝らした。
河川敷のどこに無比人が、そして的場塾の者たちがいるのか分明でなかった。
国道十五号線、多摩川の河口近くに架かる東京と神奈川を結ぶ六郷橋。その東京側の橋の下周辺一帯、深更とあって人も車の往還もなく静まり返っている。
三日前、八月に入って最初の日曜のことだ。その夜、真澄との逢瀬を早々に切り上げて帰宅した千堂が、例によってプレーの出前で呼んだ氷見子に延々といたぶられ、腑抜けのようになってベッドに転がっていると、
——このところ頓に従順になったねぇ。ご褒美にいい物を見せてあげよう。
彼女が横にきて、半身を起こした姿勢のうちに寄り添うようにしながら言った。
——なにかしら、いい物って。
いつの頃からか氷見子とのプレー中、女言葉に変じるのが習いとなっていた。甘えるかのように見上げる千堂の胸の上へ、四つ折りにした紙片が投げられた。
——広げてご覧。
言われた通りにするとニュー東都プロレスにFAXされてきたもので、名古屋の日本空手道的場塾から万無比人に宛てて、塾長的場毅一郎の無念を晴らすべく野試合を申し入れる、塾生有志とあり、八月五日午前二時、大田区西六郷六郷橋下河川敷にて待つ、とあるではないか。
——これって、果たし状じゃないの！
高声を上げる千堂へ、いたずらっぽい眼差しを氷見子はそそいで、
——無比人はね、部長には内緒にする、常識人としては止めるに決まってるからって。でも、おまえが可愛いから見せたんだ。止めるのには反対だけど、気が揉めるなら行って自分の目で確かめれば。
——反対だというのは、なぜ。
——止めたらそいつを見せたことが知れちゃうし、それに彼ときたら大勢を相手に野試合だなんて機会は滅多にあるものじゃないって、舌嘗めずりせんばかりだったから。
——氷見子女王さまは、現場へは。
——行かない。こっちが勝つに決まってるもの。
こうして千堂一人、無比人には伏せたまま六郷橋下河川敷へ足を運ぶことに落ち着いたのだ。〝プライド3〟では無比人は巻の示唆を見事に活かし、シカティックの強打の大半を両肩の筋肉を防禦に用いて跳ね返すとともに、ロープワークから何度となく足許を脅かすうち、相手は寝技に運ばれるのを懼れる余りか片腕でロープを抱え込んだままパンチを揮うという暴挙に出て自滅。反則勝ちを収めて以来六週間、ニュー東都プロレス結成二周年記念興行へ向け奔走してきた身としては、できればここでエースを騒動に巻き込ませるなどの愚は避けたかったが、氷見子には背きかねた。
不意に眼下に光が氾濫した。
昼を欺く明るさのなか、河川敷に横一列に駐車した十台近いセダンやワゴンが消していたヘッドライトを一斉に点灯したのだと知れた。千堂が目を屢叩くうち、車のドアが次々に開いて空手着の者たちが姿を現した。総勢三十人を超えていようか。
無比人は、車の列と正対する位置に試合のときと同じタイツ姿で立っていた。片方の手に持っていたマスクとおぼしい物で、おもむろに顔を覆った。
黒豹のマスクであった。

＜以下次号＞

味の決め手は昭和・新日テイストだ！

RADICAL MYSTERY TOUR

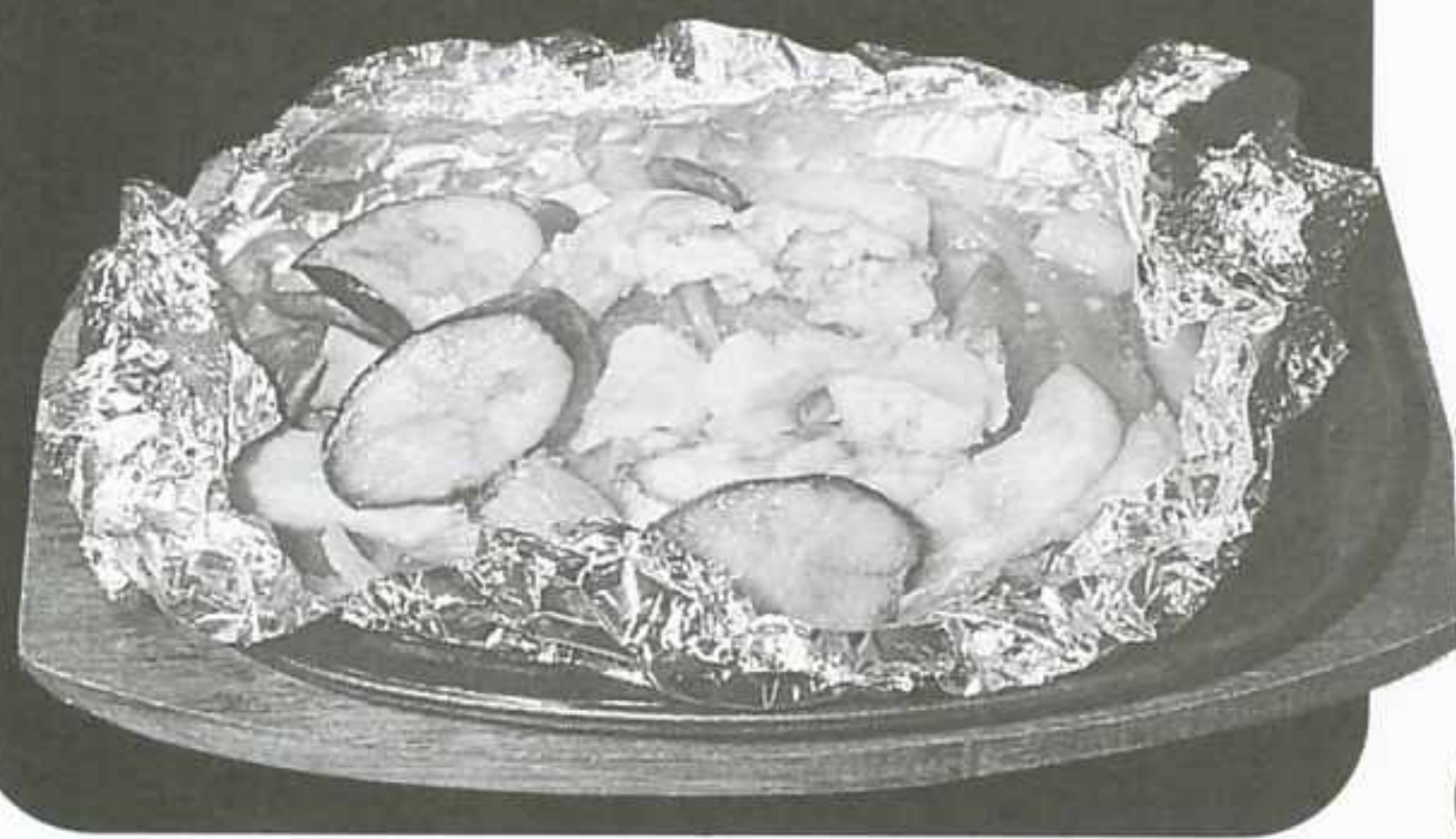
vol.7 VIVA! 梵婆家！

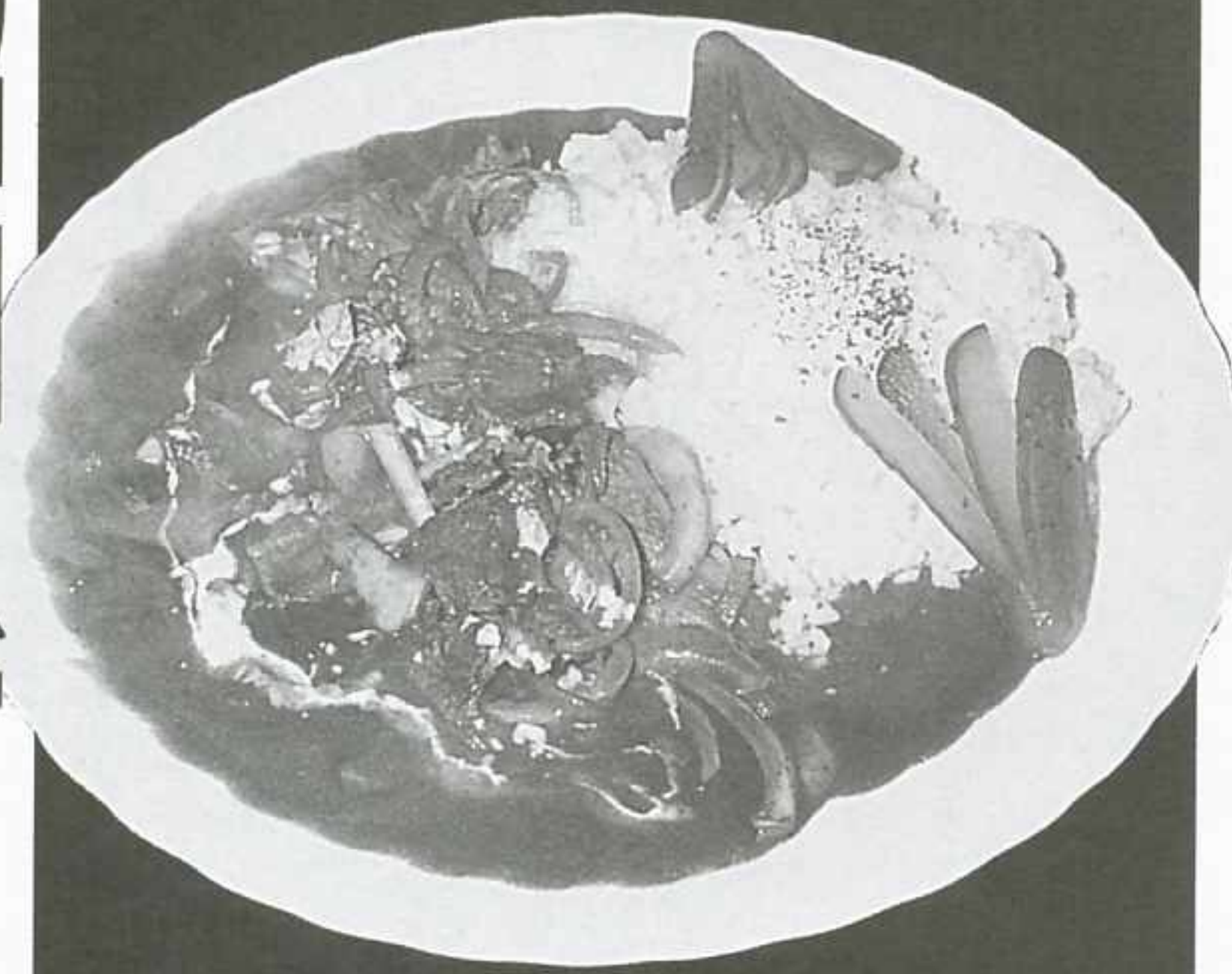
猪木、長州、前田の引退で、マット界から古き良き昭和・新日の匂いが絶滅しかかっている今日この頃。だがしかし、PUB『梵婆家』には失われた何かが残っている！

構成＝坂井ノブ　撮影＝斉藤ユーリ

魅惑の味は脱出不可能

木戸クラッチ（魚介類のホイル包み）

いぶし銀（色）のアルミホイルに包まれたクラシカルな味を基調とした地味だが魅惑的な料理。ホンモノの味を頑固に追求する姿勢に昭和・新日魂を見た！

コマンドグルメの決定版！

ボルク飯（ビーフ・ストロガノフ）

誰もが「こんな技（飯）はくらったことがない！」と衝撃を受ける見事なキレ味。猪木、前田のダジャレ好きな姿勢をも受け継いだ店長にリスペクト！

ブタもおだてりゃ旨くなる

橋本チャーハン（焼豚チャーハン）

破壊王の体型を執拗に指摘し続ける猪木にならい、店長が命名。「クソブタ！」（ｂｙ天山）ではない。

地上最強のガチンコポテト

手作りソーセージ カール・ゴッチポテト添え

新日道場の源流に、ゴッチイズムがある。その根底の「エアガイツ」（ドイツ語で大和魂）を味に込めた素朴で熱い男の料理。

ヘタに手を出すとケガするぜ！

タイガージェットピザ

当然のようにカレーピザなのだが、基本が違う！　生地から作るのが梵婆家流。たとえピザでもストロング・スタイルを貫く。

この店に行けばどうなるものか。危ぶむなかれ！

昭和の新日には数々の酒にまつわる伝説が残っている。日明兄さんがミスター高橋の掌を包丁で刺したり、旅館をまるごと1軒破壊したりと常識を軽く飛び越えた豪快さで飲みまくっていたという。

今回紹介する『梵婆家（BON-BA-YE）』は、店の名前はもちろん、料理の名前、カクテルにまで昭和・新日の匂いが漂っている。しかも開店は5年前の「4月4日」。非常に因果なお店なのである。

まずは右のページのステキな料理の数々をご覧いただこう。他にもアブドーラ・カレー、ハイブリッド・ライス、という新日イズムを込めたネーミングの料理が並ぶ。その中に16文紙カツ（！）という、馬場を「腕立て伏せもできないようなレスラー」と一刀両断した猪木よろしく、アンチ馬場なアジテーションのメニューもあったりするから、まさに昭和・新日。

店長の大庭敏幸さんも「最近の新日は、あまり記憶に残らないんだよなあ。お店を始めてからあまり見れなくなったし」というだけあって、あの頃の新日に対する思い入れは深い。最近では「（ケンドー・）カ・シン（石沢）、藤田、桜庭、高阪、田村……バーリ（・トゥード）に勝てそうなレスラーが好きですね。そういうレスラーじゃないとつまんないんです。いまプロレスは格闘技に押され気味でおもしろくないですからね」という店長の心意気に乾杯だ！　最近の試合会場に違和感を感じる人にはオアシスとなることだろう。

店を始めたのは、熱狂的なプロレスファンだった店長が、他のマニアと共にビデオを持ち寄って上映会を開いていたのがキッカケで、その会にはターザン山本や夢枕獏なども参加していたとか。何らかの理由で放送されなかったりビデオが販売されていない試合の映像、いわゆるプロレス裏ビデオをこっそり楽しむのだ。そのころ芽生えた「こういうビデオをいつも流してるお店があればいいのに」という夢を実現させたのが、『梵婆家』なのである。まさにプロレス業界裏サロンだ。

お店では常にプロレスのビデオが流れているのだが、在庫の量がとにかく半端ではない。店長も「保有数なら日本で3本の指に入る」と豪語するだけあって、とにかく何でもある。気軽に店長や店員さんに話しかけてみよう。面白い話が聞けるかもしれないぞ。

アクセス

［店名］FACTORY PUB　梵婆家
［住所］東京都世田谷区松原1-39-16
［電話番号］03-3323-5629
［営業時間］19：00～25：00ぐらい
［特長］新日本プロレスの後楽園大会のチケットなら、最前列から取扱中。その他の大会もアリ。ご予約はお早めに。

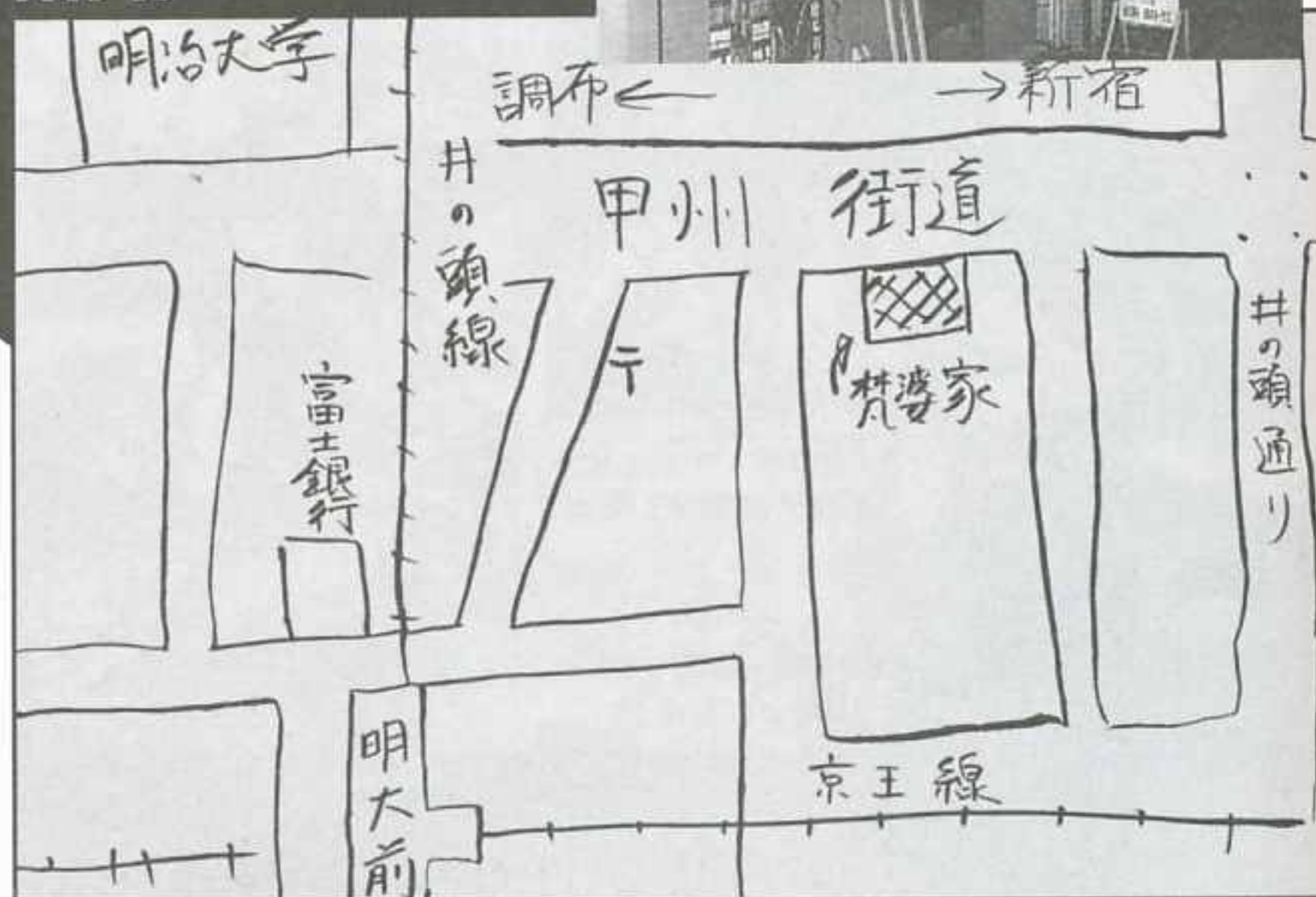
元気があれば何でもできる！果たしてカクテルのおいしそうな色は君に伝わるか？

スリーパーホールド（坂口式）
「坂口選手を見て柔道は強くないんだな」と思った北沢幹之さん的に言えば、きっと弱いお酒なのだろう。

マードックの瞳
なんとステキな名前だろう。他に新日にある青いものといえば、リングのマット、星野勘太郎のパンツぐらいか。

左からSTF（ピーチ）、ムーンサルト、グランドコブラ
モノクロページでカクテルの鮮やかでおいしそうな色を伝えるのは根本的に無理があったようだ。しかし、この店のプロレスカクテルはマジでやばいことになっている。他にもストレッチプラム、バナナスプレッドなどある程度、現物の予想がつくものからスリーパーホールド（ガニア式）など何が何だか？なカクテルもある。

ボクにも行けた！ RADICAL MAP

POST CARD
1510051
渋谷区千駄ヶ谷
3-11-3-702
(株)ダブルクロス
ハガキ道場様

ハガキ道場

SAKAI NOBU

ハガキ道場

キッズ、元気！

足！（本家ノブ復活戦後、リング上のインタビューにて）。というわけで、どうしたわけか若い読者が元気ハツラツ！　ターザン山本が、ひと昔前の『週プロ』でブチ上げた「観客主権」ジェネレーションよりも、さらに若い世代が頑張ってます。ターザン亡き後のプロレスマスコミがつまらないおかげで「親がダメだと子が育つ」方式で読者がすくすく育ってきたとしか思えません。『ハガキ道場』は、そんな元気なキッズの闘いの場として、21世紀の「あぶない木曜日」を目指して頑張ります！　ほとんどあぶないハガキを頼む！　代表＝SAKAI NOBU

<ハガキ道場システムチャート>

つまらない → おもしろい

呼び方	キッズファイター	シニアファイター	プロフェッショナルファイター
賞品	イージーな粗品	ワンダフルな粗品	トレビア～ンな粗品
昇段資格	20点以上	40点以上	×

【ルール】
私SAKAI NOBUが道場主を務める投稿コーナー『ハガキ道場』では、世界に通用するハガキファイターを育てるべく、みなさんに頑張って頂きます。当然、ハガキファイターもランク分けします。毎号、面白いハガキを書いてきた人に段位をさしあげます。

●採用されたハガキには、面白さに合わせて1～5点差し上げます。どんどんポイントを取って段位を上げましょう。
▽そこそこ面白い人＝キッズ・ファイター
▽けっこう面白い人＝シニア・ファイター
▽めちゃんこ面白い人＝プロフェッショナル・ファイターとなります。

●それぞれ採用されると
◇キッズ・ファイターにはそこそこいい粗品
◇シニア・ファイターにはけっこういい粗品
◇プロフェッショナル・ファイターには超豪華粗品を進呈します。

今号のお絵かき模範演武

「石をこう持ってね、フン！　ってやったら折れちゃうんだから。折れちゃうんだよ」（byマス大山）とばかりに地上最強のイラストを目指して何千回、何万回と筆をほとばしらせながら絵の鍛錬を重ねているキッズたちを称えるコーナーです。今号は、前号の師範が当道場初の王座防衛を達成！　いま、ブチ切れたイラスト書かしたら彼がNO．1かも。武田いづみちゃんといい、山口県の彼氏（18歳・すべてのハガキが違うペンネーム）といい、末恐ろしいね。キッズ、元気！　彼氏はシニアファイターに昇格！

（山口県・YESマンガタメ18歳♂）　5点

（山口県・癒着ッカー18歳♂）　5点

（山口県・現役最多亡命王18歳♂）　5点

ハガキ道場

SAKAI NOBU

☆前号を読んだ人たちから、ストリートを疾走するハガキがいっぱい届いてます。

前田日明vsエンセン井上対談が面白かった。特にエンセンの前田に匹敵する危なさが非常に面白かったです。

（鈴鹿市・大桑正人33歳♂） 2点

☆とにかく人気大爆発！　業界内でもかなり話題になったアドレナリン対談がブッちぎりの大反響を呼んでます。あまりに刺激的すぎるせいか、どちらかのナントカさんが訴訟を検討中との噂も。とりあえず抗議する方は、編集部までご一報ください。選手に直接脅しの電話を入れるのだけは勘弁してチョンマゲ！（なおチョンマゲの人とこの噂は一切関係ございません）

前田日明vsエンセン井上対談でエンセンがリングスを評価してくれるのがすごく嬉しい。パンクラスの悪口も少しだけ嬉しい。格通の悪口もほんの少しだけ嬉しい。

（杉並区・高島有治28歳♂） 3点

☆最近はリングスファンのパンクラス批判もめっきり減りましたね。ファン同士は仲良くなったのかな？　ウチで討論してくれないかな。まさかファンまで「絶縁」しないよね？

プロレスマスコミ表紙批評は前号でイチバン良かった記事。『週プロ』の表紙は、自分も最近「イマイチだな～」と思っていた。山本さんがズバリと言ってくれたので「そーなんだよな、さすがだ！」とスッキリした思いになった。

（大宮市・長谷川博則27歳♂） 3点

☆相変わらず毒舌を武器に危ない橋を片っ端から渡りまくるターザンを読めるのは『ファイト』だけ！　あれ、『紙プロ』は？？？

7・14新日の札幌大会にヤスカクおじさんが来てました。友人のUは私が何かを言うと、すぐ後ろにヤスカクがいるというのに「そんなこと言うと応援できないよ！」と言い続けてました。聞こえてたのかどうなのか、ヤスカクはいなくなりました。ヤスカクさん、聞こえてたら許してチョンマゲ！　あと山口日昇さん、結婚してください。

（釧路市・上田恵27歳♀） 5点

☆「V-VA！　友人U！」と言いたいところですが、あんまり失礼なことしちゃダメだよ。罰として山口〝嫁のアバラ叩き折り男〟日昇との結婚を許可します。ご愁傷様。

（愛知県・粟野幸次♂） 3点
上半期最も話題を振りまいた「応援できないよ」事件後、1度だけ誌面に登場した「安田悪霊」。マコ・スガワールと並んでレアキャラ殿堂入りは確実であろう。

最近の鈴木みのるを見ると『浅ヤン』の再起する芸能人に出てる元WINKの鈴木早智子さんを見てるようでブルーになる。

（日立市・武富浩二26歳♂） 4点

☆以前、『週プロ』に「完全実力主義を超えた愛」とかいう見出しの鈴木試合リポートがありましたが、そういうことです。鈴木は完全実力主義を超えちゃってるんです！　愛っスよ、愛！　現在、リングから愛を与えているのは鈴木か矢口壹琅だけということです。

この前、真っ赤な大和魂Tシャツを着てNKホールにリングスを見に行ったらエンセンが、背後からいきなり「ナイスTシャツ！」と叫びながらチョーク・スリーパーをかけてきた。やっぱりエンセンはナイスな兄貴だ。

（日立市・武富浩二26歳♂） 5点

☆U系団体なら、どこの会場にもエンセンがいます。見てると必ず、誰かを殴ったり首締めたりしててメチャクチャおもしろいので要チェック！

Uインター時代の歩くたびにガチャガチャいってるような甲冑から身軽な着流しに着替えていい感じ。あとはドスだね～。一刀両断できる。

（山口県・インチキッズ18歳♂） 5点

☆高田の出撃以降、プロレスから総合格闘技にアプローチする人たちの流れが、どうにも止まらない今日この頃。格闘技雑誌はプロレスラーを締め出し、プロレス雑誌は格闘家を締め出す傾向がどうにも腑に落ちません。

（岐阜県・今井麻実22歳♀） 4点
毎号送ってくる桜庭のイラストがナイス。ちょっとマヌケ面なところも、また秀逸。

エンセンを逆ナンパできるような大和魂を持った女になることを決意!!

（千葉県・武田いづみ18歳♀） 4点

☆力でやれや、力で！　遠慮すっこたあねえよ！　（バチン！）やれんのか～っ！

オレの両手は女を抱くためにあるんだ！

（東大阪市・今西誠博20歳♂） 5点

☆最近、こういう大和魂を持った人が減ってますよね。心がオシャレな人でハガキ道場は成り立ってます。

（江戸川区・戸崎素子28歳♀） 2点
テーマは平成の黄色い悪魔？　見すぎると泡吹いてブッ倒れてしまいそうな呪術的イラストです。

中川雅博・イラスト・エクスプロージョン

怒涛の勢いでイラストを送りつけてくる埼玉県・中川雅博（20歳♂）。どうにもこうにも止められない、止まらないブレーキの壊れた投稿野郎である。そんな中川の作品がNHKドラマ『さよなら五つのカプチーノ』で使われるそうだ。中川ファンは要チェックということで、計30点・中川は一気にプロフェッショナルファイター昇格！

坂井ノブが選ぶ プロレスだじゃれリング

荒野のワンマン 元ドンカン

へたなてっぽうもカチューシャ当たる

ロシアンだじゃれ

甘納豆くいてえな

(熊本県・塩本祐介32歳♂) 5点
うひゃ～、ミスター・ウォーリーがさっそく登場なのだ。時代に敏感なのだ。

Egashira 2:50 サスケ、作れ!

(八王子市・片岡健太郎22歳♂) 4点
ニャハハハハ! 面白いのだ。しかも、サスケが作りそうとところがいいのだ。

ブリーフ・ブラザーズだ ブラジャー付けブリーフブラジャーズです。

(香川県・正木浩二25歳♂) 1点
汚ねえ絵だな、オイ! ダジャレもお下劣だよ、コラ。モデル誰?

2人あわせて…… 紅茶ぴのこ

(熊本県・塩本祐介32歳♂) 4点
ニャハハハハ、ぴのこが似てないのだ。でも、バカっぽさは出てるのだ。

カプチョー! ぴのの味

(大阪市・WCRあまぐり18歳♀) 2点
うおおおお! あまぐりちゃんは女子高生なのだ。若さで頑張るのだ!

千里の道も「ぴのこ」から

中川雅博

(『週プロ』865号より)

「松澤チョロ」改め「松澤ぴのこ」を世間に浸透させつつ、『週プロ』に載せて更正させようということで始まった新企画。さっそく常連・中川雅博が『週プロ』865号に「ぴのこTシャツを着た桜庭」を投稿してくれました。VIVA! こんな調子で、ペンネームでもイラストでもいいんで『週プロ』誌上に「ぴのこ」という文字を送り込みましょう。中川に5点!

匿名リサーチXX2000

キミの疑問を一発解決! 『紙プロ』版こども電話相談室

府川唯未のキャッチフレーズ「ダイナマイトミニ」ってなんですか?

(新潟県 ビッグ・ザ・ブトン24歳)

小さな爆弾という意味です。だったら「ミニダイナマイト」じゃねえかというツッコミもありそうなもんだが、それじゃ語呂が悪い。これでいいんです。「ファイティング・チーター」や「千の技を持つ女」などというまだだいぶ分かりやすいキャッチから、果ては「アルシオンUSAの首領」というものすごくミクロな世界でしか通用しなそうなものまで揃ってます。芳賀元太ならずとも「何が何だか」と言いたくなる個性的なキャッチフレーズが満載で飽きさせません。楽しみです。って、おい、ホントかよ!?(安田調)

カウント4.5! 反則ギリギリRADICALランキング 激突カウントアップ・グル～ヴ RADICAL版 あなたの愛読誌は?

プロレスファンの心の故郷を調査するこのランキング。『週プロ』が圧倒的に強い! 強すぎる! 業界最有力であることを証明してますね。『紙プロ』読者だけで調査をするから、ここまで片寄ってしまうんだろうけどね。しかし、『ゴング』の票が『ファイト』の票を下回るというのもショックです。さて、次号のテーマは東京都在住のちょとん調査団くん(25歳)からのリクエストで「ヒクソンに勝てそうなプロレスラー(もちろん高田も含む)」というテーマでやりたいと思います。レスラーの名前を1人だけ明記してください。

あなたの愛読誌は?

順位	誌名	票数
1位	週プロ	138票
2位	ファイト	59票
3位	ゴング	51票
4位	東スポ	43票

日本一の手抜きコーナー 絵はがきorDIE?

これが長崎名物オランダ漫才。全然楽しさが伝わってこない嫌がらせのようなハガキです。大仁田、長与、雁之助など長崎出身者には一流の見る者を飽きさせない過剰なアピールぶりを発揮するレスラーが多いですが、きっとこういう伝統芸能が彼らを育んだからでしょう。おそるべし、オランダ漫才。

(浦安市 宮川美香27歳♀) 4点

ハガキ道場

SAKAI NOBU

バカ日誌 RADICAL

呆魂三銃士が揃い踏み の巻

ここ最近の編集部では、毎日毎日何らかの事件というか失敗が続発して、とてもこの1ページでは納まりきらないほどなのだが、敢えて凝縮して高密度なバカ日誌をお届けしよう。現在、本誌編集部では、ダメ人間のカリスマ・中村カタブツ君（35歳）、「ちっとちっと」でお馴染みのチョロことぴのこ（26歳）。そしてもう1人、ネオ・レディースに初来日したニコル・バス並みの身長を誇る逆バイアグラ女・ジャイ子（26歳）が話題を独占している。特にこの女はじつに大物。抜群の可能性を秘めている、バカとして。この3人のバカ日誌を今回はオムニバス形式で紹介させていただくとしよう。

【カタブツ編】

最近は自分の家に帰るのが寂しいらしく、この原稿を書いている現時点で2ヶ月間会社に泊まりっぱなしの中村カタブツ君（35歳）。最近は「映画の中で脱いでいる女優のオッパイ評論と、その時間計測」という趣味と実益を兼ねたおいしい仕事をこなしている。家に帰って仕事をすると仕事が仕事でなくなるらしく、翌日はゲッソリした顔で会社にやってくるのだ。そんなにハードな仕事なのかと思いきや、「オナ疲れです」とのこと。じつにバカである。

それにしても、あれだけ徹底的に追い詰められていたポンコツじじいが、なぜにそこまで会社に居着いているのだろうか？　じつはこの男、最近すっかり自信を付けているのだ。

きっかけは『フルコンタクトKARATE』の仕事でK―1軍団&極真軍団の三峯山合同合宿取材だった。当日は朝早くから練習が開始されるため、おおかたのマスコミがホテルに泊まる中、「他のマスコミは、全部マスコミ・ダンスですよ！」とばかりに、宮本武蔵ゆかりの地で極真3級のくせして中村カタブツ君（35歳）が山篭りを敢行！　右の写真を見ていただければ一目瞭然だろう。その内容は真剣さの中にもマヌケさが漂う抜群の内容。この修行で男をあげた中村カタブツ君（35歳）。その日以来、何かが一皮むけたご様子で、その根底に流れる「男尊女卑」思想や「歪んだS嗜好」がムクムクと亀頭をもたげ、その怒張したイチモツ（反りが自慢）で、言葉のちんこビンタをかましまくっている。特にジャイ子に対しては、「いつ生理なの？」だとか「そんなにデカいとバックじゃできないでしょ？」と手のほどこしようがないセクハラを繰り広げている。

性癖が異常ならパンツも異常だ。ぴのこは異様に長いトランクスを愛用。

【ぴのこ編】

この男が、じつはカタブツ君と並び、かなり偏執的な性癖の持ち主であることは、まだあまり知られていない。小学校2年生から痴漢が大好きで、デパートに行っちゃあ満員のエレベーターに潜り込み、エレベーターガールに自分のイチモツを押しつけていたという神童なのである。

高校になってもその暴れん棒はおさまらず、地元で全女を見に行き、西脇とメデューサの入場時、試合前で興奮が抑えられなかったのか、名もない新人だった頃の井上貴子のオッパイにタッチ！　それを目撃したブル中野の逆鱗に触れてしまい、横殴りのラリアットで薙ぎ倒されるという驚異のバカっぷりを発揮。さすがブル、いい話である。ってよくないか？　他にも当時の彼女を川に押し倒し、流されながらのファックを敢行していたりと飽くなき性へのチャレンジを繰り広げてきた強者なのである。最近はそれがなりを潜めているのが惜しまれる驚異の新人だ。

クワガタを捕まえてすっかりご機嫌のカタブツ君。ゼニの取れるバカ面だ。

自然石割りにも挑戦。割れなかったが男をあげた。写真はセルフタイマーで撮りました。

そして極めつけは朝5時から、雨のそぼ降る中、滝に打たれての正拳突き。目指せ、地上最低の男！

【ジャイ子編】

さて、トリを務めるジャイ子だが、こいつはヤバイ。そもそも、どう考えても常識的な社会感覚など微塵も持ち合わせていない我が社に、自分の就職についての悩みを相談しに来るのだ。その相談内容がまたイカレていて、「パソコンとファックスを支給してくれて、その日のプロレスの試合結果を打ち込むだけで月20万円くれる」という会社があったらしいのだが、「そんな誰にでも出来るような仕事はしたくないんですぅ～」と意味不明な理由で号泣するのだ。わけわかんねえ！　そんなおいしい話だったら、すぐに飛びつけばいいようなものをなぜに号泣？　しかも「泣くなよ」と慰めれば、「泣いてないですぅ～。目がかゆいだけですぅ～」と強がって見せる姿が、これまた爆笑もの。180センチの大女が目にゴミが入ったぐらいで号泣すんな！

というわけで、明るく元気な本誌編集部は美女の来社を心から待っています。くれぐれも美女だけね。

まるで地鳴りのような音をあげてジャイ子が号泣。「目がかゆいだけですぅ～」。

「泣いてないもん！目がかゆいだけですぅ～！」な募集！

ハガキ道場では、いろんなハガキを募集しま～す。

●本誌へのご意見、ご感想　●楽しいイラスト
●匿名リサーチ2000XXに聞きたいこと　●マヌケなダジャレ
●ぜひやってもらいたいカウントアップ・グル～ヴのテーマ
●紹介してほしい同人誌
●編集部に遊びに来たい美女

などを送ってください。ちなみに合言葉の「なんでバカって言うのぉ～？」を明記して下さい。宛先は

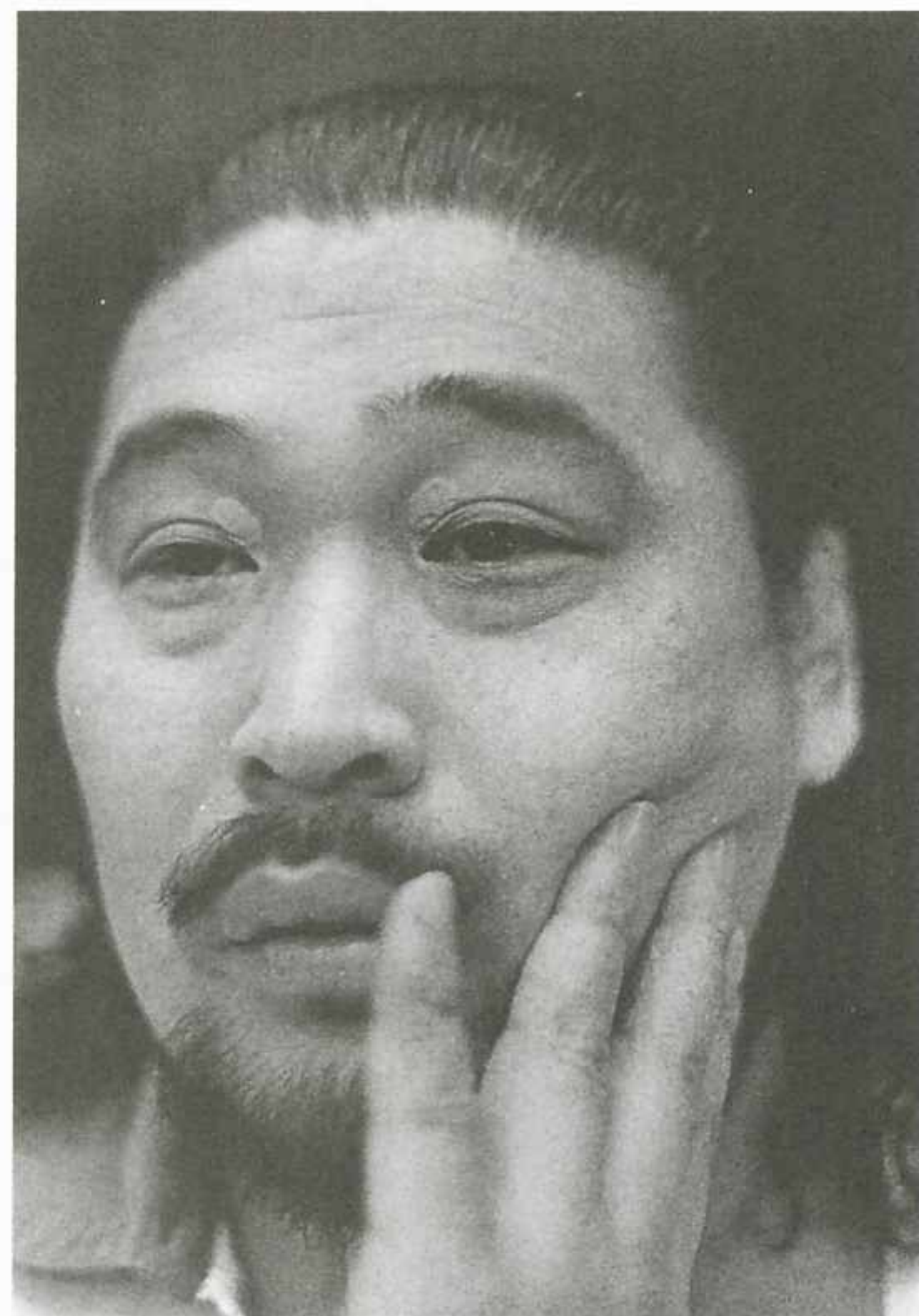
〒151－0051 渋谷区千駄ヶ谷3－11－3－702
(株)ダブルクロス「ハガキ道場」係まで

ドスコイ ハガキ道場番付表

順位	名前	得点
1位	中川雅博	53点
2位	インチキッズ	31点
3位	塩本祐介	19点
4位	うしえもん	18点
5位	武田いづみ	14点
6位	サル・ザ・マン	9点
6位	武富浩二	9点
6位	今井麻実	9点
9位	栗野幸次	8点

紙プロ本誌バックナンバーのお知らせ

『紙プロって俺と
似てるんだよ。
ほら、どっちも
反逆児じゃん
かよお』

紙プロ史上最もトンチンカンな表紙だった22号さん（反逆児）

谷津嘉章公認反逆する雑誌
『紙のプロレス』は通販もやってます！

購入方法・・

○定価は『紙のプロレス』5、8、9号は700円、11号〜22号は780円となります。『猪木とは何か？』は1320円、『極真とは何か？』は1530円、パンクラス公式読本『盾』、『矛』は各1200円となります。ドンドン注文してください。内容は古本屋で立ち読みして確認してください。
○送料は1冊＝310円、2冊＝340円、3冊〜4冊＝450円、5冊＝520円、6冊以上＝700円となります
＊なお1号〜4号、6号、7号、10号、『猪木とは何か？　キラー編』、『大山倍達とは何か？』は完売しました。残念でした。
＊10号、『大山倍達とは何か？』は書店やプロレスショップで探せば若干残っているはずです。頑張りましょう。
○ちなみに本誌23号はジャイ子の身長が190センチになる頃に発売予定！

〈申し込み方法〉
●現金書留　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
（株）ダブルクロス「本誌バックナンバー係」まで
●郵便振替　00130-3-769154　（株）ダブルクロス

紙のプロレス RADICAL
No.11
1998年9月25日発行
定価：本体743円＋税

発売元：株式会社ワニマガジン社
〒160-0014　東京都新宿区内藤町一番地
TEL.03-3357-2911（販売・営業）
発行元：株式会社ダブルクロス
〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
TEL.03-3403-5188（編集・制作）
編集兼発行人：山口日昇
編集スタッフ：坂井ノブ／松澤ぴのこ／吉田豪／八木賢太郎（ライブで疲れたので非番）
助っ人：寺島ジャイ子／恒遠バカツネ
デザイン：ツー・スリー（出田さん、村松さん、ヒサくん、マツ、出前持ち入江、古川プリン）
カメラマン：斉藤ユーリ／戸成ぶつぞう／松永源さん／浜田孝一／遠藤政文／和智正夫
お勘定：林ヘックション一枝
ちんこピンタ：中村カタブツ君（35歳）
フィニッシュ：ツー・スリー
印刷：図書印刷株式会社

編集内容等に関するお問い合せは（株）ダブルクロスにしてチョンマゲ♥

紙のプロレス RADICAL
ナ・ナ・ナントッ！
No.12は
9月下旬
に出します！中で!?
※地域によっては多少発売が遅れます

プロレス村の外から マット界を射精撃 する コラムたち

デヘヘヘヘ、
ホレホレ!!

突撃!! となりのマット界

花くまゆうさく
「リングの汁」

押切伸一
「デカ好き」

21世紀型素人投稿合戦
PRIDE.0

せきしろ
「ザ・検証」

モデル：ジャイ子にセクハラ三昧でご機嫌な中村カタブツ君（35歳）

リングの汁 RADICAL

ベタイラスト 花くまゆうさく

「爆走デコトラ伝説」を支持するページ

前回の原稿で「捨て身になってブザマだがフルチンでムキ出しないまの高田には、ほんの少し魅力が出てきたと感じる」と書きましたが、プライド3を見て、その考えを全面的に撤回しなければならないと思いました。僕が甘ちゃんでした、ゴメンナサイ。やっぱり高田は高田でした。ちっとも変わってなかった、昔（Uインター）に戻ってましたね。

高田にはガッカリしたが、桜庭は素晴らしかったです、その強さに脱帽しました。ニュートンの桜庭を見つめる目がしだいに「こ、この人凄く強いアルヨ」と尊敬のまなざしになっていくのを感じたのは僕だけじゃないでしょう。

桜庭vsニュートン戦を見ていろいろ思いました。ここ数年、プロレスvs格闘技、プロレスファンvs格闘技ファンの争いが、あちこちで起こっていますが、だがしかし、プロレスラーのトップの人たちが桜庭や髙阪のように本当に強く、なおかつ出るとこに出向いてキッチリと結果を出していれば、そんな争いは起きなかったのではないでしょうか。プロレスと格闘技が平和に共存しているのではないかと。

強かったら、もうなにも言えないし文句もないのです。本当に強い人がトップにいればいろいろ好き勝手やっていてもOKなのではないかと、思えてきました。

例えば、私が大嫌いだった団体にUインターがありますが、当時エースが高田ではなく髙阪や桜庭だったらと想像（妄想？）すると、アラッ不思議!? 全然腹が立ちません。むしろ面白そうじゃないですか!! イケイケどんどん魅力的団体に様変わりです。

本当に強くて面白く魅力的な人の団体ならプロレスやろうが格闘技やろうが関係なくなってしまう。普段はプロレスやって客を喜ばせ、強い奴がいるとなると「おっ、よしやろうう！ やるぞ〜、大丈夫大丈夫。だってオレ強いんだもん」と格闘技にも出向いていく……サイコーじゃないですか！ そんなエースのいるプロレス団体なら。

バトラーツのエースが髙阪のような人だったらと想像するとメチャクチャ面白そうじゃないですか!! みんな好き勝手にいろんなプロレスやってて、その上に髙阪がデーンといるんです。後楽園で松永と有刺鉄線バットで殴り合いの大流血戦を終えた髙阪が「今日はありがとうございました。私は来月、アルティメット大会へ行って、トム・エリクソンと決着つけてきます」とマイク。大歓声で総立ちの客の中に私もいるでしょう、きっと。サイコーですよ、まさに実写版1・2の三四郎です。

他にも想像すると、三冠チャンプが髙阪なら……新日のトップに髙阪がいたら……リングスが髙阪の団体だったら……UFOに髙阪が乗っていたら……DDTに髙阪がいて「これからメジャーを潰しに行きます」とか「パンクラスに乗り込みますか」と宣言したら……やっぱメチャクチャ面白いですよ、プロレスって。プロレス界に髙阪がたくさんいればすべて解決だ。

本当に強い男たちがプロレスやるからこそプロレスは面白く魅力的なのだと、いまさらながらあらためて痛感したであります。UFOはそれをやろうとしてるんですね。

と、この作文をしめようとしたところで「髙阪が日本を離れ→海外でノールール系に専念か？」との本当だったらシビれるニュース。

バリバリ闘えるうちに、リアルな場でやっていこうということでしょうか。髙阪、桜庭、そして二つ返事でK―1でもVTでも平気で戦う安生、U系の大御所たちがやらなかったことをあっさりやってのける彼らこそ、我々が望んでいた本当のUだ。

突撃！となりのマット界

花くまゆうさく■マキタスポーツと岩月が過去最高のステージを見せ、スピーク☆イージーと東京ダイナマイトもいつもよりいい出来で、ニトログリセリンは横綱相撲で3度目の優勝、皆が思ってたことをブチまけてくれたネタのキッドの「第9回浅草お兄さん会」は、3・1プロ修斗と共に上半期ベスト興行でありました。第10回も豆ブラシ渡辺さんまで登場して完璧♥ 次はいよいよキッドの2時間漫才である。日本の男の子なら8・21、22は中野へ行かなきゃダメでしょ。

突撃！となりのマット界

押切伸一のデカ好き

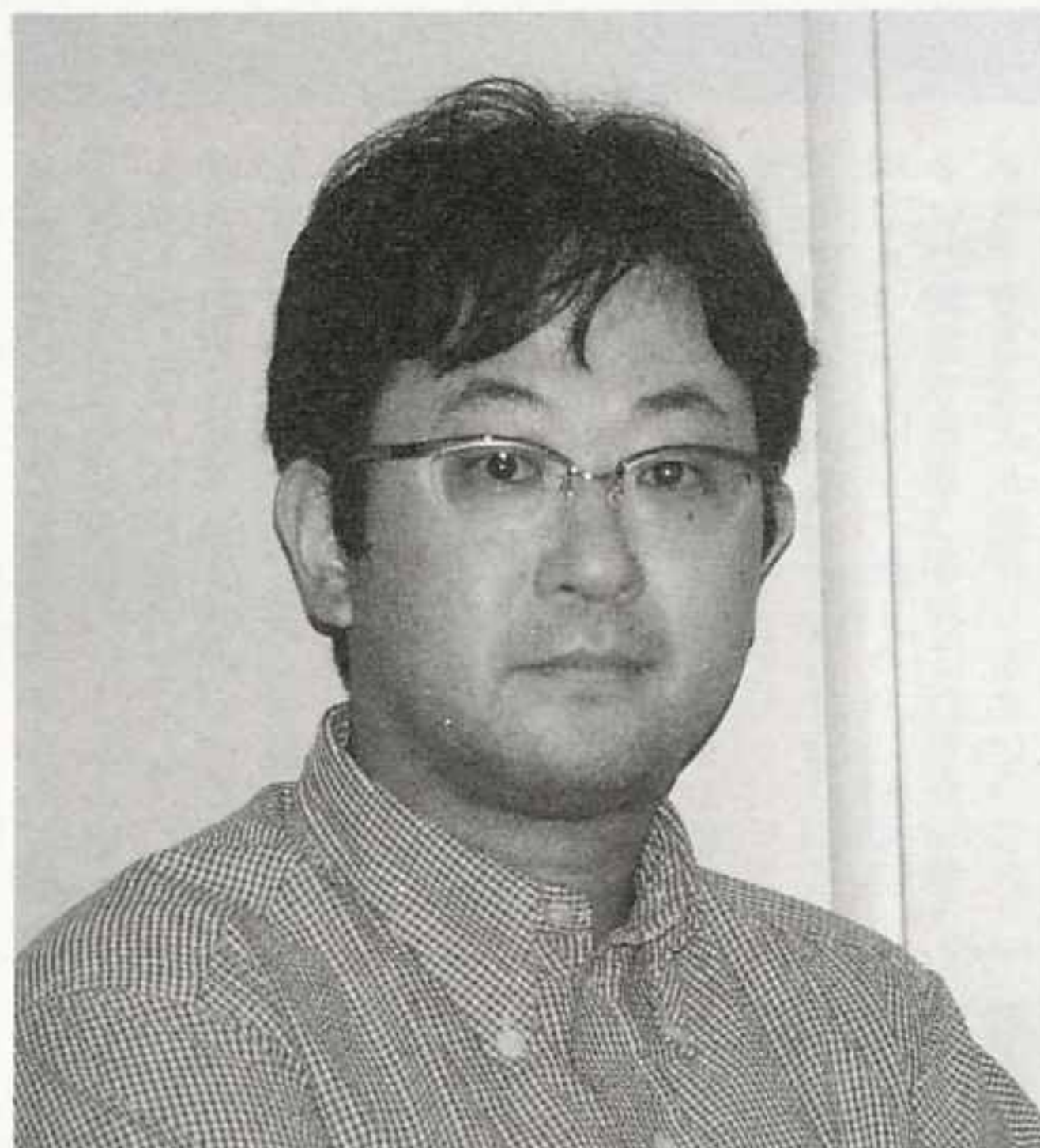
デカプリオでもなくデカでもなく、体格の良い人を愛する気持ちが世界中の人々にあるのは、各地に残る「巨人伝説」を見ても明らかだ。まれなる力の象徴としてのデカい人が幸せをもたらす、と信じているのである。

もちろん、プロレスがその信仰を取り入れないわけがない。しかし、「巨人をどう楽しむか」という方法論は国によって違う。日本のプロレスファンの場合、その創成は相撲なくして語れないだけに「相撲における巨人の楽しみ方」が強く影響を及ぼしている。

世界的に見て、デカい人だけを集めて戦う競技（？）が、プロとして何百年も続いている例はない。「ウドの大木」だらけでは、そんな伝統続くはずもない。だから、日本人はデカい人に対する信頼感や期待感がことさら大きい。そして、体格差のある戦いは不公平だ、という考えの強い西洋に対して、「小が大を制す」のも好きなだけに、巨人がすばらしい負けっぷりを見せるとなんとも言い難い快感を感じる。つまり、日本人は多様に巨人を楽しんでいる、または「日本の巨人は十徳ナイフのようにおトク」とも言えるだろう。

それなのに、最近の日本のプロレス界にはデカい奴が少ない。なにしろ、新日本と全日本の二大団体では社長が一番デカいのだ。これはイカンと思う。橋本真也も小さくないが、高校の柔道部に一人はあれぐらいの奴がいる。

だからこそ、私は北尾にかなり期待した。そして、武道館で高田と戦ったあたりの北尾は最高だった。うさんくさいノースリーブの空手着でゆっくり入場してくると、誰もが、「でけぇ〜〜」と嬉しそうに叫んだし、ハイキック一発で倒れたときもあの巨体でなくては醸し出せない、樹齢100年のスギが切られたときのよう、威厳のある倒れっぷりだった。あのダウンに匹敵するのは、K—1戦士のロブ・ファン・エスドンク（身長2m）ぐらいだろう。効いてしまうと彼はいきなり「冷凍マグロ」と化して、スローモーションで倒れていくさまが素晴らしい。

その後、北尾はデカさを有効に生かせないまま、引退してしまった。私が次に期待を寄せ、それがしぼみかけているのが小川直也である。小川は巨人というほどではないが、今のマット界においてはデカめで、何より、スケール感がある。柔道時代は、外国人の奥襟をとって3分間黙っているだけで、相手の息を絶え絶えにしたという男だ。ジャンボ鶴田だって、そんな芸当は無理だったろう。

そして、この前の『K—1ドリーム』の入場時には、その肉体が絞られて、「おお、これは……！」と思わせるデカさを感じた。なんというかNBAのカール・マローンのような「鍛え抜かれたデカさ」である。ああ、それなのに小川、だけど小川、かえすがえすも小川。みなさま、報道でご存知の通り、実にトホホな試合だったのだ。小川はやっぱりダメなのだろうか？

数年前、私は小川の両親に取材したスポーツ番組を見た。そこで両親はとても暗い顔をして、中学生の頃の小川を語ったのである。

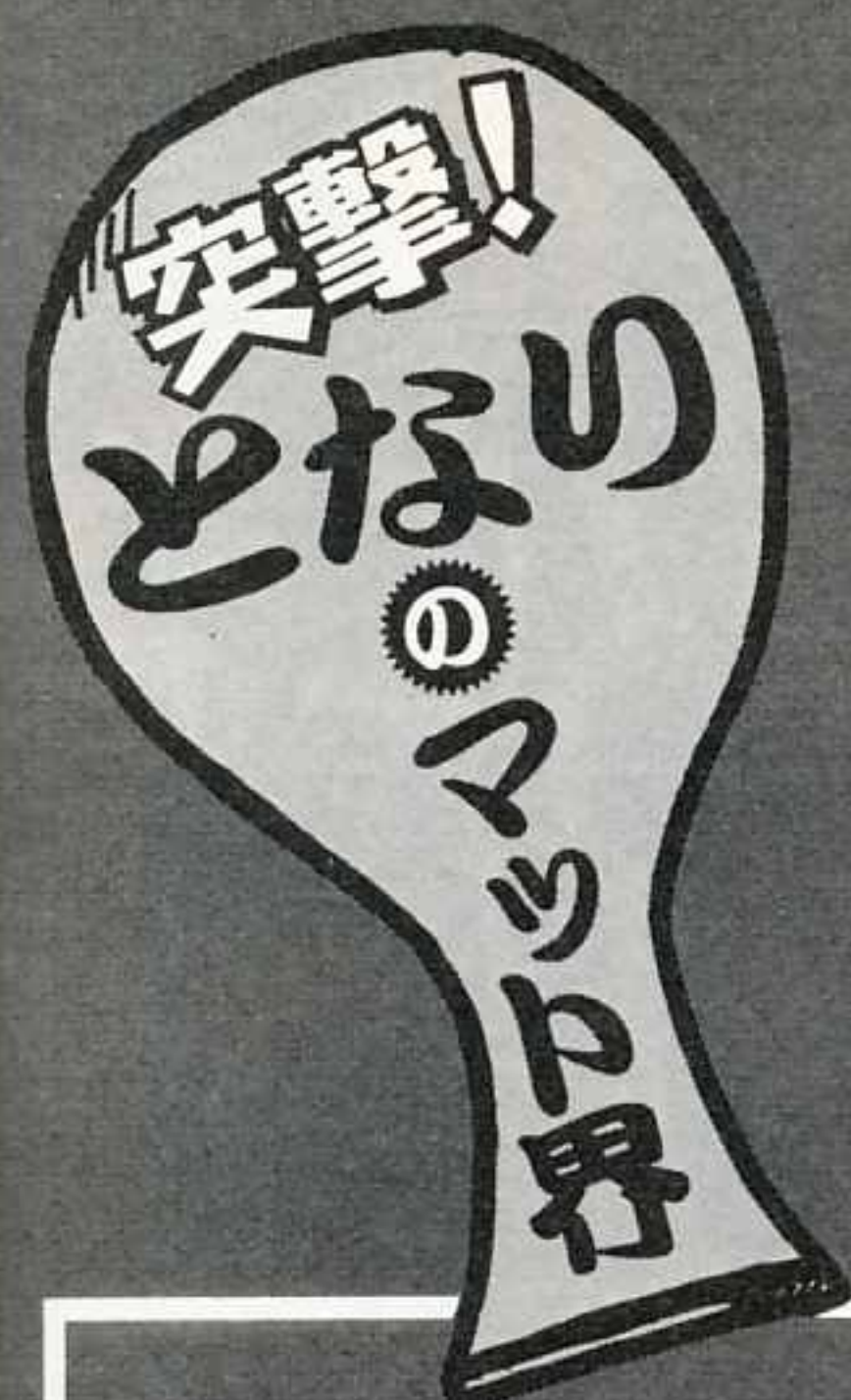
「その頃はまだ柔道をやっていなかったんですが……反抗期で……ほんとに……大変でした……」

両親の苦い汁をしぼるような口ぶりから、デカい人間が歯止めなく暴れたときの恐ろしさが、容易に想像できたのである。小川の反抗期……ほんと〜〜に、たいへんだったのだろう。このエピソードには、横綱時代におかみさん相手に暴れたと噂される北尾に通じる雰囲気がある。だから、小川も北尾と同じような道をたどる……という結論は容易に導き出されるのだが、私はあえてそれをせず、その狂気に期待したいと思う。小川、キレてくれよ。

さて、最近のプロレス界はアスリート志向が強く、それがデカい奴の活躍を妨げているのかもしれない。そう思ったのは友人の話を聞いていたからだ。友人、関取の敷島関（支度部屋の横綱と呼ばれるコメント王）は、高校生の時レスラーになろうと新日本プロレスを訪れた。柔道部にいた敷島だったが、なんと入門を断られた。山本小鉄さんに、「キミねえ、ウチではアンコ型はウケないから……」と言われたのだという。なんてことだ！ 小鉄さんも頭が固い！ ……そして敷島は角界に入門し、現在幕内日本人最重量を誇る。（約190kg）ただ、不合格の裏には別の理由もあるかもしれない。最重量を誇る敷島は、幕内最大乳輪をも誇っているのだ。しかもかなり黒目。体がデカいのはいいが乳輪はなあ、と思われたのか。小鉄さんに真相を正したいところだ。

押切伸一（おしきりしんいち）■ライター／放送作家。『SRS』及びK—1ビデオシリーズなど構成。自分の写真のデカさにビックリしている。本文に登場の敷島は、初のケガでの休場から復帰、来場所にかけている。鼻の穴もデカく、なんと五百円玉が入る。いろいろデカくて立派だ。

21 世紀型素人投稿ページ

突撃！となりのマット界

PRIDE.0（ゼロ）

オッス！　チョロ（26）だぜ。俺は20代の半ばに『紙のプロレス』という編集部に入り、毎日失敗を繰り返し続けている男だ。2年前に高額の報酬に惹かれて人体実験を受け、副作用が出てしまい……（略）そんな俺も今では『PRIDE.0』みたいなイカしたページを担当させてもらえるまでになった。セッド・ジニアスに負けないくらい、強く優しいアイアンマンハートを手に入れるために、この3作品をぜひ読んでくれよなっ！

前号の結果発表！

ライセンスナンバー3／武田いづみさん
『プロレスのこと』　143 票

ライセンスナンバー4／岡崎晶士さん
『闘わずして鈴木みのる』　57 票

ライセンスナンバー5／恒遠聖文さん
『男を探してブラリ旅』　44 票

見てみ、この結果!!「内容に共感!! 一番サエてる投稿!!」（群馬県／井上リエ）「男のマニアが忘れてる純粋で真剣な視点をもっていると思います。エライ!」（西成沢町／鈴木靖隆）「武田いづみっち」（山口県／河杉奈央子）「写真付きはズルイヨ!! ダメでっしょ!! ほんとに…もうっ!! 武田いづみちゃんに決定!! スゴイョスゴイョ300点!!（欽ちゃん風に）」（兵庫県／井村哲弘）他同様多数。いづみちゃん人気爆裂だぜ！

2戦勝ち抜き　ライセンスナンバー3

『あの世行きテレビプロレスのころ』

武田いづみ（18歳）

今までのプロレスの歴史で、世間に対するアピールの大きさという点では〃老人ショック死事件〃は5本の指に入る。その頃、私は生まれていないし、試合を観たわけでもないので、どんなふうだったか知らないが、「プロレス中継を観ていた人が死んだ」という事実だけ見ることにする。

しかし、よく考えたらこんなに不思議な事も少ない。直接誰かに攻撃されたわけでもないのに観ていただけで死んでしまうとは。人間が視覚と聴覚に受けた刺激だけで本当に死ねるもんなのか？

現代人にあの頃の映像を見せても、同じようにショック死する人はまずいないと断言できる。それはわずか40年足らずで日本人が変化したということだ。なんか話がでかくなってきた気もするが。

その理由の1つは、人に噛みついて流血させる人間よりも、もっと猟奇な人間をたくさん知っているということ。現実に猟奇殺人は増えていて、ニュースでいつも流れているし、ドラマや映画でもそういうものは多い。子供の読むマンガなんか、もう「血まみれ」だ。現代に生きる人は、そのへんが昔より確実に鋭くなってきている。

そんな環境で生きているのだから、ちょっとやそっとの事ではショックを受けないし、「噛みついて流血」というビジュアルだけではまさか死ぬはずもないんである。まぁ、実際に亡くなった人もビジュアルだけが原因ではないと思うが、少なくとも今の人よりはショックの度合いは大きかったと思われる。

では、どうしたら人間はショック死するんだろうか。友達に「ねぇ、人間ってどうやったらショック死するかなぁ？」と聞いてみたが、「死なないよ」と一言で片付けられてしまった。さらに「何かあったの？」と私の心のことまで心配してくれた。仕方ないので自分で考えてみたが、〃ショック死〃というからには興奮状態になければならないということを忘れていた。こっちの方がビジュアルより大事だ。

なるほど、興奮が極限に達したら若者はともかく老人くらいは死にそうだ。これでショック死の理由はなんとなくわかったが、こんどはどうして極限に達してしまったのかがわからない。だってテレビ観戦である。他の人がどうやってテレビでのプロレス中継を観ているのか知らないけど、私はわりと冷静に観ている。たぶん試合会場で「この人には何か憑いているのでは」と思うほどはじけている人でも、テレビで観ているときはおとなしくしてるんじゃないだろうか。

テレビ中継の試合を観ていて「スゲェ〜」と感動して興奮したことは何度かあるが、ショック死した老人がブラッシーの噛みつきで感動したとも思えないし、感動したくらいで死んでいては、うっとおしくて仕方ない。

ということは、テレビでは会場のライブ感が伝わりきらないと思っていたが、あの頃のプロレス中継では試合会場と同じような興奮がおじいちゃんの座っている茶の間にまで伝わっていた、ということだろうか。

しかし、今とあの事件のあった頃を比べるのは無理があるかもしれない。そもそもプロレスの影響力が違いすぎる。力道山なんて、このまえ日本史の資料集を見ていたら写真入りで載っていた（なぜかガッツのコメント付き）。完全に歴史上の人物なんである。そんな、プロレスが日本史に残るような国家レベルの出来事だった時代だ。いろいろ理由を考えてみて「あの時代でなら死ぬかもしれないなぁ」という気になってきた。よくわかんないけど。

老人がショック死したということは、老人もプロレス中継を観ていたからこそである。今、地上波でのプロレス中継の地位はものすごく低い。この時間帯では老人はおろか、若い人だってなかなか目にしないだろう。あの事件の後、いろんな所からプロレスに対してクレームがつき、一般紙でも取り上げられたらしいが、今はプロレスが問題になることすらほとんど無い。それも全て含めた上で、昔はプロレスが、戦争をもくぐり抜けた心臓にムリヤリ引導をわたすほどのエネルギーをガンガン世間に放っていたということであろう。

それにしても、プロレス観てショック死なんてメチャメチャいい死に方じゃあないか。よし、私の死に方は決まった。あとは私が老人になるまでプロレスが存在していることと、ショック死するほどのエネルギーを放つプロレスが行われることを祈ろう。

ps.写真ですが、これ撮ったあと病院行ってレントゲン撮るわ、血ィ抜かれるわ、点滴うつわであんまり健康じゃなかったので中途ハンパな笑いなんです。でも「本物の病人みたーい」とか言って点滴うってるあいだ笑ってたので元気ではありましたが…

「プライド？ 俺、結構プライドたかいよぉ」谷津（談）

「『紙プロ』でマット界を一刀両断してやるかぁ。ズバッと！」谷津（談）

ライセンスナンバー 6

『なにがなにやら、セッド・ジニアス』

グレート・ショウゴさん（4歳）

「4月4日東京ドーム。アントニオ猪木試合逃避。記録残っちゃいました。」

6月24日、悲しき天才セッド・ジニアスの爆弾発言である。皆さんはご存じであろうか。あの、「いつ何時、誰の挑戦でも受ける」が信条であった猪木が、歴史に残る「引退試合」の日に逃げていただなんて……。俺には信じられない。最も誰も信じていないようではあるが……。

とにかく俺は、この発言を徹底検証してみようと思い立った（泥酔中）。さっそく猪木引退試合を報道した新聞、雑誌を手当たり次第調べてみたが、「猪木試合逃避」なる記録はどこにも見当たらない。徹底検証は、早くも袋小路に行き詰まってしまった。ところがどっこい、「ムムッ、記録といえば？」と、俺はピンと閃いた！

「ギネスブック？」俺の脳裏を「世界記録」の四文字が一瞬よぎった。しかし残念ながら、ギネスブックにも「猪木試合逃避」の記録は掲載されていなかった。となるとどこに？　どこに猪木逃避の記録が残っているのだろう。疲れきった俺は自問自答の末、一つの結論に辿り着いた。それは……謎の記録の正体とは……

ジニアスの日記（または絵日記）ではないのだろうか。なるほど日記であれば書くのも自分の思いのまま、徒然なるままにである。策士ジニアス、なかなかやるではないか！　俺は思わず爆笑してしまった。ウプププ～プハハハー！

きっとジニアスの日記には、猪木への熱い想い、怒りが綿々と書き連ねてあるに違いない。「猪木さんたら、興奮する私を置いて、さっさと逃げてしまうんです。（宇能調）」「猪木が逃げた。太鼓が鳴った。どん。（夢枕調）」読んでみたいものだ。その記録を。

しかしというかやっぱり、『週プロ』、『週ゴン』共にこの爆弾発言の扱いが小さすぎるでごわす！　仮にもあの猪木の歴史を覆すかの爆弾発言である。表紙もしくは巻頭カラーでドドーンと取り上げても罰は当たらないのではないか！　特に『週プロ』！　「鈴木みのるはどこに……」なんてやったんだから「4月4日、セッド・ジニアスって……誰？（猪木談）」ぐらいのインパクト&とんち魂溢れる表紙を創ってほしかったぜ！

とにかく、ジニアスは今が旬のレスラーである。なんたって「太陽の光をいっぱい浴びて～光合成完了～」なのだから手が付けられない。少々紫外線を浴びすぎたのか、髪の毛が薄くなっていたのが気掛かりであるが、そんな事はドンマイ、ドンマイ！　いよいよ二十世紀最大のレスラー（自称）が輝きだしたのだ！　リアル・ワールド・ヘビー級ベルト（自称自作）を見よ！　ジニアスの男の意地に乾杯だ！

「猪木 vs ジニアス」この夢のカード（ジニアスの）は今世紀中に行われるのであろうか。この対決がかなうのならば、そこで二十世紀が終わってもいい！と約1名（ジニアス）考えている筈だ。だからなんだ！　と言われればそれまでだが、今後のジニアスに要注目！

ライセンスナンバー 7

『タイガー・ジェット・シンはどこに……』

福岡県　マスクド・ツネ（25歳）

私にとっての〝金曜8時〟とは、「アントニオ猪木&○○対タイガー・ジェット・シン&上田馬之助組」である。シン、上田の〝悪役〟という枠には収まりきれないほどの狂気、そしてそれにとことん付き合う猪木のプロフェッショナルぶりに幼い私は熱狂させられた（しかし、大人になった今考え直してみると、実は猪木こそが狂人で、悪役のシン、上田の方がプロフェショナルだったのではないかと思えてならない）。

この2人に思い入れのある私としては、4月4日、東京ドームのアリーナ席で涙まじりの〝猪木コール〟をしながらも、心のどこかで「シンも駆けつけたかったに違いない」「親子で今後UFOに関わりインドで格闘技のビッグ・イベント開催だ！」とか「上田は病室のTVで見てるかな？」などと考えてしまった。

シンは『A猪木30周年メモリアル・フェスティバル』において猪木と初タッグを結成し「これからもイノキとタッグを組み続けたい！」と言っていたくらい猪木に惚れており、名作『プロレス・スーパースター列伝』の6巻でのシンは「近頃、スタン・ハンセンだのハルク・ホーガンだのがはしゃいどるようだが、渡してたまるかッ！　最後にイノキの息の根をとめるのは、このタイガー・J・シンだ！　ひょっとするとある意味で……俺にとってイノキは……永遠の恋人なのかな？」とニヤリとしてたくらい猪木にラ^{2}ブであった。相棒の上田も上田で「猪木の凄さなんて客にはわからねえよ」とボヤクほど猪木を独り占めにしたがっていた。

話は変わって、アントニオ猪木の最後の相手は〝狂乱のアルティメット王〟ドン・フライだった。このドン・フライ、なんとも曲者である。最初は〝小川のかませ犬〟くらいにしか思ってなかったが、その正体は近年まれに見るくらいの悪役ぶりを見せる魅惑のヒゲ野郎であった。

猪木の最後の試合、フライはドームの花道をのっしのっしと悠々とした足取りで現れた。

さて、このように最近のヒールは花道を悠々と歩いて来る。あらかじめ用意された客の用意された反応の中に現れる。nwoに代表されるようにヒールたちは観客の反応を確かめるようにリングに向かう。冷静といえば冷静、プロといえばプロである。だが、かって猪木に立ち向かった男たちは違った。猪木との闘いを待ち切れないかのように、あるものはサーベルを振り回し、あるものは鎖を振り回し、またあるものは観客席をなぎ倒しリングになだれ込んだ。我々の心の準備なんてまるでお構いなしに現れた。シンも上田もブッチャーもブロディもアンドレもハンセンもホーガンも国際はぐれ軍団も長州もみんな猪木しか見てなかった。みんな猪木に夢中だった。みんな猪木ファンだったのである。

この日のドン・フライは猪木以外のものを見過ぎていたのではないだろうか、客を、メインダートを、ゴルドーを、そして小川を…。この闘いの後、フライは何を感じたのだろうか？　シンに負けないくらいフライも猪木ファンになっただろうか？　フライの本音が聞けなかったのが残念であった。もし猪木と恋愛し損なったのならば、その息子小川を永遠の恋人として追いかけて欲しい。そして「近頃、nwoだのK－1だのがはしゃいどるようだが、渡してたまるかッ！最後にオガワの息の根をとめるのは、このドン・フライだ！」くらいのことを漫画でもいいから言って欲しいものである。

さて、私には5年後いや10年後でもいいから是非見たいカードがある。それは「小川直也&藤田和之対ドン・フライ&タイガー・アリ・シン」だ。セコンドはもちろん猪木とJ・シン。会場には上田、「力道山時代から続いたTVのゴールデンタイムをはずされたっちゅーことをな、レスラーみんなで考えろっちゅーの！」とボヤク（元祖「○○っちゅーの」）。または、藤田じゃなくてカ・シンとの〝シンつながり〟でもタイガーキングとの〝タイガーつながり〟でも可。荒川で〝ドン〟つながりはちょっと不可。試合後はフライとシン親子の仲間割れ→親父乱入→猪木仲裁→ダーッ！　などとますます夢は広がるが、そのためにも小川にはもっと闘魂伝承してもらわねばならないし、フライにはこの際、シンから〝狂虎伝承〟を受けるべきである。もし、この試合が実現するのならば「これが感動せずに……」。

というわけで、UFO絶対支持の皆様も私と一緒にシン親子の参戦と上田馬之助の全快を心より願いましょう。

と、ここまで書いた後にステーキ屋の松永が突如サーベル片手に狂虎伝承。よって私の夢は「ドン・フライ&シンJr&松永（狂虎三銃士）対小川&藤田&石川社長（平成闘魂三銃士DX）」に変更。「これが賛同せずに…」。

きみもビジュアルライターになってみないか!

誰かいづみちゃんの快進撃を止めるヤツはいないのか?　このままだと20世紀も終わっちゃうぜ。全国の女子高生諸君、みんな投稿してきてくれよな。プリクラ貼るのも忘れるなよ。もちろんお姉さん、未亡人でも大歓迎だぜ。おっと男の子も負けてられないよな。ところで今回の3選手の中で一番輝いていた選手を1人選んでくれないかい?（応募方法はP152参照）一番支持を集めた選手は勝ち抜きとなり次号参戦が約束されるぜ。しかも5戦勝ち抜いたら、本社規定の原稿料をたっぷりとお支払いするぜ。ついでに掲載者全員にはビックリするようなプレゼント付きだ。参加希望選手は、400字詰原稿用紙3枚～5枚程度、内容はちっとでもプロレスにかかっていれば全然問題はないぜ。住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上（あなたの顔写真も同封してくれ!）

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
（株）ダブルクロス『紙プロ』編集部「一刀両断」係 まで送ってチョンマゲだぜ。●締切は9月15日（当日消印有効）だ！（ぴのこ）

ザ・検証
卯木イズム

構成／せきしろ

卯木とは何か!?

UNOKI DAIHYOU

THE BURNIG SPIRIT

キラー編

WHAT is UNOKI ?

卯木の目にバーニングスピリッツ以外が見える!

【キラー卯木……①】映画編

「この前、『ラジヲの時間』という映画を見たんやけど、そのとき思ったわ。この映画は俺が作らなあかんかった映画だったって」

と、よくわからない悔しさを、いきなり私へぶつけてくるほど卯木氏は大の映画好きだ。いまだに**「映画監督になるのが夢」**といってきかない。ならば、現在の映画界に不満も人一倍あるだろう。映画に対して怒りをぶつけているうちに、気持ちが高ぶり、キラー卯木が出現するかもしれない。そう考えた私は、さっそく映画の話を切りだした。すると返ってきた答えは……。

「映画? そういえばこの前『タイタニック』を観に行きました。嫁さんと一緒に行ったんやけどね。夜の10時から。レイトショー。レイトショーっていうのはいいシステムやね。安いし。なんかアメリカ人になった気分やったわ。仕事帰りに映画、一日得した気分になったわ……」

残念ながらキラー卯木は現れなかった。でてきたのは、平凡な日常に見つけた小さな幸せの話ばかり。映画の話ではキラー猪木の出現は無理、とっとと話題を変えよう、そう思ったときだった。

「しかし、デカプリオがカッコいいっていうのはわからへんな!」

突如出現したキラー卯木!

「なんで人気あるのやろ。ただのデブやないか! まったくわからへん」

まるで春やすこ・けいこのような毒舌がマシンガンのように乱射された。ついさっきまで**「『リング』『らせん』は怖くて観られへん」「映画はビデオで観るのが一番。いつでも止められるし、酒飲みながら観れる」**などと平凡な中流家庭的セリフをはいていた卯

木氏とはまったくの別人である。

ったから。過去の名前で生きてるような奴が

健悟は選挙で欠場!

かでズルイことをしたときはね。家族でモノ

木氏とはまったくの別人である。

……キラー卯木の魔性の毒舌はとまらない。気付くといつしか毒舌の対象が映画から、先の総裁選へと変わっていった。

「この不景気をなおしてくれって言ってるのに、出てきたのが小渕!? どういうこっちゃ!」

場の雰囲気を、レストランから安い立ち飲み居酒屋へ、ディズニーランドから秘宝舘へと強引に変えてしまうキラー卯木の力、おそるべし。キラー卯木の前では、シャネルの香りもホルモン焼きの匂いへと変わることだろう。

【キラー卯木……②】ワールドカップ編

卯木氏の好きな野球チームはもちろん阪神タイガース。その阪神といえば、残念ながら今年も不甲斐ない成績。卯木氏のイライラも募っていることだろう。これはキラー猪木を見るチャンス! ここぞとばかりに私は阪神の話を切り出した。しかし、卯木氏はため息を吐くばかり。どうやら阪神に対しては、怒りを通り越してしまった状態らしい。

これでは仕方ない。違う話題を振るだけだ。私は話題を移行するためのつなぎとして卯木氏と雑談を交えた。その際たまたま出たサッカーワールドカップの話が、キラー卯木の出現の鍵となった。

「カズを外した時は、日本もやる気や、本気やと思ったけどね。俺はカズ不要論の推進派やったから。過去の名前で生きてるような奴が一番嫌いやからね! ずっとアカンかったんやから、外されて然るべきやったと思うよ」

またまたキラー卯木登場! カズをぶった斬り、続いて日本代表を

「決定力不足というより、シュート力のなさちゃうんか!」

と、サッカーだけに一蹴! 「よりによってサッカー界で一番弱いヤツらが出ていった」と言わんばかりの勢いだ。

……しかし、ここで敢えて言わせてもらおう。日本代表惨敗の原因はカズ云々や決定力の有無などでは断じてない! 代表メンバーにあの男達を入れなかったからである。そう、平成維震軍を!

笑顔の裏にキラーあり。突如としてキラー卯木は現れるのだ。

「アルゼンチン!? ふざけるなって! クロアチア!? 関係ないって! ぶっ潰すよ! 維震軍の体勢も整ったし、勢いは続いてるよ! 今大会は突っ走るって!」

そんな越中の頼もしい怪気炎があがる! 小原がボールに気合いを入れる! カラテ出身・彰俊のものすごいキック力! 虎ハンター・小林、今日の獲物はタイガーではなく相手のゴールだ!

後藤はゴール裏から相手チームキーパーの足を引っ張る好アシストを連発!

健悟は選挙で欠場!

そして最後はやっぱり越中のケツ! どんな角度のセンタリングにもケツを合わせてくる越中! ケツの嵐でゴールの山! スタンドにたなびく維震軍の旗! 越中がゴールポストに上り、腰にベルトを巻くポーズを見せた! 観客は大熱狂……(以下略)。

【キラー卯木……③】家庭編

家庭におけるキラー卯木、それはおっかないお父さん。卯木氏にはお子さんが3人いるが、一番上のお嬢さんは10歳。思春期直前の女の子への教育が容易ではないことは想像がつく。卯木氏もキラー卯木(おっかないお父さん)へと変わらざるを得ないときがあるのではないだろうか。

「まだそんなに大変な年頃やない。さすがにお風呂は一緒に入らへんけど。まあ、別に本人は一緒に入ってもええみたいやけどな」

本当にお嬢さんは一緒に入ってもいいと思ってるのか、はたまたお嬢さんに拒否されたことの寂しさからくる強がりなのか、その心意はともかく、キラー卯木(おっかないお父さん)は子供に手をあげるのだろうか? その辺を質問してみた。

「手はあげます。うちは厳しい。特にゲームとかでズルイことをしたときはね。家族でモノポリーやったり、人生ゲームやったりするんやけど、サイコロ投げたのに、もう1回投げるとか、そういうズルイことをしたときには思いっきりね、思いっきり怒る! ムチャクチャ怒る!」

家庭内での甘えが家庭外でも出てしまう、それを阻止すべく、キラー卯木は出現するのだ。現在我が国では失われている父親像が、卯木家では健在なのだ。

続いて付け加えられた卯木氏の言葉に、キラー卯木の意外な一面を知ることになる。

「子供らしく育ってくれればええから、うるさいとかでは怒らない。まあ、人前だったら『静かにせえ!』と言って、パフォーマンスとして叩くけどな」

人前なら叩く! 常に観客を意識したプロフェッショナルさがキラー卯木には存在するのだ! ところで奥さんに対してはどうなのであろう。パフォーマンスとして手をあげることがあるのだろうか?

「嫁さんには絶対手はあげない……昔、付き合ってたころはあげたけど。若かったからなあ……」

そう遠い目で語る卯木氏。それ以後は思い出に浸りはじめ、何を聞いても応答なし。取材はここで打ち切らなければならなくなった。私は、目を閉じ幸せそうな表情をしている卯木氏を、微笑ましく見つめながら、そっと部屋を出た……。

卯木を信じよ!

というわけで、今回もまたいい加減な取材をもとに、こちらの都合のいい解釈と捏造を加え、キラー卯木を検証してみたのだがいかがであっただろうか。

今回の検証は、いわばリトマス試験紙である。この検証を読んだ卯木氏が激怒するかしないか、それを確かめるための手段である。激怒しないという結果が出たならば、卯木イズムシリーズの検証は永遠と続くであろう。

さて、今回のまとめだが、「キラー卯木」とは結局何であったのだろうか。その答えはあえてここでは書かないので、読者諸君がそれぞれじっくり考えてもらいたい。そして私に教えてほしい。すると私はとても楽をできるのである。

もし、卯木イズムに直に触れたければ、試合会場へ行こう。日程は各自調べること。運がよければ闘魂注入(男の子の場合は股間を握っての体育教師風スキンシップ、女の子はフルコンタクトセクハラ)してくれるかもしれません。

←椎名基樹さんは『ザ・検証』を1回お休みして夏休み特別企画で執筆! さあ、P144へ急げ!!

QUEST VIDEO

感動をありがとう
忘れ得ぬ名勝負を再現！

絶賛
大好評発売中！

前田日明引退記念ビデオ

前田日明メモリアル

たった独りで未開の地平を切り開いてきた男　決して安易な道を選ぼうとせず、
自らの信念を貫き通し、困難を打破してきた男、前田日明！
その格闘人生を様々な秘蔵映像と共に振り返る

各巻カラー90分　税抜6,600円

Vol.1 黎明篇

前田日明引退記念ビデオ
前田日明メモリアル 1 黎明篇
入門、デビューから第1次U.W.F.まで

入門、デビューから第1次U.W.F.まで

主な収録内容
◆欧州遠征からの帰国第1戦、対ポール・オーンドーフ（'83年4月21日蔵前国技館）◆第1回IWGPトーナメントでアントニオ猪木と初対決（'83年5月27日高松市民文化センター）◆維新軍団との対抗戦で長州力と初対決（'83年11月3日蔵前国技館）◆記念すべきU.W.F.旗揚げ戦、対ダッチ・マンテル（'84年4月11日）◆スーパータイガーとU.W.F.実力No.1をかけ激突（'84年9月11日後楽園ホール）◆公式リーグ戦で師匠の藤原とケンカ勝負（'85年3月2日後楽園ホール）◆若き日の高田伸彦とU魂をぶつけ合った死闘（'85年7月17日大阪臨海スポーツセンター）◆旧U.W.F.での最後の闘いとなったスーパータイガーとのセメントマッチ（'85年9月2日大阪臨海スポーツセンター）など全12試合／その他、撮りおろしインタビュー、高校時代の空手道場訪問などの未公開映像、入門からデビュー、そして欧州遠征当時の貴重な未公開写真なども多数収録

Vol.2 神話篇

前田日明引退記念ビデオ
前田日明メモリアル 2 神話篇
新日Uターンから第2次U.W.F.まで

新日Uターンから第2次U.W.F.まで

主な収録内容
◆新日本勢との対抗戦スタート、前田&高田&木戸対藤波&木村&星野（'86年3月14日鹿児島）◆最高の名勝負と言われたIWGPでの藤波辰巳戦（'86年6月12日大阪城ホール）◆激勝で格闘王の称号を得たドン中矢ニールセン戦（'86年10月9日両国国技館）◆新日提携時代唯一の自主興行、対藤原喜明戦（'87年8月29日後楽園ホール）◆第2次U.W.F.旗揚げ戦、対山崎一夫（'88年5月12日後楽園ホール）◆旗揚げ2戦目で盟友高田延彦と壮絶な死闘（'88年6月11日札幌中島体育センター）◆台風をも吹き飛ばした奇跡の有明大会、対ジェラルド・ゴルドー戦（'88年8月13日有明コロシアム）◆オランダ軍団の首領ドールマンとの初対決（'89年5月4日大阪球場）◆東京ドームに初進出で柔道銀メダリストのウィルヘルムと激突（'89年11月29日大阪球場）◆鈴木みのるとの最初で最後の対戦（'90年5月28日宮城県スポーツセンター）◆U.W.F.最後の試合となった船木誠勝戦（'90年10月25日大阪城ホール）など全15試合／その他、奇跡の大成功を収めた有明コロシアムでの独白、解散当時の心境を吐露するインタビューなどを収録

お買い求めは、全国の書店、レコード店、ビデオショップ、プロレスショップか直接当社まで。

【通信販売要領】①現金書留　②郵便振替　口座番号…00190-9-753158
①②いずれかの方法で下記クエストの住所までご送金下さい。ビデオの送料はサービスですので、商品代金のみで結構です。どちらの場合でも住所、氏名、年齢、電話番号、希望商品名の明記をお願いいたします。（郵便振替の場合は用紙裏面の通信欄に記入）

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-3-1 ユニオン駅前ビル5F　㈱クエスト　TEL.03-3360-3810　FAX.03-3366-7766　http://www.bekkoame.or.jp/~questnet/　E-mail:questnet@bekkoame.or.jp

引退おつかれさま記念
紙のプロレス RADICAL
スーパースター列伝

東洋の神秘 ザ・グレート・カブキ interview

The Great Kabuki

その格闘人生を様々な秘蔵映像と共に振り返る

波瀾万丈なるプロレス時代絵巻&小咄

ストロングスタイルを旗印に旗揚げした新日のリングで、タイガーマスクが熱狂的に支持されていた80年代。当時、新日と熾烈な興行戦争を繰り広げていた全日のリングで、小中学生に絶大な人気を誇ったのがザ・グレート・カブキである。ヌンチャク、連獅子、ペイント、毒霧……とにかく圧倒的なカッコ良さで、ハートを鷲掴みにされた読者の方も多いのではなかろうか。カブキに心踊らせたキッズたちも大人になり、カブキ自身も年をとった。そして、9月7日に引退を迎えるカブキがプロレス生活を総決算！　プロレス界を34年間さすらい続けた男の言葉に潜むリアリティを感じろ！

聞き手／吉田　豪
interview by Go Yoshida
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou

夏場、窓を開けてたら声が聞こえたから、ホテルを盗聴したことが…

―カブキさんはデビューが記録的に早かったんですよね。その後、船木（誠勝）さんがデビューするまで抜かれないぐらいの記録だったっていう。14歳で入って、15歳でデビューですもんね。

カブキ　そうそう。中学卒業でね。

―カブキさんは、力道山先生を知らない最初の世代ですよね。力道山先生というと、恐ろしい人とか鉄拳主義って感じじゃないですか。力道山先生が亡くなった後にカブキさんは入られたんで、比較的楽だったのかなっていうイメージがあったんですが、いろいろ情報を集めてみると、どうもそんなもんじゃなかったらしいですね（笑）。

カブキ　力道山の時代から、そのままずっと変わらなかったからね（苦笑）。

―やっぱり厳しかったですか。

カブキ　自分が入ったのが3月17日で、力道山が死んでから初めてのワールドシリーズが4月に始まってね。自分は残り番をしてて、巡業終わってみんなが帰ってきたのは6月だったんですよ。まあまあの興行成績で帰ってきたみたいなんですけど、どうも様子がおかしい。聞けば人員整理があるらしいってことでね。

―最初、カブキさんは人員整理のリストに入ってたらしいですね。

カブキ　うん。その時に4人辞めさせられて、自分もその中に入ってたんですよ。2人はすぐに出て行ったけど自分は「リキパレスに挨拶して帰ります」ってことで幹部の人に挨拶したんですよ。そしたら芳の里さんが、「お前誰だ？」って言うんです。

―知らないんですか？

カブキ　会ったことないからね。「新弟子です」って答えたよ。「歳はいくつだ？」「15歳です」「何キロあるんだ？」「75キロです」ってな感じで話をして。隣にいた豊登さんに「トヨさん、こいつはまだ15歳だし、もったいないから残しなよ」って言ってくれてね。トヨさんも「おう。わかったわかった」って。その時はもう退職金5万円もらってたんだけどね。当時の5万円っていったら大きいよ。大卒で1万3800円だから。

―そのお金はどうしたんですか？

カブキ　返さなかった（笑）。「いいよ、お前取っとけよ」って言われたからね。それで伊勢丹で着物とか草履とか買っておふくろに送ったら、すぐ手紙が来て、「お前なんか悪いことしたのか」って書いてあった（笑）。

―ダハハハ！　もともと小中学校では番長だったんですよね。

カブキ　番長というか、ガキ大将っていう感じだよね。みんながぞろぞろ付いてきてさ、冬は山に行って遊んだり、夏は海とか川とか行って遊んだりっていうね。別にみんなでイジメたりするような陰湿さはなかったよ。

―カブキさんの温和な表情を見てるとあんまり喧嘩してたようには見えないんですけど。

カブキ　喧嘩は嫌いだ（笑）。出張って喧嘩に行ったって、相手になるヤツがいなかったしね。

―格闘技はやってたんですか？

カブキ　柔道をやってたね。他には水泳と野球もやってたよ。水泳は得意だよ、中1の時にバタフライで県大会3位に入ったからね。

―それで日プロに入門して同期というと（山本）小鉄さんや星野（勘太郎）さんが上にいるぐらいですよね。

カブキ　それも1年とか2年先輩になるから、やっぱり怖かったよね。歳も離れてるしさ。

―やっぱり14、15歳で歳が離れてると大変ですよね。

カブキ　どんなに頑張ったって、みんな5つも6つも上だからね。

―特に、その2人はケンカじゃ負けたことがないって言われているような人たちですからね（笑）。

カブキ　デカイしね（笑）。当時は、新弟子が入ってきてもすぐに逃げちゃいましたよ。だから2年間、後輩がいなかった。

―らしいですね。ずっと一番下で。いろんな雑用をこなして。しかも先輩には

ギュウギュウいわされて（笑）。
カブキ　そうそう（笑）。でも、苦しくはなかった。楽しかったよ。だってほら、飯炊くことも知ってたしさ、全部出来たから。
——カブキさんは子供の頃から自炊してたんですよね。
カブキ　そう。だからそういうことでは苦労はなかったからね。逆にそういう面で兄弟子たちに買われてた面があって、可愛がってもらったよ。さっき、本（紙プロRADICAL第10号）を見てたら北沢さんの写真が出てたけど、懐かしくてさあ。いい人だよ。だけど悪いのもいた。●岡●鉄っていうイジメ専門の奴がいてね。もう、かなわないよ（笑）。
——あの頃の日プロはホントに派閥とイジメが横行する世界だったらしいですね（笑）。
カブキ　「おい、あんちゃん上がって来いや」ってリングに呼ばれてさ。要するにシューティングやるわけよ。キューーって極められて、グーンっとやられてね。背骨を上からガンッてやられてウワァーってなって（笑）。もう口は切れるわ鼻は切れるわ、それがいまの前田（日明）選手とかの源流になるんだけど。新弟子も、その練習を見ただけで「失礼しました」って帰っちゃう奴がいっぱいいたもん（笑）。ヒドイ奴になると、陰干ししてる力道山のガウンを持って逃げちゃうんだから（笑）。
——お宝ですね（笑）。
カブキ　そんなのばっかりよ（笑）。いっぱいいろんなヤツが入ってきたよ。
——そういう状況下で、カブキさんはどうして残っていられたんですか？
カブキ　14歳、15歳で入ってきて、「これが当たり前なんだ」っていう感覚だったからすごく楽だったよ。
——まだ世間の常識を知らない状態ですもんね。
カブキ　だいたい2年ぐらい経つと先輩と話もちゃんとできるようになるし。それまでは……いやぁ、地獄だったね。
——その後、さらに2年ぐらい遅れて入ってきた選手たちが、これまたエリートだったわけですよね。
カブキ　マサ斎藤、サンダー杉山ね。
——アマレスのエリートですよね。
カブキ　オリンピックにバリバリ出ててね。それにアホの（グレート）草津（笑）。でも、やっぱりラッシャー（木村）と一番気があったね。向こうが年上なんだけど、俺のことを「高千穂さん、高千穂さん」って呼ぶんだ。「もう、『高千穂さん』はやめてくださいよ」って言って（笑）。よく2人で飲みに行ったね。
——（グレート）小鹿さんともよく飲みにいかれたという話ですけど。
カブキ　昔は、小鹿のことをよく知らなかったから（笑）。
——なるほど（笑）。その頃は遊びもスケールが違ったらしいですね。リキパレス（日プロの道場兼試合会場）って渋谷のホテル街にあって「よく覗きをやってた」って猪木さんが自伝に書いてたんですけど（笑）。カブキさんはそういうことはやってました？
カブキ　隣りのホテルにマイクを仕掛けたことはある（笑）。
——ダハハハ！　盗聴ですか（笑）。
カブキ　夏場、リキパレスの窓を開けてたんだよ。そしたらなんか声が聞こえてくるわけ。みんなで聞きだして、しまいにはテープレコーダーを俺に持たしてさ、「部屋にこれ突っ込め」って（笑）。
——やっぱ、レスラーはそういう話があった方がいいですね。バカやれて強い人たちって、絶対面白いですからね。その頃、道場ではアマレス形式のスパーリングもやっていたそうですね。
カブキ　それが基本だから。ガチンコでどうやって極めるかを毎日練習するんだから。それはナメられないための裏技。
——アマレス王のサンダー杉山がカブキさんを極められなかったそうですね。
カブキ　アマレスの人たちは寝っ転がし方はうまいけど、極め方は知らないから。スパーリング中、俺も投げられそうになってカチンっときたから「じゃあ、プロレスやろう」っていうことになったんだ。「こんなのに負けちゃいけない」と思って、あいつがスッと組みに来たときに左ストレートをパカンって入れてやったら「もうやめて、もうやめて」だって（笑）。
——ダハハハ！　いくら相手がアマレス王でも、後輩にはナメられちゃいけないというのがあるんですね。
カブキ　やっぱりプライドですよ。10代であろうが20代であろうが負けちゃいけないって思えば、本当に殴り合いの喧嘩になるよ。俺にはプライドがあるし、俺の方が先輩だし。「若いけどやるよ」っていうのを見せないと。いつまでもオリンピックに出たっていうことの下になるのは嫌なことだよ。負け犬になったら惨めだしね。10代の時から、そういう気持ちでやってたっていうことだよ。
——そういうハートは海外でも役に立ったと思いますけど、いかがでした？
カブキ　うん。だから、そういう気持ちがあるからアメリカでホームシックにかかった時もね、「ここで泣き言を言っち

The Great Kabuki

やいけない」とか思えたよね。

——海外では危ない客も多かったんじゃないですか?

カブキ　もう、しょっちゅうケンカだよ。こんなデカイ奴が控室に3人来たことがあってさ。俺はボッコン、ボッコン殴ったよ。そしたら試合場までなだれ込んじゃって、試合やってる奴も飛び降りてきて参加して四つん這いになってる奴を下から顔をまともにバカンって蹴りあげてた（笑）。その時の喧嘩で俺は右手の小指の付け根の骨をなくしたんだよ。ほら、ここ。

——あっ！　ホントにへこんでなくなってますね。

カブキ　これがデトロイトの思い出。

——ムチャクチャかっこいいですね！

カブキ　殴ったらちょうど頭に当たっちゃってね。

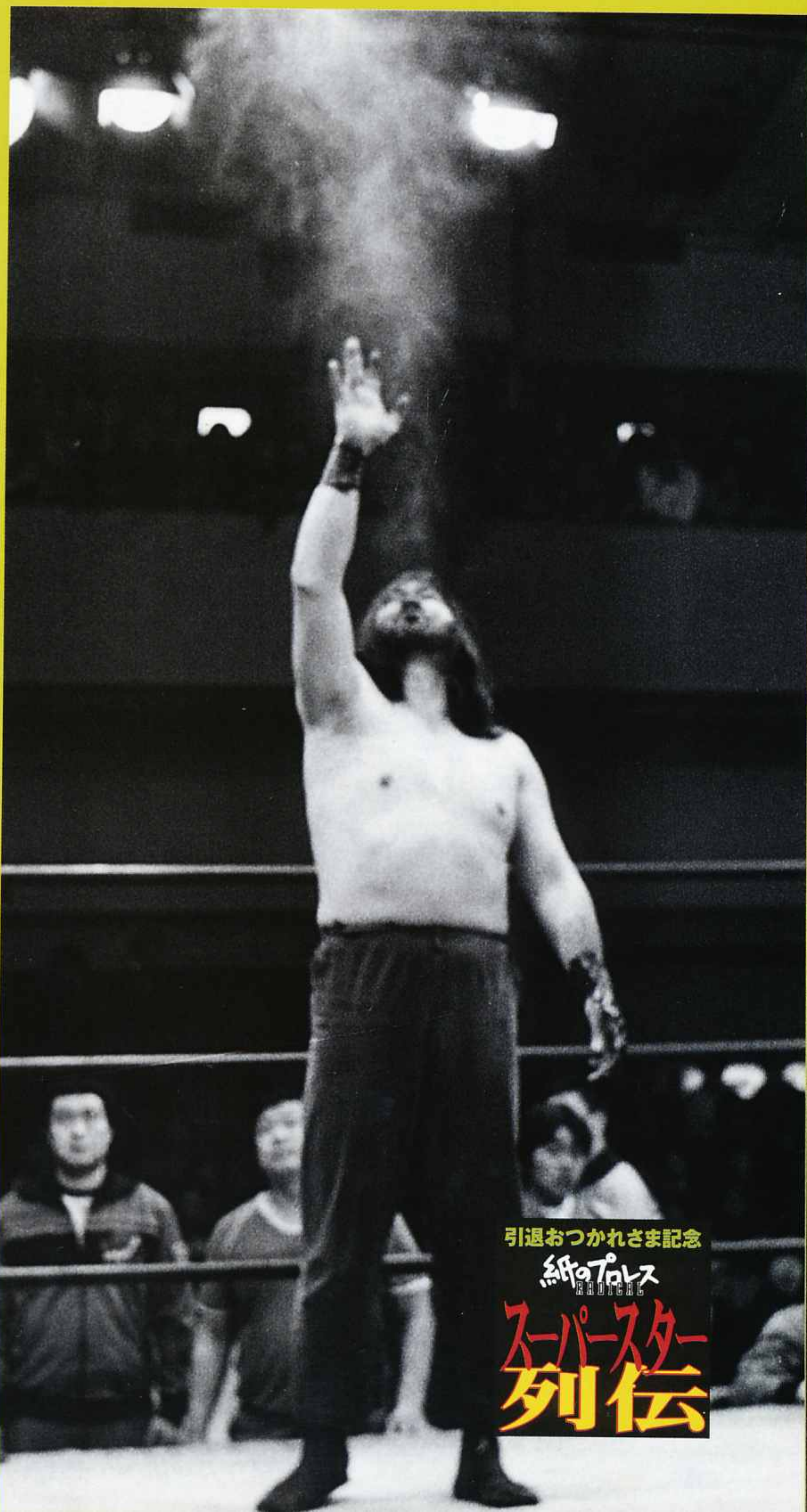
——カブキさんは、ケンカになると手が先に出るタイプなんですか?

カブキ　手が一番早いよ。

——トラースキックとかよりも（笑）。

カブキ　喧嘩だったらアッパーカットだね（笑）。

——ダハハハハ！　とにかくカブキさんは若い頃からプロレス・センスが良かったらしいですね。

カブキ　器用貧乏だね。レスラーはあんまり器用すぎてもダメ。だから、若かったらどんな受け身も取れたのよ。カール・ゴッチがきてもビル・ロビンソンが来てもどんな技も受け切れたのね。だから、どんな技をやるのかわからないレスラーが来ると「おい、高千穂、お前やれ」ってね（笑）。でも、あんまりレスラーは器用じゃダメだ。

——猪木さんとか見てると、やっぱり不器用だなって思うんですよね。

カブキ　あの人は不器用だよ。猪木さん、天龍、坂口征二は不器用だ（笑）。だけど馬場さんはうまい。

——不器用な人ってなんだか不思議と印象に残るんですよね。

カブキ　そうそうそう。あんまり綺麗に受け身を取りすぎると、全然効いてないみたいに見えるでしょ。ところがショッパイ……っていうか不器用な人ね（笑）。相手の技が凄く見えちゃうのよ。猪木さんみたいにゴトゴトゴトっていう受け身の方が実際には伝わるもんなんだよ（笑）。

——それで、アメリカ修行に行くんですよね?

カブキ　70年にアメリカに行きました。でも、しばらくしたら日プロから電話がかかってきて「帰ってこい」と。せっかくアメリカでうまくやってたのに、嫌だったんだけど帰ったら、あんなことだったでしょ（日本プロレスでクーデターが起こり、猪木が離脱）。それで日プロが無くなったから全日に行って、（サムソン・）クツワダと組まされたけどパッとしなかった。それで78年にまた海外に行ったんです。

——やっぱり外様だといろいろ難しいですね。

カブキ　そうそう。だから、ある程度、全日に居てもしょうがないなとは思っていましたよ。

83年2月11日、ザ・グレート・カブキの初来日（?）。センセーショナルかつエキセントリックな入場シーンはファンタスティックだった。

——分裂騒ぎの時にカブキさんが日プロに残られたのは、やっぱり芳の里さんの存在が大きかったからですか。

カブキ　そうですね。高千穂って名前の名付け親だしさ。アメリカ行く前に付き人もやってたし。芳の里、吉村（道明）、豊登の付き人をやったよ。

——こういう方たちと一緒に飲みにいくとガンガン飲まされるわけですよね。それとも後ろで立ったままとか?

カブキ　座ってるけど、そんなにガンガン飲めないよ。やっぱり気を遣わなきゃいけないから、暑いなって感じたら後ろに行って背広を脱がしてやったり、タオルを氷で冷やしたものを出したりさ。マンガ（『プロレススーパースター列伝』）

11カ月間、毎日試合で休みがなかったけど毎晩朝まで酒んでた。

では芳の里さんとかが悪者になってるけど、そんなことはないよね。

——最近は、その4人の放漫経営で日プロを潰したとかっていうのが常識みたいになっちゃってますけど。

カブキ　そうじゃないよ。誰がいい、誰が悪いじゃないんだよ。あの当時はもう力道山がいなくなって「こんないい商売はない」ということで、「自分でやろう」っていう輩ばっかりだったから。

——そういうのが嫌でカブキさんはアメリカに行った、と。

カブキ　嫌だったけど、そんなことは言えないしね。だから、会社でベンツのバスを買ったらさ、オマケにベンツの450がある人のところに入ったとかさ、いろいろあるわけよ。●●●●さんのところにね（笑）。あっ言っちゃった。これオフレコね（笑）。

——ダハハハ！

カブキ　そういうのがいっぱいあるの。みんな悪いんだよ。

——逆にアメリカ行ったら伸び伸びやれたんでしょうね。

カブキ　楽だよ、アメリカは。なんの心配もしなくていいんだもん。

——最初はマサさんと組んでたんですよね？

カブキ　そう。78年だね。あのタッグが一番面白かったよ。

——当然、2人で悪さをしていたわけですよね（笑）。

カブキ　そうですね（笑）。それにタイガー服部がマネジャー。だから、11カ月間休みがなかったですよ、1日も。そのかわり毎晩朝まで3人で酒をくらってた（笑）。

——朝までですか（笑）。

カブキ　それで潰れないですもんね、身体が。何時間か寝て試合場までドライブしてって。でも、それがあったからこそ11カ月間休みなしでやれたんだと思う。だから、あの当時はもっと痩せてたよ、100キロあるかないかぐらいじゃなかったかなあ。

——昔の選手の遊ぶスタミナって凄いですよね。カブキさんは酒癖はいい方なんですか。

カブキ　俺は酒飲めないです。

——なのに飲んでたんですか（笑）。

カブキ（お馴染みのポーズで）少〜しだけ（笑）。

——そこでネタを出しますか（笑）。そのころは、まだカブキのキャラクターじゃなかったんですよね。

カブキ　田吾作スタイル。日本人独特のスタイルだったんですよね。

——で、カブキというキャラクターに開眼して大スターになられたと。

カブキ　いや、その頃の俺はキャ〜ンサス（カンザス）でグリーンカードの申請をしててね。降りるまでキャンサスを動けなかったんですよ。ロスには子供がいて仕送りもしなきゃいけないし、どうしようかって思ってた時にブルーザー・ブロディが「お前さ、ゲーリー・ハートがお前のことを探してたぞ」って教えてくれて。「指がこういう風に曲がる日本人はお前じゃないか」って電話がかかってきてね。ちょうどそのときグリーンカードもおりたから、ダラスにあるゲーリーのオフィスに行ったんですよ。そしたらゲーリーが『ライフ』に載ってた連獅子の写真を見せて「こういう格好をできるか？」って。それでやるようになったんですよ。

謎が多いカブキのギミックの中でも最も不思議なのがこの血噴き。しかし、このインタビューでは敢えてそこには突っ込まず、日本プロレス史を作ってきた男としての話を聞いた。

The Great Kabuki

——じゃあ、第一関節だけ曲がる指はカブキに変身する以前から有名だったんですね。

カブキ　なんか俺の知らないところでね（笑）。それからペイントしてドーラン塗ったり、口紅塗ったり、いろいろ試したね。

——それでペイントレスラーの元祖になったんですね。『プロレススーパースター列伝』には指の第一関節曲げられるのは猪木さんと佐山さんとカブキさんだけだって書いてあるんですよ。

カブキ　猪木さん、曲がったかな？　あれはガイジンが見るとは気味悪がるんだよ。だから、カメラの前で、指をコキコキ曲げてやったさ。

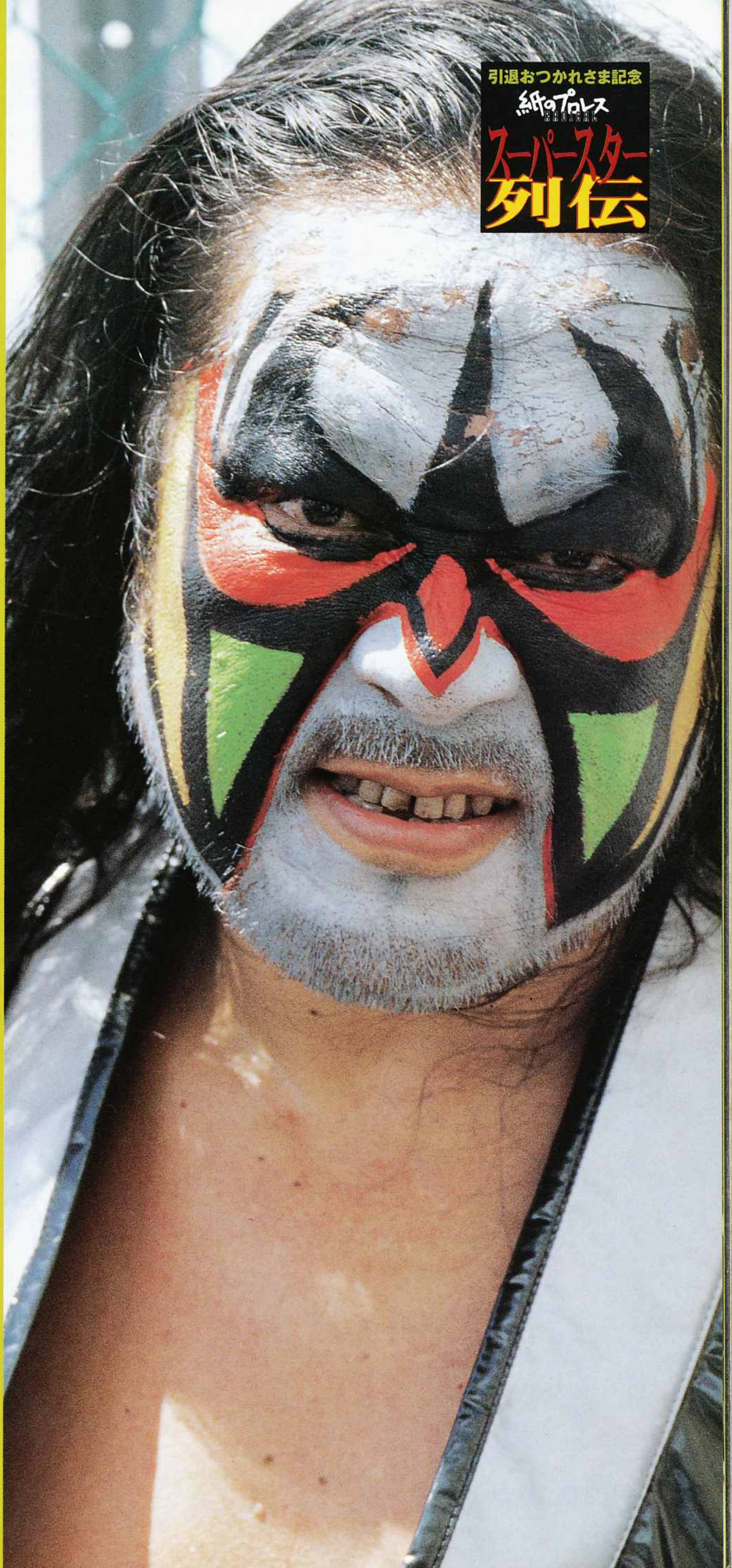
——漫画によると、「それがやれることがカンフーの達人の証明」ってことらしいですけど。

カブキ　フフフ（微笑）。

——その頃、タイのバンコクに遠征してるんですよね？

カブキ　それはずっと前だよ。18歳ぐらい。

——フジ・コータローというリングネームで賭けプロレスをやってたという伝説がありますよね。

カブキ　あっちは危ないよ。バンコクでは大暴動みたいになっちゃったもの。俺とスティーブ・リッカードが試合をやってる途中で、お客さんが揉めだして。賭けてるから大変な騒ぎになってね。リングサイドにいた日本人の女の子なんか押しつぶされそうになってたよ。試合どころじゃないからリングにドンドン上げて。

そのとき、日テレのカメラが1台無くなっちゃったんだって（笑）。銃声まで聞こえたよ。

――プロレスで賭けが成立するって凄い話だなあ。そういう修羅場を散々経験してるだけあって、カブキさんの海外での趣味はピストル収集だったらしいですね。

カブキ　そうですね。ピストルは好きだったですから。日本刀も好きだったんですね。だから、日本刀を見ながらピストルを持って（笑）。それでオーストラリアに行った時に日本刀を二本見つけたのよ。シャレてるわけじゃないよ（笑）。

――ダジャレまで物騒ですね（笑）。

カブキ　で、その刀を持ってアメリカのリングに上がったんですよ。それを日本でもやろうと思ってたんだけど、新聞社の誰かが「お前、そんなものを持って上がったら捕まるぞ」って（笑）。

――すっかり日本の法律にうとくなってたわけですね（笑）。海外ではドラゴン・シ・マッチっていう試合をされていたそうですね。

カブキ　竹刀を真ん中に置いて「1、2の3！」で先に取った方が使えるっていう形式でね。

――いまのインディー団体の先取りみたいな感じですね。その試合形式で谷津さん（当時、海外でのリングネームはトラ・ヤツ）と試合してるんですよね？

カブキ　それで谷津をボコボコにしちゃった。あいつ、「やめてくださいよぉ、やめてくださいよぉ」って言ってたよ、舌足らずなしゃべり方で（笑）。まあ、日本刀もピストルも好きだったけどね、アメリカで2番目の娘がピストルで撃たれたのよ。

――えぇ～っ!?

カブキ　娘の友達が俺のピストルをいじくってるうちに、娘に向けたまま引き金引いて、弾が出ちゃった。

――うわ～っ！

カブキ　家に帰ってびっくりしたよ。首は固定されて、半身不随になっちゃった。それからはピストルはいじらなくなったね。

――……。

カブキ　それはしょうがないよ、神様がその子に与えた試練かもしれないし。でも、1年ぐらい経って1人で車の運転は出来るようになった。

バスの後ろに飲む連中が集まって、ワァーと宴会が始まっちゃう

――どうも聞きづらい話を聞いてしまったみたいで……。

カブキ いえいえ。

――話題を変えましょうか。当時は、正直あんまり日本に戻る気はなかったんじゃないですか?

カブキ そうですね。

――でも、日本に来たら大スターだったわけですよね。

カブキ いやいや、とんでもない。ペイントするのが嫌でしょうがなかったんですよ。恥ずかしいから(笑)。

――ダハハハ! それは日プロ時代にしていた試合と違ったからですか。

カブキ でしょうね。だから、顔にペイントすることは邪道だと思ってたからね。いまはパフォーマンスの一つとして考えるようになったんだけどさ。

――日本のプロレスと海外のプロレスの大きな違いってなんなんですか。

カブキ パフォーマンスですよ。自分のキャラクターを出してやるのがアメリカのプロレスであって、そこにうまさ、強さが出てくるわけ。日本の場合はストロング・スタイルで、パフォーマンスがない。見て楽しませる部分が少ないね。

――面白いですね。佐山さんにしてもカブキさんにしても、あれだけ大スターになった人に限って、自分のキャラクターを嫌がってるわけですよ。

カブキ そうね(笑)最初からそういうものになりたくてプロレスラーになったわけじゃないからね。根本的に「強くなりたい」っていう思いがあるから。自分の中の理想像は力道山だし、佐山にしたら猪木さんだったかもしれないしね。

――そういう思いがあったからなのか、カブキさんの試合って入場は派手ですけど、試合自体はすごくオーソドックスでしたよね。あれはカブキさんなりのこだわりですか?

カブキ そうでしょうねえ。引退すると決まってからは開き直って試合でクルクル回ったりしてるけど(笑)。

――次々と団体を変わられてきたんですけど、一番居心地がよかったのはどこですか。

カブキ 全日ですね。カブキになる前、旗揚げ間もないころの全日。あのころは最高に良かったですよ。一番面白かったね。その時なんか、自分に天龍に石川(孝志)にプリンス・トンガとかラッシャーが巡業バスの後ろを陣取ってね。だいたい飲む連中でしょ。ワァーっと飲んで宴会が始まっちゃうんだよ(笑)。そうすると馬場さんが前の席から「お前たちねぇ、あんまり飲み過ぎるんじゃないよぉ(馬場マネ)」って(笑)。

――ダハハハ!

カブキ 隣りで元子さんが「そうよねえ。あんまり飲んじゃダメなのよねぇ」って(笑)。優等生のジャンボ(鶴田)はその後ろに座っててね。

――ホント学校みたいですね、悪いのが後ろにたまって大騒ぎして(笑)。

カブキ そういうとき、小鹿さんは最後部の広い空きスペースでガァーっと寝てるわけ。バスの中はトイレがないでしょ。だから、ビニール袋におしっこして結んで、小鹿さんの頭の周りに置くんだ(笑)。

――それでも気付かないわけですね(笑)。

カブキ 大熊(元司)さんなんか得意だったから。「小鹿、この野郎」って言いながら(笑)。それで1回その小便袋を小鹿さんの鞄の中に詰めたんだよ(笑)。小鹿さん、知らないでうちに持って帰って、奥さんが鞄開けて「これ何?」だって(笑)。

――メチャクチャ面白そうですね、その頃の全日って。

カブキ 馬場さんもまだ、そのころは話がわかったからさ。あの人はもともとは寂しがり屋だからね。あの人の好きな歌があるんですよ。三条高校の野球部の歌。「♪越後おろしはよぉ〜」っていう(笑)。それをね、高木(功・現嵐)にこの歌を飲みながらさんざん練習させて、夜中になったら馬場さんの部屋に電話して「♪越後おろしはよぉ〜」って歌って、ガチャって切るんですよ(笑)。これが面白かった。そうしたら翌朝さ、馬場さんに呼ばれて「おまえ、このやろぉ。昨日の夜、電話したろぉ」って(笑)。「いや、電話してないですよ」「ばかやろぉ、あの歌を知ってるのはおめえしかいねえんだよぉ」って(笑)。

――ダハハハ! 中学生じゃないんですから。

カブキ 天龍は天龍で、飲んで金がなくなると、夜中に馬場さんに電話して「ハガミ、ごっちゃんス」って(笑)。

――ギャラの前借りを頼むんですね(笑)。

カブキ 馬場さんは「ばかやろうぉ。ハガミなんかないよぉ……わかったよぉ、取りこい」って(笑)。

――ガハハハ! 新日も全日も一緒ですね、そういう部分での幻想は(笑)。

カブキ 酒飲むにしてもウイスキーをビ

本誌9号で検証したカブキの「蛇手」は本当だった！チビッコはマネしてみよう。

The Great Kabuki

引退おつかれさま記念
紙のプロレス
スーパースター列伝

The Great Kabuki

SWSは、みんなもっと頭が良かったら「誰を立てるか」わかったはず

ールで割って飲む（笑）。そういう飲み方をしてたんです。

――かっこいいですねえ、それでしっかり試合もするんですよね（笑）。

カブキ　IWAもそう。外人なんかも一緒だよ。レザー（・フェイス）も飲むし、（テリー・）ゴディもそう。

――ゴディは飲みそうですもんね。

カブキ　この間、ゴディはアメリカで飲んで暴れてパトカー1台潰したんだって。

――昔ながらのレスラーですね（笑）。

カブキ　バカだよ（笑）。

――そんな素敵な全日を今度は離脱するわけですけど。

カブキ　天龍がSWSに行くから、まあ、いい機会だなと思って。

――全日を出たのはカブキさんが一番最後だったわけですよね。だけどSWSに行って後悔されたそうですが、入った早々に（笑）。

カブキ　天龍を頭にやってくのかなって思ったらそうじゃないんだもんね。

――いろんな頭があったと（笑）。

カブキ　そうそう。それも変な頭ばっかで（笑）。まいったよ、ホントに。

――SWSがやろうとしてたことっていうのは正しかったと思うんですよ。ただ、プロレス界で変わってると言われる人が、ほとんどSWSにいっちゃってるって感じですよね。

カブキ　そうなんです！

――ジョージ（高野）さんは、ボクも何回かインタビューしたんですけど、あの人は特に変わってますね。

カブキ　兄弟でね。ホント素晴らしい兄弟だよ（笑）。

――SWSでなんか、いい思い出ってあります？

カブキ　やっぱりWWFを呼んできたことだね。あれは大したもんだと思うよ。ただ、みんなもっと頭が良かったら、「誰を立てるか」っていうのがすぐにわかったはずなんですよ。ところが「俺が、俺が……」ってのばっかでしょ。「ちょっと待ってよ」ってね。立てる人があってそれで次に出ていくことをすればいいのに、それをしない。もう勝手にしろって感じだね。う〜ん。（首を傾げながら）頭痛くなってきた（笑）。ほ〜んと俺、おかしくなっちゃったもんね。

――らしいですね、自立神経失調症で。

カブキ　頭皮にブツブツがいっぱいできてさ。

――（将軍KY）ワカマツさんも大変だったらしいですね。

カブキ　あの人はそうでもないよ。それだけの神経を持ってないし（笑）。もともとはね、田中八郎さん（SWSの母体・メガネスーパーの社長）を引っ張ってきたのが若松さんなんですよ。それで若松さんがいろんなことを田中さんに直訴するから、田中さんが今度は現場にいろいろ言ってくる。もう収まりがつかないよ。

――そんな大変な中で北尾さんの八百長発言とか次々と余計に大変なことが起こってましたね（笑）。

カブキ　……思い出したらまた頭痛くなってきたよ。ブッカーみたいなことをやらされたからね。だから、マッチメークなんか誰でもできるのよ。誰でもできるんだけど1人に決めなきゃいけない。それを田中さんは「皆さんで作りなさい」

ザ・グレート・カブキ■昭和23年9月8日宮崎県出身。昭和39年10月31日、vs山本小鉄戦でデビュー。日プロ、全日、SWS、WAR、フリー、平成維震軍、フリー、IWAジャパンと渡り歩いた一匹狼。181cm、110kg.

って。できるわけないよ。
——田中社長がそう言うと、結局「俺が俺が」になるわけですね。
カブキ　そうねぇ……。俺は思ったんだけど、プロレスっていうのは金持ちがやるもんじゃないね。やっぱり選手が金を生み出していくような会社じゃないとダメ。じゃないと選手は、いつまでたっても伸びないし、それに甘んじてダメになっていくからね。
——お金がない方が確かに団結は強まりますね。UWFとかもヘタに儲けたからああいうことになったわけだし。
カブキ　金が有り余ってたから。メガネスーパーとしては20％売り上げが上がったんだから……。ああもう、なんか疲れたぁ……。
——この話は気が重そうですね（笑）。そういえば今日、これからアポロ菅原さんにもインタビューするんですよ。鈴木みのる選手と神戸でやった試合のことを聞こうと思ってるんですけど。あれはカブキさん的にはどう思われてるんですか？
カブキ　……レスラーじゃないね。だからね、職人じゃないんだよね。誰とでもやれるような試合をしなきゃいけないんですよ。
——藤原組長は、UWFでもそういう試合ができたけれどもという。
カブキ　若い頃なら気にくわないこともあると思うよ。だけど、それはそれでガンガンいけばいいの。
——それができなければプロ失格だということですか？
カブキ　そういうこと。
——SWSの話は気が重いようなのでこの辺にしておきます（笑）。
カブキ　ああ、良かったあ（笑）。
——でもWARの話も気が重いような気もするんですけど。
カブキ　そんなこともないよ。天龍が社長になればよかったんだよ。赤いタイツと赤いネクタイと赤いソックスはやめましょうってこと（笑）。
——なるほどね（笑）。まあ、その頃に新日ともからんでムタとの試合もありましたね。
カブキ　できたからね。だから動き的にはWARから新日本に行けたしね。
——ムタに水芸みたいにして血をピューピュー浴びせてたのは凄かったですよ。その後、東プロや維震軍にも在籍してましたよね。やってどうだったですか。
カブキ　楽しかった。みんな気の合う連中ばっかりだったし、いい選手がいっぱいいたからね。タッグを組んだら一番わかるのよ。なんにも考えなくてもポンポンポンポン技が出てね。みんなプロレスがうまいよ。
——そして東京プロレスからFFF？
カブキ　FFFは俺は入らなかったけどね。だから、やっぱり金持ちがやったらいけないよ。インディーで一番いい汗かけるのはIWAだよ。みんな人はいいのね。だけど、「人がいいだけじゃダメだ」って俺もよく言うんだけど。欲がなきゃダメ。
——レスラーはほんとそうですもんね。カブキさんはいい人の割には、ちゃんと成功してるわけですけどね。
カブキ　いや、俺は意外とズル賢いんですよ（ニヤリ）。
——カブキさんはこれからIWAのフロントになるんですか？
カブキ　まあ、手助けできたらいいなと思いますよ。でも、飯田橋で店舗を探してあるからね。串焼きの店をやります。
——では、最後の質問ですけど、カブキさんが試合した中でこいつは強いなって思った人ってどなたでした？
カブキ　アンドレでしょ。大きいし、強いなんてもんじゃないね。
——やっぱりデカいってだけで全然違いますもんね。
カブキ　そりゃ違うでしょ。馬場さんに肉がついてみなさいよ、大変ですよ（笑）。
——ダハハハハ！
カブキ　この間、馬場さんがハワイから帰ってきて北海道に巡業に行ったんですって。それで白樺林を元子さんと一緒に歩いてたら、後ろから「白樺の木を勝手に持っていかないでください」って管理人のオジサンに言われてね。馬場さんがハワイから帰ってきて皮がボロボロ剥けてたから白樺の木に見えたんだって（笑）。
——今度は小咄ですか（笑）。アンドレはそんなに強いんですか。
カブキ　動かないからね。
——動かざること山のごとし。風林火山ですか（笑）。
カブキ　そう。（急に）馬場さんは昔、帽子なんかも特注でさ。ある日、お母さんが「正平、4軒先の家までジャガイモを5キロほど配達してくれ」って言われて「お母さん、僕、そんなに持てないよぉ」って。そしたら「馬鹿だね、お前の学生帽子の中に入るでしょう」って（笑）。さあ、帰ろうか（笑）。
——いいオチがつきましたね（笑）。
【98年7月27日、ダブルクロスにて収録】

8月8日、大阪ドームでグレート・ムタと念願の初タッグ結成を果たしたパパ・カブキ。毒霧の共演も見事！　ブラボー！

毒霧よ、今夜もありがとう!
ザ・グレート・カブキの勇姿を見逃すな!!

9月2日　新潟・新潟フェイズ
9月4日　神奈川・横浜文化体育館
9月5日　愛知・知立市福祉体育館
9月7日　東京・後楽園ホール

※5日は18:00試合開始。それ以外はすべて18:30試合開始です。

［お問い合わせ先］
2日、4日については、【IWA　JAPAN　03-3352-3366】
5日、7日については、【オフィスカブキ　03-5684-0406】

トンパチマシンガンズ

なんだコノヤロー!!

11月、バトラーツ両国大会開催決定!

それがどうした!!
俺らは吠えるぜ!
トンパチマシンガントーク!!

リーダー
折原昌夫
(メビウス)

小野武志
(格闘探偵団バトラーツ)

昨年11月のタッグ結成以来、バトラーツのリングのみならず、他団体にも超特大のバッドマシンガンをブッ放し続ける彼等。今やトンパチマシンガンズの勢いはインディーマット界を黒く塗り潰さんばかりである。行く先々で悪事を繰り返し、吠えまくりの彼等をこのまま野放しにしておいていいのか!? 誰か噛みつかないのか!?

聞き手／松澤チョロ
Interview by Choro Matsuzawa
撮影／遠藤政文
Photographs by Masafumi Endou

クチビルゲルゲだね、お前（小野）

――すっ、すみません。大変遅くなりました（新人のくせにインタビューの時間に30分も遅れて来たチョロ）。今日はよろしくお願いします。

ジャイ子　（『紙プロ』練習生・身長178センチのメス）お願いしますぅ。

小野　パシーン！（突然チョロを張り倒す）おせーんだよ！（怒）。お前何分待たせたと思ってんだよ！　お前みたいなド新人が俺たちの取材に来るなんて、450年はえーんだよ！　このヤロー！

――ウッ！　エエッ！　450年？　す、すみません。

折原　すみませんじゃねーよ！　このヤロー！

小野　天下のトンパチマシンガンズ様相手にド新人よこすんじゃねーって。おまえんとこのバカ大将によく言っとけよ!!　そっちのデカイ女。唇が塩辛みたいだよ。鏡とか見たことある？

ジャイ子　……はいぃ。

折原　俺も思ってたんだよ（笑）。

小野　クチビルゲルゲだね、お前。これ書いとけよ。

ジャイ子　うぅ。（涙目）

――ウヒャヒャヒャ（笑）。いきなりスけど、リーダーは最近喧嘩してますか？

折原　喧嘩してるんですよ（笑）。喧嘩してるんですけど負けてるんですよぉ（笑）。

――エッ！　負けちゃうんですか（笑）

折原　全敗ですよぉ（笑）。

――エッ！　全敗って、何でですか？

折原　最近は相手が4人とか5人とかが多いんですよ。こっちは1人なんで、初めの1人2人ぐらいは気持ちよくいけるんですけど、まだまだ俺も大丈夫かなと思ってる隙に、後ろからやられちゃうんですよ（笑）。

――う〜。やられちゃうんスか。

折原　気が付いたらボコボコになってるっていう。

――え〜。ボコボコにされるんですか。

折原　なんだプロレスラーは弱いなっていう伝説が出来つつあるという（不気味な笑み）。

――そんな（笑）。やっぱ折原さんは喧嘩に物とかは使わないんスか？

折原　物は使わないですね。素手で。やっぱりキンタマ狙いが多いですね（笑）。

――ヒャヒャヒャ。キンタマ。やっぱし。さすがッスね（笑）。

折原　一番の武器だね。

――小野さんはやっぱ喧嘩するスか？

小野　僕は喧嘩はしませんよ。もっぱらナイトクラビング。朝帰りばっかですよ。

――や、やっぱり。で、今日のテーマは「挑発」っていうことで……。

小野　ロン毛？

――まっそうスね。

折原　違うだろ！

小野　なんだ、そりゃ！

――あ！　この間のトンパチ直接対決（7・25FMホール）では折原さんが勝って、見事リーダーになりましたね。

折原　私がトンパチマシンガンズのリーダー、折原です。

小野　営業部長の小野です。

――営業部長！　ヒャヒャヒャ。

折原　まあ、小野クンがリーダーになるのと、僕がリーダーになるのとでは、

折原昌夫■S44年6月16日、群馬県生まれ。全日本〜SWS〜WAR〜東京プロと渡り歩き、現在は「メビウス」を主宰。更に別動部隊「ジョリー・ロジャー・メビウス」をも率い、多団体で活躍する爬虫類好きレスラー。

98・7・25 TFMでのヤングジェネレーションバトル公式戦、折原昌夫vs小野武志の一戦は、トンパチ・マシンガンズリーダー決定戦として行われ、これを制した折原がこの日より正式にマシンガンズリーダーに就任した。

小野武志■S49年9月30日、東京都生まれ。平成6年、対田中みのる戦でデビュー。現在バトラーツ以外にも、DDT、IWA、FMW、みちのく?にも参戦し、各団体で悪事を繰り返すケンカ番長（又はラッパー）である。

どこにどういう風に喧嘩売ってたのかわかんなくなるんですよ（笑）（折原）

これからのトンパチマシンガンズの色が変わってくるからね。

――やっぱり変わりますか。

（ここで注文していた飲み物が届く）

ジャイ子　あのぉ、小野さんはレモンティーですよね。

小野　レモンだよ！　レモンに決まってんだろう、このヤロー！

折原　聞くんじゃねえよ、このヤロー！

ジャイ子　はぃぃ。（涙目）

折原　だから俺がリーダーになってどうなるかっていうと……。

（さっさと自分だけジュースを飲み始める失礼なチョロ）

小野　なに1人で飲んでんだよ！　こういう場合は、お前が俺の飲み物にストロー挿すべきだろ！　このヤロー！

――あっ！　ちっと！　すみません。

折原　だから他団体に……。

――（慌ててストローを袋ごと差し込む失礼なチョロ）

小野　袋ごと入ってんじゃねぇかよ！　このヤロー。

折原　俺の話、聞いてんのか、このヤロー！

――ちっと！　聞いてますよ。

折原　わかんなくなっちゃったじゃねえか！　まあ、だからな、他団体に話をしに行く時に、まあ今のを見てわかったと思うけど、小野クンはいろいろ問題があるんで……。

TONPACHI MACHINEGUNS

――やっぱし！

（ピクッと小野の眉毛が動く）

折原　だからね、俺が交渉した方がウマくいくんじゃないかと。小野クンがリーダーだと交渉の段階までいかないからね。

――ヒャヒャヒャ（笑）。

（再びピクッと小野の眉毛が動く）

折原　小野クンは顔は売れてるんですけど、結構いろんな悪い噂があるんで。陰が多いんでね。だから僕がリーダーになって、取りあえずマシンガンズは安心かなと。これで荒れなくてすむね。

――あ～。やっぱし（笑）。

折原　ただね、試合中荒れるのは僕の方ですけど、それを小野クンがちゃんと見てくれるからね。結構控室に帰ってきてね、注意じゃないけども、されたりするんですよ。ファンは意外だと思うかもしれないけど。「こうしませんか、ああしませんか」とか。冷静に俺のことを見てるんですよ。意外でしょ？

――お～。それは意外ですねぇ。

折原　リングの上では冷静なんですよ。それに一発とか関節技とか瞬間の技を持ってるからいいんですよ。ただ私生活がね（笑）。問題は私生活！

――う～。問題は（笑）。

折原　更生させせよう更生させようと何度も思ってるんだけども、いっつも携帯に電話してくる時にはワケわかんなくて気持ちよくイッちゃってますからね（笑）。

――ウヒャヒャヒャ！……で、折原さんは考えてみたらホントいろんな団体にあがってますよね。現役では間違いなく最高ですよね。

折原　みんな意外に気がつかないんですけど（笑）。

――全日本から数えると17、8団体は出てますよね。みんな気がつかないッスよね（自分だけ気がついたように）。

折原　名前が大きすぎたり、小さすぎたりして出られなかったりする人も多いんですけど、僕はその中間にいて、なりふり構わず、勝ち負けも関係なくいってるんで。あとは大日本プロレスですか。そこに出れば全団体制覇っていうかね。一ヶ月コンスタントに12試合とか10試合以上は絶対にやってますから。だけど、生活全然良くなんないんスけども（笑）。取りあえずプロレスラーでいられるかなっていう誇りはありますね。

――大日本にはなんで上がらないスか、小鹿社長となんかあったとか（笑）。

折原　ん？　いろんなコメントとか見て誤解してる部分とか、噂もいろいろ立つんで、「折原、天狗になってるんじゃないか」っていう部分があるんじゃないんですか。僕は大日本にも出てみたいですけどね。ただ、かぶりものとかデスマッチはやる気ないですから。

――かぶりものって、月光とか？

折原　あれはかぶりものじゃないです。あれはマスクマンですから。俺が言うかぶりものっていうのは例えば冬木が金太郎みたくなったとかね。あんなのは邪道・外道の下ですよ。シャレになんないッスよ。いくら仕事とはいえ、やらないですよ、俺は！　最低だよ、冬木さん！　がっかりしたよ。俺の相方は結構プライドがあって自分の顔を出すところを選ぶんだけど、俺がリーダーになったからには場所は選ばず、小野を見せていく。俺ってけっこういろんなところで露出してるから。彼はそういう部分が足りないから。秘密のベールに包まれてる部分が大きいから（笑）。

――秘密のベールっていうとカッコいいですけどね。

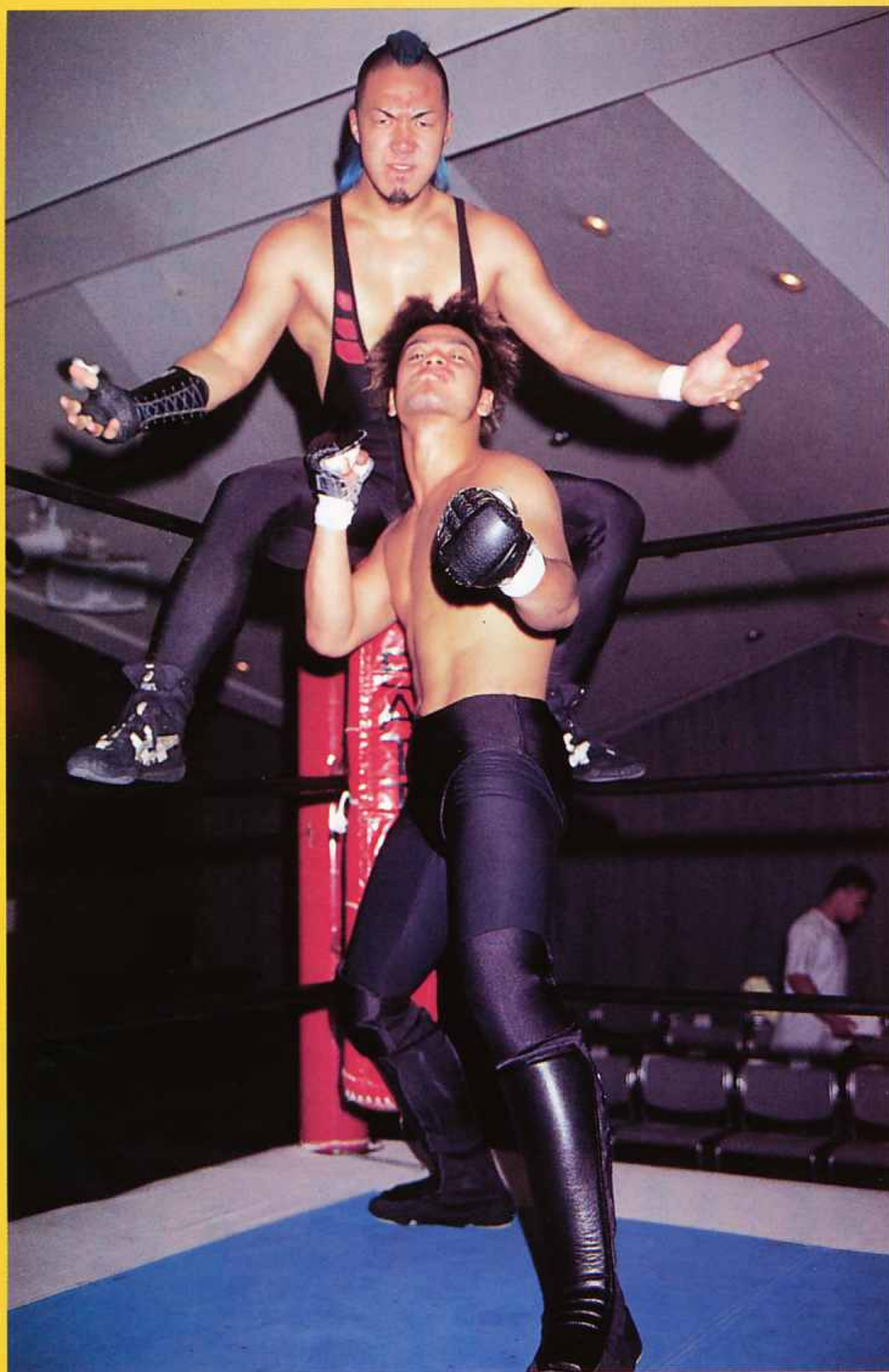
小野　……なんかムカツクなぁ、お前。

折原　そういう部分を露出していく。そっからでしょ。だから、場所は関係なくマシンガンズのトンパチぶりと勢いをね。とにかく勢いがあるんで、それをいろんなところで見せて強く印象づけてね。

――小野選手は、DDTでは宇宙パワーと闘いましたけどどうでしたか。

小野　別に。宇宙語をしゃべんなかったですからね（笑）。

折原　宇宙パワーも宇宙語をしゃべらなかった。それぐらいなんか興奮させたっていうか。こいつらには地でいかなければダメだなって向こうに思わせ

たってことで俺たちの勝ちでしょ。勝負でも勝ってるし。
小野　内容でも勝ってるでしょ。
折原　すべてにおいて全然段違いじゃないの。これは勢いとかそんなんじゃないでしょ。ま、実力の差でしょ。
──あ〜。ただ折原さん絡みだとどの団体に行っても抗争とかあって……。
折原　けっこうねえ、オフの時なんかは手帳見て考えるんですけど（笑）。
──わかんなくなっちゃうと（笑）。
折原　どこにどういう風に喧嘩売ってたのかわかんなくなるんですよ（笑）。だけど、会場行って選手に会うと気持ちの切り替えってできますけどね。
──あぁ、そういうもんなんですか。そういえばトンパチマシンガンズで

今まで以上に他団体へ打って出るというリーダーの折原だが、その言葉通りアッと驚く団体への襲撃を秘密裏に画策しているという。今はまだ言えないのだが……。

『東スポ』のタッグ大賞を狙うとか新聞に載ってましたね。
小野　そんなの載ってたんですか？
──載ってましたよ。
小野　じゃあ狙いましょう！
折原　というか俺たちがいま頭に置いてるのが邪道・外道、あの二人ね。あの二人はほんとにインディーから流れてきて実力で上がってきた奴らだからね。アイツらの完成された流れの中にマシンガンズがどれだけ入るか。あとは小野の噛みつくっていうイメージがどれだけ浸透するかっていうね。
──タッグとしてライバル視してるのは邪道、外道になるわけですか？
折原　そうですね。
小野　そうなんですかぁ（笑）。でも金的が多い試合になりますよ（笑）。
──でしょうね（笑）。
折原　だから小野クンはね、見てわかるでしょ？　今の自分にピンときてないっていうか、自分にどれだけ勢いがあるってことを彼自体があまり把握してないっていうか、だから逆に勢いが止まらないんですよ。けっこう、天狗になっちゃうとその場で終わっちゃうんスけど、彼はそういうのないから。
小野　関係ないですよ。誰が誰とか。もっといいものが俺らはできるはずだっていうね。
折原　でもお客さん引くよね〜〜。悪いことしすぎだよね、僕たち（笑）。
──確かに悪いことしすぎですよね（笑）。その勢いで全日本に上がったら面白いと思うんですけど、やっぱりそれは無理なんですか？
折原　いや、僕はね、因縁めいた物があるんで、SWSのことでね。
──いろいろありましたよね。
折原　ただ僕も向こうも、時代が回ってるからねぇ、そういうこと言ってる場合じゃないと。小野クンも何回かは全日に上がってますから。いいと思いますよ。全然問題ないよね。
小野　全然問題ないですね。
折原　正直言って、なんでみんな勝てないのかな。ベルトを奪取できないのかなっていうね。まあ、先輩なんですけどね、小川（良成）先輩。
──あ！　いろいろとあったんですよね、小川選手とは。
折原　昔散々イジメられたんでね（笑）。でも俺たちは別にベルトにはこだわんないんでね。試合内容とか、後で悔しい思いをさせてね、先輩の頭に残像として残るようなことをする自信はありますね。
小野　あるねえ。
折原　いい思い出を作ってあげますよ（笑）。俺を残しとけば良かったなって思いを馬場さんに思わせたいね（笑）。
──それと新日本の大谷晋二郎選手とか高岩竜一選手とかも「バトラーツの選手とやりたい」って言ってましたね。
折原　向こうがやりたいって言うんだから、それぐらい注目してるんでしょ。俺たちは別に何でもいいよ。やりたきゃ貸すよ！　でも俺たちのケツは高いよ（笑）。
小野　ケツの話か（笑）。
──ヒャヒャヒャ（笑）。
折原　まあね、注目してるだけでやめておいた方がいいですよ。もし呼んじゃったら「呼ぶんじゃなかったな、マシンガンズ」ってなるから。
小野　嫌な思い出を残しますよ（笑）。あれっ？　クチビルゲルゲはプールに入ってきたの。くちびるが紫色になってるよ（笑）。
ジャイ子　はいぃ。（涙目）
──小野選手は道場での練習以外に出稽古とか行ってるんですか？　以前ウチのインタビューでヒクソン（・グレイシー）やウゴ（・デュアルチ）とやりたいって言ってましたよね。
小野　余計なこと言いましたね。
──もうバーリトゥードとかは出ようとは思ってないんですか？
小野　もう面倒臭いですよ。ラッパーの方がいいッスよ。
──はぁ？　ラッパー……ですか。で

両国でブレイクするのは俺たちだろうね。うん、間違いない（折原）

も、この間のトンパチリーダー決定戦では、試合開始早々きれいなタックルを決めてましたね。

折原 あれはビックリしたね～。熱くなったよね。タックルきて、すぐスリーパーだからね。あれはロープ際じゃなかったら決まってましたよ。だけど秒殺されると、これから折原個人としての仕事がなくなっちゃうんでね。キングダムじゃないんだから（笑）。

――ああ、去年は不慣れな顔面ありルールの出てましたね。

折原 俺もあのあとリング上で「おい、武志！ パートナーにそこまでやるか！」って言って（笑）。客も笑ってましたけど。そりゃねえだろって（笑）。

――失礼ですけど、あそこで決まったら面白かったスけどね（笑）。

折原 面白いけど来年からメシが食えなくなっちゃうからね（笑）。ホントは折原弱いんじゃないかとなったらね。でもあれはホントビックリしましたよ。

小野 俺もビックリしたよ。

――小野さんも（笑）。

折原 ビックリすんなよ、お前！ お前がやってんだよ（笑）。パートナーだから手加減するのかと思ったらマジだからね（笑）。あんとき極めようと思ったろ。どうなんだよ。

小野 早く遊びに行きたかったんですよ（笑）。

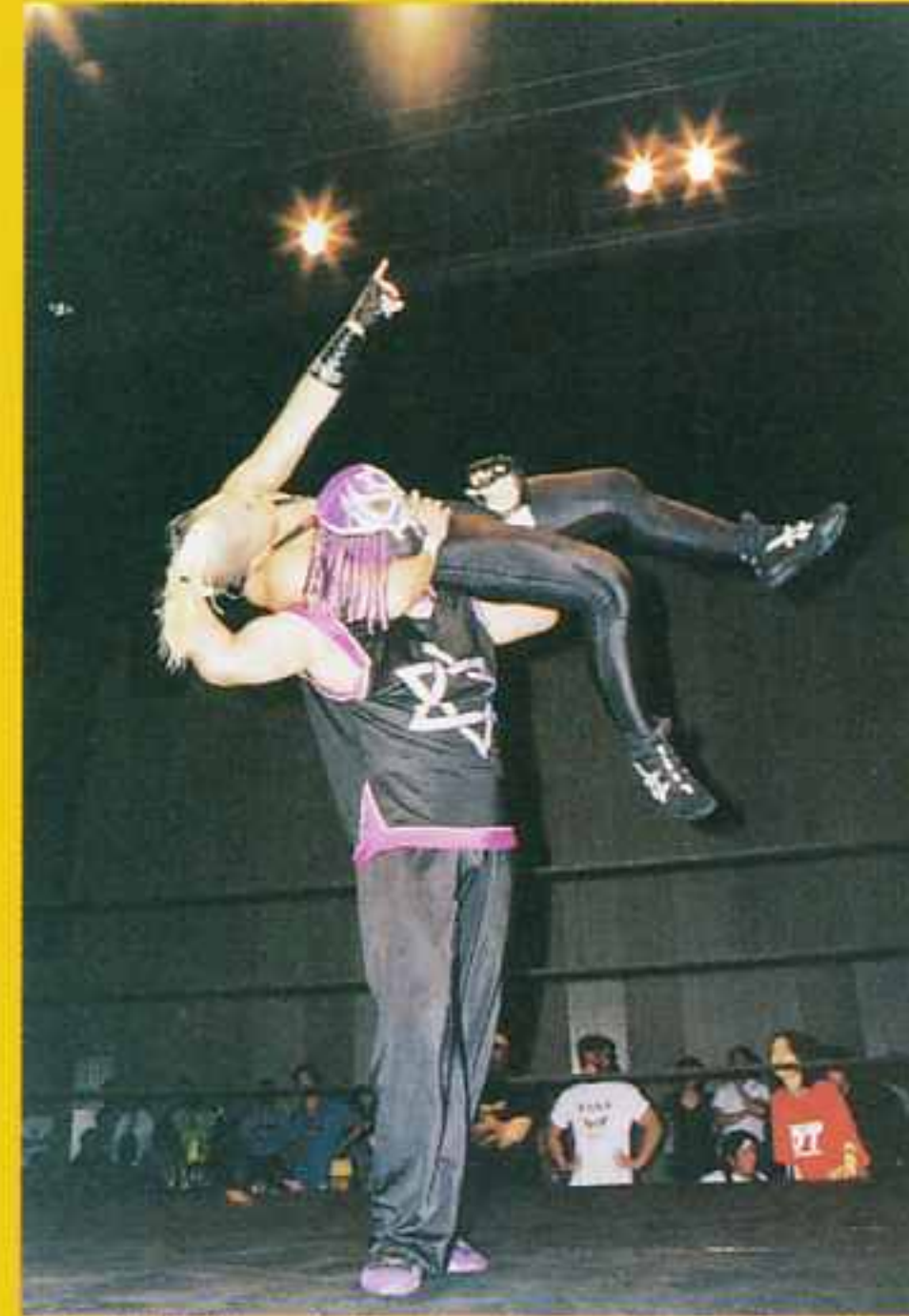
折原 あの試合のことを聞くアンタが悪い！ あの試合のことはお互いに揉めると思って、なかったことになってるんだから。

――それは失礼しました（笑）。

折原 あの試合の途中にグーパンチもらって記憶飛んでるんですけど、その瞬間、瞬間で〝バトラーツ〟っていうカタカナが頭の中をよぎるんですよ。稲妻のように。う～ん。漢字がよぎった場合は読めないんですけど。

――ヒャヒャヒャヒャ（笑）。

小野 漢字だと時間かかりますからね（笑）。

――ところで、今度みちのくに『トイレの花子さん』のキャラクターがいっぱい出ますけどアレはどう思います？

高校時代、同じレスリング部で一緒に汗を流していた折原と宇宙パワー。宇宙曰く、「折原は後輩を腕ひしぎ十字で怪我させたり、逆エビで腰を悪くさせたり、日常茶飯事だったッスよ」。さすがキング・オブ・トンパチである。

●写真提供　ナイタイスポーツ

折原 どう思いますって僕に聞かないでくださいよ。まるでみちのくに出てるみたいじゃないですか（笑）。でもみちのくには行ってみたいね。

小野 素顔で行きたいね。

――ヒャハハ！ まるでマスク被って行ってるみたいッスね（笑）。

折原 おい！ 黙ってりゃさっきからムカつくこと言うな！

――あ！ ちっと！ すみません。お、小野さんはどうですか、みちのくは？

小野 みちのくは相手いないスもんね（笑）。

折原 イルカはイルカで口開いてるだけだし（笑）。海の豚。

――ヒャハハハ！ 海の豚！

折原 俺だって少しは漢字わかるんだからな（笑）。

――あ！ 海の豚と書いてイルカ！

折原 わかってなかっただろう、お前（笑）。

――そ、そんなことないスよ（怒）。

小野 凄いなあ、リーダー。違うなあ、リーダー（笑）。でも、サスケがダメだからもうダメでしょう。

折原 だって、噂によるとあそこのタイガーマスク？ ぜ～んぜんしょっぱいらしいじゃん（笑）。ニセタイガーの方がよっぽどタイガーらしいよ。

小野 ニセサスケの髪の色は青らしいですよ。

TONPACHI MACHINEGUNS

7・18、みちのく矢巾大会。敗者髪切りorマスク剥ぎマッチに勝利したマスクド・タイガー＆サスケ・ザ・グレート。モハメド・ヨネは無惨、丸坊主に。こうなりゃ次はトンパチマシンガンズvs偽サスケ＆偽タイガーだ！

――青って、折原さんと一緒ですね。

折原 ん？ 違うの、あれは俺の熱狂的ファンなんだよ、絶対！ ニセタイガーも小野クンと同じグローブ付けてたよな。あれも絶対ファンだよな。

――また、ニセタイガーもマスク取られたら小野選手と似てましたね。

小野 似てるらしいッスね。

折原 あの二人、変に人気があってみちのくから怒られてるらしいよ（笑）。

――そういえばこの間、折原選手は（モハメド・）ヨネ選手のチン毛まで剃っちゃうとか言ってましたけど。

折原 あいつは俺たちと試合する時はマジで怒ってるからね（笑）。でもこれはあんまり言いたくないんだけど。ちっちゃく書いておいてほしいんだけど、ヨネはね、バトラーツの中で次に出てくる奴じゃないかなと。勢いがありますよ。

――あ～。認めてるわけですか。

マシンガンズといえば、その悪どさばかりが目に付くが、リーダー兼マイク部長でもある折原のトンチの効いたマイクアピールは毒グモのように、毎回観客をシビレさせてくれる。

折原　認めてるわけじゃねえよ！　何言ってるんだよ！

——あ、あ、訂正します。ヨネ選手が爆発する前にチン毛まで剃っちゃうということですか。

折原　恥ずかしくてリングに来れないようにしちゃう。

小野　見えないじゃないですか（笑）。

折原　まあ、リングの上で剃りますよ。

——チンチンつまみながら（笑）。

折原　もちろん。剃ったあとに（ツームストーン・）パイルドライバーして女の子のファンに見せつけてやりたいね。

小野　そりゃ自分の顔に付いちゃうじゃないですか（笑）。

折原　あ！　やべえ。やばい、やばい（笑）。それじゃ逆にすればいいのか。

小野　逆だったらケツですよ（笑）。

——ヒャヒャヒャ！

折原　やばい、やばい（笑）。まあ、でもヨネは要注意だね。

——あと11月には、信じられないことにバトラーツの両国大会が決定しましたね。

折原　そうみたいッスね。もちろん両国もマシンガンズで出ようと思ってますよ。どこでやろうが、誰とやろうが、マシンガンズの勢いはとまらないッスよ。ハッキリ言って両国でブレイクするのは俺たちだろうね。うん、間違いない。

小野　結局両国でやったって、もってくのは自分たちですからね。勝敗もインパクトも何もかも。まあオレらは会社に組まされて組んでるんじゃないですからね。

折原　逆に今、バトラーツは困ってるんじゃないかな。俺たちが一人歩きするって言ってるから。今頃大切にされてもね～（笑）。

——ちょっと遅かったですか（笑）。

折原　ちょっと遅いよね～（笑）。

——それにしても、折原選手は髪切りマッチをよくやりますよね。

折原　あんなに連続でやったのって俺ぐらいじゃないですか。あっ、なんで連続？　なんで連続なの（自問自答）。

——自分で悩みますか（笑）。

折原　でも、いまだに髪は守ってますしね。でも一回、（ターザン）後藤に前髪を切られちゃったんで、電話で文句言ったんですよ。

小野　すぐ電話で言いますね（笑）。

折原　大人げないでしょ。電話じゃないと怖いから（笑）。電話でガーッて一気に言ったんですよ「前を切るな！」。前を切られたら、かっこ悪くなっちゃうんだよ（笑）。

——ヒャヒャヒャ（笑）。じゃあ、いまバランス悪いんですね（笑）。それにしても二人とも特徴的なヘアスタイルしてますよね。悪のビジュアルファイターっていうか。

折原　ん？　モヒカンもね、これまでにあっても良かったんだけど、なかったっていうね。いないでしょ？　カッコ悪いレスラーが多いから。

——カッコ悪いと思う選手って誰ですか？

折原　特に名前出すと失礼ですけど、全日本のね……。

——出しましょうよ（偉そうに）。

折原　な～んか普通の七三分けでベトッ～とした頭の田上とか、モジャモジャのナマハゲみたいな多聞とか。

——そんな！　多聞選手はあれはあれでかっこいいですよ！

折原　多聞なんか画面に出す選手じゃないよ。汚いよ。やっぱり見た目にも気を使わなきゃダメでしょ。

小野　それが美学ですね。折原昌夫の。

折原　なんで自分は言わないんだよ（笑）。文句が来るからとか思ってるだろ。バシッと言わなきゃ。

——小野選手はカッコ悪いって思うレスラーって誰かいますか？

折原　バシッと言えよ。バシーンと言わなきゃ。バシーンと！

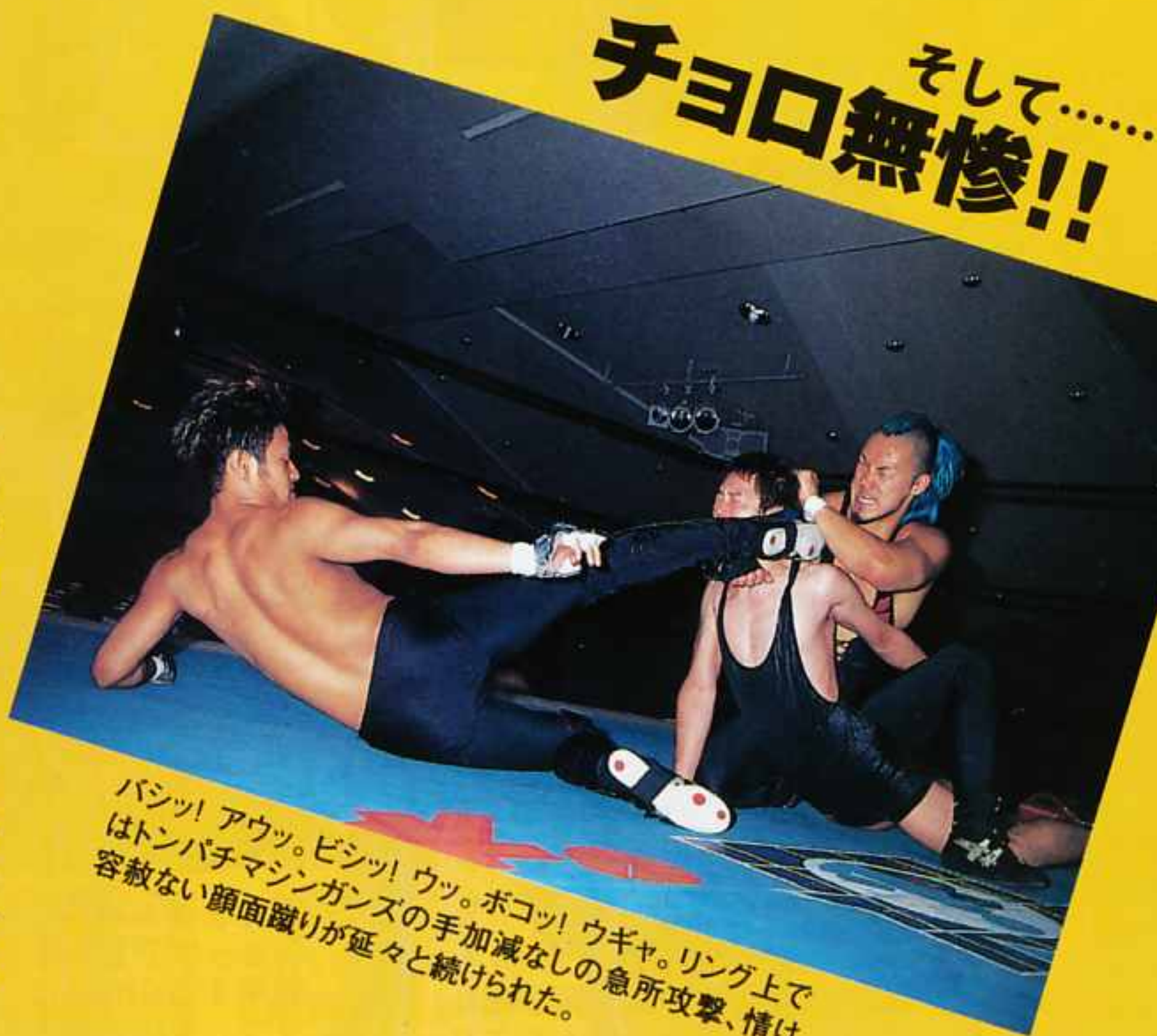
——リーダーはカッコ悪いですか（笑）。

小野　バシ～ン！（張り手で失礼なチョロを張り倒す）遅れて来やがって！

折原　なに言ってんだよ！　遅れて来たくせによ。

小野　お前が一番カッコ悪いんだよォ！　バシ～ン!!（椅子から転げ落ちるバカ丸出しのチョロ）

折原　いい加減にしろよ！　お前ちょっとこっち来い！（髪の毛を掴まれリングに放りこまれるチョロ↑）

そして……チョロ無惨!!

バシッ！アウッ。ビシッ！ウッ。ボコッ！ウギャ。リング上ではトンパチマシンガンズの手加減なしの急所攻撃、情け容赦ない顔面蹴りが延々と続けられた。

——プ、プロレスラーは、すごい！

【7月30日、本川越ペペホール内のレストランにて収録】

夏休み特別企画！　本誌は新日会場には入れないので会場の外で遊んでみました!!
（編集部）

新日本プロレスG1クライマックス2日目
AUGUST 1
両国国技館

押忍！ 今回もいつもキュートなピーコさんが得意の毒舌で、世の中のファッションをメッタ斬りにする独眼流服装検査『RADICAL キッズ・コレクション』の時間がやってきたよ。今回のターゲット会場は新日本プロレスの夏の本場所・G1クライマックスが行われた両国国技館。夏の陽差しか、会場のボルテージは上がりっぱなしだったよ。

構成／椎名基樹

RADICAL KIDS COLLECTION

左・伊藤好一（40）
中・竹内英治（27）　右・野末宏行（28）

3人並ぶと、どこか犬軍団チックになる個性的な着こなしだね。埼玉からやってきた、nWoには心強い応援団です。

左・稲岡俊成（29）　右・隆憲（23）

千葉からやってきたコスプレ兄弟で〜す。橋本パンタロン、侍ハカマ合わせて2万5千円で作りました。リングシューズは1万円。Tシャツは自作で〜す。

佐藤浩章（32）

蝶野のファンです。逆三角形のペンダントに、ウエストポーチがよく合っています。

左・塚田好男（22）
中・nWoよしみ（22）
右・阿部大輔（22）

小さいときからずっと仲良し関係の3人組。今はそろってnWo入り。蝶野ガンバレ〜!!　茨城からやってきました。

太田正夫（24）

力強い健介が今にも飛び出しそうだね。後ろで結んだエリアシは、まるで変身前のパワーみたいだよ。

鷹木満恵（36）

nWoタトゥーシールは闘魂ショップで買いました。よく利用するShopは、闘魂ショップ。天山、蝶野LOVE♥[2]

左・田村浩尚（32）
右・渡辺義一（29）

キューティー賞

今日は、静岡は沼津から2人で来ました。同じ職場で働いていて、「普段は主任って呼んでるんですよ」（渡辺）。「そんなことないよ〜」（田村）。

右・澤川佳枝（23）
左・石原洋子（23）

新日伝統のTシャツで真っ赤に決めてくれました。最近の会場にはこんなおしゃれな女の子が急増中!!「蝶野さん、これからも応援していきま〜す」。

真鍋幸司（27）

バイクで兵庫から北海道を周って見に来ました。スペースローンウルフばりのファッション感覚が意表だけをついていました。

白坂好広（22）

ファック・ユー！　nWoムタだぞ〜!!

田村政博（48）

「長州ファンだったけど、もう裏方になっちゃったしねえ」。モミアゲがステキな熟練ファンです。

尾坂先生（28）とその彼女

絞り染めのペアルックという2人だけの独自の世界観に頭をひねらずにはいられません。お幸せに〜！

フィル・ジョーンズ（20）

ユタをバカにするなよ!!　イギリスのウェールズから、ジャパンのプロレスを見にやってきました。テンザンとコジ〜マをイギリスで見て好きになったんだ。もうケチャックとは呼ばせない。

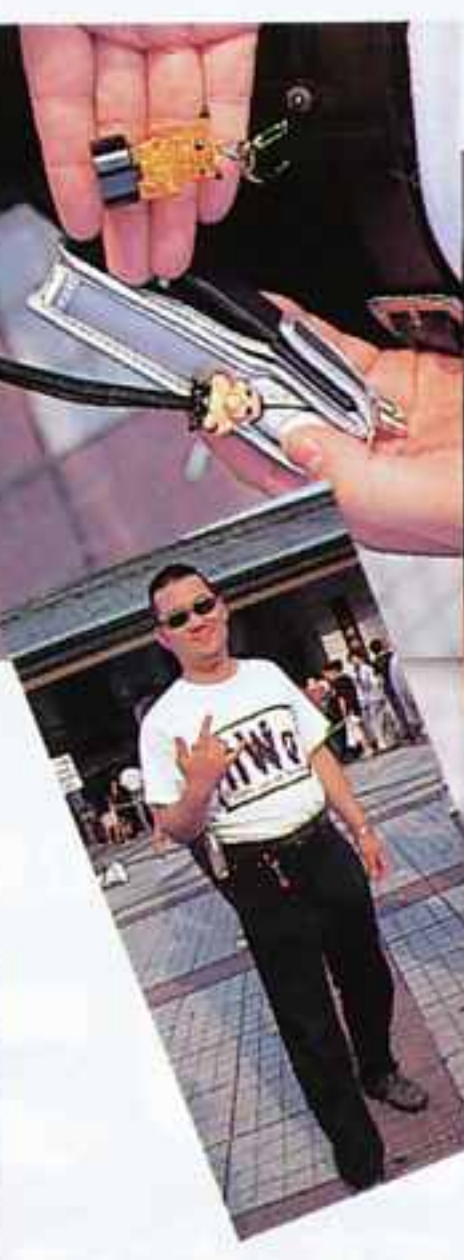
蝶野集合〜!
ブラック・バタフライ・コレクション

元エゴイスト集団団長の蝶野は、やっぱりプロレス・ファッション・リーダー。会場で、もっともたくさん見かけたいろんな蝶野をコレクションしてみたよ。

高橋克郎（35）
これ以上ない、わかりやすいコスプレを決めてくれました。

蝶野命（21）
おいどんが九州の蝶野ですたい!!

小物は蝶野とピカチュウで決まり！

菅原伸（25）
最近、会場にいろんな蝶野がいっけどみんな甘えよ!!

鰐渕健太郎（23）
競輪界からnWo入りしている、鰐渕選手のイトコだそうです。本人は岐阜で公務員をする、ちょっと丸顔の蝶野正洋で〜す。

ダブル
Wクロスが集めた「ワッ!」と驚くプレゼント(=WWP)

WP PRESENT

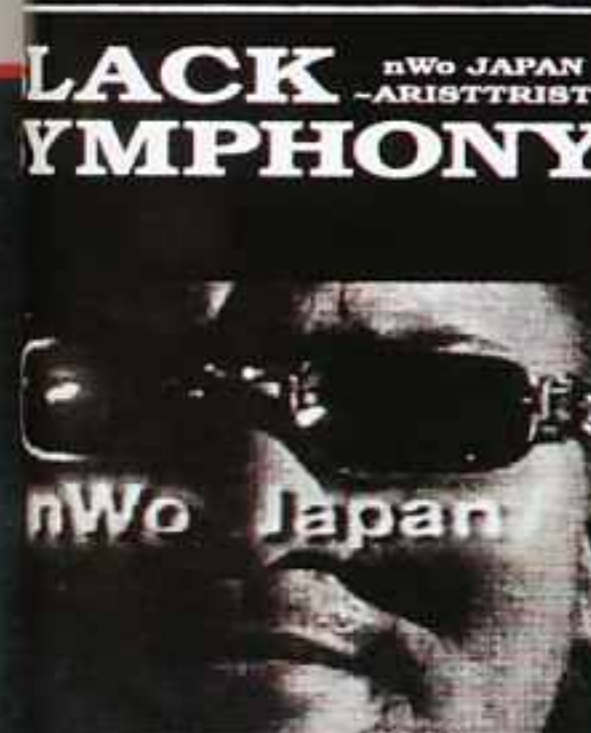
ヘイ、キッズども!! 超クールな読者プレゼントページのおでましだぜ。WWFつったら全米最大のプロレス団体だがな、こっちのWWPは日本最大のプレゼントページなのさ。プロレスファンなら泣き叫ぶほど、ほしいものばっかり揃えてんだ。ブツがほしけりゃハガキを出すこったな! わかったかい?

スポーツ平和党デッドちらしセット　20名
超絶デザインがキミの延髄を斬る! もはや入手不可能と思わる今回の選挙のスポ平ちらしとポスターをドド～ンと放出!
【スポーツ平和党提供】

猪木vs三銃士ビデオ 3巻セット　3名
号でも紹介したビデオ3本。大好評!【VALiS提供】

●一家に一枚! UFOのTシャツ　2名
7·18の夏の大祭で会場のみ限定販売されていたTシャツも放出!【夏の大祭実行委員会】

猪木グッズで闘魂注入しろ!

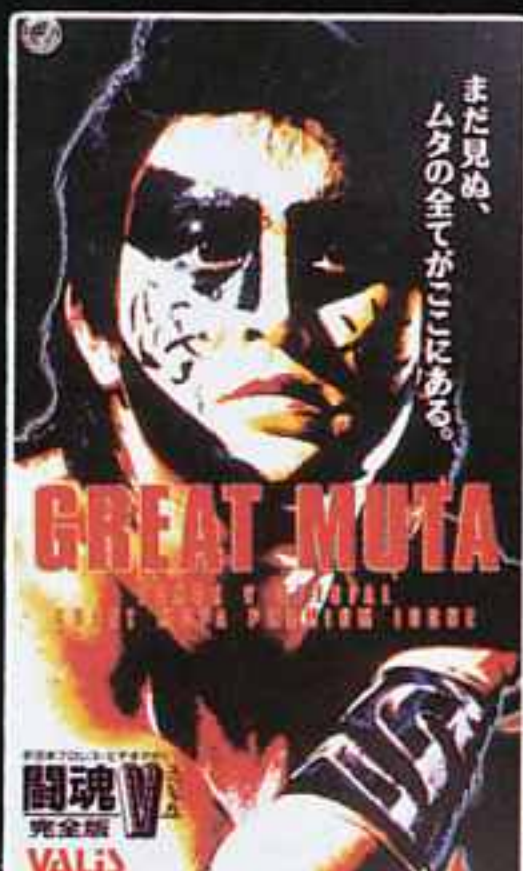
●復刻版猪木最強タッグ戦シリーズ 70'S&80'S　2巻セット　2名
70'Sでは猪木&坂口や猪木&ストロング小林のタッグ名勝負が甦る。80'Sでは猪木&長州という意外なタッグも収録だ!
【東芝EMI提供】

●nWoのCD発売記念! メガ渋蝶野ステッカー　10名
nWo JAPANのCD発売を記念してかっこいいステッカーを10名に!
【ウッド・ベル提供】

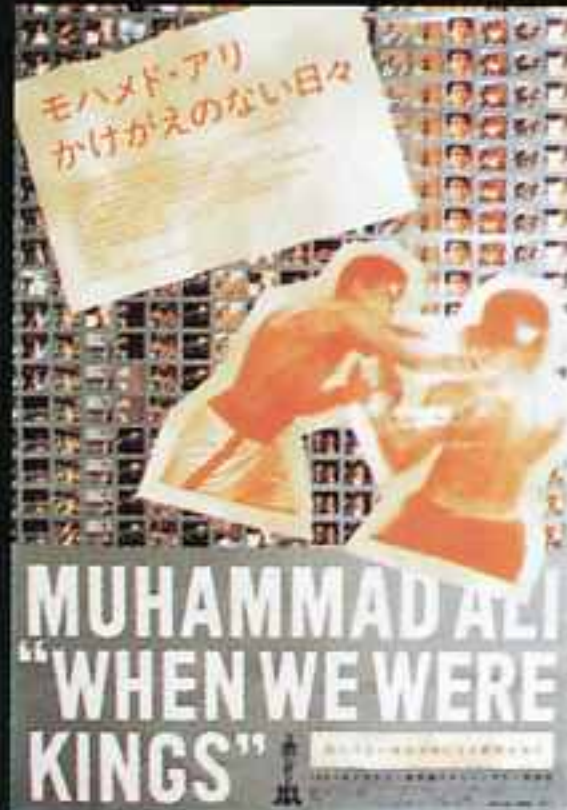
●直筆サイン入り猪木寛至自伝　3名
『書評の星座』でも絶賛のベスト・オブ・スーパー猪木本にサインを入れてプレゼント!
【新潮社】

●復刻版猪木フルタイム戦シリーズ vsボブ・バックランド、vsドリー・ファンクJr.、vsビル・ロビンソン　3巻セット　2名
アントニオ猪木がフルタイムで死闘を繰り広げた3試合を完全パックにしてビデオ化。至高のストロングスタイルだ!
【東芝EMI提供】

●不滅の闘魂! 絶対必見! アントニオ猪木物語3巻セット　2名
新日旗揚げから一連の異種格闘技戦まで、名勝負を収録したVOL.1と、IWGP戦やアンドレ、ホーガンとの対決を収録したVOL.2と、UWFや厳流島から引退試合までを収録したVOL.3をセットでプレゼントだ!
【東芝EMI提供】

平成・新日ファンのハートをワシ掴み!

●闘魂Vスペシャル Best Of The Super Jr.V　2巻セット　2名
初夏恒例のジュニアの祭典を丸ごと2本にまとめたぜ! 熱い、濃い、凄い! 2本セットでどうだっ!
【VALiS提供】

●闘魂Vスペシャル ザ・グレート・ムタ　2名
日本一のアメプロレスラー・ムタの勇姿を満載。見るべし!
【VALiS提供】

●闘魂Vスペシャル 新日本VS天龍　2名
最近は袴も着用してノリノリの我らが源ちゃんが、新日に殴り込んだ模様を収録。
【VALiS提供】

●側近から見た猪木! 闘魂ふたり旅　3名
筆者は世界中を猪木と共に渡り歩いた。『紙プロ』17号で猪木と対談もしているぞ。
【いれぶん出版】

●モハメド・アリ 映画ポスター　1名
編集部に貼っていた中古ポスター。いる?

新作ウェアをすばやくチェック！

●ダイエットブッチャーTシャツ　各2名

応募殺到の大人気・ダイエットブッチャーTシャツだ！　青か緑かを明記してね。ダイエットブッチャーのウェアは直販店「オクタゴン」（TEL 03—3486—5539）で手に入れろ！
【ダイエットブッチャースリムスキン提供】

●ダイエットブッチャートレーナー　1名

イラストでレスラーも登場しているクールな逸品。さあ、直販店「オクタゴン」（東京都渋谷区神宮前5-16-8）にダッシュ！
【ダイエットブッチャースリムスキン提供】

●リッキー・スティムボートTシャツ　1名

キメキメのポーズがいかしてるリッキーTシャツ。人気爆発のバンバンビガロ（TEL.03-3460-1145）で絶賛発売中！
【バンバンビガロ提供】

●巨大なアンドレTシャツ　1名

見てみい、この面！　お店は東京都世田谷区北沢2-33-11-2Fだ！　マスク・ド・店長に会いに行け！
【バンバンビガロ提供】

●ダイナマイト・キッドTシャツ　1名

ソデに入ってるワンポイントが秀逸。この夏のイチ押しだ！
【バンバンビガロ提供】

●新ブロディTシャツ　1名

夏といえば思い出すぅ〜、というわけで新しいデザインのブロディTシャツ。
【バンバンビガロ提供】

●HAOMING ヘッドロックTシャツ　1名

水道橋の「チャンピオン東京店」で絶賛販売中の新ブランドHAOMINGから。
【HAOMING提供】

●HAOMING エビ固めTシャツ　1名

かわいいイラストがプロレスファンの心をくすぐるナイスTシャツだ！
【HAOMING提供】

●HAOMING スペイン語Tシャツ　1名

背中にも文字入ってます。HAOMINGは「チャンピオン東京店」で買えます。
【HAOMING提供】

●HAOMINGイラストTシャツ　1名

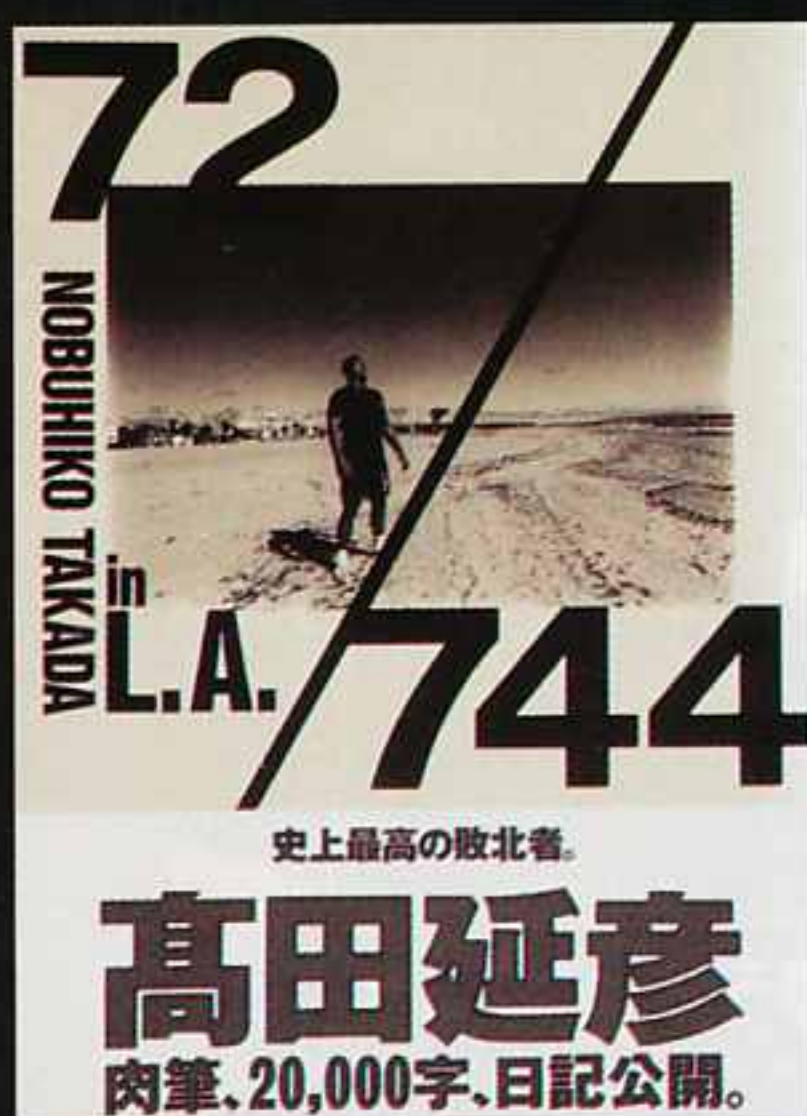
往年の名レスラーがイラストで登場！マニア泣かせの人選です。
【HAOMING提供】

行ったれ、高田！応援グッズだぜ！

●あの頃の高田ポスター　3名

編集部に眠っていたモノクロポスターを思いきって手放すぜ！

●もち必読！U〜多重アリバイ〜　2名

Showちゃんが作り上げたU本。第2次UWF誕生10年目のレクイエム！
【スコラ提供】

●高田が元気な写真集「72／744」　2名

744時間LAに滞在して、取材は72時間という意味らしいです。高田の日記公開は絶対読んどけ！
【スコラ提供】

パンチ田原結婚記念おめでたグッズだ！

●結婚記念パンフレット&NWAバックルおめでとうセット　3名

小社で制作した記念パンフに引き出物のバックルとマル秘Tシャツをセットにして放出！　バトラーツの売店で買えるかも。
【パンチプロモーション提供】

カタブツが襲撃!? ファミ通グッズだ!

●ファミ通WAVE・Tシャツ　4名

中村カタブツ君（35歳）が『ファミ通WAVE』（毎月末発売）編集部をパンツ一丁で襲撃!?　8月末発売の同誌に載ってるのでチェックしとけ！

【アスキー提供】

●ステッカー４色&テレカセット　４名

Tシャツとともに編集部から強奪した戦利品を『紙プロ』読者にプレゼント。かなりレア物みたいだけどね。

【アスキー提供】

●トゥー・セクシー!!　キューティー鈴木ビデオ　1名

元祖ビジュアルファイターのキューティー鈴木が魅せる極限ビデオ！

【スコラ提供】

●本誌・林ヘックション一枝も愛読！　ブル中野のダイエット日記　3名

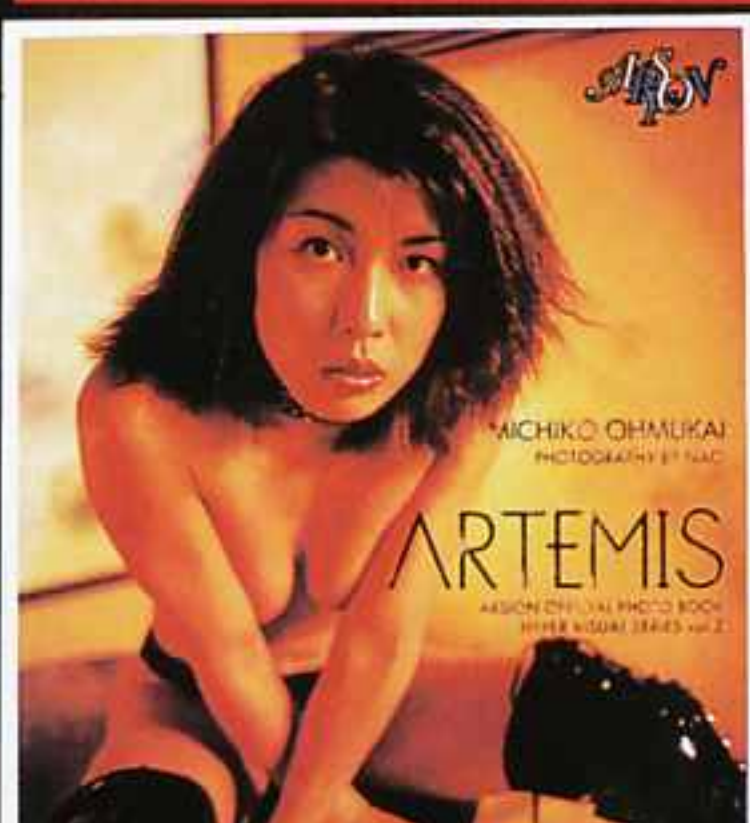
痩せたくても誘惑に負けちゃう人、必読！

【ブックマン社】

●究極の非売品！　謎のピンバッジ　5名

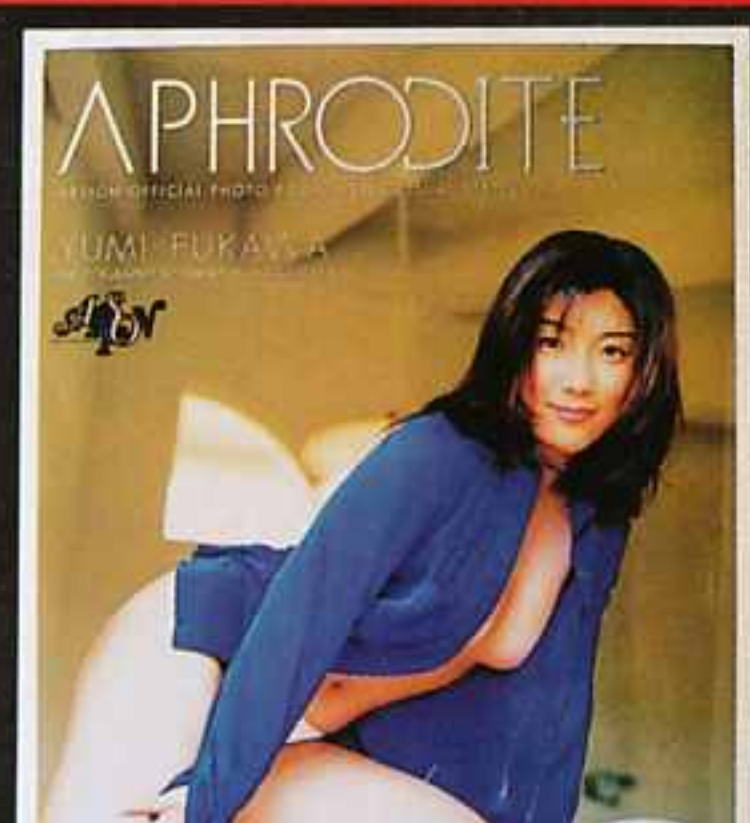
謎が謎を呼ぶ正体不明のピンバッジが登場。こいつの正体？　さあね、それは言えないよ。誰も知らない、知られちゃいけない非売品。

見て読んで楽しい女子プログッズさ！

舞闘神・大向美智子、究極のプライバシー

●大向美智子写真集『ARTEMIS』　2名

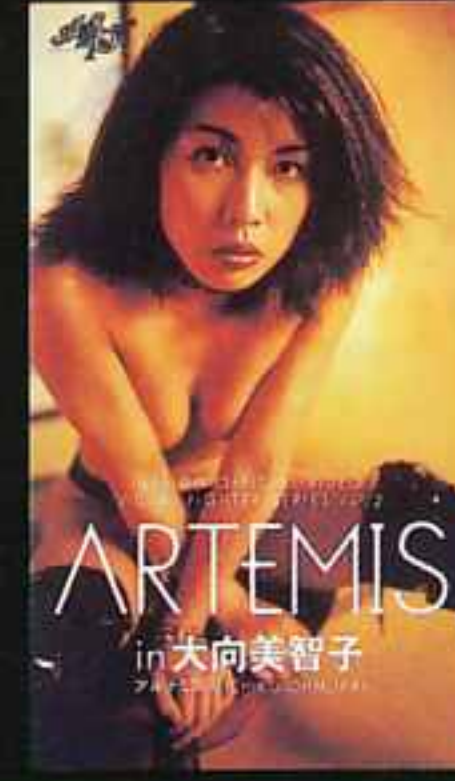
ＬＬ時代よりも突き抜けた大向の衝撃ショット満載の写真集。恥ずかしがらずに見てみることをお勧めします。

【ゲオ販売提供】

ついにベールを脱ぐ新生ビジュアルファイター　美闘神・府川唯未のすべて

●府川唯未写真集『APHRODITE』　2名

女子プロ界のトップ・アイドルの写真集。マニアならずとも読みたかろう、ほしかろう。【ゲオ販売提供】

●ビデオ『APHRODITEｉ府川唯未』　2名

ビデオでもやってくれます！　府川のイタズラがステキです。

【東芝ＥＭＩ提供】

●ビデオ『ARTEMISｉ大向美智子』　2名

制作発表記者会見で「将来の夢はモデルに」と言うだけあってナイスなバディです。

【東芝ＥＭＩ提供】

プロレスグッズで秋の夜長を乗り切るぜ！

●オリジナルマスク作りセット　1名

前々号で大人気だったマスク作りセットが再度登場！　オフィスTAKA（TEL.0425-66-5407）にて絶賛通販中。マスクは強盗しちゃダメ!

【オフィスTAKA】

●全格闘技カード大百科　5名

プロレスやK-1や相撲など、ありとあらゆる格闘技トレーディング・カードの大百科。これを読まずにトレカは語れない。【ケイブンシャ提供】

●格闘キーチェーンゲーム攻略本！　K-1グランプリ大百科　10名

「K-1版たまごっち」（？）の完全攻略本を大放出！　【ケイブンシャ提供】

●地上最強のカラテクノ　1名

…版で活動するテクノのレー…『TOY LABEL』…らCDが出ました。マス…イスをバックに爆速ビート……

【TOY LABEL提供】

●プレイステーション用ソフト　プロレス戦国伝2　3名

…回のテーマは「プロレスvs格闘技」。レスラ…や団体を育てながら大きくしていく超大作。…引込み、団体抗争、引き抜きなど物騒なモー…もついてマニア的にも大満足だ！

【KSS提供】

日本のインディーの夜は明けたのか!?

●W☆INGフリークス　Tシャツ&ステッカー　1名

このTシャツ（サイズはL、販売用は黒のみ）を通販してます。3000円を現金書留で〒547-0027　大阪市平野区喜連3-4-15　中川方W☆INGフリークスグッズ係まで。送料は着払いです。他のグッズのリスト希望の方は80円切手同封で。

●福田愛用夢ラグトップ　1名

かなり着込んだ販売されていないラグトップを1名に！　これも当然、将来のお宝だ！　【福田雅一さん提供】

●福田愛用サイン入りTシャツ　1名

今号に登場した福田選手からサイン入り夢ファクTシャツをGET！　将来値が付くことでしょう。

【福田雅一さん提供】

●芸術的カブキ引退ポスター　5名

THIS IS KABUKIな素晴らしい記念ポスター。家宝級の逸品にサインをつけて放出！

【IWA JAPAN提供】

●エンターテイメント・レスリングライブ　~スーパーマッチin YOKOHAMA~　2名

日本プロレス史の金字塔、FMW4月30日のビッグマッチを丸ごと収録。言い切ったもん勝ちなんだよ！

【東芝EMI提供】

パナソニック デジタルコンテンツPRESENTS
21世紀の新メディア

DVDプレイヤーと別売バッテリーに下記ソフト7本までついて総額25万円分を1名にドド～ンとプレゼント!

●DVD／ビデオCD／CDプレイヤー DVD-L10

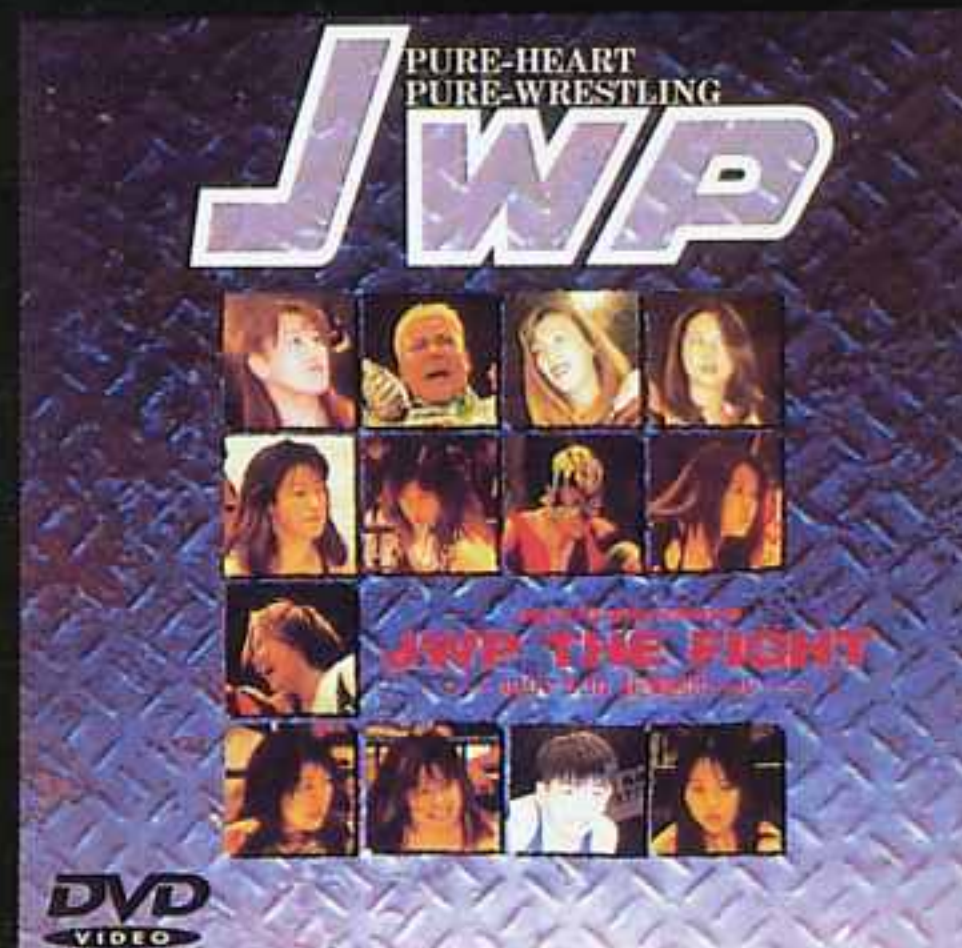
アウトドア、室内、列車の中、「いつでもどこでも簡単に」高画質で高音質のDVDが楽しめます！　パナソニックの先端技術を駆使した最新高性能マシンです。プロレスのソフトもJWP、RINGSを中心に充実中。プレイヤー本体標準価格150000円（税別）です。『紙プロ』史上最も豪華なプレゼントだ！

5大特長

1. 5.8型ワイド液晶モニター＆ステレオスピーカー搭載。
2. 16センチ×16センチのコンパクトサイズを実現（幅16×奥行16×高さ4.3／910グラム）。
3. 2電源対応（AC100V／バッテリー［別売］）。
4. 先進の高画質・高音質（10bitビデオD／Aコンバーター、96kHz／24bitオーディオD／Aコンバーター、バーチャル・サラウンド・サウンド機能など）。
5. 新しい操作性（G.U.I.機能、ジョイスティック搭載）。

続々登場！DVDのリングス＆JWPソフト

パナソニックデジタルコンテンツのホームページで各タイトルの詳しい内容を紹介しています。
アドレスは
http://www.pdci.co.jp
です

●キューティー鈴木10年の軌跡 Dreaming
LAロケ、インタビュー、インタラクティブドラマなど多彩な内容で魅せます

●JWP THE FIGHT
97年5月15日、後楽園大会の模様を余すところなく完全収録　画期的です！

●RINGS WORLD MEGA-BATTLE TOURNAMENT1997 1stROUND
恒例のリングストーナメントの1回戦8試合を完全収録　高阪＆長井の解説も聞けるぞ

●RINGS MEGA-BATTLE TOURNAMENT1996 パーフェクトコレクション
田村の快進撃で話題をさらった注目のトーナメントの模様を思う存分楽しめます

●尾崎魔弓 THE HISTORY of Mayumi Ozaki
リングに咲いた悪の華・尾崎のベストバウト3試合の模様を完全収録！

●本谷香名子 MOTOYA AtoZ
ニューアイドル本谷がハワイでキュートな水着姿を披露　プライベート映像も満載だ

●福岡晶 La Fiesta
セブ島を舞台に、福岡が迷宮のような街に迷い込んでいく。美しい映像で見たい！

【パナソニックデジタルコンテンツ提供】 問い合わせ先　〒150-0012東京都渋谷区広尾1-1-39恵比寿プライムスクエアタワー10F　TEL. 03-5469-5485

甦る怒涛の男・力道山！ ゴッドファーザー・オブ・プロレス！

●プロレスフィギュアの極致！
力道山1／6フィギュア　1名

力道山が生前に最も好んでいた写真をもとに、忠実かつリアルに再現したフィギュアが登場！　オールドファンには涙ものだ。力道山の長男であり、全日本プロレス・百田光雄の兄にあたる百田義浩氏が細部まで監修しています。500体限定生産のうちの1体を『紙プロ』読者のために提供してもらいました。メーカー希望小売価格は28000円。【(株)ドリームズ・カム・トゥルー提供】

お問い合わせ：ドリームズ・カム・トゥルー　03-5687-6372
※フィギュア、ZIPPOともにシリアルナンバーの指定はできません

The 20th century's hero 力道山 No.

（表面）

The
20th century's hero,
names
RIKIDOZAN
The prime professional wrestler
in
JAPAN.
THE CHAMPION!
No.0000
©RIKI project 1998

（裏面）

●まさに炎の男！
力道山zippo　1名

フィギュア同様、力道山が生前に最も好んでいた写真をもとに作成したレリーフを張り付けた重量感溢れるzippo。プレートのデザインは、闘う英雄「力道山」のイメージを、全身から立ち上がる炎で表現したもの。仕上げは銀古美メッキ。もちろんこちらも百田義浩氏公認！　メーカー希望小売価格は12000円。

【(株)ドリームズ・カム・トゥルー提供】

変なクシャミをしないための

応募要項

思わず涙がこぼれそうなほどにギガ・ゴージャスなスケールでお届けする今回の読プレ。ハガキを出せば何かが起こる！　ノドから手が出るくらいほしいでしょ？　だったらハガキ出す！　キミに必要なのは一歩踏み出す勇気だ！　というわけで、ハガキは右記の要領で、応募券を必ず貼って小社まで送ってください。締切は9月25日（当日消印有効）です。
※応募券のないものは無効となります。押忍！

あて先は……
〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
(株)ダブルクロス『紙プロR』編集部　「ハッ、ハッ、ハドドウッ!!」係

1.住所
2.氏名
3.年齢
4.プレゼント希望商品
5.面白かった記事&理由
6.つまらなかった記事&理由
7.『PRIDE-0』（P124～）の勝者は誰？
8.ヒクソン・グレイシーに勝てそうなプロレスラーは誰？
9.あなたの夢

応募券

RADICAL 11号 応募券 貼らないとちんこビンタ！

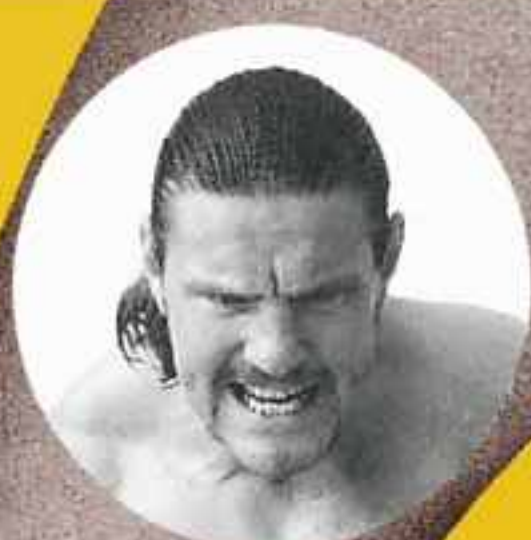
BATTLE FICTION

蘇れゴールデンタイム伝説

地獄の両国

バトラーツ最大のビッグマッチ!!

やれんのかーッ!!

驚天動地！ 世界の強豪続々来襲予定!!

ボブ・バックランド　ビクター・クルーガー　ザ・グレート・サスケ　松永光弘

BATTLARTS

11月23日（祝）15時開始

入場料

特別リングサイド	10.000円
リングサイド	7.000円
1階指定席	5.000円
2階特別席	5.000円
2階指定席	3.000円
パノラマシート	15.000円

（桝席1・2列目、パンフレット・お土産付）
※マス席は2人掛けになります

両国国技館

［主催］
格闘探偵団バトラーツ
［協力］
東芝EMI
［後援］
TOKYO FM、週刊プロレス、週刊ゴング、週刊ファイト、紙のプロレス

【チケット発売所】■チケットぴあ／03・5237・9999■後楽園ホール／03・5800・9999■大山アメリカン／03・3962・6443■チャンピオン／03・3221・6237■書泉ブックマート／03・3294・0011■プロレスマニア館／03・6276・0304■レッスル渋谷／03・3464・0078■レッスル池袋／03・3294・0011■アイドール／03・3371・5211
【お問い合わせ】バトラーツ　0489・63・0005

望小売価格は28000円。
【（株）ドリームズ・カム・トゥルー提供】

紙のプロレス RADICAL
WANIMAGAZIN MOOK 84
1998 No.11

烈談！髙田vsエンセン!!
ヒクソンを狩れ!!

平成10年9月25日発行 編集発行人／山口日昇
発売元：(株)ワニマガジン社 〒160-8580 東京都新宿区内藤町1番地 電話／03-3357-2911
発行元：(株)ダブルクロス 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話／03-3403-5188
ワニマガジン社 定価：本体743円＋税

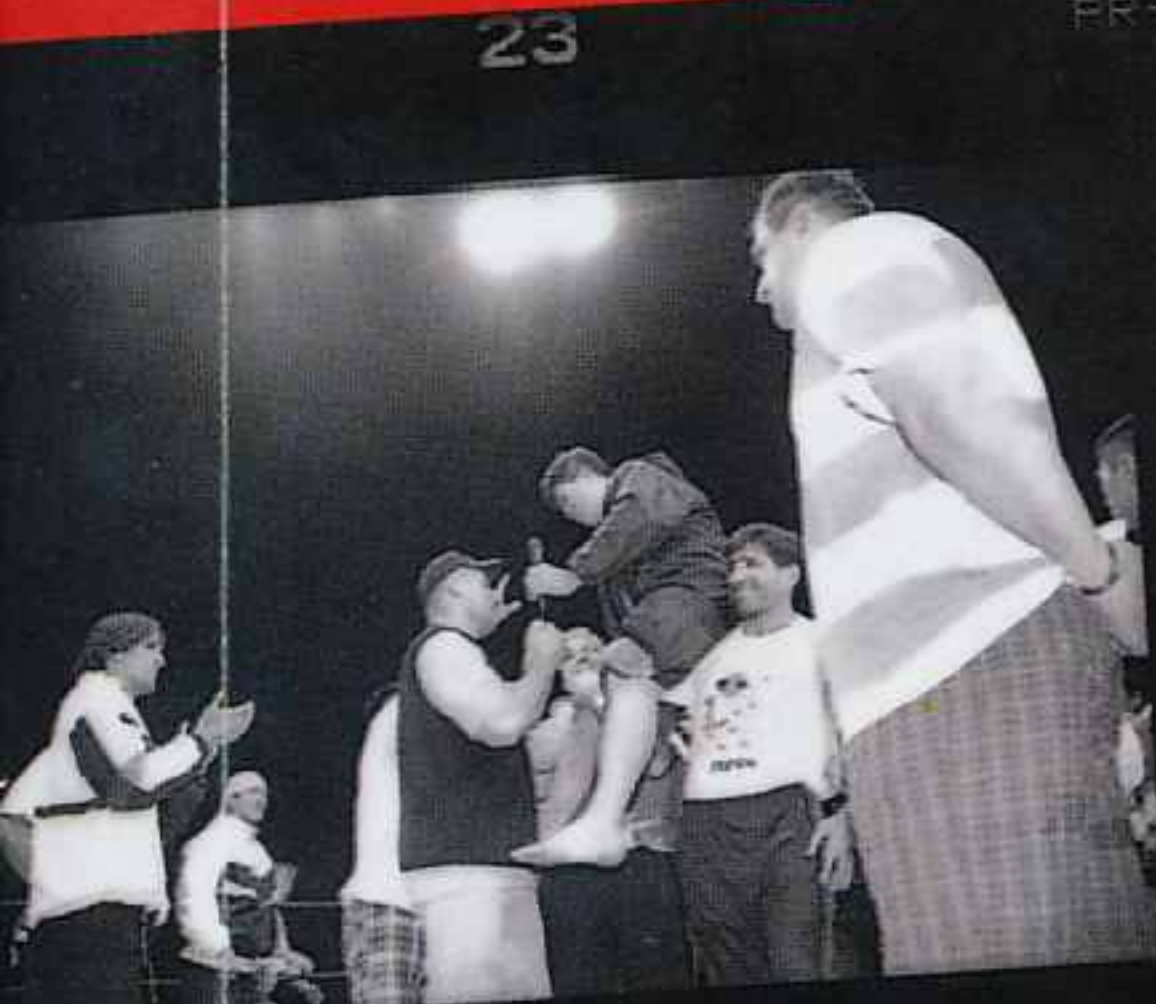
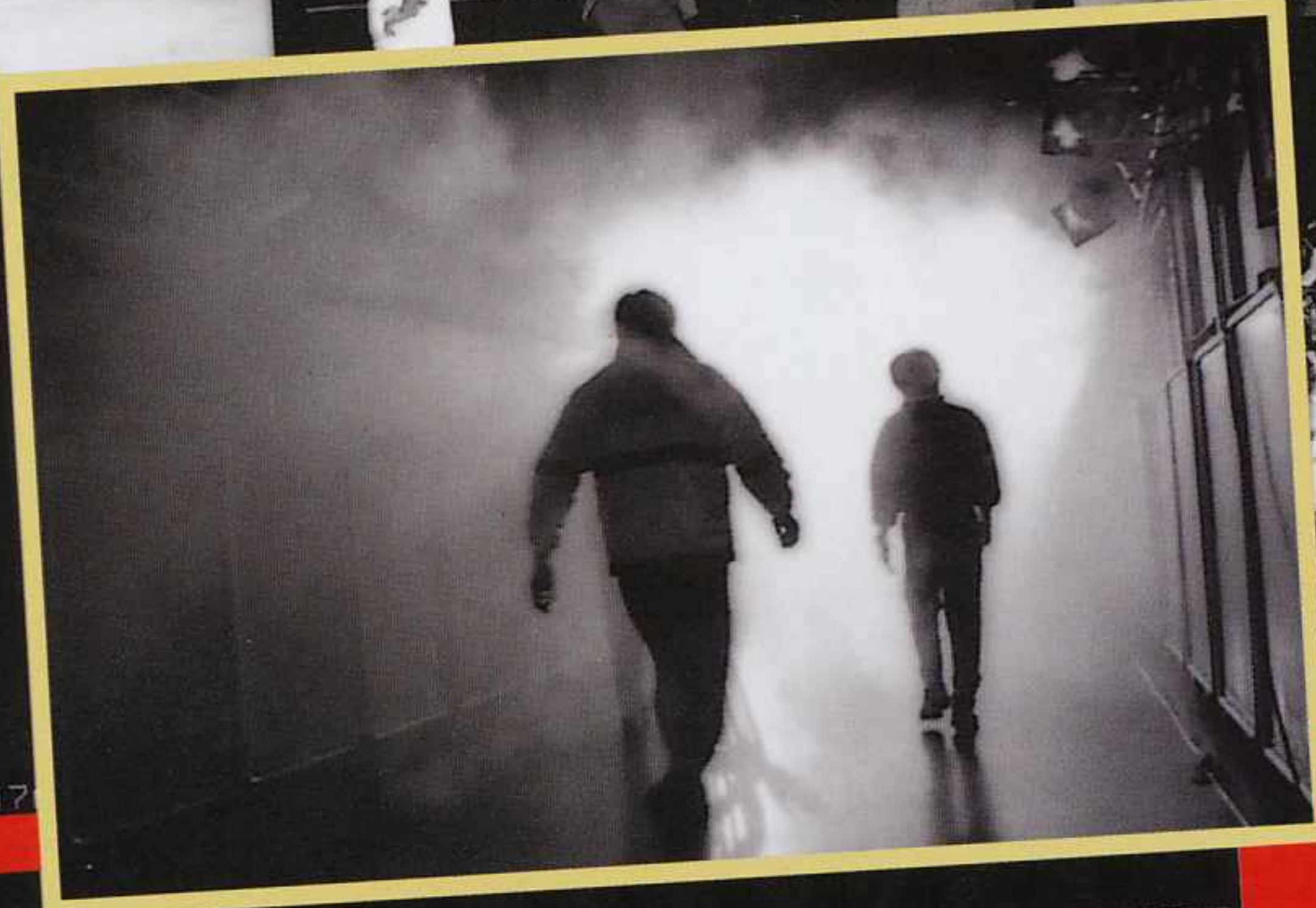
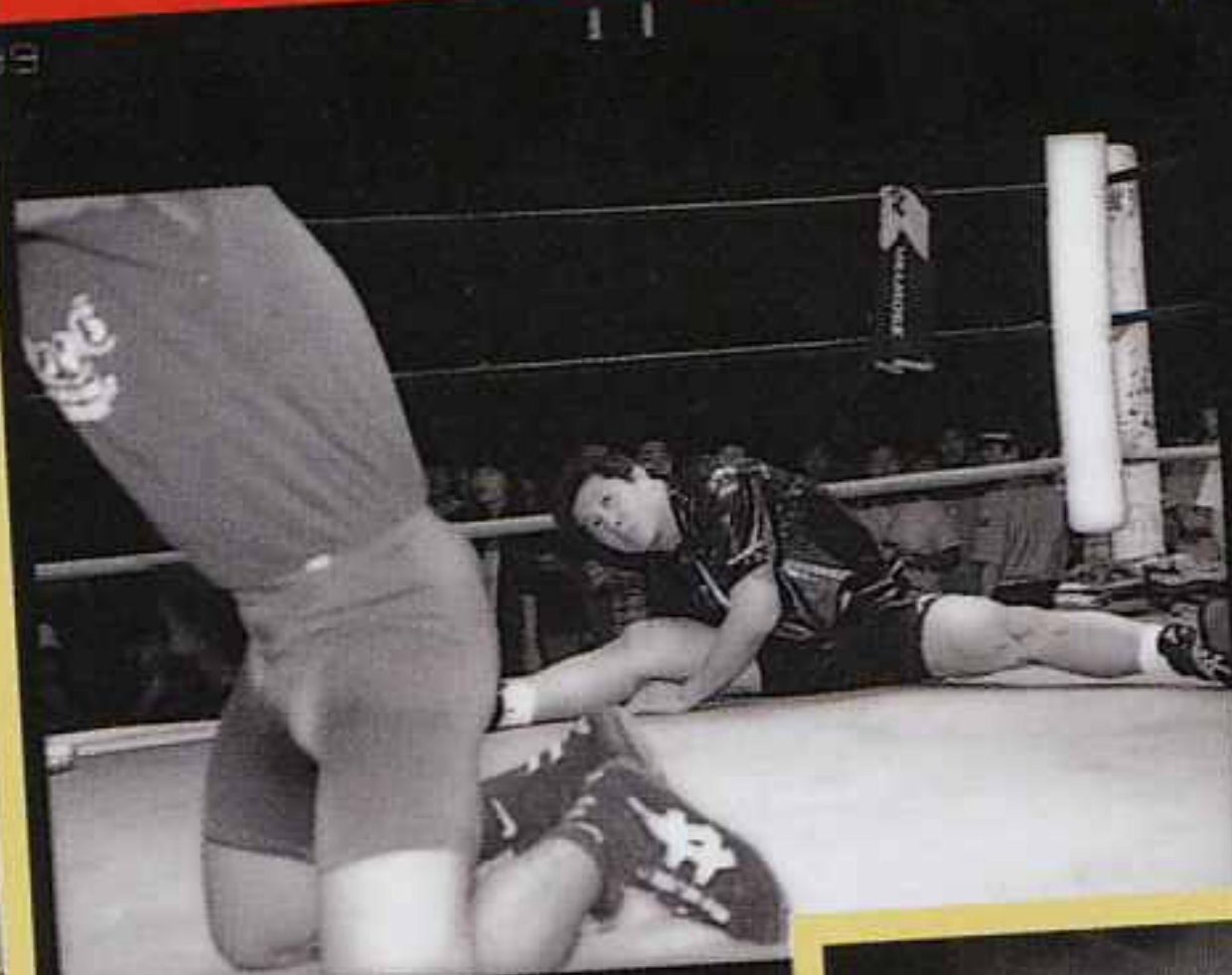
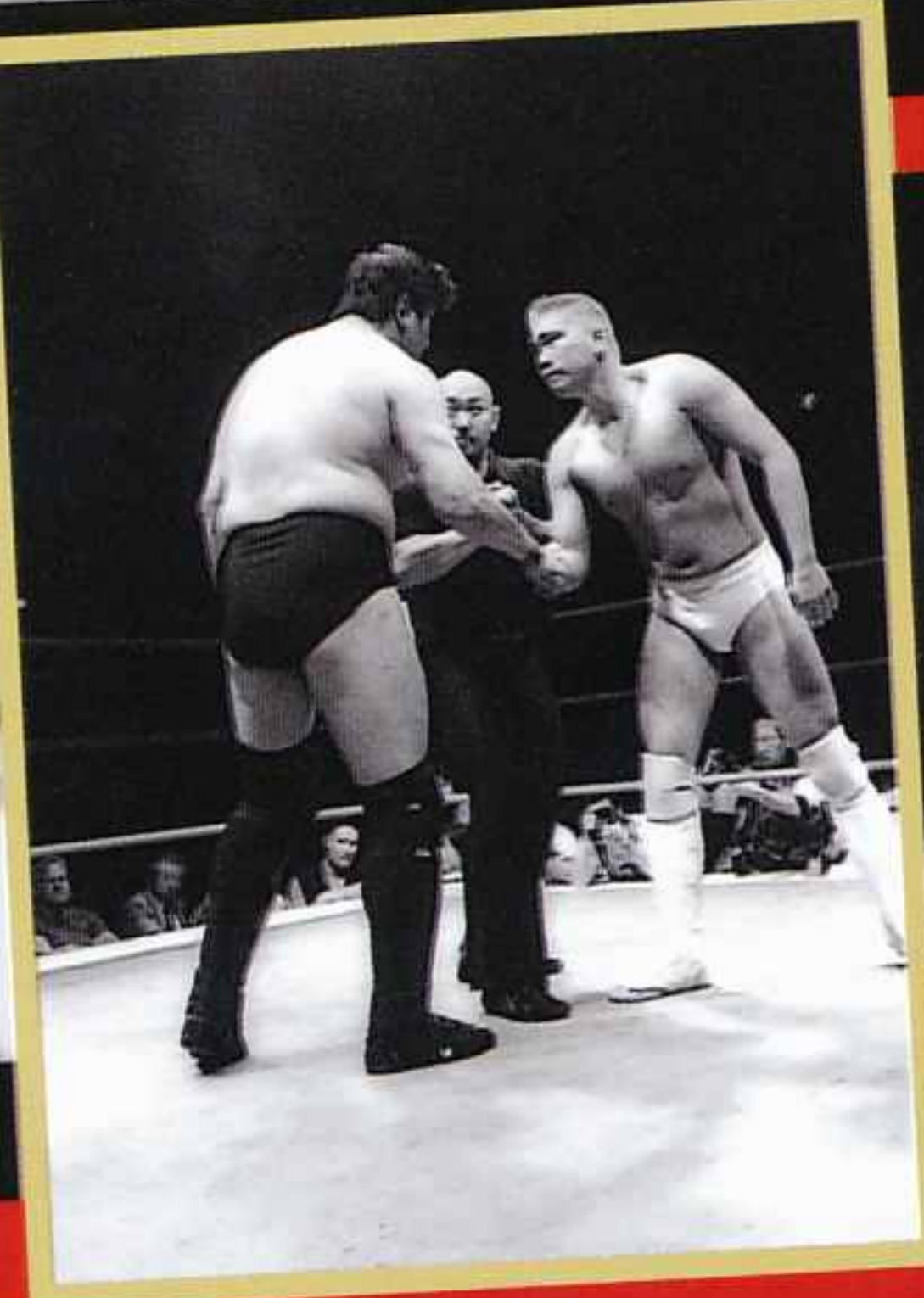
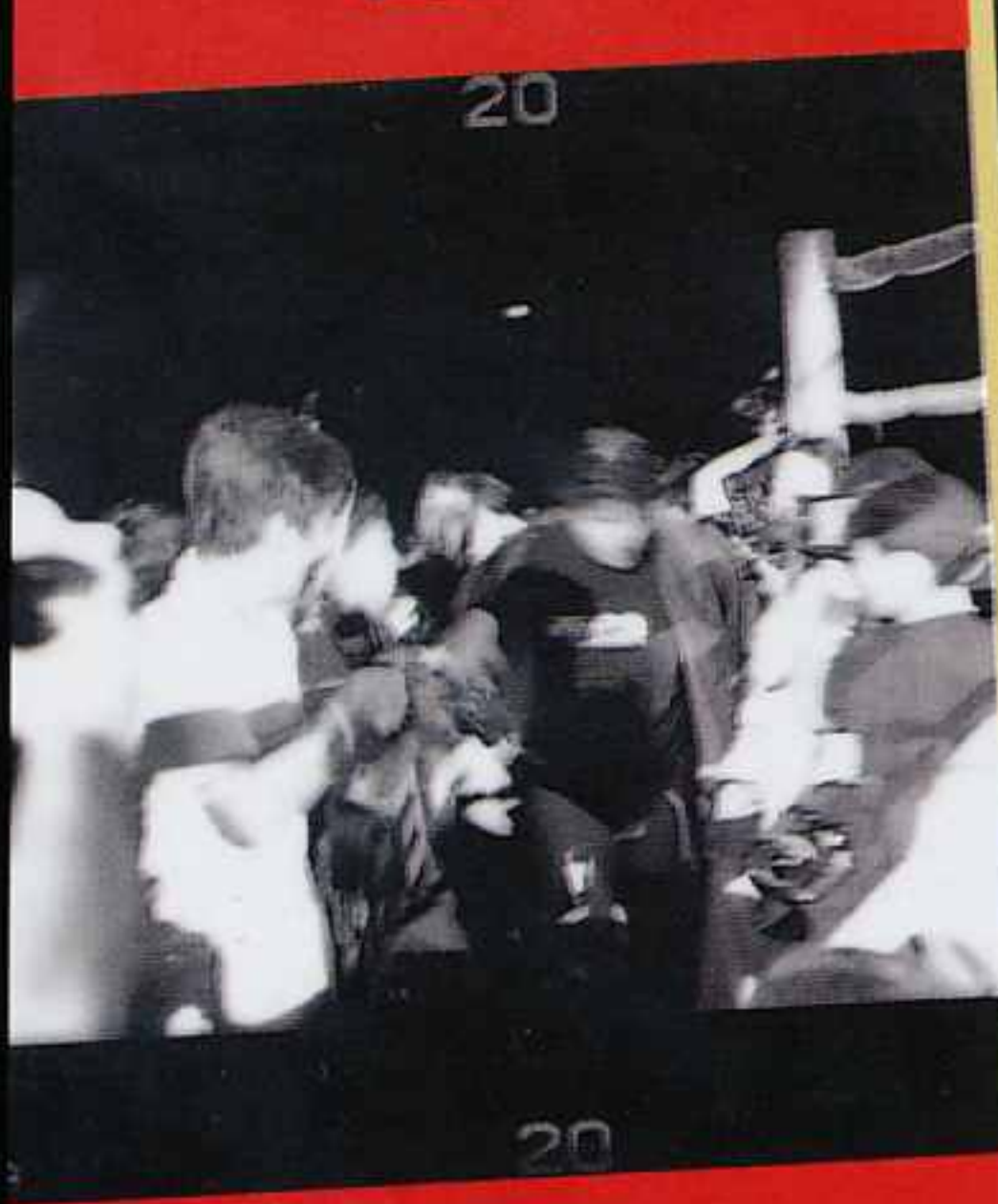
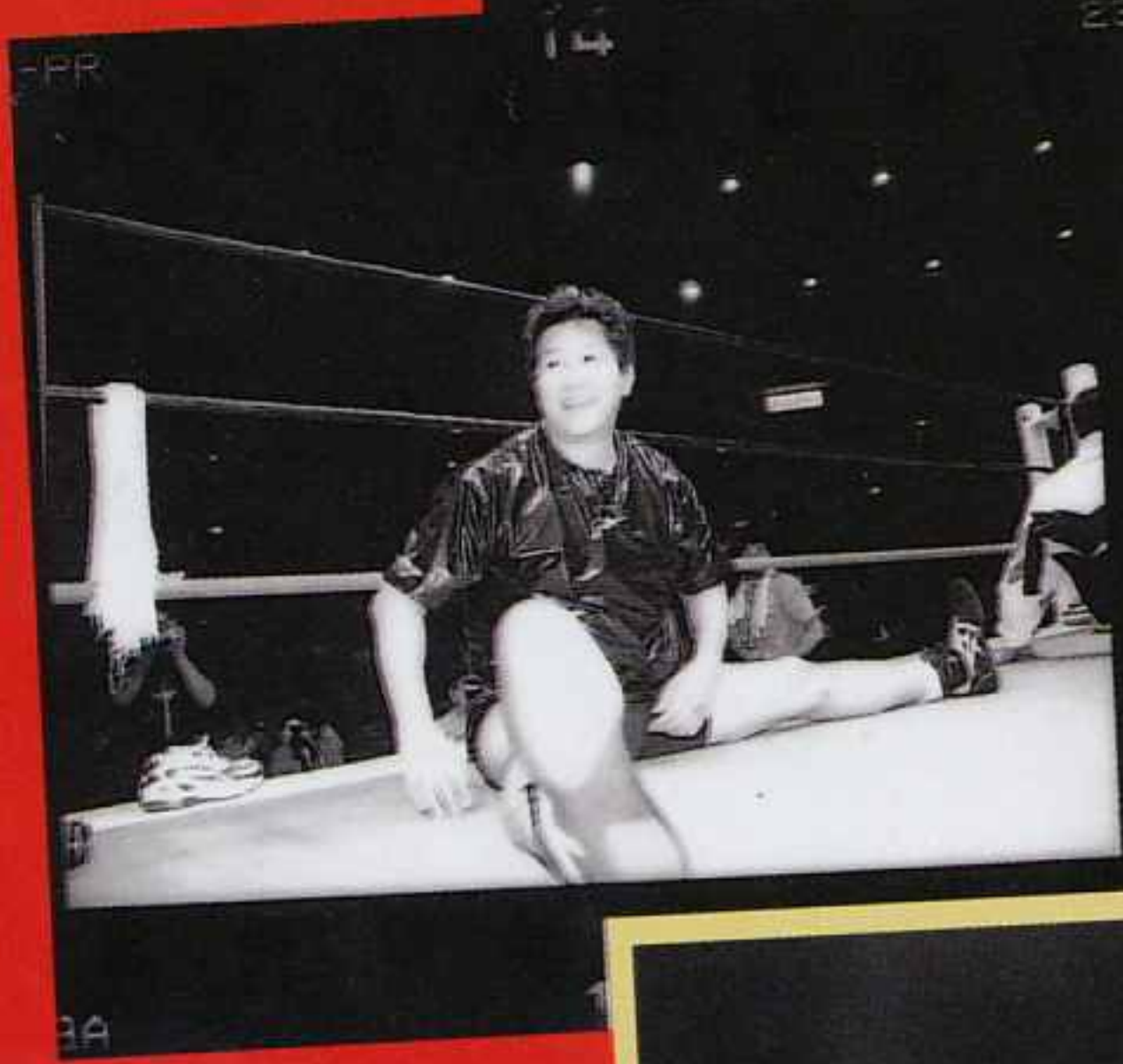
9784898295953
ISBN4-89829-595-9
雑誌 69861-84
C9476 ¥743E
1929476007438

印刷：図書印刷株式会社

世の中が乱れ
混乱したときこそ
ウォーリーの出番!!

Mr.ウォーリー

1998.7.20 from first to last

photographs by Masafumi Endo

Akira Maeda the Last day on Rings